

目 次

中 公 新 書	3
分野別分類	155
著訳編者名索引	227
書名索引	240

中公新書

2025年 解説目録



- この目録には、2025年4月1日現在発売中の書籍を収録しております。それ以降の新刊については、中央公論新社ホームページ (<https://www.chuko.co.jp/>) をご覧ください。
- この目録の表示価格は、2025年4月1日現在の本体価格です。また、重版の際に価格が改訂されたり、品切れとなる場合がありますことをご了承ください。
- 価格の下に数字は当該書のISBNコード978-4-12に続く7桁です。書店でのご注文にご利用ください。
- 電子書籍版については、上記の中央公論新社ホームページをご覧ください。書籍で品切れとなった作品も多数販売しています。
- 電子書籍版は主要電子書店にてお求めください。

当社刊行物の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

1 日本の名著 改版
— 近代の思想

桑原武夫 編

われわれは、過去の文学作品に接する機会は多くても、明治初年から終戦までの日本人の思想的苦闘のあとをどれだけ知っているだろうか。人間は虚無から創造することはできない。われわれが日本の未来を構築するためには、まず日本近代の思想遺産を活用しなければならぬ。本書は、未来への意欲的出発を意図する現代知識人が、前進のための足場を自由に見いだしうるようにできるだけ幅ひろく、福沢諭吉から丸山真男まで五十の名著を紹介する。

980円
180001-5

3 アーロン収容所 改版
— 西欧ヒューマニズムの限界

会田雄次 著

英軍は、なぜ日本捕虜に家畜同様の食物を与えて平然としていられるのか。女性兵士は、なぜ捕虜の面前で全裸のまま平然としていられるのか。ビルマ英軍収容所に強制労働の日々を送った歴史家の鋭利な筆はたえず読者を驚かせ、微苦笑させつつ西欧という怪物の正体を暴露してゆく。激しい怒りとユーモアの見事な結合がここにある。強烈な事実の持つ説得力の前に、私たちの西欧観は再出発を余儀なくされるだろう。

940円
180003-9

7 かん 宦官 改版
— 側近政治の構造

三田村泰助 著

中国の歴史において宦官のはたした役割は実に大きい。清朝の歴史家は、各王朝ともその衰亡の原因が宦官にあったことを指摘する。過去四千年にわたる専制君主と表裏一体をなして生きながらえた宦官の研究は、単なる好奇心を越えて、中国史の裏の裏の課題の一つである。宦官とはなにかから説きおこして、宦官のもっとも活躍した漢・唐・明代を中心に、それぞれ、時代を背景にした特色を指摘する。

840円
180007-7

12 史記

— 中国古代の人びと

貝塚茂樹 著

『世界の歴史』『諸子百家』等々の著書で示されたように、難解な中国古典の含蓄深い精神を現代に伝える名手の著者が、青年時代より敬愛し、研究しつづけてきた司馬遷の名著『史記』の精髓を展開し、その歴史観に近代的な照明をあたえて解釈をほどこす。古代中国の群像は、宮刑の屈辱に堪えてまで歴史家としての使命に徹した司馬遷によって不朽となった。竹簡百三十卷の大著を書いた人、書かれた人の精神は、新鮮な感動を伴って再現される。

720円
100012-5

15 科学 科挙
— 中国の試験地獄

宮崎市定 著

かつて中国では、官吏登用のことを選挙といい、その試験科目による選挙を「科挙」と呼んだ。官吏登用を夢みて、全国各地から秀才たちが続々と大試験場に集まってきた。浪人を続けている老人も少なくない。なかには、七十余万字にもおよぶ四書五経の注釈を筆写したカンニング棉袴をひそかに着こんだ者もある。完備した制度の裏の悲しみと喜びを描きながら、試験地獄を生み出す社会の本質を、科挙制度研究の権威が解き明かす。

680円
100015-6

27 ワイマル共和国

— ヒトラーを出現させたもの

林 健太郎 著

ワイマル共和国史は、第一次大戦後からナチスが政権を取るまでのドイツの歴史である。「史上最大の民主的憲法」をもつこのワイマル共和国がわずかに十四年あまりで潰えざるを得なかったのはなぜか。そしてその中から、ナチスのような怪物が出現した原因はどこにあるのか。この十四年の不幸な時代の歴史を担ったエーベルト、グレーナー、ローザ・ルクセンブルク、ノスケ、シュトレイゼマン等々の人間像に焦点をあてつつ、その解答を試みる。

840円
100027-9

36 莊子

— 古代中国の実存主義

福永光司 著

人間はだれでも自由でありたいと願う。昔から人類の教師、哲人賢者とよばれる人びとは、人間の自由について多くのすぐれた思惟と叙言を示し、その教説をさまざま著作に書き残してきた。特に莊子は、親的な思考方法ではなく、いかに囚われることのない自由な自己をもちうるかを明らかにした。莊子を敬愛し、『莊子』によって人生の苦境を乗り越えてきた著者が「生を善し」とし、「死を善し」とする思想を深い感動をもって伝える。

720円
100036-1

39 医学の歴史

小川鼎三 著

医学は人類の歴史とともに古い。呪術にたよっていた古代人の薬草発見を医学のあけぼのとするれば、ヨーロッパにおける大学の誕生と人体解剖こそ近代医学の第一歩である。東洋医学の伝統をうけついできた日本の医学はまた、蘭学の伝来によって急速に近代医学へと発展した。本書は、日本の医学の歩みを東洋と西洋との接点としてとらえながら、異なる人間観によって独自の道を進んだ東洋医学と西洋医学の歴史を説く。

720円
100039-2

76 二・二六事件 増補改版

— 「昭和維新」の思想と行動

高橋正衛 著

昭和十一年二月二十六日、降りしきる雪を蹴って決行された青年将校たちのクーデターの結果は全員処刑により終った。本書は、多くの資料によって事件の経過を再現し、彼らが意図した「昭和維新」「尊王攘夷」の意味を探り、軍隊のもつ統帥権意識を解釈の軸として、昭和初期からの農村の疲弊に喘ぐ社会との反応、軍部の政治への結合と進出の過程を追う。なお、改版に当り「命令・服従」という日本軍隊の特性について増補・加筆する。

820円
190076-0

84 太平洋戦争(上)

児島 襄 著

民族の興廃を賭け、二五〇万の尊い人命を失って敗れた太平洋戦争は、日本人にとってなんであったか。単なる回想や懺悔の対象であつて五年の歳月を費やしか、国内資料の渉猟はもろろん、アメリカへ調査に渡り、南洋諸島、東南アジア各国の旧戦場を隈なく訪ね、相戦った双方の資料を突き合わせて戦争の赤裸な姿を再現する。

1100円
100084-2

90 太平洋戦争(下)

児島 襄 著

米軍の反攻が本格化し、日本軍の退勢が明らかに成り始めた昭和十八年以降——日本軍將兵の勇戦敢闘に、米兵はタラワの恐怖に身震いし、硫黄島の砂を鮮血で染め、カミカゼの機影におびえていた。その能力と気力に優劣なき両軍の戦士が相対峙したとき、將軍は何を策し、指導者は何を企図していたのか。すべての戦闘戦略について双方の資料を照合して描く。本書は、新鮮なイメージで戦争をとらえる。

毎日出版文化賞受賞

1100円
100090-3

92 肉食の思想

——ヨーロッパ精神の再発見

鯖田豊之 著

ヨーロッパ人は、いったいなぜ動物を屠畜して食う一方で、動物を愛護するのか——。本書は、ヨーロッパ思想の原型を、きびしい歴史的・地理的条件が生み出した特有の食生活のバターンに求め、そのバターンにもとづいて形成されてきた思想の伝統を明らかにし、それによって規制される彼らの日常生活や心理・行動を、日本とも比較しながら平易に説く。食生活という新しい視点の導入によってヨーロッパの歴史を見直す、西洋史学究の問題作。

840円
100092-7

108 国際政治 改版

——恐怖と希望

高坂正堯 著

世界平和を実現するために人類は古くから睿智を傾けたが、戦いは繰り返された。戦争の危機はなぜ去らないのか——この問いに答える書物は少ない。国際関係を単純に図式化・理想化するごとくなく、また「複雑怪奇」といって正確な認識を諦めることもない追い求めた著者が、軍縮、経済交流、国際機構などを具体的に検討しながら、国家利益やイデオロギーがからみあう現実世界を分析し、組織的に論じた国際政治の入門書。

860円
180108-1

113 日本の外交

——明治維新から現代まで

入江 昭 著

日本の外交思潮のバターンである「政府の現実主義」と「民間の理想主義」とは、日本が日露戦争の勝利によって二十世紀の国際外交の舞台に躍りだすまでにはできなかったが、大陸への野心から太平洋戦争へ、そして敗戦から日米安保体制下の今日にいたるまで、百年の尺度で日本の近代外交の思潮をかえりみると、そこにはどのような歴史の教訓を引きだすことができるだろうか。長期の展望にたつて、今日の外交への指針を示そうとする。

660円
100113-9

118 フイレんツエ

——初期ルネサンス美術の運命

高階秀爾 著

ブルネレスキ、ドナテロ、マサッチオ等々、相次ぐ巨匠の輩出によって、十五世紀のフイレんツエは美術の黄金時代を迎えていた。しかし世紀の変わり目にあつて、レオナルド、ポリウオーロ、ペロッキオ等の優れた芸術家の芽を育てながら、ついにその成果を果らせることなく衰退に向かい、盛期ルネサンスの栄光をローマにゆずる。このフイレんツエ美術の実相を究明し、芸術の運命について考える。

700円
100118-4

125 法と社会

——新しい法学入門

碧海純一 著

社会においては個人の行動を規制し、秩序を維持していくことが不可欠であるが、これは主として「社会化」および「社会統制」という過程を通じて行なわれる。本書は、法を社会統制のための特殊な技術とみる立場からその社会的機能を論じ、法と他の文化領域——言語、神話、宗教、道徳などとの関係を明らかにする。古代社会や未開社会における社会秩序の問題にも考慮がはらわれており、従来の書とはやや異なつた法学入門である。

820円
100125-2

134 地獄の思想

——日本精神の一系譜

梅原 猛 著

日本人は、生の力を肯定する思想とともに、生の暗さを凝視する思想を愛した。この地獄の思想こそ、人間の苦悩への深い洞察と、生命への真摯な態度を教え、日本人の魂の深みを形成してきた。源信、親鸞、紫式部、世阿弥、近松門左衛門、宮沢賢治、太宰治などは、みな現世に地獄を見た人びとであつた。これら先人の深い魂の苦闘の跡を知らなければならぬ。生命の強さは、どれだけ暗い生の事実を見つめるかによつて示されるからである。

780円
100134-4

136 発想法 改版

——創造性開発のために

川喜田二郎 著

ここで語られる「発想法」つまりアイデアを創り出す方法は、発想法一般ではなく、著者が長年野外研究をつづけた体験から編みだした独創的なものだ。「データそれ自体に語らしめつつそれをどうして啓発的にまとめたらいか」という願いから、KJ法が考案された。ブレン・ストーミング法に似ながら、問題提起↓記録↓分類↓統合にいたる実技とその効用をのべる本書は、会議に調査に勉強に、新しい着想をもたらす。

720円
180136-4

147 騎馬民族国家 改版

——日本古代史へのアプローチ

江上波夫 著

日本国家と日本民族の起源は東北アジア騎馬民族の日本征服にあるという説にたつ著者が、大陸と古代日本との比較・対照によつて、その社会・政治・軍事・文化などのそれぞれの面で具体的に符合することを証明する。第1部では、騎馬民族であるスキタイ・匈奴・突厥・鮮卑・烏桓などの興亡の歴史とその特質を描き、第2部では日本における征服王朝をとりあげて、大陸騎馬民族との比較研究を綿密に行なう。

毎日出版文化賞受賞

980円
180147-0

161 秩父事件

——自由民権期の農民蜂起

井上幸治 著

明治十七年秋、明治国家がまさに確立せんとする時期、秩父盆地を中心舞台に武装蜂起し、一時「無政の郷」を現出した農民たちのエネルギーは、どのような者によって生みだされたのか。事件の策源地に生まれ育ち、この事件を歴史家としての原点と考える著者は、困民党の反権力意識、行動形態、組織など、事件において農民たちの主体的基盤をなしたものを解明する。ここでは、商品経済の波にのみこまれた農民の変革精神が生き生きと流れている。

780円
100161-0

210 続・発想法
— KJ法の展開と応用

前著『発想法』で公開したKJ法の実技をさらに発展させ、加えて実例・応用例・図解等を豊富にとり入れた本書は、自己革新のために、会議運営の効率化のために、新製品開発のために、チームワークのために、あるいはカウンセリングにと、その効用は著しいものがある。情報化社会といわれる今日、ソフトウェアのなかのソフトな部分をうけつKJ法の効力が再確認されている。『発想法』との併読を強くおすすめしたい。

220 詩経

— 中国の古代歌謡

川喜田二郎 著

『詩経』は潑たる古代人の精神と豊かな生命の胎動を伝える中国最古の詩歌集である。それにもかかわらず、儒教の聖典の一つとして特殊な解釈の上に早くから古典化し、詩歌本来の姿が見失われて久しい。この古代歌謡の世界を回復するために、その発想基盤の類似性をわが国の『万葉集』に求め、比較民俗学的な立場から、古代人の民俗と生活感情に即しつつ、哀歓をこめて歌われた民謡や貴族社会の詩のうちにある生命と感動を蘇らせる。

244 東京裁判(上)

白川 静 著

ニールンベルク国際軍事裁判とともに歴史上前例のない戦争犯罪人を裁く極東国際軍事裁判は、戦争に敗れた日本人に何を問うたか。昭和二十一年五月三日の開廷以来半年余、三百七十回に及ぶ公判で「平和」の名道、戦争に対する罪の名道と、満州事変から太平洋戦争に至る「侵略」の事実を問い、七人の絞首刑を含む二十五人全員に有罪を宣した東京裁判の全容を、膨大な公判速記録、公判資料、関係諸国・内外関係者の取材から解明する。

248 東京裁判(下)

児島 襄 著

極東国際軍事裁判は、毎回波乱をきわめた。苛烈な検事側立証に続き、本巻は一般、満州、中国、ソ連、三国同盟、太平洋戦争と六段階に分けた弁護団の反証に入り、最大の問題点天皇の不起訴を決めて立証合戦は終った。二十三年十一月十二日、二十五人全員有罪というニールンベルク以上の苛酷な判決で歴史的な大裁判の幕は閉じた。勝者が敗者を裁いた東京裁判とはいったい何であったのか。太平洋戦争とともに日本を考え直す。

252 ある明治人の記録 改版

— 会津人柴五郎の遺書

石光真人 編著

明治維新に際し、朝敵の汚名を着せられた会津藩。降伏後、藩士は下半島の辺地に移封され、寒さと飢えの生活を強いられた。明治三十三年の義和団事件で、その沈着な行動により世界の賞讃を得た柴五郎は、会津藩士の子であり、会津藩城に自刃した祖母、母、姉妹を偲びながら、維新の裏面史ともいべき苦難の少年時代の思い出を遺した。「城下の人」で知られる編著者が、その記録を整理編集し、人とその時代を概観する。

275 マザー・グースの唄

— イギリスの伝承童謡

平野敬一 著

マザー・グースの唄とはイギリスの伝承童謡の総称である。格言あり、なぞなぞあり、ナンセンスあり、英語国民の生活感覚や言語感覚の機微に満ち、そのことばは、現代英語のイデオロムとなっている。このような英語文化の基盤をなすものへの理解を欠いては、高遠な文化論も文学論もむなし。本書はマザー・グースの唄を紹介し、伝承童謡が英語文化のなかで果たした役割を考える、英語に関心をもちつすべての人にすすめる好著である。

285 日本人と日本文化

司馬遼太郎／ドナルド・キーン 著

雄大な構想で歴史と人物を描き続けてきた司馬氏と、日本文学・文化の秀れた研究者として知られるキーン氏。平城宮址、銀閣寺、適塾で共に時を過ごし、歴史の香りを味わうなかで、語りすすめられた。「ますらおぶら」と「たおやめぶら」、忠義と裏切り、上方と江戸の違い、日本にきた西洋人等々をめぐって楽しく話題が展開するうちに、日本人のモラルや美意識が、また日本人独得の大陸文化・西欧文化のこなし方が掘り下げられる。

290 ルワンダ

中央銀行総裁日記 増補版

服部正也 著

一九六五年、経済的に繁栄する日本からアフリカ中央の小国ルワンダの中央銀行総裁に着任した著者待つのとは、財政と国際収支の恒常的赤字であった——。本書は物理的条件の不利益に屈せず、様々な驚きや発見の連続のなかで、あくまで民情に即した経済改革を遂行した日本人総裁の記録である。今回、九四年のルワンダ動乱をめぐる一文を増補し、著者の業績をその後のアフリカ経済の推移のなかに位置づける。

318 知的好奇心

波多野諠余夫／稲垣佳世子 著

伝統的な心理学の理論は、人間を「ムチとニンジン」がなければ学びも働かもしない怠けもの、とみなしてきた。それははたして正しいか。興味深い実験の数々を紹介しつつ、人間は生まれつき積極的に情報的交渉を求める旺盛な知的好奇心を持ち、それこそが人間らしく生きる原動力であることを実証し、怠けもの説に基づく現在の学習・労働観を鋭く批判する。楽しい学習の設計や幼児の知的教育の可能性を具体的に追求する。

352 日本の名作

— 近代小説62篇

小田切 進 著

二葉亭四迷の『浮雲』に発するといわれる、日本の近代・現代文学の長い歴史のなかから、名作・佳品六十二篇を選び、各作品の原文を生かしつつ梗概をたどり、あわせて鑑賞のための解説と批評を附す。大学、読書サークル、季節大学等における、著者の豊富な経験から生れた、高校生や大学生はじめ文学愛好家のための名作への案内。日本近代文学館理事長でもある、最過の著者に編まれた本書は、初めて文学に接する人々の恰好の文学入門でもある。

385 カラー版

近代絵画史 増補版(上)

— ロマン主義、印象派、ゴッホ

高階秀爾 著

絵画における近代は、印象派とともに始まる、といわれる。しかし、印象派の「革命」をもたらし要因がロマン主義の運動にあるとすれば、広い意味でのロマン主義に始まる大きな歴史の流れの中で近代絵画の理解される必要がある。本書は、十九世紀前半から第二次世界大戦にいたるおよそ一五〇年間の西洋絵画を概観。上巻は近代絵画の先駆者ゴッホから、ボナールに代表されるナビ派まで。名著をカラーで刷新。

386 カラー版

近代絵画史 増補版(下)

— 世紀末絵画、ピカソ、シュルレアリスム

高階秀爾 著

二十世紀の美術は、思いがけない多面的展開によって私たちを驚かす。しかし、抽象絵画やシュルレアリスムの作品は、決して画家の気まぐれや偶然の産物ではない。それぞれの美術運動は、印象派で頂点を極めた写実主義を想像力で乗り越えようとするものであった。本書は、十九世紀前半から第二次世界大戦にいたる一五〇年間の西洋絵画を概観。下巻は、世紀末絵画から抽象絵画まで。増補にあたり、あとがきを新規に収載。

410 取材術

— 探求の技法

加藤秀俊 著

取材の立場とは積極的・主体的に情報を使う立場のことである。そのためには氾濫する情報を受けるだけの立場ではなくて、まず何より問題意識をもつ必要がある。取材したいテーマをきめて目的を達成するまでにどうしたらよい。本書は著者の体験をふまえて、図書館の利用法から索引の使い方、見出し読みの効用、さらにはもの知りについて聞く方法からその作法、あるいは自分の眼で現地をたしかめる取材旅行にいたるまでを説き明かす。

416 ミュンヘンの小学生

— 娘が学んだシュタイナー学校

子安美知子 著

学者夫妻がミュンヘンに留学して、娘さんを入学させた学校のユニークな教育——「詰め込み」をさせて授業を進めて行き、落第もさせないし、能力による選別もやらない。しかし十二年間の一貫教育のあとでは、実力が身についている。「エポック授業」「オイリュトミー」など子どもの能力発達に適した方法……日本の教育が直面している難問題を解決している学校を、娘の生活を通して母親が綴る。

433 日本語の個性

改版

外山滋比古 著

もともと日本語は「終りなければすてよし」の構造で、重心は末尾の動詞にあった。だが次々と登場した名詞群に関心が移り、バランスが崩れた結果、長く培われてきたおもしろさは失われた。それは翻訳文化の影響だといえる。日本語本来の魅力を取り戻すうえで、話し言葉がもつ豊かさこそ重要なカギとなるのではあるまいか——日常の言語生活にひそんだ盲点の数々を、英語表現と比較しつつ軽やかな筆致で示唆するエッセイ。

448 詭弁論理学

改版

野崎昭弘 著

知的な観察によって、人を悩ます強弁・詭弁の正体を見やぶろう。言い負かし術には強くならなくとも、そこから議論を楽しむ「ゆとり」が生まれる。人食いワニのパラドックスや死刑囚のパラドックスなど、論理パズルの名品を題材に、論理のあそびをじっくり味わおう。それは、詭弁術に立ち向かうための頭の訓練にもなる。ギリシャの哲人からルイス・キャロルまでが登場する、愉快な論理学の本。「鏡と左右」問題の付録つき。

455 戊辰戦争

— 敗者の明治維新

佐々木 克 著

戊辰戦争に勝利することによって薩長討幕派は明治政権の主体となりえた。だが幕藩制国家にかわる統一国家の構想は討幕派だけがもっていたのではない。徳川慶喜、榎本武揚、河井継之助、そして会津、庄内および奥羽越列藩同盟も自ら描いた国家像があった。彼らは「朝敵」とされながらも何故に、何を求めて戦い、敗北したのか。敗者に負わされたマイナスの遺産はなにか。敗者の側に分析の視座を置いて戊辰戦争に新たな照明をあてる。

476 江戸時代

大石慎三郎 著

小説・映画・演劇が作りあげた江戸時代のイメージは、歴史学の研究成果と合致しないものが少なくない。また膨大な史料や事実の中で、全体像を見失った歴史書もある。あるいは、近代社会が前の近世社会をことごとく古く見せようとした傾向も少なくない。本書は、二五〇年あまり内外ともに戦争のなかった時代、しかも今日の一般庶民大衆の歴史が直接始まった時代の全体的特徴を、捉え直す。江戸時代イメージを一新する通史である。

481 無意識の構造

改版

河合隼雄 著

私たちは何かの行為をしたあとで「われ知らずにしてしまった」ということがある。無意識の世界とは何なのか。ユング派の心理療法家として知られる著者は、種々の症例や夢の具体例を取り上げながらこの不思議な心の深層を解明する。また、無意識のなかで、男性・女性によって異性像がどうイメージされ、生活行動にどう現れるのか、心のエネルギーの退行がマザー・コンプレックスに根ざす例なども含めて鋭くメスを入れる。

482 倭国

— 東アジア世界の中で

岡田英弘 著

本書は中国の史料を基礎に、確実な事実を積み重ねて、日本をとりまく国際情勢を把握し、東アジア全体の民族の興亡と政治の動態、大陸から日本にまで及んだ壮大な商業ルートを明らかにし、華僑の来日とその背景、卑弥呼の王権がどのような状況で成り立ちえたかなど、意外なドラマを展開する。大きな流れを踏まえた視点で『日本書紀』の伝承に新たな光をあてて日本古代史の謎に大胆な解釈を加え、日本民族と国家の誕生過程を描く。

500 漢字百話

白川 静著

漢字の伝統は、中国では字形を正す正字の学として、わが国ではその訓義を通じて漢字を国語化する問題として存在した。中国が正字を捨て、わが国で訓義的使用を多く廃すのは、それだけの伝統の否定に連なる。また、両国の文字改革にみる漢字の意味体系の否定は、その字形学的知識の欠如に基づく。甲骨・金文に精通する著者が、このような現状認識から、漢字本来の造字法やその構造原理に即しつつ、漢字の基本的語問題を考察する。

515 少年期の心

— 精神療法を通してみた影

山中康裕 著

一歩家を出ると一言も口をきかない太郎君、不登校を続ける庭子さん、自分の母親が母親と分からなくなった霧子さん、執拗な心気症から自殺まではかった誠君……。ごく当り前の小学生・中学生を辛い危うい淵に追いやった原因は何か。「箱庭療法」はじめ、イメージの世界で彼らとことんつきあうことを通じその心の治療に取組んできた著者が、一つ一つのケースを如実に描きだし、親が、教師が忘れてはならないことを愛情をこめて説く。

518 刑吏の社会史

— 中世ヨーロッパの庶民生活

阿部謹也 著

かつて社会にとって最も神聖な儀式であった「処刑」は、十一、十三世紀を境にして、名誉をもたない刑吏の仕事に変わっていった。職業としての刑吏が出現し、彼らは民衆から蔑視され、日常生活においても厳しい差別をうけた。都市の成立とツunftの結成、それにもなう新しい人間関係の展開、その中で刑罰観はどう変化していったか。刑罰観の変遷と刑吏差別の根源を追究する中で、庶民生活の実態を明らかにし、民衆意識の深層に迫る。

530 チャーチル

増補版

— イギリス現代史を転換させた
— 一人の政治家

河合秀和 著

植民地での従軍・観戦に、福祉政策の着手に、第一次大戦の作戦指揮に、時には反革命に情熱を傾け、歴史を書くことで政治家としての背骨を作ってきたチャーチル。彼は一九四〇年、ただ一国でナチ・ドイツに対峙する祖国を率いて立つ。イギリスの過去と現在を一身に体現した彼は、帝国没落の暗黒の時を、輝ける一ページに書き変えた。資料を博搜し、貴重な見聞を交えて描く巨人の伝記に、新たに「チャーチルと日本」の一章を増補した。

533 日本の方言地図

徳川宗賢 編

相手の出身地も知らずに「シアサツに会おう」などと約束するのは危険であろう。西日本と東日本では、その意味内容が同じでない。このようなことばの地域差を分布図に読み取る方法は、柳田国男の『蝸牛考』にはじまる。以来、約半世紀の空白時代を経て、国立国語研究所の行なった全国的な言語調査の成果『日本言語地図』（全六巻）の中から代表的な五〇枚を選び出して略図化し、そこに投影されたことばの生成・発展・衰滅を明らかにする。

557 対象喪失

— 悲しむということ

小此木啓吾 著

肉親との死別・愛の喪失・転勤・浪人等々、日ごろ馴れ親しんだ対象を失ったとき、その悲しみをどう耐えるかは、人間にとって永遠の課題である。ところが現代社会はいつのまにか、悲しむことを精神生活から排除してしまい、モラトリアム人間の時代を迎えて「悲しみを知らない世代」が誕生し、いたずらに困惑し、絶望にうちひしがれている。本書は具体例によって悲哀の心理過程と悲哀の意味を説き、自立することへの関係に及ぶ。

560 文化人類学入門

増補改訂版

祖父江孝男 著

文化人類学とは、社会・文化・経済・宗教をはじめ諸分野にわたって、またそれぞれに異なる世界の民族を比較検証する広範な研究対象を視野に取めた学問である。その方法論は、フィールド・ワークによる具体的でしかも忍耐強い実証的な調査が重視される。本書は、この多岐にわたる学問を系統的に要約整理した入門の書として、一九七九年刊行以来、多くの読者を得て版を重ねてきたものを増補改訂し、学界の新しい情報を提供する。

561 明治六年政変

毛利敏彦 著

明治六年十二月、西郷隆盛は、板垣退助ら四参議とともに、自らの手をつくった政府を去った。西郷はなぜ野に下ったのか。征韓論に敗れたからという。また不平士族の棟梁として殉じたのだともいう。当時の内政外交の激動の過程を先人見を去って正確にたどってみると、驚くべき事実が浮かび上がってくる。——西郷は、日本への法治主義導入をめぐる深刻な政争の犠牲者だった。「征韓論」政変の名の下に隠されていた事件の真相に迫る。

563 幼い子の文学

瀬田貞二 著

子どもと子どもの本の世界を愛しつつ逝った著者の真骨頂を伝える連続講話。東西のさまざまな、わらべ唄、民話についての造詣を自在に語り、確かな目で選ばれた詩や物語を朗読し鑑賞するなかで、幼い子どもの心を深くゆさぶり、そして大人の読者も惹きつけずにはおかない、本当の幼年文学の姿がありありと浮かびあがる。楽しい作品、数々の優れた翻訳によって日本の児童文学を豊かにした著者ならではの道案内。

565 死刑囚の記録

加賀乙彦 著

一九五四年、松沢病院の医師として一人の殺人犯を診察したときが、著者の死刑囚とのはじめの出会であった。東京拘置所の精神科医官となつてから、数多くの死刑囚と面談し、彼らの悩みの相談相手になることになる。本書では著者がとくに親しくつきあった人びとをとりあげてその心理状況を記録する。極限状況におかれた人びとが、一様に拘禁ノイローゼになつている苛酷な現実を描いて、死刑とは何かを問いかけ、また考える異色の記録。

720円
100500-7

780円
100515-1

760円
100518-2

940円
190530-7

720円
100533-5

680円
100557-1

800円
190560-4

780円
100561-8

800円
100563-2

820円
100565-6

596 茶の世界史 改版
—緑茶の文化と紅茶の社会

角山 栄著

一六世紀に日本を訪れたヨーロッパ人は茶の湯の文化に深い憧憬を抱いた。茶に魅せられ茶を求めることから、ヨーロッパの近代史は始まる。なかでもイギリスは独特の紅茶文化を創りあげ、茶と綿布を促進剤として伸長した資本主義は、やがて東洋の門戸を叩く。突如世界市場に放り出された日本の輸出品「茶」は、商品としてははるばる敗勢明らかだった。読者がいま手に茶碗をお持ちなら、その中身は世界史を動かしたのである。

860円
180596-6

599 無気力の心理学 改版
—やりがいの条件

波多野諠余夫／稲垣佳世子著

「どうせダメだ」——現代社会に蔓延する無気力。衣食住が満たされた豊かな環境というだけでは、「効力感」、つまり意欲的に環境に働きかける態度は生まれない。本書は、心理学の研究成果を広く紹介し、自律性の感覚、他者との交流、熟達のもつ意義など、さまざまな角度から効力感を発達させる条件を掘り上げる。さらに子ども大人も、やりがいを持って生きられる教育や社会のあり方についてヒントを示す。

800円
180599-7

605 絵巻物に見る
日本庶民生活誌

宮本常一著

日本の絵巻物は、時代の民衆生活を知る貴重な宝庫でもある。民衆の明るさを語る「陽気な日本人」から始まり、次いで「人生」「農耕」「人間と動物」「海的生活」「工匠と民衆」「旅と交易」「住居」「火と生活」「衣生活」「飲食と生活」「信仰と生活」といった民俗誌的な章立てで、絵巻物に描かれた庶民の生活とさまざまな習俗を読みとる。本書は、多年全国の田舎を隈なく歩き回り、庶民と民俗に愛情深い眼を注ぎつけた著者の遺著となった。

820円
100605-9

608 中世の風景(上)

阿部謹也／網野善彦／石井進／樺山紘一著

これまで私たちにあって、中世の明確なイメージを結ぶことはむずかしかった。しかし、近年の中世史研究の新しい動向はめざましいものがあり、具体的な中世の諸相が浮かび上がった。本書は、四人の中世史家による中世についての活発な討論の記録である。上巻は、「海・山・川」などの縁辺に暮らす民の文化、社会に独自の地位を占める多種多様な「職人」、中世の忘れられない景観である「馬」、そして「都市」がテーマとなる。

800円
100608-0

613 中世の風景(下)

阿部謹也／網野善彦／石井進／樺山紘一著

長い緩慢な時の流れを想わせる中世は、日本にとってもヨーロッパにとっても、うねりのような大転換にあたっていたことがしだいに明らかにされてゆく。また人の心の内側でも、新旧の壮大な葛藤がくりひろげられていた時代だといってもよい。下巻では、歴史学に聴覚の世界を導入した「音と時」「徳政を待望する庶民の意識を掘り起す」「売買・所有と法・裁判」ほか、「農業」「家」「自由」「異端」がテーマとなる。

720円
100613-4

624 理科系の作文技術

木下是雄著

物理学者で、独自の発想で知られる著者が、理科系の研究者・技術者・学生のために、論文・レポート・説明書・仕事の手紙の書き方、学会講演のコツを具体的にコーチする。盛りこむべき内容をどう取捨し、それをどう組み立てるかが勝負だ、と著者は説く。文のうまさ、主眼を置いた従来の文章読本とは一線を劃し、ひたすら「明快・簡潔な表現」を追求したこの本は、文科系の人たちにも新鮮な刺激を与え、「本当に役に立った」と絶賛された。

840円
100624-0

632 海軍と日本

池田 清著

極東無名の非白人国日本を、国際政治の檯舞台に引き上げるのに大きく貢献した海軍は、またその日本を破滅の淵に追いこんだもう一人の主役でもあった。近代日本にあって、ひとたび抜き出た人材と技術とすぐれた国際認識とをもちえたはずのこの集団が、何故あの戦争にのめりこんでいったのか。短剣と白手袋に象徴されるスマートさの奥に潜む、ある見逃しがない体質を追及するとともに、太平洋戦争をより広い国際環境の枠組のなかで捉え直す。

660円
100632-5

650 風景学入門

中村良夫著

環境問題が景観問題を素通りして公害問題というかたちで深刻化し、美しい国土の景観は悪化の一途をたどりつつある。本書は、人間環境の眺めである景観の意味と価値を問いなおすために、風景の視覚像の特性を明らかにし、古今のさまざまな風景体験を精査することから生活環境を整える技術的知識体系として「風景学」を構想する。風景を目きし、風景への愛着を培うための一書である。

サントリー学芸賞受賞

820円
100650-9

666 犯罪心理学入門

福島 章著

日常的にさまざまな犯罪が頻発している。幼いときの環境のひずみから犯罪に走る場合もあるが、まじめなサラリーマンとして過してきたひとが、突然犯罪をおかす場合もある。動機は何か、また犯罪者の気質や性格・環境はどうだったかなど、さまざまなケースを多次元診断によって追究し、犯罪という極限状況にあらわれた人間の心理と行動とをさぐる。具体例によって説かれており人間について多くのことを教えられる。

780円
100666-0

674 時間と自己

木村 敏著

時間という現象と、私が私自身であるということとは、厳密に一致する。自己や時間を「もの」ではなく「こと」として捉えることによって、西洋の独我論を一気に超えた著者は、時間と個我の同時の誕生をあざやかに跡づけ、さらに、あつうは健全な均衡のもとに散わっている時間の根源的諸様態を、狂気の中に見てとる。前夜祭的時間、あとの祭的時間、そして永遠の今に生きる祝祭的時間——「生の源泉としての大いなる死」がここに現前する。

760円
100674-5

691 胎児の世界
— 人類の生命記憶

三木成夫 著

赤ん坊が、突然、何かに怯えて泣き出したり、何かを思い出したようににつこり笑ったりする。母の胎内で見残した夢の名残子を見ているのだという。私たちは、かつて胎児であった「十月十日」のあいた羊水にとっぷり漬かり、子宮壁に響く母の血潮のざわめき、心臓の鼓動のなかで、劇的な変身をとげたが、この変身劇は、太古の海に誕生した生命の進化の悠久の流れを再演する。それは劫初いらいの生命記憶の再現といえるものであろう。

700円
100691-2

700 戦略的思考とは何か 改版

岡崎久彦 著

先進国の大学で、戦略や軍事と題した講義を聴けない国は日本だけだ。しかし、日本が自らの意思にかかわらず戦争に直面せざるを得ない場合を考えておくのは、平和を望む者にとって、ごくふつうの教養の一部ではないだろうか——。国家戦略の欠如を憂えた著者は、歴史と地政学を入り口に日本の戦略的環境を解明、その歩むべき道を示した。情報の役割を重視し、冷静かつ現実的な分析に徹した国家戦略論の名著。

920円
180700-7

721 地政学入門 改版
— 外交戦略の政治学

曾村保信 著

地政学とは地球全体を常につの単位と見て、その動向をリアル・タイムでつかみ、そこから現在の政策に必要な判断の材料を引き出そうとする学問である。誤解されがちだが、観念論でも宿命論でもない。本書は現代の地政学の開祖マッキンダー、ドイッ地政学を代表するハウスホーファー、そしてマハーンらによるアメリカ地政学を取り上げ、その歴史と考え方を紹介する。地図と地球儀を傍らに、激動の国際関係を読み解こう。

740円
180721-2

740 元禄御畳奉行の日記
— 尾張藩士の見た浮世

神坂次郎 著

尾張徳川家に二百五十年間秘匿されてきた「鵜飼籠中記」という稀有の日記がある。筆者は御畳奉行朝日文左衛門。知行百石役料四十俵、元禄に生きた、酒好き女好き芝居好きのありふれた侍だが、好奇心旺盛で無類の記録マニア、当時の世相を赤裸々に書きとめて倦むことなく、二十七年に及ぶ。文左衛門の記述を読み解いていくと、華やかなイメージとは裏腹な、滑稽と悲慘が渦巻く、元禄の真の時代像が浮かび上がってくる。

780円
100740-7

757 問題解決の心理学
— 人間の時代への発想

安西祐一郎 著

人間が目標達成に向けて自在にコントロールできる心理的機能や、それに基づく特徴は、最新の情報処理的アプローチによる認知心理学によって、はじめて明らかにできるようになった。本書は、問題解決のシステムをめぐるさまざまな実験的成果を踏まえながら、われわれが生きていくなかで直面する大小の事態に、どのように対応する機能があるかを具体的に考察し、人間だけがもつ「自由に目標を創り出す能力」について考察。

820円
100757-5

784 豊臣秀吉

小和田哲男 著

日本の歴史上、最も大衆に愛されている豊臣秀吉の生涯は、出生から二十八歳まで完全な謎に包まれている。しかし、今日流布する秀吉の立身出世譚は、人気者ゆえに創作が重ねられて、江戸期には反権力・反徳川の思潮の中で庶民の共感を得、明治期に入ると、海外侵略の輝かしい先駆者伝として教科書にまで登場する。本書は、創作の過程で虚と実を混在させた史伝群を確かな史料と史眼で検証し、真の秀吉像を洗い出す。

760円
100784-1

795 南京事件 増補版
— 「虐殺」の構造

秦 郁彦 著

満州事変以来、十数年にわたって続いた中国侵略の中で、日本軍が最も責められるべき汚点を残した南京事件とは？ 日本軍の戦闘詳報、陣中日誌、参戦指揮官・兵士たちの日記など多数の資料を軸に据え、事件の実態に迫る。初版刊行以降二十余年、虐殺の有無や被害者数など、国の内外で途切れることなく続いた論争の要点とその歴史的流れをまとめる章を新たに増補。日中双方の南京戦参加部隊の一覧、詳細な参考文献、人名索引を付す。

940円
190795-0

799 沖縄の歴史と文化

外間守善 著

沖縄は地理的に遠く、日本本土と趣きの異なる歴史と文化をもっているため、歴史を区切る概念も、文化を貫く美意識も、それらを表現する言語も、すべて本土的な尺度では計れない。本書は、単に日本列島の一島嶼群として捉えるのではなく、広く太平洋洋文化圏の中に位置づけ、日本人および日本文化のルーツの一つともいえるべき沖縄の歴史と文化を、諸分野の研究成果を取り入れながら紹介する。沖縄の実相を識るための入門書である。

700円
100799-5

804 蝦夷
— 古代東北人の歴史

高橋 崇 著

「蝦夷とはなにか」という問題を含めて、古代東北史の戦後四十年間の研究は、質量ともに「膨大なものがある。その中で多くの通説や定説が生れたもの、それらは必ずしも厳しい史実検証が行われたものとはいえない。本書は、最近の目覚ましい考古学の成果を取り込み、数少ない史料を丹念に検討しなおして、古代史の中でも、最も深い闇の奥底に閉ざされてしまつた、まつろわぬ民。蝦夷」古代東北人の実像と、その軌跡の解明を試みる。

820円
100804-6

807 コミュニケーション技術
— 実用的文章の書き方

篠田義明 著

「英文ドキュメント作成法」で知られる実用英語の第一人者が、今度学生、ビジネスマンのために、日本語のわかりやすい文章を苦しまないで、早くまとめるコツを具体的に解説する。ワンフレーズ/ワンミニッツ/ワンセンテンス/ワンアイデア、ワンパラグラフ/ワントピックのルールを紹介し、そのルールを駆使した例題文を通じて、論文、レポート、説明書、提案書、カタログなどの実用的な文章の上達法を明快・簡潔に解説する。

660円
100807-7

819 アメリカン・ロイヤルの誕生

— ジョージタウン・ロー・スクール留学記

弁護士^ロ社会といわれるほどロイヤルの活動の場と機会が多いアメリカで、ロイヤルはいかにして生まれるのか。本書は一九八一年当時、ロー・スクールのJ・D・プログラムに進む日本人が極めて少なかった頃、正規の三年間コースを修めるために留学した一企業人の奮戦記である。名門ロー・スクールの厳しい学業を卒え、無事司法試験に合格するまでを描いて、アメリカ社会の一面面を鮮やかに浮び上がらせる。

阿川尚之 著

824 辞世のことば

中西 進 著

つひにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとは思はざりしを」。世に知られた在原業平の臨終の歌である。この歌を契沖や本居宣長は死に臨んでの人間の偽りのないまことの心として、契沖も万感こもることばを遺し、宣長にも有名な遺言状に添えた「詠草」がある。このように古来、日本人は末期の感懷を様々のことばに託してきた。その中から六〇人を選び出し、死へのまなざしが生んだ純粹な自己発見の姿を探り出す。

828 清沢 冽

増補版

北岡伸一 著

『暗黒日記』の著者として知られる清沢冽は、戦前期における最も優れた自由主義的言論人であり、その外交評論は今日の国際関係を考える上で、なお価値を失っていない。石橋湛山、馬場恒吾ら同時代人のなかでアメリカに対する認識が例外的に鋭くあり得たといえる。一人のアメリカ移民が邦字新聞記者となり、活躍の舞台を日本に移してから孤独な言論活動の後に死すまでを、近代日本の動きと重ねて描く唯一の評伝。

840円
190828-5

832 外国人による 日本論の名著

佐伯彰一／芳賀 徹 編

幕末日本は異国人に扉を開いた。「謎と神祕の国」であった。以来一三〇年、世界第二の経済大国に成長した「奇蹟」に至るまで、外国人のわが国に対する関心は、書き手・内容共に多彩な日本論を生み出した。このうち、ゴンチャロフの「日本渡航記」からM・バングの「自死の日本史」まで、創見に富み、思いもかけぬパースペクティブを示し、それによって日本人の自己認識を深め豊かにしてくれる秀れた日本人論42篇を選んで解説する。

780円
100832-9

853 遊女の文化史

佐伯順子 著

遊女とはかつて「性」を「聖なるもの」として生き、神々とともに遊んだ女たちであった。本書は従来の遊女史の枠を越え、万葉集、謡曲、梁塵秘抄から御伽草子、近松、西鶴、荷風、吉行淳之介に至るまで、文学に現れた遊女像の系譜を辿りつつ、文化を育んだ「遊び」の姿を明らかにする。ホイジンガの遊戯論に示唆され、比較文学の手法を駆使して試みられた遊女論であるとともに、新しい文化論、女性論への展望を拓く意欲作。

760円
100853-4

881 後藤新平

北岡伸一 著

後藤新平が、台湾総督府民政長官や満鉄総裁として植民地経営に辣腕を振い、鉄道院総裁として国鉄の発展の基礎を築き、都市計画に雄大なヴィジョンを示したことは今日なお評価されるが、外交指導者としては、ほとんど忘れられている。しかし、当時にあつては矛盾と飛躍に満ちた言動ながら後藤の人氣は高く、「唯一の国民外交家」とまで評されるほどであった。本書は、外交指導者の条件を問いつつ、後藤新平の足跡を辿る評伝である。

820円
100881-7

907 人はいかに学ぶか

稲垣佳世子／波多野誼余夫 著

遊びや職業活動に必要な知識・技能を身につけていくとき、人が必要を超えて上達を望み、理解を深めようとするのはなぜか。日常生活での能動性と有能さを支えるものとはなにか。本書は伝統的学習観による「人間受け者」説をくつがえし、「みずから学ぶ存在」としての人を実証的に描き出して、学び手の心的装置と文化の役割を探索すると同時に、「学習」のもつ暗いイメージを再考し、新しい学習観にもとづく教育のあり方を提言する。

720円
100907-4

925 物語 韓国史

金 岡 基 著

五千年の歴史と文化が彩る韓半島には、中国・韓国（朝鮮）・日本など、東アジア諸国の歴史が孕みダイナミズムのなかに、韓民族の諸王朝が興亡する。鴨綠江のかたを原郷とする扶餘族が、韓半島を南下し諸小国平定を進める建国神話に、民族の歴史形成の背景を読み、また周辺諸国との戦いのなかに、民族のアイデンティティ形成の過程を追う。本書は、檀君朝鮮の建国から一九四八年の南北分断までを「父が子に語る韓国史」として描く。

760円
100925-8

939 発 酵

小泉武夫 著

酒、チーズ、納豆等の嗜好食品から医薬品、洗剤の製造、さらには抗生物質、アミノ酸、ビタミン、微生物タンパク質の製造まで、発酵の作用は広く利用されている。自然界における環境浄化もまた微生物の活動に依存する領域で、発酵は地上の動植物の生存に不可欠の作用である。フグの毒抜き、中国の「奇跡の発酵」等、世界各地の発酵文化に今日のバイオテクノロジーの原点を探り、目に見えない微生物の神秘的世界を宇宙的スケールで捉える。

660円
100939-5

978 室町の王権

今 谷 明 著

強大なカリスマ性をもって、絶対主義政策・中央集権化を支持する官僚・公家・寺社勢力を操り、武家の身で天皇制度の改廃に着手した室町将軍足利義満は、祭祀権・叙任権などの諸権力を我が物にして対外的に（國王）の地位を得たが、その死によって天皇権力暴発計画は挫折する。天皇制度の分岐点ともいべき応永の時代に君臨した義満と、これに対抗した有力守護グループのせめぎあいの中に、天皇家存続の謎を解く鍵を模索する。

760円
100978-4

989 儒教とは何か 増補版

加地伸行 著

儒教は宗教というより、単なる倫理道德として理解されがちだ。古い家族制度を支える封建的思想という暗いイメージもつきまとう。しかし、その本質は死と深く結びついた宗教であり、葬儀など日本人の生活の中に深く根を下ろしている。本書は、死という根本の問題から儒教を問い直し、その宗教性を指摘する。そして孔子以前に始まる歴史をたどりながら、現代との関わりを考える。全体を増補し、第六章「儒教倫理」を加えた。

1009 トルコのもう一つの顔

小島剛一 著

言語学者である著者はトルコ共和国を一九七〇年に訪れて以来、その地の人々と諸言語の魅力にとりつかれ、十数年にわたって一年の半分をトルコでの野外調査に費す日々が続いた。調査中に見舞われた災難に、進んで救いの手をさしのべ、言葉や歌を覚えてくれた村人たち。辺境にあつて歳月を越えてひそやかに生き続ける「言葉」とその守り手への愛をこめて綴る。とかく情報不足になりがちなトルコという国での得がたい体験の記録である。

1041 蝦夷の末裔

— 前九年 後三年の役の実像

高橋 崇 著

平安時代中期、陸奥の北上川中流域を席巻していた安倍氏と、出羽の山北地方一帯を押さえていた清原氏は、その勢力が最大に拡張したとき、国家権力の介入を招いて滅亡の災禍に見舞われた。前九年の役、後三年の役の両合戦である。古代東北史を語る上で不可欠の大事件にも拘わらず、顧末を伝える史料に乏しく、検証も疎かにされてきた両合戦の実像を、厳密な史料批判のもとと再検討し、蝦夷の末裔である安倍・清原両氏の興亡を描く。

1042 物語 アメリカの歴史

— 超大国の行方

猿谷 要 著

アメリカは民主主義の理念を具体的に政治に実現させた最初の国である。独立宣言（一七七六年）の中心「すべての人間は生まれながらにして平等である」は、今なお民主主義国家の道標として輝き続けているものの、人種間の問題や戦争など、建国から二百年余、その歴史は平坦ではなく、生々しい傷がまだ癒えることなくその跡をとどめてくる。この超大国の光と影を、戦後深いなごりをもつて歩んできた日本との関係もまじえて描く。

1045 物語 イタリアの歴史

— 解体から統一まで

藤沢道郎 著

皇女ガラ・ブラキディア、女伯マティルデ、聖者フランチェスコ、皇帝フェデリコ、作家ボッカチオ、銀行家コジモ・デ・メディチ、彫刻家ミケランジェロ、国王ヴィットリオ・アメデオ、司書カサノヴァ、作曲家ヴェルディの十人を通して、ローマ帝国の軍隊が武装した西ゴート族の難民に圧倒される四世紀末から、イタリア統一が成就して王国創立宣言が国民議会会で採択される十九世紀末までの千五百年の「歴史」物語を描く。

1085 古代朝鮮と倭族

— 神話解説と現地踏査

鳥越憲三郎 著

中国雲南省辺りの湖畔で水稻栽培に成功し、河川を通じて東アジアや東南アジアの広域に移住していった人々があつた。これら文化的特質を共有する人々を、著者は「倭族」という概念により捉える。この倭族の中で朝鮮半島を経て縄文晩期に日本に渡ってきたのが弥生人である。著者は、倭族の日本渡来の足跡を理解するため、径路となった朝鮮半島および済州島を踏査。そこには日本では失われつつある倭族の習俗・慣習が脈々と息づいていていた。

1087 ズウの時間 ネズミの時間

— サイズの生物学

本川達雄 著

動物のサイズが違うと機敏さが違い、寿命が違い、総じて時間の流れる速さが違ってくる。行動圏も生息密度も、サイズと一定の関係がある。ところが一生の間に心臓が打つ総数や体重あたりの総エネルギー使用量は、サイズによらず同じなのである。本書はサイズからの発想によって動物のデザインを発見し、その動物のよって立つ論理を人間に理解可能なものにする新しい生物学入門書であり、かつ人類の将来に貴重なヒントを提供する。

1095 コーヒーが廻り 世界史が廻る

— 近代市民社会の黒い血液

臼井隆一郎 著

東アフリカ原産の豆を原料とし、イスラームの宗教的観念を背景に誕生したコーヒーは、近東にコーヒーの家を作り出す。ロンドンに渡りコーヒー・ハウスとなって近代市民社会の諸制度を準備し、パリではフランス革命に立ち合い、「自由・平等・博愛」を謳い上げる。その一方、植民地での搾取と人種差別にかかわり、のちにドイツで市民社会の鬼つ子ファシズムを生むに至る。コーヒーという商品の歴史を、現代文明のひとつの寓話として叙述する。

1103 モーツァルト

— 音楽における天才の役割

H・C・ロビンズ・ランドン 著

石井 宏 訳

歿後二百年を経た今、モーツァルトの功績を無視する者はいないが、世の天才の常として、その評価は、生存中から死後まで一定したものではなかった。しかし、価値観の変化に伴う毀誉褒貶はさて置き、彼は、音楽史の上にとればどの貢献を行なったのか。本書は、政治状況、流通事情、人的関係、作曲のプロセスなどの多角的資料を整理して、モーツァルト像のエッセンスを新たに抽出しようとするものである。

1130 仏教とは何か

— ブッダ誕生から現代宗教まで

山折哲雄 著

仏教を考える上でもっとも根元的な難問は「仏教をどう生かすか」ということではないか。現代、日本人にとって、この問いに応えることが焦眉の急務になっている。その難問に対処するには、まずブッダの人生と仏教の歴史を等分の視野におさめる必要がある。この問いに日本においてのみ繁栄を誇り、しかし今や、その生命力を枯渇させつつ自滅の道を突き進んでいる大乘仏教——日本の仏教を、ブッダ誕生の原点に立ちもどって検証する。

1131 物語 北欧の歴史
— モデル国家の生成

武田龍夫 著

中世においては西ヨーロッパの人々を恐怖に陥れたバイキングとして、現在では高度な福祉を実現させた国家として世に名高い北欧の国々。その歴史は平坦ではなく、隣接する強国ロシアとドイツを交えた度重なる戦争や民族独立運動、緊迫した国際情勢の中での苦難に満ちた中立外交などからなる。本書はデンマーク、スウェーデンを中軸に、両国から分離・独立したノールウェー、フィンランド、アイスランド北欧五カ国の通史である。

820円
101131-2

1138 キメラ — 満洲国の肖像 増補版

山室信一 著

一九三三年三月、中国東北地方に忽然と出現し、わずか一年五カ月後に姿を消した国家、満洲国。今日なおその影を色濃く残す満洲国とは何だったのか。本書は建国の背景、国家理念、統治機構の特色を明らかにし、そこに凝縮して現れた近代日本の国家観、民族観、そしてアジア観を問い直す試みである。新たに満洲・満洲国の前史と戦後に及ぼした影響など、その歴史的意義を想定問答形式によって概観する章を増補した。

吉野作造賞受賞

960円
191138-4

1144 台湾

— 四百年の歴史と展望

伊藤 潔 著

一六二四年、大航海時代のオランダ支配に始まり、今日までの四百年に近い台湾の歴史は、「外来政権」による抑圧と住民の抵抗の記録である。外来政権はオランダ（スペイン）、鄭氏政権、清国、日本そして国民党政権である。では近年の目覚ましい経済発展の要因はどこにあったか。また急速な民主化の進捗は、対中国との関係で台湾をどのように変貌させるだろうか。一九九三年の「シンガポール会談」も踏まえ、歴史を描き、将来を展望する。

860円
101144-2

1159 「超」整理法

— 情報検索と発想の新システム

野口悠紀雄 著

情報洪水のなかで書類や資料を保存し検索するには、従来の整理法では対処できない。本書は、「整理は分類」という伝統的な考えを覆し、「時間軸検索」という新しい発想から画期的な整理法を提案する。机の上は魔法のように片付き、「整理する時間がないほど忙しい」人に対する福音となるはずだ。さらに、パソコンを用いた情報管理体系、アイデア生産を支援するシステムなど、知的活動の生産性を高める新しい方法論を提案する。

800円
101159-6

1169 色彩心理学入門

— ニュートンとゲーテの流れを追って

大山 正 著

色彩の研究は、ニュートンの実験に始まり今日の色表示体系に至る流れと、ゲーテの観察に始まる、色の主観的な体験の現象学の流れとがあり、そこに両者に欠けた色覚の生理学の流れが加わっている。さらに色には、感情や文化と結びつく複雑な側面もある。この広範囲におよぶ色彩のさまざまな問題を、主要な人物の貢献を紹介しつつ解説する。色彩への実用的知識が要求される現在、その課題にも応えてくれる格好な入門書となっている。

880円
101169-5

1213 流浪の戦国貴族 近衛前久

— 天下一統に翻弄された生涯

谷口研語 著

朝廷最高の官職の家柄に生まれた近衛前久（一五三六—一六一二）は、群雄割拠する戦国時代に自ら身を投じた。上杉謙信と盟約を結んで関東を下り、その後は織田信長と密接な関係築いて大坂本願寺との講和などに貢献。豊臣秀吉の関白就任にも関与し、家康の叙任や徳川改称について朝廷に幹旋するなど、公家でありながら武家に伍して旺盛な活動を展開した。乱世に奔走した彼の軌跡から、転換期の世相が見えてくる。

880円
101213-5

1215 物語 アイルランドの歴史

— 欧州連合に賭ける妖精の国

波多野裕造 著

アイルランドは人口僅か三〇〇万の小国ながら現在、世界各地に住むアイルランド系の人々は七千万を越すとされる。大統領メアリー・ロビンソンは就任演説で「七千万同胞の代表として」と抱負を語った。紀元前数世紀いらいの古いケルト文化と伝統を継承するこの国は、いま統合ヨーロッパの息吹の中で、新たな飛翔を試みている。本書は五千年に及ぶ民族の哀歓の歴史を跡づけ、北アイルランド問題の本質にも迫ろうとする。

860円
101215-9

1216 理科系のための英文作法

— 文章をなめらかに つなぐ四つの法則

杉原厚吉 著

文法的に正しい英文でも、つながりが良くないと明快な文章にはならない。本書は、コンピュータで開発された文章解析技術と、言語学の新分野である「談話文法」が明らかにした文と文をつなぐ画期的法則を紹介する。この法則は、自分で書いた英文を客観的に眺め、自然な英文をつないでいくための道標となり、気のきいた言い回しよりもまず英文で主張を明確に表現しなければならぬ多くの人にとって、すぐに役立つ道具となるだろう。

660円
101216-6

1227 保科正之

— 徳川將軍家を支えた会津藩主

中村彰彦 著

徳川秀忠の子でありながら、庶子ゆえに嫉妬深い正室於江手の方を怖れて不遇を託っていた正之は、異腹の兄家光に見出されるや、その全幅の信頼を得て、徳川將軍輔弼役として幕府経営を真摯に精励、武断政治から文治主義政治への切換えの立役をつとめた。一方、自藩の支配は優れた人材を登用して領民の生活安定に意を尽くし、藩士にはちに会津土魂と称される精神教育に力を注ぐ。明治以降、闇に隠された名君の事績を掘り起こす。

800円
101227-2

1242 社会学講義

— 人と社会の学

富永健一 著

人間と社会を扱う社会学は、かつては比較的狭い領域の学問であったが、いまや専門化が進み、各々の分野で深化が試みられていて。本書は、理論的研究、経験的研究、歴史的研究等多くの分野で見通してきた著者があらためて現代社会学を総合的に捉え、専門分野のみならず一般読者を対象にして、可能な限り高い水準で平易に説くことによって、この学問の面白さと真価を伝えようとする。「富永社会学の展示室」というべき作品である。

900円
101242-5

1243
石橋湛山
——リベラリストの真髄

増田 弘 著

在野のエコノミストとして、また悲劇の宰相として名高い石橋湛山の原点と真骨頂は言論人としての存在にある。即ち一九一〇年以降の政府・軍部にみられる武断政治、対外膨張政策に真向から対峙して「日本主義」を掲げ、ラディカルな正統デモクラシーの論客として軍国主義批判を貫いた。新資料を踏まえて言論人湛山の思想を検討すると、戦後、日中貿易再開、脱冷戦の思想を説いた政治家の顔を照射して巨人の全貌を明示する。

1249
大衆教育社会のゆくえ
——学歴主義と平等神話の戦後史

荻谷剛彦 著

高い学歴を求める風潮と、それを可能にした豊かさには支えられ、戦後日本の教育は飛躍的な拡大をとげた。一方で、受験競争や学歴信仰への批判も根強くあるが、成績による序列化を忌避し、そこそが教育をゆがめる元凶だとして嫌う心情は、他国においてはユニークであるとなされていく。本書は、このような日本の教育の捉え方が生まれた経緯を探り、欧米との比較もまじえ、教育が社会の形成にどのような影響を与えたかを分析する。

1256
オッペンハイマー
——原爆の父はなぜ水爆開発に
反対したか

中沢志保 著

第二次世界大戦中に原子爆弾を誕生させたオッペンハイマー。計画成功でヒーローとなったが、広島・長崎への原爆投下後、「科学者は罪を知った」とくり返し、「私の手は血で汚れていて」と震えた。巨大なエネルギーを得た一方、人類を滅亡させる最大敵の矛盾に彼は直面したのである。後に核の国際管理を構想し水爆開発に反対した彼は、赤狩りの渦中で公職から追放される。「原爆の父」と呼ばれた天才物理学者の生涯を追う。

1272
アメリカ海兵隊
——非常利型組織の自己革新

野中郁次郎 著

一七七五年に英軍を模して創設されたアメリカ合衆国海兵隊は、独立戦争以来、二度の世界大戦、朝鮮・ベトナム・湾岸戦争などで重要な任務を遂行し、遂にはアメリカの国家意志を示威するエリート集団へと成長した。はじめは海軍内でのみに足りなかったあらゆる者たち、自らの存立を懸けて新たな戦術を考案し、組織の自己革新をなしていったのである。本書は、その戦績をたどりながら、「最強組織」とは何なのかを分析する試みである。

1293
壬申の乱
——天皇誕生の神話と史実

遠山美都男 著

六七一年十月、天智天皇の弟大海人皇子（天武天皇）は王位継承を断わり吉野に隠棲。翌月、天智の子大友皇子は大海人を討つべく五人の重臣と盟約を結んだ。天智後継の座をめぐる壬申の乱の発端である。天智は大友がわいさで大海人を疎外したのか。大友は絶えず後手にまわり敗れ去ったのか。王位継承をめぐる対立はなぜ大規模な戦争に発展したのか。通説を再検討し、古代最大といわれる攻防のドラマを再現、その歴史的意義に迫る。

1296
美の構成学
——パウハウスからフラクタルまで

三井秀樹 著

人間は古くから美しい形やプロポーションに憧れ、造形における調和の美を求めてきた。しかし、この美の摂理は長いこと伝統的な様式の踏襲と芸術家の直感に支えられてきた。一九一九年に創設されたドイツの造形学校、パウハウスで「構成」という理念がはじめて体系化され、教育に採り入れられた。ファッションや生活用品のデザインからコンピュータ・グラフィックスまで、様々な物の美を読み解く際の鍵となる造形文法「構成学」とは。

1324
サブリミナル・マインド
——潜在的人間観のゆくえ

下條信輔 著

人は自分で考えているほど、自分の心の動きをわかっていない。人はしばしば自覚がないままに意思決定をし、自分のとった行動の本当の理由には気づかないでいる。人間科学の研究が進むにつれ、「認知過程の潜在性・自動性」というドグマはますます明確になり、人間の意志決定の自由と責任に関する社会の約束ごとさへくつがえしかねない。潜在的潜在精神を探索する認知・行動・神経科学の進展からうかがった新しい人間観とは。

1345
考えることの科学
——推論の認知心理学への招待

市川伸一 著

日常生活での思考は推論の連続といえる。その多くは論理形式に従うより、文脈情報に依じた知識を使ったり、心の中のモデルを操作してなされる。現実世界はまた、不確定要素に満ちているので、可能性の高さを直観的に判断して行動を決めている。推論はさらに、その人の信念や感情、他者にも影響される。推論の認知心理学は、これから人間の知的能力の長所と短所とをみつめ直すことによって、それを改善するためのヒントを与えてくれる。

1353
物語 中国の歴史
——文明史的序説

寺田隆信 著

中国の遠い祖先が黄河の中流域（中原）に創始した文明は、時とともに周辺各地に拡がり、また子孫たちの手に継承され発展をつづけ、断絶することなく現代にいたっている。中国の人々は数千年来、一貫して文明の歴史の現役でありつづけている。この事実こそ、中国の歴史と文明が他国のそれと決定的に異なる特徴である。本書は文明をキー・ワードにして、文明のかたちを中心に、「史記」が描く五帝の時代から清朝滅亡までの歴史を叙述する。

1367
物語 フィリピン
——盗まれた楽園」と抵抗の500年

鈴木静夫 著

時代を超えてフィリピン史に通底しているのは、民族抵抗の精神である。それがフィリピン人意識として浮上ってきたのは、政治と教会がそれを押しつづけてきたからである。これからのフィリピン史はこの精神の連続した存在に十分な評価を与えてきたかった。スペインの武装宣教師船来航後の長い植民地時代を通じて、西欧と闘い続けたアジア唯一の戦闘的民族の軌跡に、本書は肯定的な光を当てるものである。

山本七貴賞受賞

880円
101367-5

800円
101353-8

760円
101345-3

800円
101324-8

780円
101296-8

820円
101293-7

800円
101272-2

1000円
101256-2

700円
101249-4

920円
101243-2

1372 物語 ヴェトナムの歴史

― 一億人国家のダイナミズム

小倉貞男 著

ヴェトナムは一億人の国になろうとしている。ヴェトナム戦争では大きな犠牲を払いながら独立を堅持。経済成長のダイナミズムは二十一世紀のヴェトナムの発展を約束している。このエネルギーはどこから生まれるのだろうか。ヴェトナム人のこころ、民族の象徴として親しまれている建国の王フワン・クワン（雄王）から、独立の指導者ホ・チ・ミンに至る歴史群像を語り、あくなき抵抗と独立の戦いに勝ち抜いてきた逞しい国民性の根源を探る。

980円
101372-9

1392 中世都市鎌倉を歩く

― 源頼朝から上杉謙信まで

松尾剛次 著

源頼朝に始まる鎌倉幕府が滅亡すると、鎌倉は急速に衰退しゴーストタウンとなったと考えられがちだが、実態は違っていた。京都室町に幕府が移った後も、鎌倉は東国を管轄する鎌倉府の所在地として十五世紀半ばまで繁栄を続けた。武家の首都として誕生し、幕府滅亡後はほとんど知られることのない都市鎌倉とはいかなるものだったのか。源氏、北条氏、足利氏、上杉氏の足跡を寺社や史跡に尋ねながら、謎に包まれた鎌倉の中世を歩く。

780円
101392-7

1420 物語 ドイツの歴史

― ドイツ的とは何か

阿部謹也 著

ヨーロッパの中央にあつて四圍に国境をもつドイツは、隣国とさまざまな軋轢を経験する中で特有の国民感情を醸成してきた。しかも中世以来のアッザール（庇護権）の理念は近代以後も祝儀的なものを抱え込みながら生き残っている。ヨーロッパ連合が設けられ、国境線が事実上の意味を失いつつある現在、その進捗はドイツにどのような変化をもたらすのだろうか。ドイツの誕生から今日にいたる歴史に、「ドイツ的」とは何かを思索する。

1100円
101420-7

1437 物語

― 未来の大陸

増田義郎 著

かつては高度の神殿文化を生み出しながら、一六世紀以来ラテン・アメリカは常に外部の世界に従属してきた。スペイン、ポルトガルの征服と植民地支配、イギリスはじめ列強の経済的支配、アメリカの政治的影響、独立後も独裁制から民主制へ、統制経済から自由経済へと激動が続く。ラテン・アメリカ諸国は共通の文化的伝統を基盤に、いかに苦悩の歴史と決別し、自立と自己表現を達成するか。恐竜の時代から現代まで、長大なタイムスケールで描く。

860円
101437-5

1479 安心社会から信頼社会へ

― 日本型システムの行方

山岸俊男 著

リストラ、転職、キレる若者たち―日本はいま「安心社会」の解体に直面し、自分の将来に、また日本の社会と経済に大きな不安を感じている。集団主義的な「安心社会」の解体はわれわれにどのような社会をもたらそうとしているのか。本書は、社会心理学の実験手法と進化ゲーム理論を併用し、新しい環境への適応戦略としての社会的知性の展開と、開かれた信頼社会の構築をめざす、社会科学的文明論であり、斬新な「日本文化論」である。

760円
101479-5

1502 日本書紀の謎を解く

― 述作者は誰か

森 博達 著

七二〇年に完成した日本書紀全三十巻は、わが国最初の正史である。記述に用いられた漢字の音韻や語法を分析した結果、渡来中国人が著わした群と日本人が書き継いだ群の混在が浮き彫りになり、各巻の性格や成立順序が明らかとなってきた。記述内容の虚実が厳密に判別できることで書紀研究は新たな局面を迎えたといえる。これまでわからなかった述作者を具体的に推定するなど、書紀成立の真相に迫る。

毎日出版文化賞受賞

840円
101502-0

1503 古文書返却の旅

― 戦後史学史の一齣

網野善彦 著

日本には現在もなお、無尽蔵と言える古文書が未発見・未調査のまま眠っている。戦後の混乱期に、漁村文書を集集・整理し、資料館設立を夢見る壮大な計画があった。全国から大量の文書が借用されたものの、しかし、事業は打ち切りとなってしまう。後始末を託された著者は、四〇〇年の歳月をかけ、調査・返却を果たすが、その過程で、自らの民衆観・歴史観に大きな変更を迫られる。戦後歴史学を牽引した泰斗による史学史の貴重な一齣。

720円
101503-7

1532 新版 日中戦争

― 和平か戦線拡大か

白井勝美 著

日中戦争に関しては、その終焉から五十年を経て、新事実の発掘や新視角からの研究の深化が今日も続いている。しかし、太平洋戦争については、批判・擁護いずれの立場をとるにせよ、その位置づけが明らかになりつつあるが、日中戦争の全体像への言及は、いまだに十分とはいえない。本書は、勃発の原因、収拾の失敗、太平洋戦争への拡大過程、敗戦に至る状況などを克明にたどる、旧版「日中戦争」の全面改稿版である。

820円
101532-7

1533 英語達人列伝

― あつぱれ、日本人の英語

斎藤兆史 著

「日本人は英語が苦手だ」という通念など、信じるに足らない。かつての日本には、驚嘆すべき英語の使い手があった。日本にいないがらにして、英米人も舌を巻くほどの英語力を身につけた「達人」たちは、西洋かぶれになることなく、外国文化との真の交流を实践した。岡倉天心、斎藤秀三郎、野口英世、岩崎民平、白洲次郎ら、十人の「英語マスター法」をヴィジュアルに紹介する本書は、英語受容をめぐる日本近代文化史を描き出す。

820円
101533-4

1537 不平等社会日本

― さよなら総中流

佐藤俊樹 著

実績主義や自由競争の市場社会への転換が声高に叫ばれている。だがその「実績」は本当に本人の力によるものか。著者は社会調査の解析から専門職や管理職につく知識エリートの階層相続が戦前以上に強まっていることを指摘。この「階級社会」化こそが企業や学校の現場から責任感を生かせ無力感を生んだ現在の閉塞のゆえんとする。一億総中流の果てに日本が至った「階級社会」の実態を明かし、真の機会平等への途を示す。

660円
101537-2

1551 海の帝国

— アジアをどう考えるか

白石 隆著

「海のアジア」、それは外に広がる、交易ネットワークで結ばれたアジアだ。その中心は中国、英国、日本と移ったが、海で結ばれた有機的なシステムとして機能してきた。世界秩序が変貌しつつある今、日本はこのシステムとどうかかわっていくべきか。二世紀にわたる立体的、歴史景観のなかにアジアを捉え、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイを比較史的に考察する。

読売・吉野作造賞受賞

1564 物語 カタルーニヤの歴史

増補版

— 知られざる地中海帝国の興亡

田澤 耕著

バルセロナを中心にスペイン随一の繁栄を誇るカタルーニヤ。かつてイタリアや遠くギリシヤまで地中海全域を支配した大帝國だった。建国の父・ギフレ毛むくじやら伯・黄金時代のジャウマ征服王や、騎士・鍊金術師・怪僧らが地中海狭しと活躍する栄光の中世から、長い衰退期と混乱を経ながらも再生への努力を続ける現代へ。20世紀初頭のバルセロナの繁栄、スペイン内戦、21世紀の独立運動までを増補した決定版！

1566 月をめざした二人の科学者

— アポロとスプートニクの軌跡

的川泰宣著

宇宙開発競争をくりひろげた冷戦期の米ソは、それぞれ稀有な才能を擁していた。ソ連には、肅清で強制収容所に送られながら、後に共産党中央委員会を「恫喝」して世界初の人工衛星スプートニクを打ち上げたコロリョフ。アメリカには、「ナチスのミサイル開発者」と白黒視されながらも、アポロ計画を成功に導いたフォン・ブラウン。遠く離れた地にありながら、同じように少年の日の夢を追ひ、宇宙をめざした二人の軌跡。

1574 海の友情

— 米国海軍と海上自衛隊

阿川尚之 著

日本海軍は、戦場でまみえた相手であるアメリカ海軍に対して、意外なほどの尊敬と共感を抱いていた。それは、戦後の海上自衛隊にも脈々と受け継がれ、彼らの協働態勢が、日米同盟を基盤で支えていた。本書は、日米関係の中で特異な地位を占めるこの海の絆を軸にしなごった、帝国海軍の英雄たちと異なり、ひたすら訓練に励み、戦うことなく名も知られぬまま去った海上自衛隊指揮官たちの誇り高き姿を綴るものである。

1585 オペラの運命

— 十九世紀を魅了した「夜の夢」

岡田暁生 著

オペラ— この総合芸術は特定の時代、地域、社会階層、そしてそれらが醸し出す特有の雰囲気と密接に結びついている。オペラはどのように勃興し、隆盛をきわめ、そして衰退したのか。それを解く鍵は、貴族社会の残照と市民社会の熱気とが奇跡的に融合していた十九世紀の劇場という「場」にある。本書は、あまたの作品と、その上演・受容形態をとりあげながら「オペラのな場」の興亡をたどる野心的な試みである。 サントリー学芸賞受賞

1594 物語 中東の歴史

— オリエント五〇〇〇年の光芒

牟田口義郎 著

キリストを生みムハンマドを生んだ中東は、歴史上の転換点となった数々の事件の舞台であり、まさに世界の富と知の中心だった。ソロモン王とシバの女王の知恵くらべ。新興イスラーム勢力のペルシア帝国への挑戦と勝利。ムスリム商人による商業の隆盛と都市文化の繁栄。「蛮族」十字軍やモンゴル帝国の侵攻とその撃退。しかし、やがて地中海世界は衰退し、中東は帝国主義の蹂躪する所となる……。ドラマティックな歴史をたどろう。

1596 ベトナム戦争

— 誤算と誤解の戦場

松岡 完著

米軍の撤退完了から、三十年が過ぎようとし、ベトナム戦争は忘却の淵に沈みかけている。ベトナムでもアメリカでも、この戦争を知らない世代が増えてきた。だが一方で、その実像を明らかにし、両国の誤算と誤解の解明を目指す試みも始まっている。ベトナムは、「民族の世紀」と「アメリカの世紀」が激突した戦場であり、各地に飛び火する地域紛争の原型だった。広い視野に立つ精密な記述で、ベトナム戦争の全体像が浮かび上がる。

1617 歴代天皇総覧

— 皇位はどう継承されたか

笠原英彦 著

天皇は古代より連綿と代を重ねてきた。壬申の乱、承久の乱、南北朝動乱などの激動を乗り越え、その系譜は千年以上にわたって続いている。皇位継承はどのように行われ、どう変質をとげたのか。時の権力との関わりはいかなる推移をたどったのか。記紀に記される初代神武天皇から平成の天皇までの百二十五代と北朝天皇五代の生涯と事績を丹念に叙述する。皇統の危機を論じた新稿を収録し、巻末の系図・年表を更新した決定版。

1622 奥州藤原氏

— 平泉の栄華百年

高橋 崇著

奥州藤原氏は平泉を拠点として平安末期の東北地方に君臨した。産金をもとに財をなし、京風の絢爛たる仏教文化を花開かせた。初代清衡から三代秀衡へ、支配権はどのように伸長したのか。秀衡の死後わずか二年で源頼朝に攻め滅ばされたのはなぜか。京都との関わりを軸に、百年の歴史を多角的に検証。併せて、中尊寺金色堂に眠る歴代のミイラの学術調査結果も紹介する。『蝦夷』『蝦夷の末裔』に続く東北古代史三部作完結編。

1625 織田信長合戦全録

— 桶狭間から本能寺まで

谷口克広 著

家督を継いだ十九の年より本能寺に没するまで、織田信長は四方の敵と戦い続けた。初期には、劣勢を覆した桶狭間の戦いのように少数精銳の部隊を自ら率いて戦い、後には、浅井・朝倉氏攻めや対本能寺戦の戦いに、羽柴秀吉らの部将を配して多方面にわたる戦線を同時に指揮した。際だった戦巧者ぶりを示す戦略や戦術への考察も併せ行い、天下統一の基礎を作った信長のすべての戦いをたどる。

1635
物語 スペインの歴史
——海洋帝国の黄金時代
岩根 圀和 著
キリスト教国の雄スペインは、カスティーリヤ、アラゴン両王国の婚姻により成立した。八世紀以来イベリア半島を支配したイスラム勢力を逐い、一四九二年、レコンキスタを完了。余勢を駆って海外へ雄飛し、広大な領土を得て「太陽の没することなき帝国」の名をほしいままにする——。国土回復戦争の時代から、オスマン・トルコとの死闘を制して絶頂をきわめ、宿敵イギリスに敗れて斜陽の途をたどるまでを流麗な筆致で描く。

1636
オーラル・ヒストリー
——現代史のための口述記録
御厨 貴 著
個人や組織の経験をインタヴューし、記録を作成して後世に伝えるオーラル・ヒストリーは、歴史資料としてはばかりではなく、意思決定のケース・スタディーとしても利用価値が高い。著者らは、政治家、官僚、実業家への聞き取り調査を蓄積し、政策決定プロセスの解明を目指している。本書は、オーラル・ヒストリーの準備、実施、速記の整理から、資料としての利用法までを実践的に手ほどきするものである。

1644
ハワイの歴史と文化
——悲劇と誇りのモザイクの中で
矢口 祐人 著
ハワイ——世界中の観光客を魅了する太平洋の美しい島々。十八世紀以来、欧米、そしてアジア諸国から多くの移民が来島し、定着・活動してきた。しかし、異人種、異文化との接触が、ネイティヴ・ハワイアンに苛酷な歴史を強いてきたことも忘れてはならない。本書は、日本との交流に光をあてながら、楽園イメージの奥に横たわる、もう一つの現実を浮かび上げ、ハワイ文化の力強い流れを描き出すものである。

1647
言語の脳科学
——脳はどのようにことばを生みだすか
酒井 邦嘉 著
言語に規則があるのは、人間が言語を規則的に作ったためではなく、言語が自然法則に従っているからである——。こうしたチオムスキーの言語生得説は激しい賛否を巻き起こしてきたが、最新の脳科学は、この主張を裏付けようとしている。実験の積み重ねとMRI技術の向上によって、脳機能の分析は飛躍的な進歩を遂げた。本書は、失語症や手話の研究も交えて、言語という究極の難問に、脳科学の視点から挑むものである。 毎日出版文化賞受賞

1655
物語 ウクライナの歴史
——ヨーロッパ最後の大国
黒川 祐次 著
ロシア帝国やソビエト連邦のもとで長く忍従を強いられながらも、独自の文化を失わず、有為の人材を輩出して続けたウクライナ。不撓不屈のアイデンティティは、どのように育まれてきたのか。スキタイの興亡、キエフ・ルーシ公国の隆盛、コサツクの活躍から、一九九一年の新生ウクライナ誕生まで、この地をめぐる歴史を俯瞰。人口五〇〇〇万を数え、ロシアに次ぎヨーロッパ第二の広い国土を持つ、知られざる「大国」の素顔に迫る。

1656
詩歌の森へ
——日本詩へのいざない
芳賀 徹 著
一篇の詩が、苦境から脱出するきっかけになったり、人情の興行きをかみ見せたりすることは、誰しも経験するだろう。そんな、心に動きかけてくる詩を知れば知るほど、人生は豊かになる。本書は、記紀万葉のいにしえから近現代までの、日本語ならではの美しい言葉の数々を紹介するエッセイである。古今東西の文学・藝術に精通した著者が、みずからの体験を回想しつつ、四季折々の詩歌味読のコツを伝授する。

1658
戦略的思考の技術
——ゲーム理論を実践する
梶井 厚志 著
自分の利害が、自分の行動だけでなく、他人の行動によってどう左右されるか、という状態が戦略的環境であり、その分析ツールがゲーム理論である。ビジネス交渉はもろろん、恋人とのかけひき、バーゲンでの買物や合コンの席順といったことまで私たちは他人の行動を織りこみつつ戦略を立て実行しているのだ。本書は身近な題材をふんだんに使い、コミットメント、シゲナリングなどゲーム理論のキーワードを解説しながら読者の戦略的思考を磨く。

1662
「超」文章法
——伝えたいことをどう書くか
野口 悠紀雄 著
企画書、評論、論文など論述文の目的は、伝えたいメッセージを確実に伝え、読み手を説得することだ。論述文の成功は、メッセージが「ためになり、面白い」かどうかで決まる。それをどう見つけるか。論点をどう提示するか。説得力を強めるために比喩や引用をどう用いるか。わかりやすい文章にするためのコツは。そして、読み手に興味を持ってもらうには。これまでの文章読本が扱ってこなかった問題への答が、こにある。

1664
アメリカの20世紀(上)
——1890年～1945年
有賀 夏紀 著
一九世紀末、アメリカは急速な工業化に起因する社会の混乱を克服し、政府・企業・研究機関の三者が協力する体制を確立した。このシステムの下で経済発展は加速し、未曾有の大恐慌と二度の世界大戦を経て、世界をリードする超大国にのし上がっていく——。自由と民主主義の理念、物質的な豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する二〇世紀前半を、社会・文化的側面に光を当てながら叙述する。

1665
アメリカの20世紀(下)
——1945年～2000年
有賀 夏紀 著
第二次世界大戦後、「パックス・アメリカナ」は危機を迎える。ソ連との対立、ベトナム戦争の泥沼化でアメリカの国際的地位は著しく低下した。他方、国内では公民権運動、マイノリティの地位向上や女性解放の運動、ベトナム反戦運動など、社会変革を求める動きが活発化する——。冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカは、どこへ向かおうとするのか。国内外の新たな試練にさらされる二〇世紀後半を描く。

1670
ドイツ 町から町へ

池内 紀著

ドイツの町には、おどろくほど個性がある。通りや建物、広場から、民家の屋根や壁の色、窓のつくりにいいたるまで、土地ごとに様式があり、みごとに造形美を生み出している。長らく領邦国家が分立していた歴史的背景から、町ごとの自治意識が強く、伝統や風習に誇りを持っていて。港町、川沿いの町、森の町、温泉の町……。ドイツ各地をめぐる、見過ごされがちな風物や土地に根ざした人々の息づかいを伝える紀行エッセイ。

760円
101670-6

1686
国際政治とは何か

—地球社会における人間と秩序

中西 寛著

人類のおかれた状況が混沌の度を深め、希望と苦悩が錯綜する時代にこそ、断片的な情報ではなく、深い考察が求められる。本書はまず、国際政治の起源を近代ヨーロッパにたずね、現代までの軌跡を追うことで、その基本的な性質を明らかにする。その上で安全保障、政治経済、価値意識という三つの角度から、差し迫る課題に人間が人間を統治する営みとしての政治がどう答えられるのか、的確な視座を提示する。

読売・吉野作造賞受賞

860円
101686-7

1687
日本の選挙

—何を変えれば政治が変わるのか

加藤秀治郎 著

選挙制度が政治全般に及ぼす影響力はきわめて大きい。「選挙制度が適切なら何もかもうまくいく」という哲学者オルテガの言をまっぴらでなく、選挙は民主主義をいかなる形態にも変えよう力を秘めている。本書は、小選挙区制や比例代表制の思想的バックボーンをわかりやすく紹介し、「選挙制度のデバート」とも揶揄される日本的システムを改善する道筋を示すものである。巻末に、近年の議論をふまえた補足解説を付す。

800円
101687-4

1690
科学史年表

増補版

小山慶太 著

科学の歴史を辿ると、偉大な発見は、地道な観察・研究だけでなく、偶然の結果から生まれたものも多い。そこには、自然の原理を解明しようと情熱を傾けた「科学者」たちの創意工夫と試行錯誤があった。「近代科学」が生まれた十七世紀から、宇宙や生命の神秘に自然科学が迫る現代まで、物理・天文・化学を軸に、四百年の歩みを年表形式で読み解く科学史ガイド。二〇一〇年までを新たに増補した最新版。

980円
191690-7

1695
韓非子

—不信と打算の現実主義

富谷 至著

紀元前三世紀、韓の王族に生まれ、荀子に学んだ韓非は、国を愛えて韓王を諫めるも容れられず、憤慨して著述に向かう。その冷徹な思想は秦の始皇帝をも魅了し、「この人物に会えたら死んでもよい」と言わしめた。人間の本性は善か悪か。真の為政者はいかにあるべきか。「韓非子」五十五篇を読み解くのみならず、マキアベリ、ホッブズらの西洋思想と比較して、いまなお輝きを放ち続ける「究極の現実主義」の本質に迫る。

740円
101695-9

1696
日本文化論の系譜

—「武士道」から「甘え」の構造」まで

大久保喬樹 著

奈良・平安のいにしえから、日本人は自らの文化の特質について、さまざまな角度から論じてきた。それは、常に異国文化の影響下で自分たちの考え方やふるまい方を築いてきたことと密接な関係がある。本書は、明治以降、西欧文化が激しく流入する時期に焦点を絞り、五人の思想家、学者、作家などによる代表的な日本文化論を比較文化的視点から読み解くことによって、近代日本人の自画像を検証する試みである。

880円
101696-6

1701
英語達人塾

—極めるための独習法指南

斎藤兆史 著

英語力は会話力にあらず。文法無視で、「ペラペラ」しゃべる癖がついてしまうと、そこで学習が頭打ちになる。何ごとも、基本をおろそかにした我流では伸びない。本書は、日本で誇る英語達人も実践し、効果が実証されている学習法を、実例を交えて紹介するものである。ハイレベルな英語力がなければ、英語での交渉や口頭発表、さらには通訳・翻訳など望むべくもない。達人レベルを志す方々よ、いざ、当塾の門を叩かれよ。

760円
101701-7

1702
ユーモアのレッスン

外山滋比古 著

しゃれて気の利いたユーモアは、その場かぎりのものでなく、聞かざる者の記憶に長くとどまる。気まずい場の雰囲気をつちまき明るくし、ときに、厳しい追及をせらりと受け流すのにも役立つ。だが、ユーモアを発揮する側はもとより、それを感じ取る側にも、洗練されたことばの感覚が必要である。本書は、思わず煩がゆるんでしまうエピソードをまじえながら、その効用に光を当てる。このレッスンには、教則本も近道ありません。

740円
101702-4

1704
教養主義の没落

—変わりゆくエリート学生文化

竹内 洋著

一九七〇年前後まで、教養主義はキャンパスの規範文化であった。それは、そのまま社会人になったあとまで、常識としてゆきわたっていた。人格形成や社会改良のための読書による教養主義は、なぜ学生たちを魅了したのだろうか。本書は、大正時代の旧制高校を発祥地として、その後の半世紀間、日本の大学に君臨した教養主義と教養主義者の輝ける実態と、その後の没落過程に光を当てる試みである。

880円
101704-8

1707
ヒンドウー教—インドの聖と俗

森本達雄 著

弁財天信仰、輪廻転生の思想などヒンドウー教は、直接に、あるいは仏教を通して、意外にも古くからの日本人の暮らし、日常の信仰、思想に少なからぬ影響を与えてきた。本書は、世界四大宗教の一つでありながら、特定の開祖もなく、核となる聖典もない、いわばとらえどころのない宗教の世界観を日常の風景から丹念に追うことによって、インド社会の構造から、ガンデーの「非暴力」の行動原理までも考察する。

980円
101707-9

1709 親指はなぜ太いのか
—直立二足歩行の起原に迫る—

島 泰三 著

一本だけ離れて生えている太くて短い親指、ガラスさへ噛み砕くほど堅い歯。人類の手と口は、他の霊長類に例のない特異なものである。霊長類の調査を長年続けた著者は、サルと口と手の形、移動方法は、その主食によつて決定されることを解明し、「口と手連合仮説」と名づけた。なぜアイアイの中指は細長いのか、なぜチンパンジーは拳固で歩くのか、そして人類は何を食べ、なぜ立ちあがったのか。スリリングな知の冒険が始まる。

1728 会津落城

—戊辰戦争最大の悲劇—

星 亮一 著

慶応四年春、幕府軍は鳥羽伏見の戦いで敗れて瓦解した。江戸城無血開城を経て戦場は東北に移る。長岡での激戦、白河の攻防、日光口での戦い……、会津藩をはじめ奥羽越列藩同盟軍は各地で戦いつづけるが、薩長軍はついに国境を破り会津若松に突入、一カ月に及ぶ籠城戦がはじまる。なぜこれほどまで戦わねばならなかったのか。会津藩の危機管理、軍事・外交、人材育成を検証しつつ、戊辰戦争最大の悲劇を浮き彫りにする。

1729 俳句的生活

長谷川 耀 著

俳句は十七音からなる、地球上でもっとも短い定型詩である。そのうち何字かは季語を含むのだから、作者が独創を発揮する余地はさらに少ないように見える。だが、それだからこゝでひとつひとつの言葉は磨かれ、詠む人の感覚や記憶が凝縮されるのだ。本書は、「俳壇の気鋭」として知られる著者の「俳句的生活」をたどり、実感溢れる俳句作りの場に立ち会う。日々暮らしたを結晶化した、美しい日本語に再会しよう。

1741 美学への招待

増補版

佐々木健一 著

二〇世紀の前期美術は「美しさ」を否定し、藝術を大きく揺さぶった。さらに二〇世紀後半以降、科学技術の発展に伴い、複製がオリジナル以上に影響力を持ち、美術館以外で作品に接することが当たり前になった。本書は、このような変化にさらされる藝術を、私たちが抱く素朴な疑問を手がかりに解きほぐし、美の本質をくみとる「美学入門」である。増補にあたり、第九章「美学の現在」と第一〇章「美の哲学」を書き下ろす。

1742 ひとり旅は楽し

池内 紀 著

ひとり旅が自由気ままと思うのは早計というもの。ハードな旅の「お伴」は、厳選された品々でなければならぬ。旅の名人はみな、独自のスタイルをもっている。山下清の下駄や寅さんの革トランクにしても、愛用するには立派なワケがあるのだ。疲れにくい歩き方や良い宿を見つけるコツから、温泉を楽しむ秘訣、さらには土産選びのヒントまで、達人ならではのノウハウが満載。こころの準備ができれば、さあ旅に出かけよう。

1750 物語 スペインの歴史 人物篇

—エル・シドからガウディまで—

岩根閑和 著

国土回復のイスラム掃討戦で勇名を馳せた伝説の騎士エル・シド、皇帝カルロスの子母ながら幽閉の半世紀をすごした悲劇の女王ファナ、新大陸支配における同胞の悪行を告発した修道士ラス・カサス、不朽の名作『ドン・キホーテ』の著者セルバンテス、数多の傑作を描き残した宮廷画家ゴヤ、そして未完の聖堂サグラダ・ファミリアの建築家ガウディ。時代や出身地、活躍した分野もさまざまな六人の生涯を通して千年の歴史を描く。

1755 部首のはなし

—漢字を解剖する—

阿辻哲次 著

なぜ「正」は「十」部6画なのか？「巨」はなぜ「工」部なのか？なぜ女へんがあつて男へんはないのか……漢字が誕生して三千年、漢字の字体はさまざまに変化していった。そのなかで、多くの部首が生まれ、消えていった。所属する部首を移動したり、部首が分かれなくなつてしまつたものも多い。漢字を分解してみると、その合理性と矛盾がはじめて見えてくる。50の部首ごとにたどる楽しい漢字エッセイ。

1758 物語 バルト三国の歴史

—エストニア・ラトヴィア・リトアニア—

志摩園子 著

二〇〇四年五月、エストニア、ラトヴィア、リトアニアは念願だったEUへの加盟を果たした。これまで三つの子のように扱われてきた三国は、なぜ「バルト」と一括されるのか。その答えは、中世から東西南北の交易の十字路口として注目されたバルト海東南岸地域でくりひろげられた歴史の中にある。周辺大国ドイツ、ロシアの狭間にあつて、それぞれの民族のまとまりを失うことなく、二〇世紀にやつと建国した三国の道のりを辿る。

1769 苔の話

—小さな植物の知られざる生態—

秋山弘之 著

庭の隅や道端にひっそりと息づく苔たちは、見るものに安らぎを与えてくれる。インテリアとしても人気があり、美しい苔を求めて寺院や庭園を訪れる人も少なくない。ふだん見慣れた苔だが、その一生はどのようなものなのか？乾燥や寒暖など厳しい環境を耐え抜く適応能力の秘密とは？コケ植物の専門家が、知られざる生態をわかりやすく解説。私たちの生活や文化との深い関わりにふれながら、その魅力を余すところなく伝える。

1771 物語 イタリアの歴史 Ⅱ

—皇帝ハドリアヌスから
画家カラヴァッジョまで—

藤沢道郎 著

ローマ、テヴレ河畔に威容を誇るカステル・サンタンジェロ（聖天使城）は、紀元二世紀に皇帝ハドリアヌス自らの陵墓として築かれて以来数々の歴史的事件に立ち会つてきた。本書はハドリアヌス帝、大教皇グレゴリウス、ロレンツォ・デ・メディチ、画家カラヴァッジョら八人をおとし、古代ローマ帝国の最盛期からバロック文化が咲き誇った十七世紀までの千五百年を描く、もうひとつの「歴史」物語である。

1773
—「最後の武士」の実像

大石 学 著

嘉永六年（一八五三）のペリー来航から明治二年（一八六九）の箱館五棱郭陥落までの幕末維新期、さまざまな国家構想が錯綜する中で戦争や戦乱が展開された。こうした時代に生まれ、滅んだ新選組とは、どのような集団で、いかなる歴史的位置を占めていたのか。近藤勇らが幕末の京都で活躍してきた政治的基盤や、近代性・合理性といった組織としての先駆的性格に着目しつつ、各種史料を丹念に検証する新選組全史。

1781
—エロスとアガペーの聖女

岡田温司 著

聖母マリアやエヴァと並んで、マグダラのマリヤは、西洋世界で最もポピュラーな女性である。娼婦であった彼女は、悔悟して、キリストの磔刑、埋葬、復活に立ち会い、「使徒のなかの使徒」と呼ばれた。両極端ともいえる体験をもつため、その後の芸術表現において、多様な解釈や表象を与えられてきた。貞節にして淫ら、美しくしてしかも神聖な（娼婦＝聖女）が通った数奇な運命を芸術作品から読み解く。図像資料多数収載。

1790
—「フランケンシュタイン」解剖講義

廣野由美子 著

批評理論についての書物は数多くあるが、読み方の実例をととして、小説とは何かという問題に迫ったものは少ない。本書ではまず、「小説技法論」で、小説はいかなるテクニクを使って書かれるのかを明示する。続いて「批評理論篇」では、有力な作品分析の方法論を平易に解説した。技法と理論の双方に通じることによって、作品理解はさらに深まるだろう。多様な問題を含んだ小説「フランケンシュタイン」に議論を絞った。

1792
—20世紀最初の大国間戦争

横手慎二 著

日露戦争は、日本とロシアにとってそれぞれにきわめて影響の大きい戦争であったが、客観的になかなか評価が確定していない。戦後一〇〇年にあたり、その地球規模での意味に言及する試みがなされているが、本書は、ロシア近現代史の視点も含めて、戦争の背景・経過・影響を通覧しようとするものである。双方の認識に極端な差があったことが、戦争の帰趨にどのように影響を及ぼしたかを明瞭に伝える。

1798
—神々と英雄に出会う

西村賀子 著

数多い英雄たちの複雑な関係、神々も介在する入り組んだ物語、重複や矛盾に満ちた展開……アポロンやアテナなどの名前は身近であるものの、実は読みこなしにくいギリシア神話だが、古代人の世界観を探るといふ視点から見ると、意外に理解しやすい。本書は、古代ギリシアの詩や悲劇がどんな話をもどのように語っているかを踏まえながら、西欧文明にきわめて深い影響を与えた伝承の数々を紹介する。

1810
—造景の技とこころ

進士五十八 著

石と水、そして木。日本庭園はこれらを美しく組み合わせ、その地の自然と歴史と文化を一体として表現した。方寸のなかに宇宙を展望しようとしたのである。その構成はどのようなものか、魅力はどこから生じるのか。神仏の庭、貴族の庭、大名庭園、庶民の庭を訪ねて考察する。また、植栽、石組、水工などの作庭技術を詳細に解説する。名庭名園三十六景の見方、味わい方も具体的に紹介する、本格的日本庭園入門書。

1812
—西太后

加藤 徹 著

内憂外患にあえぐ落日の清朝にあって、ひときわ強い輝きを放った一代の女傑、西太后。わが子同治帝、甥の光緒帝の「帝母」として国政を左右し、死に際してなお、幼い溥儀を皇太子に指名した。その治世は半世紀もの長きにわたる。中級官僚の家に生まれ、十八歳で後宮に入った娘は、いかにしてカリスマ的支配を確立するに至ったか。男性権力者とは異なる、彼女の野望の本質とは何か。「稀代の悪女」のイメージを覆す評伝。

1816
—「クラシック」の黄昏

岡田暁生 著

一八世紀後半から二〇世紀前半にいたる西洋音楽史は、芸術音楽と娯楽音楽の分裂のプロセスであった。この時期の音楽が一般に「クラシック音楽」の歴史と呼ばれている。本書は、「クラシック」音楽の歴史と、その前史である中世、ルネサンス、バロックで何が用意されたのか、そして、「クラシック後」には何がどう変質したのかを大胆に位置づける試みである。音楽史という大河を一望のもとに眺めわたす。

1818
—シユメル——人類最古の文明

小林登志子 著

五千年前のイラクの地で、当時すでに文字やハンコ、学校、法律などを創り出していた民族がいる。それが今まではほとんどその実像が明らかにされてこなかったシユメル民族である。本書は、シユメル文明の遺物を一つ一つ紹介しながら、その歴史や文化を丹念に解説するものである。人類最古の文明にして現代社会の礎を築いた彼らの知られざる素顔とは——。多様かつ膨大な記録から、シユメルの人々の思っかいを今に伝える。

1820
—丸山眞男の時代

竹内 洋 著

戦後の市民による政治参加に圧倒的な支配力を及ぼした丸山眞男。そのカリスマ的な存在感の背景には、意外なことに、戦前、東大法学部の助手時代に体験した、右翼によるヒステリックな恫喝といふトラウマがあった。本書は、六〇年代後半に学生から背向けられる栄光と挫折の遍歴をたどり、丸山がその後のアカデミズムとジャーナリズムに与えた影響を検証する。

1821 **安田講堂**
1968-1969

島 泰三 著

一九六九年一月、全共闘と機動隊との間で東・安田講堂の攻防戦が繰り広げられた。その記憶はいまなお鮮烈である。青年たちはなぜ戦ったのだろうか。必至の敗北とその後的人生における不利益を覚悟して、なぜ彼らは最後まで安田講堂に留まったのか。何を求め、伝え残そうとしたのか。本書は「本郷学生部長」として安田講堂に立てこもった当事者によって、三十七年を経て、はじめて語られる証言である。

1824 **経済学的思考のセンス**

— お金がない人を助けるには —

大竹文雄 著

「お金がない人を助けるには、どうしたらいいのですか？」小学5年生が発したこの問いに、経済学者はどう答えるだろうか。女性が背の高い男性を好む理由からオリンピックの国別メダル獲得数まで、私たちのまわりには、運や努力、能力によって生じるさまざまな格差や不平等がある。本書は、それらを解消する方法を、人々の意思決定メカニズムに踏み込んで考えることによって、経済学の本質をわかりやすく解き明かす。

1827 **カラー版 絵の教室**

安野光雅 著

たとえば、天使がラッパを吹きながら空を舞う名画は、技術の蓄積だけでは描けなかった。目には見えないその姿を描く画家は、人体のデッサンに習熟し、想像力に助けられて、絵画という世界を構築していったのだろう。この本では、クルールやゴッホなどのたくらみや情熱の跡を辿り、美の宇宙の源泉、旅してみたい。描く技術、鑑賞する感性を会得するには、近道も終着点もないが、創造の歴史には「絵の真実」が現われてくる。

1833 **ラテン語の世界**

— ローマが残した無限の遺産 —

小林 標 著

かつてローマ文明を支えたラテン語の生命力は、二千年経った現在でも衰えていない。ラテン語は、生物学などの学問やキリスト教に使われるとともに、イタリア語やフランス語、スペイン語なども生み出した。さらに、その言語構造が持つ普遍性ゆえに、英語や日本語にも影響を与えている。身近な言葉や感言、いまま残る碑文などの豊富な例をひきながら、ラテン語の特徴やその変遷、ラテン文学のエッセンスを楽しむ語る。

1836 **華族**

— 近代日本貴族の虚像と実像 —

小田部雄次 著

明治維新後、旧公卿・大名、維新功労者などから選ばれた華族。「皇室の藩屏」として、貴族院議員選出など多くの特権を享受した彼らは、近代日本の政治、経済、生活様式をリードした「恵まれた」階級のはずだった。日清・日露戦争後、膨大な軍人や財界人を組み込み拡大を続けたが、多様な出自ゆえ基盤は脆く、敗戦とともに消滅する。本書は、七八年間に一〇一家存在したその実像を明らかにする。巻末に詳細な「華族一覧」付。

1838 **物語 チェコの歴史**

— 森と高原と古城の国 —

薩摩秀登 著

九世紀のモラヴィア王国の誕生以来、歴史に名を現わすチェコ。栄華を誇った中世のチェコ王国は、そのうち、ハプスブルク家に引き継がれ、さらに豊かな文化を生み出した。二十世紀に至って、近代的な共和国として生まれ変わったのち、第二次世界大戦後の共産化によって沈滞の時代を迎えるが、ビロード革命で再出発した。ロマンティックな景観の背後に刻印された歴史を、各時代を象徴する人物のエピソードを核に叙述する。

1843 **科学者という仕事**

— 独創性はどのように生まれるか —

酒井邦嘉 著

多くの研究者には、共通した考え方や真理に対する独特のこだわりがある。アインシュタイン、ニュートン、チョムスキー、朝永振一郎、キュリー夫人らが残してくれた、真理を鋭く突き、そして美しい言葉を手がかりに、独創性がどのように生まれるかを考えてみよう。科学者という仕事を通して科学研究の本質に触れることは、「人間の知」への理解を深めることにつながるだろう。第一線の研究者によるサイエンスへの招待。

1854 **映画館と観客の文化史**

加藤幹郎 著

映画はいったいどこで見るべきものなのだろうか。ホームビデオの普及以降、一般的になった、個人的な鑑賞は、はたして映画の本来的な姿から遠ざかってしまったものなのだろうか。本書は、黎明期から今日までの二一〇年間の上映形態を人念にたどりながら、映画の見かたが、じつは本来、きわめて多様なものだったことを明らかにする。作品論、監督論、俳優論からは到達し得ない映画の本質に迫る試みである。

1862 **入門！ 論理学**

野矢茂樹 著

論理の本質に迫る。論理学という大河の最初の一滴を探る冒険の旅！ あくまでも日常の言葉素材にして、ユーモアあふれる軽快な文章で説き明かされていく。楽しみ、笑いながら、著者とともに考えていく知的興奮。やがて、「考え、話し、書く」という実際の生活に生きている論理が見えてくる。論理学ってなんだかむずかしそう、と思っているあなたにこそ、ぜひ読んでほしい「目からうろこ」の入門書。

1867 **院政**
— もうひとつの天皇制 —

美川 圭 著

院政とはすでに譲位した上皇(院)による執政をいう。平安後期に白河・鳥羽・後白河の上皇が百年余りにわたって専権を振るい、鎌倉初期には後鳥羽上皇が幕府と対峙した。承久の乱で敗れて朝廷の地位は低下したが、院政自体は変質しながらも江戸末期まで存続する。上皇が権力行使できたのはなぜか。その権力構造はいかなるものだったか。ロングセラーに終章「院政とは何だったのか」を収録し、人名索引を付した決定版。

1869
カラー版
将棋駒の世界

増山雅人 著

インターネットを介したオンライン将棋が盛んだ。しかし、盤駒を使う将棋の魅力が減じたわけではない。木の宝石といわれる黄楊に、美しい漆で文字をあしらった将棋駒は、遊具を超えた工芸品としての魅力をもっている。材質や木目の種類、さまざまな表情で見る者を魅了してやまない書体をはじめ、鑑賞やコレクションに必要な知識を美しい写真とともに紹介する。駒の世界を豊かにした名工たちの息をのむ作品をとくとご覧いただきたい。

980円
101869-4

1875
「国語」の近代史

— 帝国日本と国語学者たち

安田敏朗 著

明治維新後、日本は近代的な統一国家を目指し、ことばの地域差・階層差を解消するため「国語」を創始する。「国語」は国民統合の名の下に方言を抑圧し、帝国日本の膨張とともに植民地・占領地にも普及が図られていく。この「国語」を創り、国家の国語政策に深く関与したのが、国語学者であった。仮名文字化、ローマ字化、伝統重視派、普及促進派などの論争を通して、国家とともに歩んだ「国語」と国語学者たちの戦前・戦後を追う。

1000円
101875-5

1891
漢詩百首

— 日本語を豊かに

高橋睦郎 著

返り点と送り仮名の発明によって、日本人は、ほんらい外国の詩である漢詩を自らのものとした。その結果、それを鑑賞するにとどまらず、作詩にも通曉する人物が輩出した。本書は、中国人六〇人、日本人四〇人の、古代から現代に及ぶ代表的な漢詩を精選し、詩人独自の読みを附すとともに、詩句の由来や作者の経歴、時代背景などを紹介。外国文化を自家薬籠中のものとした、世界でも稀有な実例を、愉しみとともに通読する。

780円
101891-5

1899
国連の政治力学

— 日本はどこに在るのか

北岡伸一 著

国家を超える結束の場として構想された国連が誕生して六十年、冷戦とその後の激動を経て、その地位と役割は大きく変動した。国際社会でアメリカ中心のシステムが機能するなか、国連は世界の平和と安全の維持という最大の目的を果たしているのか。また、一九二〇の「対等」な加盟国をもつ組織の意思決定はどうなされているのか。研究室から外交の現場へ身を移した著者の二年半の体験から、国連の現在と未来を照らし出す。

880円
101899-1

1905
日本の統治構造

— 官僚内閣制から議院内閣制へ

飯尾 潤 著

独特の官僚内閣制のもと、政治家が大胆な指導力を発揮できず、大統領制の導入さえ主張されてきた戦後日本政治。しかし一九九〇年代以降の一連の改革は、首相にアメリカ大統領以上の権能を与えるなど、日本国憲法が意図した議院内閣制に変えた。本書は、議会、内閣、首相、政治家、官僚、政党など議院内閣制の基盤を通して、その歴史的・国際的比較から、日本という国家の統治システムを明らかにする。サントリー学芸賞、読売・吉野作造賞受賞

880円
101905-9

1910
人口学への招待

— 少子・高齢化はどこまで解明されたか

河野稠果 著

二〇〇五年から始まった日本の人口減少。一〇〇年後には半減と予測されている。北・西ヨーロッパに端を発し、いまや世界人口の半分を覆った少子化は、なぜ進むのか——。急激な人口減少が社会問題化するなか、急速に脚光を浴びる人口学だが、戦前の国策に与したとみられ、近年まで疎んじられてきた。本書は、人口学の入門書として、人口の基礎的な考え方、理論、研究の最前線、少子化のメカニズムなどを平易に解説する。

860円
101910-3

1912
数学する精神

— 正しさの創造、美しさの発見

加藤文元 著

数学における「正しさ」とは何だろうか。公式や証明は絶対的に正しいもので、揺るぎない「神の知」だと思っている人も少なくないだろう。しかし数学を創ったのが人間である以上、究極的には仮説的で暫定的であることを免れない。ならば「正しさ」「美しさ」は、数学という営みにおいてどんな意味を持つのか。数学の「真の正しさ」「美しさ」に正面から対峙した稀有の書に、「数学とは何なのか」を論じる「後奏曲」を加筆した増補決定版！

900円
191912-0

1913
物語 タイの歴史

— 微笑みの国の真実

柿崎 一郎 著

一三世紀以降、現在の領域に南下し、スコタイ、アユッタヤーといった王朝を経て、一八世紀に現王朝が成立したタイ。西欧列強の進出のなか、東南アジアで唯一独立を守り、第二次世界大戦では日本と同盟を組みながらも、「敗戦国」として扱われず、世渡りの上手さを示してきた。本書は、ベトナム、ビルマなどの周辺諸国、英、日、日本などの大国に翻弄されながらも生き残った、タイ民族二〇〇〇年の軌跡を描くものである。

920円
101913-4

1916
ヴィクトリア女王

— 大英帝国の戦う女王

君塚直隆 著

植民地を世界各地に築き、「太陽の沈まない帝国」と呼ばれた19世紀イギリス。18歳で即位し、この繁栄期に64年間王位にあったのがヴィクトリアである。後に「君臨すれども統治せず」の確立期と言われ、女王の役割は小さいとされたが、実態は違う。自らの四男五女で欧州各王室と血縁を深めた女王は、独自外交を繰り広げ、しばしば時の政権と対立した。本書は全盛期の大英帝国で、意思を持って戦い続けた女王の実像を描く。

860円
101916-5

1927
西南戦争

— 西郷隆盛と日本最後の内戦

小川原正道 著

明治維新後、佐賀の乱、神風連の乱、萩の乱などに続く、不平士族による最後の戦いとなった西南戦争。九州全土で八ヵ月間続いた行われた近代日本最大の内戦である。それはまた誕生してまもない「日本軍」が経験した最初の本格的戦争でもあった。本書では、反乱軍の盟主である西郷隆盛の動向を柱に、熊本城籠城戦、田原坂の戦いをはじめ、九州各地での戦闘を丹念に追い、日本最後の内戦の実態と背景を明らかにする。

820円
101927-1

1928 物語 京都の歴史

— 花の都の二千年

脇田 修／脇田晴子 著

桓武天皇により平安京遷都が行われて以来、京の都は千年もの長きにわたり日本の中心だった。貴族の邸宅や寺社が立ち並び、都市の基礎が作られた王朝時代。武家政権が興り戦乱の舞台となるとともに、商工業が発展した中世。豪商が生まれ、学問・文化の興隆著しかった近世。今も多くの人が訪れる寺社・名所の縁起をひもときつつ、花の都と詠われた京の歴史を一望する。カラーの歴史地図を付した。

1930 ジャガイモの世界史

— 歴史を動かした「貧者のパン」

伊藤章治 著

南米生まれのジャガイモは、インカ帝国滅亡のち、スペインに渡った。その後、フランスやドイツの啓蒙君主たちも普及につとめ、わずか五百年の間に全世界に広がった。赤道直下から北極圏まで、これほど各地で栽培されている食物もない。痩せた土地でも育ち、栄養価の高いジャガイモは「貧者のパン」として歴史の転機で大きな役割を演じた。アイルランドの大飢饉、北海道開拓、ソ連崩壊まで、ジャガイモと人々をめぐるドラマ。

1931 物語 イスラエルの歴史

— アブラハムから中東戦争まで

高橋正男 著

イスラエルという民族部は、紀元前三世紀のエジプトの碑文にはじめて登場する。文明が交錯する東地中海沿岸部では、さまざまな民族が興亡してきた。そのなかでイスラエル（ユダヤ）民族はバビロニア捕囚やローマ帝国による迫害など、民族流亡の危機を乗り越え、第二次世界大戦後に再び自らの国を持つに至った。本書は、民族の祖とされるアブラハムから中東戦争後の現在まで、コンバクトに語る通史である。

1935 物語 メキシコの歴史

— 太陽の国の英傑たち

大垣貴志郎 著

「太陽の国メキシコ」と言えば、わたしたちは陽気なマリアッチや古代文明を思い起こす。だが重層的な民族構成や文化をもつメキシコは、「仮面をかぶった国」と言われ、なかなか素顔を見せない。この複雑なメキシコの歴史を、マヤやアステカにはじまり、植民地時代、レフォルマ戦争、メキシコ革命などをへて現代まで概説するとともに、イダルゴやサパタなど、それぞれの時代を特徴づける神がかり的な英雄たちを紹介する。

1936 アダム・スミス

— 『道徳感情論』と『国富論』の世界

堂目卓生 著

政府による市場への規制を撤廃し、競争を促進することによって経済成長率を高め、豊かで強い国を作るべきだ——『経済学の祖』アダム・スミスの『国富論』は、このようなメッセージをもつと理解されてきた。しかし、スミスは無条件にそう考えたのだろうか。本書はスミスのもう一つの著作『道徳感情論』に示された人間観・社会観を通して『国富論』を読み直し、社会の秩序と繁栄に関する一つの思想体系として再構築する。サントリー学芸賞受賞

1939 ニーチェ

— ツアラトウストラの謎

村井則夫 著

ある日「永劫回帰」の思想がニーチェを襲う。この着想をもとに一気呵成に書き上げられた『ツアラトウストラ』は「こう語った」は、「二〇世紀の文学者・哲学者の多くを惹きつけ、現代思想に大きな影響を与えた。文学の伝統的手法を駆使しつつも、ときにそれを逆手にとり、文体の実験までも行うニーチェ。一見、用意周到な筋立てや人物造形とは無縁と思われるこの物語は何を目論んでいるのか。稀代の奇書に迫る。

1943 ホロコースト

— ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌

芝 健介 著

ヒトラー政権下、ナチ・ドイツによって組織的に行われたユダヤ人大量殺戮「ホロコースト」。「劣等民族」と規定されたユダヤ人は、第二次世界大戦中に六〇〇〇万人が虐殺される。だが、ヒトラーもナチ幹部も、当初から大量殺戮を考えていたわけではなかった。本書は、ナチスのユダヤ人政策が、戦争の進展によって「追放」からアウシュヴィッツ絶滅収容所に代表される巨大な「殺人工場」に行き着く過程と、その惨劇の実態を描く。

1948 電車の運転

— 運転士が語る鉄道のしくみ

宇田賢吉 著

時速一〇〇キロ以上の速さで数百トンの列車を率いて走行し、時刻通りにホームの定位位置にピタリと停める……。このような職人技をもつ運転士は、何を考え、どのように電車を運転しているのだろうか。また、それを支える鉄道の仕組みとはどのようなものだろうか。JRの運転士として特急電車から貨物列車まで運転した著者が、電車を動かす複雑精緻なシステムと運転士という仕事をわかりやすく紹介する。

1959 韓国現代史

— 大統領たちの栄光と蹉跎

木村 幹 著

一九四八年、日本の植民地から米国の占領を経て、建国した大韓民国。六〇年の間に、独裁国家から民主国家、途上国から先進国へと大きく変貌した。本書は、歴代大統領の「眼」と「体験」を通して、激変した韓国を描くものである。「建国の父」李承晩、軍事クーデタで政権を奪った朴正熙、民主化に大きな役割を果たした金泳三、金大中、そして「ポスト民主化」時代の盧武鉉、李明博。大統領たちの証言で織りなす現代史の意欲作。

1963 物語 フランス革命

— バスチーユ陥落からナポレオン戴冠まで

安達正勝 著

一七八九年、市民によるバスチーユ襲撃によって始まったフランス革命は「自由と平等」という光り輝く理想を掲げ、近代市民社会の出発点となった。しかし、希望とともに始まった革命は、やがて恐怖政治へと突入、ナポレオンを登場させ、彼の皇帝即位をもって幕を下ろす。本書は、ドラマに満ちた革命の有為転変をたどりつつ、当時を生きた人々の息づかいや社会の雰囲気と丁寧に迫り、革命の時代を鮮やかに描き出す。

1971 英語の歴史

—過去から未来への物語

寺澤 盾 著

5世紀半ばは、ブリテン島の一部でのみ使われていた英語は、現在、15億人が使う国際言語へと成長した。英語は8世紀以降、北欧語、ラテン語、フランス語といった「侵入者」たちから、16世紀以降は英国人の海外進出に伴いアメリカ、フランスの言語から、語彙・綴り・文法など様々な影響を受けて創られてきた。本書は、現代英語を意識しながら1500年の歴史を概観し、近年英米社会で急変する姿とその未来を描くものである。

820円
101971-4

1974 毒と薬の世界史

—ソクラテス、錬金術、ドーピング

船山信次 著

毒にしても薬にしても、人類との関わりは、きわめて長く深い。古くから人類は毒を避け、効能のある物質は活用してきた。そして、それらを合成することが可能になってからは、良きにつけ悪しきにつけ、その使用法は無限に拡大している。しかし、実は、同じものが毒にもなれば薬にもなる。本書は、ソクラテスの飲まれた毒から、錬金術、ドーピングにいたるまで、古今東西の毒や薬をめぐる秘話・逸話を紹介するものである。

860円
101974-5

1976 大平正芳

—「戦後保守」とは何か

福永文夫 著

戦後、「保守本流」の道を歩み、外相・蔵相などを歴任、一九七八年に首相の座に就いた大平正芳。その風貌から「おとうちゃん」「鈍牛」と渾名された大平は、政界屈指の知性派であり、初めて「戦後の総決算」を唱えるなど、二二世紀を見据えた構想を数多く発表した。本書は、派閥全盛の時代、自由主義を強く標榜し、田中角栄、三木武夫らと切磋琢磨した彼の軌跡を辿り、戦後の保守政治の価値を問うものである。

840円
101976-9

1977 シュメル神話の世界

—粘土板に刻まれた最古のロマン

岡田明子／小林登志子 著

いまから五千年前にティグリス、ユーフラテス河畔に栄えた人類最古の都市文明シュメル。粘土板には多くの神話が残され、ギルガメシュ叙事詩や大洪水伝説など、後世に伝えられたものも多い。これらの神話の世界では、酔っ払う大神、死後の国を覗こうとする女神、蜜族を征服する王、怪獣など、様々なキャラクターがいきいきと活躍している。代表的な神話のストーリーを紹介し、神々の役割や性格、舞台背景などを詳説する。

900円
101977-6

1984 日本の子どもと自尊心

—自己主張をどう育むか

佐藤淑子 著

自分の頭で考え、はっきりと意見を言える子どもに育ってほしいというのは親の自然な願いだろう。しかし、自己主張の発達と深く結びついている「自尊心」は、謙虚さが賞賛される日本において、常に歓迎されるとは限らない。そこに矛盾があるとしたら、自己主張できる子を育てるためにはどうすればいいのか。日本人独特の自尊心を考察し、教育学の視点から、保護者の価値観の影響や、子どもの成長との関わりを明らかにする。

740円
101984-4

1989 諸子百家

—儒家・墨家・道家・法家・兵家

湯浅邦弘 著

春秋戦国時代、諸国をめぐる自らの主張を説いた思想家たち。彼らの思想は、その後の中国社会の根幹を形づくったのみならず、日本をはじめ東アジアにおいても大きな影響力を持った。一九九〇年代には大量の古代文献が発掘され、これまで謎とされてきた事柄も解き明かされつつある。新知見をふまえ、儒家（孔子・孟子）、墨家（墨子）、道家（老子・莊子）、法家（韓非子、兵家（孫子）などの思想と成立の過程を平易に解説する。

840円
101989-9

2000 戦後世界経済史

—自由と平等の視点から

猪木武徳 著

第二次大戦後の世界は、かつてない急激な変化を経験した。この六〇年を考える際、民主制と市場経済が重要なキーワードとなることは誰もが認めることであろう。本書では、「市場化」を軸にこの半世紀を概観する。経済の政治化、グローバリゼーションの進行、所得分配の変容、世界的な統治機構の関与、そして「自由」と「平等」の相剋——市場システムがもたらした歴史的变化の本質とは何かを明らかにする。

940円
102000-0

2004 大学の誕生（上）

—帝国大学の時代

天野郁夫 著

日本の大学はどのような経過をたどって生まれたのだろうか。本書は、その黎明期のダイナミックな展開を二巻にわたって、つづさに描くものである。上巻では、明治一〇年の「東京大学」の設立と一九年の帝国大学誕生の成立から説き起こす。その後、帝国大学が自己変革していくさまと、帝国大学に対するかのように生まれる官立・私立の専門学校の隆盛へと物語は進んでゆく。人と組織が織りなす、手に汗握るドラマ。

940円
102004-8

2005 大学の誕生（下）

—大学への挑戦

天野郁夫 著

日本の大学はどのような経過をたどって生まれたのだろうか。そのダイナミックな展開をつづさに描く本書の下巻は、東京と京都の帝国大学との距離を縮めようとして、官立・私立ともに専門学校などの高等教育機関が充実してゆくありさまを見る。帝国大学はその数を増し、一方で、専門学校はそのなかに序列を生じていった。そしてついに、大正七年の大学令の成立により、現在につながる大学が誕生するのである。

980円
102005-5

2006 教育と平等

—大衆教育社会はいかに生成したか

荻谷剛彦 著

戦後教育において「平等」はどのように考えられてきたのだろうか。本書が注目するのは、義務教育費の配分と日本的な平等主義のプロセスである。そのきわめて特異な背景には、戦前から地方財政の逼迫と戦後の人口動態、アメリカから流入した「新教育」思想とが複雑に絡まり合っていた。セーフティネットとしての役割を維持してきたこの「戦後レジーム」がなぜ崩壊しつつあるのか、その原点を探る。

840円
102006-2

2007 物語 数学の歴史
—正しさへの挑戦

加藤文元 著

古代バビロニアで粘土板に二次方程式の解法が刻まれてから四千年、多くの人々の情熱と天才、努力と葛藤によって、人類は壮大な数学の世界を見出した。通約不可能性、円周率、微積分、非ユークリッド幾何、集合論——それらの発見やパラダイムシフトは、数学史全体の中でどのような意味を持ち、どのような発展をもたらしたのか。歴史の大きなうねりを一望しつつ、和算の成果や一九世紀以降の展開についても充実させた数学史決定版。

940円
102007-9

2009 音楽の聴き方
—聴く型と趣味を語る言葉

岡田暁生 著

音楽の聴き方は、誰に言われるまでもなく全く自由だ。しかし、誰からの影響や何らかの傾向なしに聴くこともまた不可能である。それならば、自分はどうな聴き方をしているのかについて自覚的になってみようというのが、本書の狙いである。聴き方の「型」を知り、自分の感じたことを言葉にしてみるだけで、どれほど世界が広がって見えることか。規則なき規則を考えるためにはどうすればよいかの道筋を示す。

吉田秀和賞受賞

780円
102009-3

2015 「大日本帝国」崩壊
—東アジアの1945年

加藤聖文 著

「大日本帝国」とは何だったのか。本書は、日本、朝鮮、台湾、樺太、南洋群島といった帝国の「版図」が、一九四五年八月一日、どのように敗戦を迎えたのかを追うことによって、帝国の本質を描き出す。ポツダム宣言の通達、原爆投下、連参戦、玉音放送、九月二日の降伏調印。この間、各地域で日本への憎悪、同情、憐憫があり、その温度差に帝国への意識差があった。帝国崩壊は、東アジアに何を生み、何を喪失させたのか。

820円
102015-4

2030 上海
—多国籍都市の百年

榎本泰子 著

アヘン戦争後、一八四二年の南京条約によって開港した上海。外国人居留地である「租界」を中心に発展した街は二〇世紀前半には中国最大の「華洋雑居」の地となり繁栄を極める。チャイナと自由を求めて世界中からやって来る移民や難民たち、英米日の角逐、勃興する中国の民族運動。激動の時代のなかで人々はいかに暮らしたか、何を思ったのか。本書は国籍別の検証を通じ、上海という都市独特の魅力を余すところなく伝える。

800円
102030-7

2041 行動経済学
—感情に揺れる経済心理

依田高典 著

完全無欠な人間が完全な情報を得て正しい判断をする——これが経済学の仮定する経済人である。だが、現実にはこのような人間はいない。情報はあまりに多く、買い物をしたあとでもっと安い店を知って後悔する。正しい判断がいつも実行できるわけではなく、禁煙やダイエットも失敗がちだ。本書は、このような人間の特性に即した「行動経済学」を経済学史の中に位置づけ直し、その理論、可能性を詳しく紹介する。

780円
102041-3

2042 菜根譚
—中国の処世訓

湯浅邦弘 著

中国では長く厳しい乱世が多く、処世訓を生んだ。中でも最高傑作とされるのが、明末に著された『菜根譚』である。社会にあつて身を処する世知と、世を離れ人生を味かう心得の双方を記したこの書は、江戸期に和訳されて後、生涯の道を説くものとして多くの日本人の座右の書となった。本書では内容を精選して解説するとともに、背景となる儒教・仏教・道教の古典や故事、人物を丁寧に紹介、より深い理解へと読者を誘う。

820円
102042-0

2045 競争と公平感
—市場経済の本当のメリット

大竹文雄 著

日本は資本主義の国のなかで、なぜか例外的に市場競争に対する拒否反応が強い。私たちは市場競争のメリットをはたして十分に理解しているのだろうか。また、競争にはどうしても結果がつきまとうが、そもそも私たちはどういう時に公平だと感じるのだろうか。本書は、男女の格差、不況、貧困、高齢化、派遣社員の待遇など、身近な事例から、市場経済の本質の理解を促し、より豊かで公平な社会をつくるためのヒントをさぐる。

780円
102045-1

2047 オランダ風説書
—「鎖国」日本に語られた「世界」

松方冬子 著

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほぼ唯一の情報源だった。幕府はキリスト教禁令徹底のため、後には迫り来る「西洋近代」に立ち向かうために情報を求め、オランダ人は貿易上の競争相手と蹴落とすためにそれに応え、激動の世界の中で、双方の思惑が交錯し、商館長と通詞が苦闘する。長崎出島を舞台に、「鎖国」の二〇〇年間、毎年続けられた世界情報の提供の実態に迫る。

740円
102047-5

2051 伊藤博文
—知の政治家

瀧井一博 著

幕末維新期、若くして英国に留学、西洋文明の洗礼を受けた伊藤博文。明治維新後は、憲法を制定し、議会を開設、初代総理大臣として近代日本の骨格を創り上げた。だがその評価は、哲学なき政治家、思想なき現実主義者、また韓国併合の推進者として、極めて低い。しかし事実は違う。本書は「文明」「立憲国家」「国民政治」の三つの視角から、丹念に生涯を辿り、伊藤の隠された思想・国家構想を明らかにする。

サントリー学芸賞受賞

940円
102051-2

2053 老いのかたち

黒井千次 著

「かつてのように歳を取りにくくなった。昨今の老人はどのように日を過ごし、何を考えたり感じたりしてどう生きているか（あとがきより）。昭和・桁生まれの作家が、自らの日常を通して（現代の老いの姿）を探る。同級生の葬儀を同窓会にこなせられ、男女の老い方の違いに思いを馳せ、「オジイちゃん」と呼ばれて動揺、平均余命の数字が気にかかり……。冷静な観察眼と深い内省から紡がれる、珠玉のエッセイ五六篇を収録。

840円
102053-6

2056 日本語作文術

— 伝わる文章を書くために

野内良三 著

読みにくい日本語では、誰にも読んでももらえない。説得力のある、わかりやすい文章をどう書くか。短文を意識すること、語順や読点に敏感になること、段落の構成や論証の仕方に気を配ること。そして、起承転結ではなく「起」起承「展」。これだけで、文章の説得力はぐんとアップする。本書では、作文に役立つ「使える定型表現」のリストも大々的に披露。日本語力を、生きていく上での強力な武器とするための指南書。

2058 日本神判史

— 盟神探湯・湯起請・鉄火起請

清水克行 著

神仏に罪の有無や正邪を問う裁判——神判は、前近代の世界各地で広く見られ、日本では中世、湯起請や鉄火起請が犯罪の犯人捜しに、村落間の境界争いに多用された。熱湯の中に手を入れ、あるいは焼けた鉄片を握り、火傷の有無で判決が下される過酷な裁判を、なぜ人々は支持したのか。為政者、被疑者、共同体各々の思惑をはかれば、神の名を借りた合理的精神すら見え隠れする——豊富な事例から当時の人々の心性を読み解く。

2061 認知症

— 専門医が語る診断・治療・ケア

池田 学 著

一度身につけた記憶や能力が失われていく認知症。いままで根治療法はないが、治療においても介護においても、早期発見と病気の正しい知識の果たす役割は大きい。本書では、認知症のうちアルツハイマー病やレビー小体型認知症などの主要な病気の特徴をやさしく解説し、病气ごとの治療とケアのポイントを紹介する。正常な物忘れと認知症の違いはどこにあるのか、若年性認知症固有の問題とは。悩んでしまう前に読んでほしい。一冊。

2066 いじめとは何か

— 教室の問題、社会の問題

森田洋司 著

一九八〇年代に「発見」されて以来、三度にわたる「いじめの波」が日本社会を襲った。なぜ自殺者が出るような悲劇が、繰り返されるのか。いじめをその定義から考察し、国際比較を行うことで、日本の特徴をあぶり出す。たしかに、いじめを根絶することはできない。だが、歯止めのかかる社会を築くことはできるはずだ。「いじめを止められる社会」に変わるため、日本の社会が、教育が、進むべき道を示す。

2067 物語 エルサレムの歴史

— 旧約聖書以前から
パレスチナ和平まで

笈川博一 著

一九八〇年代イスラエルが占領地でユダヤ人入植を推進した際、パレスチナ人がオスマン・トルコの土地台帳を根拠に所有権を主張すると、入植者たちは旧約聖書に記された神とアブラハムの契約を示したという。ダビデら古代の王の事績から、イスラム教徒の統治と十字軍、二回の大戦とイスラエル建国。そして戦争と和平交渉が繰り返される現代まで、聖書の記述が息づく「聖地」の複雑な来歴を、エピソード豊かに綴る。

2072 日本的感性

— 触覚とずらしの構造

佐々木健一 著

花の好みに表れるように、日本人には西洋人とは違う感じ方がある。「おもかげ」「なごり」「なつかしさ」など、日本人にとってそのものに「詩」を感じる言葉がある。「世界」が「われ」のなかでどのように響き合うか。それこそが感性であるならば、その多くは文化的な環境のなかで育まれ、個々の文化に固有の感性が生まれるだろう。本書は日本的感性を和歌を素材として考察し、その特性である「ずらし」と「触覚性」を明らかにする。

2075 歌う国民

— 唱歌、校歌、うたごえ

渡辺 裕 著

日本人の心の原風景として語られることの多い唱歌だが、納税や郵便貯金、梅雨時の衛生などの唱歌がさかんに作られた時期がある。これらは、近代化をめざす政府から押しつけられた音楽でもあった。だが、それさえも換骨奪胎してしまう日本人から、歌が聞こえなくなることはなかったのである。唱歌の時代から「うたごえ」、そして現代までを辿る、推理小説を読むような興奮あふれる、もう一つの近代史。

2076 アメリカと宗教

— 保守化と政治化のゆくえ

堀内一史 著

アメリカは二億人を超えるキリスト教徒を抱え、その八割が「天地創造」を信じ、教会出席率・回心体験でも群を抜く保守的な宗教大国である。一九七〇年代以降、宗教右派が政治に参入し、レーガンの大統領当選に貢献する。表舞台上に登場、二一世紀以降、ブッシュ、オバマは宗教票を無視できなくなった。本書は、世俗への危機意識からリベラル派が衰退し、保守化・政治化していく過程を中心に、アメリカの宗教の実態を描く。

2084 戦国武将の手紙を読む

— 浮かびあがる人間模様

小和田哲男 著

戦国の武将たちは筆まめだった。合戦の前には各地の武将を味方につけようと調略の手紙を出し、平時にも年貢の取り立てや金の輸送などについて指示を出す。子どもの手習いを褒める手紙もあれば、兄弟相和すようにさす家訓も書く。そして、死を覚悟した文面からは武将の心奥を覗くことができる。代表的な戦国武将の手紙二〇通を取り上げ、原文・翻刻・現代語訳をのせ、文章の内容や時代背景を解説する。

2088 チョコレートの世界史

— 近代ヨーロッパが磨き上げた
褐色の宝石

武田尚子 著

カカオは原産地の中米では飲み物であると同時に薬品であり、貨幣にもなった。ヨーロッパに到来したときも、この貴重な実の食用について、爆論が交わられたが、19世紀にはココアパウダーや固形チョコレートが発明・改良され、爆発的に普及する。イギリスの小さな食料品店だったロウントリー家もまた、近代的なチョコレート工場を作り、キットカットを開発、世界に販路を拡大するが……。ヨーロッパ近代を支えたお菓子の通史。

2095 『古事記』神話の謎を解く
——かくされた裏面

西條 勉 著

『古事記』は明治神宮のようなものである。見た目は古い、作られた時代は、実は新しい。「古事記」の神話も、古来のものをそのまま採録したのではなく、新しく誕生した国家「日本」の要請が作り出した新たな神話である。イザナギ・イザナミ神話は男尊女卑か？ イナバのシロウサギは白色なのか？ 浦島太郎が玉手箱を開けなかったらどうなったか？ 古くからの神話が解体・編成されて誕生した『古事記』神話を解説する。

2097 江戸の思想史
——人物・方法・連環

田尻祐一郎 著

荻生徂徠、安藤昌益、本居宣長、平田篤胤、吉田松陰——江戸時代は多くの著名な思想家を生み出した。だが、彼らの思想の中身を問われて答えられる人は多くないだろう。それでも難解な用語の壁を越え、江戸の時代背景をつかめば、思想家たちが何と格闘したのかが見えてくる。それは、「人と人との繋がり」という、現代の私たちに通じる問題意識である。一三のテーマを通して、刺激に満ちた江戸思想の世界を案内する。

2099 三国志

——演義から正史、そして史実へ

渡邊義浩 著

日本人をも魅了し続ける、三国志。しかし、『三国志演義』や、それを下敷きにした小説・ゲームの世界は「虚構」に満ちている。また、「正史」と呼ばれる歴史書の『三国志』も書き手の偏向がつまるところ。本書は、一般に親しまれている『演義』を入り口に、「正史」の記述を検討。そして、史実の世界へと誘う。暴君董卓の意外な美点、曹操が文学に託したものの、劉備と諸葛亮の葛藤——あなたの知らない三国志がここにある。

2101 国会議員の仕事
——職業としての政治

林 芳正／津村啓介 著

国会議員の仕事とはどのようなものだろうか。言うまでもなく、国会議員は私たちが有権者が選挙で投票することによって存在している。では、私たちは彼らに何を期待し、何を託しているのだろうか。そこには艱難はないか。本書は二人の現役国会議員が、その来歴と行動を具体的に記すことにより、政治家の仕事とは何か、そして、混迷する現代日本を変えていくために何が必要かを明らかにする試みである。

2105 昭和天皇
——「理性の君主」の孤独

古川隆久 著

新時代の風を一身に浴び、民主的な立憲君主になろうとした昭和天皇。しかし、時代はそれを許さなかった。——本書は今まであまりふれられなかった青年期に至るまでの教育課程に注目し、政治的どのような思想信念をもっていたかを実証的に探る。そしてそれは実際の天皇としての振る舞いや政治的判断にいかなる影響を与えたか、戦争責任についてどう考えていたか、さらに近代国家の君主のあり方をとも考察する。 サントリー学芸賞受賞

2107 近現代日本を史料で読む
——「大久保利通日記」から
「富田メモ」まで

御厨 貴 編著

歴史は史料に基づき描かれる。「昭和天皇独白録」や「富田メモ」をはじめ、新たな史料の発掘は、歴史的事実の変更や確定をもたらす。なかでも「原敬日記」「高松宮日記」「真崎甚三郎日記」「佐藤栄作日記」など政治家、皇族、軍人が残した日記は貴重な史料であり、ここから歴史が創られてきた。本書は、明治維新期から現代に至る第一級の史料を四十数点取り上げ、紹介・解説し、その意義を説く。近現代日本史の入門書。

2109 知的文章とプレゼンテーション
——日本語の場合、英語の場合

黒木登志夫 著

40年にわたって論文執筆と審査に携わってきたがん研究者が、卒業論文から学会発表まで、説得力あるドキュメントと惹きつけるプレゼンテーションの極意を指南する。文系、理系を問わず、知的三原則「簡潔・明解・論理的」がその秘訣。三原則にしたがって論文、申請書をどう書くかを具体的に説明する。グローバル化が進む21世紀、英語とのつきあい方、学び方についても実践的に説く。待望の知的表現力講座開講。

2110 日中国交正常化
——田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦

服部龍二 著

一九七二年九月、戦後三〇年近く対立していた中国と国交が結ばれた。この国交正常化交渉は、その後も続く歴史認識、戦争賠償、台湾問題、尖閣諸島など日中関係の論点が凝縮されていた。また冷戦下アメリカとの関係維持に腐心しながら試みられたものだった。本書は、外交記録、インタビューなどからこの過程を掘り起こし、政治のリーダーシップに着目し、政治家、官僚たちの動きを精緻に追う。 大佛次郎論壇賞 アジア・太平洋賞特別賞受賞

2117 物語 食の文化
——美味しい話、味な知識

北岡正三郎 著

長く人類はまずいものを繰り返し食べてきた。「美味しいものをお腹いっぱい食べたい」という欲求が強いのも無理はない。美味、珍味の探求は世界の人々の日常行為となっており、たべものへの関心は高まり続けている。本書は、食材、調理法、食事のしきたり、さらに各地各時代の食文化などを広く紹介するものである。味覚の満足、心躍る会食、そして健康増進のために、たべものについての正確な知識は欠かせない。図版多数。

2127 河内源氏

——頼朝を生んだ武士本流

元木泰雄 著

十二世紀末、源頼朝は初の本格的武士政権である鎌倉幕府を樹立する。彼を出した河内源氏の名は武士の本流として後世まで崇敬を集めるが、祖・頼朝から頼朝に至る一族の歴史は、京の政変、辺境の叛乱、兄弟間の嫡流争いなどで浮沈を繰り返す苛酷なものだった。頼義、義家、義親、為義、義朝と代を重ねた源氏嫡流は、いかにして栄光を手にし、あるいは敗れて雌伏の時を過ごしたのか。七代二百年の、彼らの実像に迫る。

2129
地図と愉しむ東京歴史散歩

竹内正浩 著

文明開化、関東大震災、空襲、高度成長……建設と破壊が何度も繰り返された東京だが、思わぬところに過去の記憶が残っている。日比谷公園の岩に刻まれた「不」の記号、神田三崎町に残る六叉路、明大前駅の陸橋下の謎のスペース、一列に並ぶ住宅など、興味深い構造物、地形を紹介し、その来歴を解説する。カラーで掲載した新旧の地図を見比べ、現地を歩いて発見すれば、土地の記憶が語りかけてくるだろう。

940円
102129-82133
文化と外交

パブリック・ディプロマシーの時代

渡辺 靖 著

いかに相手国の人びとの「心と精神を勝ち取る」か——。政府要人同士の伝統的外交と異なり、相手国世論に直接働きかけるパブリック・ディプロマシー。世界各地の反米主義へのアメリカの対抗策として急速に広まったこの文化戦略は、対外広報、人物交流、国際放送など多彩であり、日本でも「クール・ジャパン」といった形で取り入れられてきた。欧米中韓が積極展開する中、文化と外交の融合戦略の実態と思想を明らかにする。

780円
102133-52135
仏教、本当の教え

インド、中国、日本の理解と誤解

植木雅俊 著

紀元前五世紀のインドで生まれた仏教。中国では布教に漢訳の經典が用いられたのに対し、日本は漢文のまま經典を輸入した。両国においてサンクリットの原典は、ほとんど顧みられていない。中国は漢訳ならではの解釈を生み出し、日本では特権的知識階級である僧が、意図的に読み替えた例もある。ブツタの本来の教えをサンクリット原典から読み解き、日中両国における仏教受容の思惑・計算・誤解を明らかにする。

800円
102135-92138
ソーシャル・キャピタル入門

孤立から絆へ

稲葉陽二 著

東日本大震災のさい、人々は互いに譲り合い、整然と行動した。自分を犠牲にしても弱い者を救った。これは、見返りを期待しての行動では決してなく、絆や他者への信頼、思いやりの表れであった。このような絆や互酬性の規範をソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という。ふだんは目に見えない、しかし、教育や健康等に大切な役割を果たしている社会関係資本をどう育み、活かすのか。第一人者が理論と実践を紹介する。

760円
102138-02139
贈与の歴史学

儀礼と経済のあいだ

桜井英治 著

贈与は人間の営む社会・文化で常に見られるものだが、とりわけ日本は先進諸国の中でも贈答儀礼をよく保存している社会として研究者から注目を集めてきた。その歴史は中世までさかのぼり、同時に、この時代の贈与慣行は世界的にも類を見ない極端に功利的な性質を帯びる。損得の釣り合いを重視し、一年中贈り物が飛び交う中世人の精神を探り、義理や虚礼、賄賂といった負のイメージを纏い続ける贈与の源泉を繙く。

800円
102139-7

角川財団学芸賞受賞

2144
昭和陸軍の軌跡

永田鉄山の構想とその分岐

川田 稔 著

昭和十年八月十二日、一人の軍人が執務室で斬殺された。陸軍軍務局長永田鉄山。中堅幕僚時代、陸軍は組織として政治を動かすべきだとして「一夕会」を結成した人物である。彼の抱いた政策構想は、同志であった石原莞爾、武蔵章、田中新一らにどう受け継がれ、分岐していったのか。満蒙の領有をめぐる中ソとの軋轢、南洋の資源をめぐる英米との対立、また緊張する欧州情勢を背景に、満州事変から敗戦まで昭和陸軍の興亡を描く。山本七平賞受賞

940円
102144-12150
近現代日本史と歴史学

書き替えられてきた過去

成田龍一 著

近代日本の始まりは、ベリール来航ではなく、かつては天保の改革とされていた。高度成長期の公害問題が起くるまで、田中正造は忘れられた存在だった。——歴史は、新史料発見・新解釈により常に書き替えられる。特に近現代史は、時々の政治・社会状況の影響を受けてきた。本書は、マルクス主義の影響下にあった社会経済史をはじめ、民衆史、社会史という三つの流れから、近現代の歴史がどのように描かれ、修正されてきたかを辿る。

1000円
102150-22151
国土と日本人

災害大国の生き方

大石久和 著

山地が七割を占め、地震や台風にはしばしば見舞われる日本。この試練の多い土地に住みついた日本人は、古来、道を通し、川筋を変え、営々と自然に働きかけてきた。私たちが見る風景は、自然と人が共に造り上げたものなのだ。本書は、まず日本の国土の地形的・社会的特徴を明らかにする。さらに大震災に見舞われ、財政危機にある今、海外に伍して豊かな国土を築き上げ、日本人が再び活力を取り戻すために何が必要かを提言する。

840円
102151-92152
物語 近現代ギリシャの歴史

独立戦争からユーロ危機まで

村田奈々子 著

ヨーロッパ文明揺籃の地である古代ギリシャの輝きは、神話の世界そのままに、人類史の栄光として今も憧れの的であり続けている。一方で現在のギリシャは、経済危機にあえぐバルカンの一小国であり、EUの劣等生だ。オスマン帝国からの独立後、ギリシャ国民は、偉大すぎる過去に囚われると同時に、列強の思惑に翻弄されてきた。この、辺境の地の、数奇な歴史を掘り起こすことで、彼の国の今が浮かび上がる。

860円
102152-62156
源氏物語の結婚

平安朝の婚姻制度と恋愛譚

工藤重矩 著

平安時代の婚姻制度は法的に「一夫一妻制」であり、正妻とそれ以外の女性たちとの間には立場・社会的待遇に大きな差があった。恋愛譚としての『源氏物語』は、正妻の座をめぐる葛藤がストーリー展開の要となっており、婚姻制度への正確な理解を踏まえてこそ、ようやく紫の上、明石の君ら、作中人物の心情を深く味わうことができる。一夫一妻制をキーワードに『源氏物語』の構想を読み解く、かつてない試み。

840円
102156-4

2163 人種とスポーツ
— 黒人は本当に「速く」「強い」のか

川島浩平 著

オリンピックの陸上男子100m決勝で、スタートラインに立った選手56人は、ここ30年すべて黒人である。陸上以外の競技でも、彼らの活躍は圧倒的に見える。だが、かつて彼らは劣った「人種」と規定され、スポーツの記録からは遠い所にあった。彼らは他の「人種」に比べて、本当に身体能力が優れているのか。本書は、人種とスポーツの関係を歴史的に辿り、最新の科学的知見を交え、能力の先天性の問題について明らかにする。

2164 魏志倭人伝の謎を解く
— 三国志から見る邪馬台国

渡邊義浩 著

考古学調査と並び「邪馬台国論争の鍵を握るのが『魏志倭人伝』(『三国志』東夷伝倭人条)である。だが、『三国志』の世界観を理解せずに読み進めても、実像は遠のくばかりだ。なぜ倭人は入れ墨をしているのか、なぜ邪馬台国は中国の東南海上に描かれたのか、畿内と九州どちらにあったのか。『三国志』研究の第一人者が当時の国際情勢を踏まえて検証し、真の邪馬台国像に迫る。「魏志倭人伝」の全文と詳細な訳注を収録。

2167 イギリス帝国の歴史
— アジアから考える

秋田 茂 著

かつて世界の陸地の約四分の一を領土として支配したイギリス帝国。その圧倒的な影響力は公式の植民地だけにとどまらなかった。本書は近年のグローバルヒストリーの研究成果をふまえ、アジアとの相互関係に注目しつつ、一八世紀末までの帝国の形成・発展・解体の過程を考察する。今や世界経済の中心はアジア太平洋経済圏にシフトしつつある。そのシステムの基盤を作り上げた帝国の意義を明らかにする。

読売・吉野作造賞受賞

2168 飛鳥の木簡
— 古代史の新たな解明

市 大樹 著

かつて日本古代史は、『日本書紀』『古事記』や中国の史書に頼らざるを得なかった。だが一九九〇年代後半以降三万点以上に及ぶ飛鳥時代の木簡の出土が相次ぎ、新たな解明が進み始める。本書は、大化改新・中国・朝鮮半島との関係、藤原京造営、そして律令制の成立時期など、日本最古の木簡から新たに浮かび上がった史実「郡評論争」など文献史料をめぐる議論の決着など、木簡解説によって書き替えられた歴史を描く。

古代歴史文化賞大賞受賞

2170 カラー版
地図と愉しむ東京歴史散歩
都心の謎篇

竹内正浩 著

戦前の地図では、皇居はほとんど空白地として描かれてきた。戦後の地図にも、不可解な地形が表示されている。わずかに残された地図と空中写真を手がかりに、皇居の建物・地形の変遷を追う。さらに、二三区内にたくさんあった飛行場、開通しなかった新幹線の痕跡、東京駅の場所にかつて存在した刑務所、テニス・コートや学校に生まれ変わった射撃場など、東京に残る近代化の名残を新旧の地図とカラー写真で訪ねる好評第二弾。

2171 治安維持法
— なぜ政党政治は「悪法」を生んだか

中澤俊輔 著

言論の自由を制限し、戦前の反体制派を弾圧した「稀代の悪法」。これが治安維持法のイメージである。しかしその実態は十分理解されているだろうか。本書は政党の役割に注目し立案から戦後への影響までを再検証する。一九二五年に治安維持法を成立させたのは、護憲三派の政党内閣だった。なぜ政党は自らを縛りかねない法律を生み、その後の拡大を許したのか。現代にも通じる、自由と民主主義をめぐる難問に向き合う。

2174 植物はすごい
— 生き残りをかけたしくみと工夫

田中 修 著

身近な植物にも不思議がいっぱい！ アジサイやキョウチクトウ、アサガオなど毒をもつ意外な植物たち、長い年月をかけて巨木を枯らすシメコロシノキ、かさぶたをつくって身を守るバナナ、根も葉もないネナシカズラなど、植物のもつさまざまなパワーを紹介。動物たちには真似できない植物のすごさを、「渋みと辛みでからだを守る」「食べられる植物も毒をもつ」「なぜ、花々は美しく装うのか」などのテーマで、やさしく解説。

2179 足利義満
— 公武に君臨した室町将軍

小川剛生 著

公家社会と深く交わるなかで王朝文化に精通し、明国の皇帝には日本国王の称号を授与され、死後、朝廷から太上天皇の尊号を宣下される――三代将軍足利義満の治世はしばしば「皇位篡奪」「屈辱外交」という悪評とともに語られる。だが、強大な権力、多様な事績に彩られた生涯の全貌は、いまだ明らかにはなっていない。本書では、新史料にも光を当て、公武に君臨した唯一無二の将軍の足跡をたどる。

2183 アイルランド紀行
— ジョイスからU2まで

榎木仲明 著

北海道より少しだけ広い島国だが、魅力を表す言葉は果てを知らない。それがアイルランド。ケルト文明の地、スウィフト、ワイルド、イエイツ、ジョイス、ベケット、ヒーニーによる世界文学の生地、ヴァン・モリソンやU2が歌い上げる音楽の島、「虐げられてへつらう者たち」(英国からの独立闘争の国)――「木」一草に至るまで言葉が刻まれているこの土地を、達意のエッセイと美味しい訳文でまろごと味わい尽くす。

2184 コミュニティデザイン時代の
— 自分たちで「まち」をつくる

山崎 亮 著

孤立死や無縁社会という言葉が毎日口にされる現在の日本。今こそ人とのつながりを自らの手で築く必要が痛感されている。この時代の声に応え、全国で常時50以上のコミュニティづくりに携わる著者が初めて明かす、住民参加・思考型の手法と実例。「デザインしないデザイン」によって全員に参加してもらい結果を出すのは？ 話の聴き方から服装にいたるまで、独自の理論を開陳する。ビジネスの場でも役立つ、真に実践的な書。

2185 経済学は何ができるか
— 文明社会の制度的枠組み

猪木武徳 著

さまざまな「価値」がぶつかり合う、現代の自由社会。その結果、数々の難問が私たちの前に立ちはだかっている。金融危機、中央銀行のあり方、格差と貧困、知的独占の功罪、自由と平等のバランス、そして人間にとって正義とは、幸福とは——。本書は、経済学の基本的な論理を解説しながら、問題の本質に迫る。鍵を握るのは「制度」の役割である。デモクラシーのもとにおける経済学の可能性と限界を問い直す試み。

820円
102185-4

2186 田中角栄

— 戦後日本の悲しき自画像

早野 透 著

「コンピュータ付きブルドーザー」と呼ばれた頭脳と行動力で、高等学校卒から五四歳で首相の座に就いた田中角栄。「新潟三区」という雪深い地盤に「利益誘導」を行い、「日本列島改造」を掲げた角栄は、戦後政治の象徴だった。だが彼の金権政治は強い批判を浴び、政権は二年半で終わる。その後も巨大な「田中派」を背景に力を持ったが、ロッキード事件では有罪判決が下った。角栄を最期まで追い続けた番記者が語る真実。

940円
102186-1

2187 物語 哲学の歴史

— 自分と世界を考えるために

伊藤邦武 著

哲学とは何だろうか——。人間が世界と向き合い、自分の生の意味を顧みるとき、哲学は生まれた。古代から二一世紀の現代まで、人間は何を思考し、その精神の営みはどのような歴史を辿ってきたのだろうか。本書は、「魂の哲学」から「意識の哲学」「言語の哲学」を経て、「生命の哲学」へと展開する一つのストーリーとして描く。ヘーゲル、シュベングラー、ローティの歴史哲学を超えた、新しい哲学史への招待。

1100円
102187-8

2189 歴史の愉しみ方

— 忍者・合戦・幕末史に学ぶ

磯田道史 著

忍者の子孫を訪ね歩き、東海道新幹線の車窓から関ヶ原合戦を体験する方法を編み出し、龍馬暗殺の黒幕を探る——。著者は全国をめぐって埋もれた古文書を次々発掘。そこから「本の歴史像」を描き出し、その魅力を伝えてくれる。同時に、歴史は厳しいものである。地震史研究にも取り組む著者は、公家の日記などから、現代社会への警鐘を鳴らす。歴史を存分に愉しみ、現代に活かせる「歴史通」になりたいあなたへ。

740円
102189-2

2190 国際秩序

— 18世紀ヨーロッパから21世紀アジアへ

細谷雄一 著

「均衡」「協調」「共同体」——近代ヨーロッパが生んだ国際秩序の基本原理である。本書はこの三つの体系を手がかりに、スペイン王位継承戦争から、ウィーン体制、ビスマルク体制、二度の世界大戦、東西冷戦、そして現代に至る三〇〇年の国際政治の変遷を読み解く。平和で安定した時代はいかに築かれ、悲惨な戦争はなぜ起こってしまったのか。複雑な世界情勢の核心をつかみ、日本外交の進むべき道を考えるための必読書。

880円
102190-8

2192 政友会と民政党

— 戦前の二大政党制に何を学ぶか

井上寿一 著

待望の二大政党時代が到来したのにメルिटが実感できない。そうした幻滅の声がしばしば聞かれる。だが歴史を振り返ると、二大政党が交互に政権を担うシステムは戦前にも模索されている。大正末年の第二次加藤高明内閣発足から、五・一五事件による大義毅内閣崩壊までである。政友会と民政党の二大政党制が七年足らずで終焉を迎えたのはなぜか。その成立・展開・崩壊の軌跡をたどり、日本で二大政党制が機能する条件を探る。

840円
102192-2

2195 入門 人間の安全保障

— 恐怖と欠乏からの自由を求めて

長 有紀枝 著

一九九四年、国連開発計画によって「人間の安全保障」が提唱された。国家ではなく、一人ひとりの人間を対象とするこの概念は、頻発する紛争や暴力、世界を覆う貧困や飢餓からの自由を目指し、国際社会のキーワードとなった。本書では人道支援、地雷禁止条約策定交渉などの活動が続けてきた著者が、国際政治学の知見をふまえ、エッセンスを解説。増補版では新章を加え、全面的にデータを刷新した。SDGsなど最新動向にも対応。

900円
192195-6

2196 大原孫三郎

— 善意と戦略の経営者

兼田麗子 著

「わしの目には十年先が見える」「新事業は、十人のうち二―三人が賛成したときにはじめるべきだ、七―八人が賛成したときには、遅すぎる」——経営者と社会事業家の二足のわらじを履き続けた大原孫三郎。クラブハウやクラレなど、多くの企業を創立・発展させるとともに町づくりに貢献。三つの研究所を設立し、総合病院や美術館をつくった。社会改良の善意をいかにして行動に移していったか、その波瀾にみちた生涯を辿る。

980円
102196-0

2200 夫婦格差社会

— 二極化する結婚のかたち

橘木俊詔／迫田さやか 著

格差が拡大しつつある日本。家族の最小単位である「夫婦」もその流れに拍車をかけている。さまざまなデータに基づき、日本の夫婦の今を探ると見えてくるのは、夫の所得と無関係に働くようになった妻の影響力の大きさだ。医師夫婦に代表されるパワーカップルと、対極にある若いウィークカップルなど、興味深い事例を紹介。また、結婚できない人たちから、離婚、そして地域差まで視野を広げ、夫婦をめぐる格差を考える。

760円
102200-4

2202 言語の社会心理学

— 伝えたいことは伝わるのか

岡本真一郎 著

「わたしの孫はおじいさんですよ」「わたしの孫はおばあさんですよ」。この会話は、一見すると不自然である。だが当人たちは何の問題もなく意思疎通ができていて（第2章参照）。私たちは、ことは「文字どおり」に使っているわけではない。話していないのに伝わることもあれば、丁寧に説明していても誤解されることがあるのはなぜか。社会心理学の視点から、敬意表現や皮肉など、対人関係のことばの謎に迫る。

880円
102202-8

2205 聖書考古学
— 遺跡が語る史実

長谷川修一 著

聖書の記述には、現代の我々からすると荒唐無稽に思えるエピソードが少なくない。いったいどの程度まで史実を反映しているのだろうか。文献史料の研究にはおのずと限界があり、内容を見極めるには、遺跡の発掘調査に基づくアプローチが欠かせない。旧約聖書の記述内容と考古学的知見を照らし合わせることで、古代イスラエルの真の姿を浮かび上がらせる。本書は現地調査に従事する研究者の、大いなる謎への挑戦である。

840円
102205-9

2207 平和主義とは何か
— 政治哲学で考える戦争と平和

松元雅和 著

平和を愛さない人はいないだろう。だが平和主義となるとどうだろうか。今日では単なる理想論と片付けられがちだが、実はその思想や実践は多様である。本書は、「愛する人が襲われても無抵抗でよいのか」「正しい戦争もあるはず」「平和主義は非現実的だ」「虐殺を武力で止めないのは無責任」といった批判に丁寧に答え、説得力ある平和主義の姿を探る。感情論やレッテル貼りに陥らず、戦争と平和について明晰に考えるために。

820円
102207-3

2208 物語 シンガポールの歴史
— エリート開発主義国家の200年

岩崎育夫 著

一人当たりのGDPで日本を抜きアジアで最も豊かな国とされるシンガポール。一九六五年にマレーシアから分離独立した華人中心の都市国家は、英語教育エリートによる一党支配の下、国際加工基地・金融センターとして発展した。それは表現・言論の自由を抑圧し、徹底的な能力別教育を行うなど、経済至上主義を貫いた。成果、でもあった。本書は、英国植民地時代から、日本占領、そして独立し現在に至る二〇〇年の軌跡を描く。

860円
102208-0

2212 近代日本の官僚
— 維新官僚から学歴エリートへ

清水唯一朗 著

明治維新後、新政府の急務は近代国家を支える官僚の確保・育成だった。当初は旧幕臣、藩閥出身者が集められたが、高等教育の確立後、全国の有能な人材が集まり、官僚は「立身出世」の一つの到達点となる。本書は、官僚の誕生から学歴エリートたちが次官に上り詰める時代まで、官僚の人材・役割・実態を明らかにする。激動の近代日本の中、官僚たちの活躍・苦悩と制度の変遷を追うことによって、日本の統治内部を描き出す。

920円
102212-7

2213 漢字再入門
— 楽しく学ぶために

阿辻哲次 著

漢字の宿題が苦痛だった人も多いでしょう。小中学校では約二千字の漢字一つひとつについて、筆順、とめ・はねなどの字形、音読みや訓読み、部首などを習います。しかし、漢字を学び、楽しむために本当に必要なものとはなんなのでしょう。漢字学の第一人者が、漢字の意外な成り立ちや読み方の歴史、部首のふしぎなど、学生時代に知っておけばよかった知識を伝授し、真に必要な知識を解説、さらに望ましい漢字教育を提言します。

780円
102213-4

2215 戦略論の名著
— 孫子、マキアヴェリから現代まで

野中郁次郎 編著

戦略とは何か。勝ち抜き生き残るために、いかなる戦略をとるべきなのか。古今東西の戦略思想家たちの睿智が結集された戦略論の中から、「失敗の本質」で知られる編著者が現代人必読の12冊を厳選。孫子、マキアヴェリ、クラウゼヴィッツの三大古典から20世紀の石原莞爾、リデルハート、クレフエルト、そして21世紀の最新理論まで網羅し、第一線の研究者が詳細に解説する決定版。各章末に「戦略の名言」を付す。

800円
102215-8

2218 特別支援教育
— 多様なニーズへの挑戦

柘植雅義 著

小中学校の通常学級で六％、全国で六〇万人を超えると思われる「知的障害のない発達障害児」が、彼らを含む、すべての障害のある幼児・児童・生徒の自立や社会参加に向けた取り組みが、教育の場で始まっている。一人ひとりの教育上のニーズを把握し、学習面や生活面の問題を解決するための指導と支援を行う。これが特別支援教育だ。すべての親や教師、そして子どもたちが知っておくべきことを収めた現代の新基準の書。

880円
102218-9

2220 言語学の教室
— 哲学者と学ぶ認知言語学

西村義樹／野矢茂樹 著

「雨に降られた」はよくて「財布に落ちられた」がおかしいのは、なぜ? 「西村さんが公園の猫に話しかけてきた」の違和感の正体は? 認知言語学という新しい学問の、奥深い魅力に目覚めた哲学者が、専門家に難問質問を突きつける。豊富な例文を用いた痛快な議論がくり返されるなかで、次第に明らかになる認知言語学の核心。本書は、日々慣れ親しんだ日本語が揺さぶられる、知的探検の生きた記録である。

840円
102220-2

2221 バチカン近現代史
— ローマ教皇たちの「近代」との格闘

松本佐保 著

フランス革命以降、「政教分離」を推進する近代国家の登場で、ローマ教皇は領土や権威を失っていく。20世紀に入り、教皇はイタリア政治に介入し続け、ムッソリーニの思惑もありバチカン市国が成立する。その後バチカンは、「反宗教」の共産主義を常に敵視。ナチスに秋波を送り、戦後は米国に接近、「人権外交」を繰り返す。それは「東欧革命」に繋がった。本書は、カトリック総本山バチカンの生き残りや賭けた200年を描く。

860円
102221-9

2227 カラー版
地図と愉しむ東京歴史散歩
地形篇

竹内正浩 著

東京の街は、意外と複雑な地形の上にできている。海に突き出した前方後円墳、谷底の渋谷駅、人工的に作られた御茶ノ水の渋谷、川を埋めて生まれた戸越銀座、消えた日暮しの坂など、山と坂、濠と川に彩られた東京の姿を古地図で紹介。さらに、「城南五山」をはじめ、麻布や高輪、本郷や目黒など、あちこちの山の上に存在した華族や富豪の邸宅の移り変わりを解説する。一八〇以上の「都心の山」のお屋敷」リストを収載。

1000円
102227-1

2229 真珠の世界史
— 富と野望の五千年

山田篤美 著

古来、真珠は高価な宝石で、貴重な交易品だった。「魏志倭人伝」は邪馬台国の大量の真珠について記し、マルコム・ポーロやコロンブスは日本の真珠に憧れた。新大陸で新たな産地が発見されると、一大ブームが巻き起こる。そして二十世紀初め、価格を吊り上げていたカルティエやティファニーに衝撃を与えたのが、日本の養殖真珠だった。こうして真珠王国日本が誕生する。本書は誰も書かなかった交易品としての真珠史である。

940円
102229-5

2233 民主党政権 失敗の検証
— 日本政治は何を活かすか

日本再建イニシアティブ 著

二〇〇九年九月に国民の期待を集めて誕生した民主党政権は、一二一年二月の総選挙での惨敗により幕を閉じた。実現しなかったマニフェスト、政治主導の迷走、再建できなかった財政、米軍基地をめぐる混乱、中国との関係悪化、子ども手当の挫折、党内対立、参院選敗北。多岐にわたる挑戦と挫折は、日本政治にどんな教訓を残したのか。ジャーナリスト・船橋洋一を中心としたシンクタンクによる、民主党政権論の決定版。

1000円
102233-2

2237 四大公害病
— 水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市公害

政野淳子 著

四大公害病とは、水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市公害を指す。工場廃液などが原因、激痛・発作といった重い障害を多くの人にもたらした。当初、企業は工場との関係が否定。だが医師・研究者らが原因を究明し、1960年代末以降、患者が各地で提訴。70年代半ばまでに次々と勝利した。本書は高度成長の「影」である公害病の全貌を明らかにすると同時に、21世紀の今なお続く「認定」をめぐる国と被害者との訴訟・軋轢も追う。

880円
102237-0

2238 人はなぜ集団になると怠けるのか
— 「社会的な抜き」の心理学

釘原直樹 著

人は集団で仕事をする。しかし集団になると人は怠け、単独で作業を行うよりも一人当たり努力の量が低下する。これを「社会的抜き」という。例えば非効率な会議や授業中の問題行動、選挙の低投票率、スポーツの八百長などは「社会的抜き」の典型である。本書で、このような「抜き」のメカニズムを、多様な心理学的実験の結果から明らかにしていく。その防止策とは、はたまた功罪とは。リーダー・企業人必読書。

880円
102238-7

2242 オスカー・ワイルド
— 「犯罪者」にして芸術家

宮崎かずみ 著

『サロメ』『幸福な王子』『ドリアン・グレイの画像』など多くの著作と数々の警句で知られる「世紀末芸術の旗手」オスカー・ワイルド。アイルランドに生まれ、オックスフォード大学在学中から頭角を現した青年期に始まり、同性愛裁判に敗北し、保守的なイギリス社会から追放される晩年まで。「私は人生にこそ精進をつぎ込んだが、作品には才能しか注がなかった」——どの作品よりも起伏と魅力に富んだ彼の生涯をたどる。

1000円
102242-4

2247 日本写真史(上)
— 幕末維新から高度成長期まで

鳥原 学 著

19世紀半ば、日本へ輸入された写真。日露戦争を経て新聞・出版メディアが拡大するなか報道写真が成長。第二次世界大戦時にはプロパガンダに利用され、また敗戦直後には「マッカーサーと天皇」の写真のように、社会に大きな影響力を持つようになった。戦後は戦禍や公害問題を追及するリアリズム写真が隆盛を誇ったが、経済成長とともに私的テーマ、広告へと多様化する。本書は1974年まで120年に及ぶ歴史を描く。

820円
102247-9

2248 日本写真史(下)
— 安定成長期から3・11後まで

鳥原 学 著

1970年代半ばは消費社会が爛熟するなか「an・an」を筆頭にヴィジュアル雑誌が次々と創刊。新しい写真家たちが陸続と登場する。さらに『写楽』『写真時代』『FOCUS』の売り上げ拡大によって、写真は黄金時代を迎え、宮沢りえのヌード写真集は社会現象ともなった。他方で、90年代半ば以降のデジタル写真の普及は、150年に及ぶ写真史を一変する。本書は1975年以降の写真黄金期とデジタルの衝撃の歴史を描く。

820円
102248-6

2249 物語 ビルマの歴史
— 王朝時代から現代まで

根本 敬 著

民主化運動の指導者アウンサンサーチャー、壮麗なバゴダ、『ビルマの豎琴』などで知られ、潜在力の高い新興市場としても注目されるビルマ(ミャンマー)。王朝時代に始まり、イギリス植民地時代、日本軍による占領期。戦後の独立後は、ビルマ式社会主義、二三年間にわたる軍政期、そして二〇一一年に民政へ移行し、改革の進む現代まで。知られざる多民族・多言語・多宗教国家の歩みをたどり、未来を展望する。

1000円
102249-3

2250 睡眠のはなし
— 快眠のためのヒント

内山 真 著

なぜ眠くなるのか、どうして夢を見るのか、どのくらい眠れば健康的なのか……睡眠をめぐる疑問はつきない。脳と眠りの関係、体内時計の働き、夢や金縛りなどのトビツクから、人間にとつての睡眠の意味を解き明かす。さらに不眠症や過眠症の実像、うつ病と睡眠の関連など、睡眠と健康についてわかりやすく解説。長年臨床の現場に立ってきた第一人者が、最新成果を踏まえて、人間学的にアプローチする睡眠学入門の決定版。

760円
102250-9

2253 禁欲のヨーロッパ
— 修道院の起源

佐藤彰一 著

多くの宗教で、性欲・金銭欲などの自らの欲求を断ち切り、克服することが求められる。キリスト教も同様だが、それではヨーロッパにおける「禁欲の思想」はいいつ生まれ、どのような変化をしていったのか。身体を鍛錬する古代ギリシアから、法に縛られたローマ時代を経て、キリスト教の広がりとともに修道制が生まれ、修道院が誕生するまで——千年に及ぶヨーロッパ古代の思想史を「禁欲」という視点から照らし出す意欲作。

880円
102253-0

2257 ハンナ・アーレント

「戦争の世紀」を生きた政治哲学者

矢野久美子 著

『全体主義の起原』『人間の条件』などで知られる政治哲学者ハンナ・アーレント（一九〇六—七五）。未曾有の破局の世紀を生きた抜いた彼女は、全体主義と対決し、「悪の陳腐さ」を問い、公共性を求めつづけた。ユダヤ人としての出自、ハイデガーとの出会いとヤスパーズによる薫陶、ナチ台頭後の亡命生活、アイヒマン論争……。幾多のドラマに彩られた生涯と、強靱でラディカルな思考の軌跡を、繊細な筆致によって克明に描き出す。

2263 うわさとは何か

ネットで変容する最も古いメディア

松田美佐 著

デマ、流言、ゴシップ、口コミ、風評、都市伝説……。多様な表現を持つうわさ。この「最古のメディア」は、トイレットペーパー騒動や口裂け女など、戦後も社会現象を巻き起こし、東日本大震災の際も大きな話題となった。事実性を超えた物語が、人々のつながり・関係性を結ぶからだ。ネット社会の今なお、メールやSNSを通じて、人々を魅了し、惑わせるうわさは、新たに何をもたらしているのか。人間関係をうわさから描く意欲作。

2266 アデナウアー

現代ドイツを創った政治家

板橋拓己 著

第2次世界大戦の敗北により、人心・国土とも荒廃したドイツ。その復興を担ったのが、73歳で首相に就任、14年間の座にあったアデナウアーである。戦前、ケルン市長として活躍した彼が、ナチに迫害され引退。戦後、保守政党を率い、「復讐」「反動」のレッテルを貼られながらも、常に自国のナショナリズムを懐疑し、米仏などとの「西側結合」に邁進、ユダヤ人との「和解」にも挑んだ。「国父」と呼ばれる保守政治家の生涯。

2269 日本鉄道史 幕末・明治篇

蒸気車模型から鉄道国有化まで

老川慶喜 著

一八五四年、来航したバリー提督は蒸気車模型を幕府に献上。以来、日本は鉄道時代に突入した。幕末の外国人たちによる敷設計画に始まり、新橋―横浜間の開業、官設鉄道を凌ぐ私設鉄道の全盛期を経て、一九〇六年の鉄道国有化と開業距離五〇〇マイル達成に至る半世紀……。全国的な鉄道網はいかに構想され、形成されたのか。鉄道の父・井上勝をはじめ、渋沢栄一、伊藤博文などの活躍とともに日本鉄道史の草創期を描く。

2270 日清戦争

近代日本初の対外戦争の実像

大谷 正 著

1894年の夏、日清両国が朝鮮の「支配」をめぐる開戦に至った日清戦争。朝鮮から満州を舞台に戦われた近代日本初の国家間戦争である。清の講和受諾によっていったん終わりをみるが、割譲された台湾では、なお泥沼の戦闘が続いた。本書は、開戦の経緯など通説に変更を迫りながら、平壤や旅順の戦いなど、各戦闘を詳述。兵士とは同数の軍夫を動員、虐殺が散見され、前近代戦の様相を見せたこの戦争の全貌を描く。

2272 ヒトラー演説

熱狂の真実

高田博行 著

ナチスが権力を掌握するにあたっては、ヒトラーの演説力が大きな役割を果たした。ヒトラーの演説といえは、声を張り上げ、大きな身振りで聴衆を煽り立てるイメージが強いが、実際はどうだったのか。聴衆は演説にいつも熱狂したのか。本書では、ヒトラーの政界登場からドイツ敗戦までの二五年間、一五〇万語に及ぶ演説データベースを分析。レトリックや表現などの面から煽動政治家の実像を明らかにする。

2274 スターリン

「非道の独裁者」の実像

横手慎二 著

「非道の独裁者」——日本人の多くが抱くスターリンのイメージだろう。一九二〇年代末にソ連の指導的地位を固めて以降、農業集団化や大粛清により大量の死者を出し、晩年は猜疑心から側近を次々逮捕させた。だが、それでも彼を評価するロシア人が今なお多いのはなぜか。ソ連崩壊後の新史料をもとに、グルジアに生まれ、革命家として頭角を現し、最高指導者としてヒトラーやアメリカと渡りあった生涯をたどる。

2276 本居宣長

文学と思想の巨人

田中康二 著

漢意を排斥して大和魂を追究し、「物のあはれを知る」説を唱えたことで知られる、江戸中期の国学者・本居宣長。伊勢松坂に生まれ、京都で医学を修めた後、賀茂真淵と運命的な出会いを果たした。以来、学問研究に身を捧げ、三十有余年の歳月を費やし『古事記伝』を著した。この国学の大成者とは何者だったのか。七十年におよぶ生涯を丹念にたどりつつ、文学と思想の両分野に屹立する宣長学の全体像を描き出す。

2279 物語 ベルギーの歴史

ヨーロッパの十字路

松尾秀哉 著

ビールやチョコレートなどで知られるベルギー。ヨーロッパの十字路に位置したため、古代から多くの戦乱の舞台となり、建国後もドイツやフランスなどの強国に翻弄されてきた。本書は、19世紀の建国時における混乱、植民地獲得、二つの世界大戦、フランス語とオランダ語という公用語をめぐる紛争、そして分断危機までの道のりを描く。EU本部を首都に抱え、欧州の中心となったベルギーは、欧州の問題の縮図でもある。

2281 怨霊とは何か

菅原道真・平将門 崇徳院

山田雄司 著

怨霊とは死後に落ち着くところのない霊魂である。古来、日本では怨霊が憑依することによって、個人的な祟りにとどまらず、疫病や天変地異など社会に甚大な被害がもたらされると信じられてきた。三大怨霊と称される菅原道真、平将門、崇徳院は死後、いかに人々を恐怖に陥れたのか。そして、どのように鎮魂がなされたのか。霊魂の存在から説き起こし、怨霊の誕生とその終焉、さらに近代の霊魂文化まで概観する。

2282 地方消滅

— 東京 — 極集中が招く人口急減

増田寛也 編著

このままでは896の自治体が消滅しかねない。減少を続ける若年女性人口の予測から導き出された衝撃のデータである。若者が子育て環境の悪い東京圏へ移動し続けた結果、日本は人口減少社会に突入した。多くの地方では、すでに高齢者すら減り始め、大都市では高齢者が激増してゆく。豊富なデータをもとに日本の未来図を描き出し、地方に人々がとどまり、希望どおりに子どもを持てる社会へ変わるための戦略を考える。

新書大賞受賞

2286 マリー・アントワネット

— フランス革命と対決した王妃

安達正勝 著

名門ハブスブルク家に生まれたマリー・アントワネットは、フランス王妃となり、ヴェルサイユ宮殿で華麗な日々を過ごしていた。だが一七八九年のフランス革命勃発で運命が急変。毅然と反革命の姿勢を貫き、三十七歳の若さで断頭台の露と消えた。悪しき王妃として断罪された彼女が、後世で高い人気を得、人々の共感を集めているのはなぜか。彼女が目指した「本当の王妃」とは何だったのか。栄光と悲劇の生涯を鮮やかに描く。

940円
102286-8

2288 フランクフルト学派

— ホルクハイマー、アドルノから
21世紀の「批判理論」へ

細見和之 著

ホルクハイマー、アドルノ、ベンヤミン、フロム、マルクルーゼ……。一九二三年に設立された社会研究所に結集した一群の思想家たちを「フランクフルト学派」とよぶ。彼らは反ユダヤ主義と対決し、マルクスとフロイトの思想を統合して独自の「批判理論」を構築した。その始まりからナチ台頭後のアメリカ亡命期、戦後ドイツにおける活躍を描き、第二世代ハーバースによる新たな展開、さらに多様な思想像の未来まで展望する。

840円
102288-2

2289 老いの味わい

黒井千次 著

七十代後半の坂を登り切り、八十歳を超えた作家が見つめる老いの日々。身の回りには、薄い横線で消された名前の目立つ住所録。バッグは肩からすべり落ち、タタミから立ち上がるのにも一苦労。そして頭に浮かぶ疑問は、なぜ歳を取ると何事も億劫になるのか、病気の話にたくも熱が入るのか、「ピンピンコロリ」は本当に理想なのか。一年一年、新しい世界と向き合いつて歩む日常と思考を丹念に描いた、心に響くエッセイ。

840円
102289-9

2290 酒場詩人の流儀

吉田 類 著

春は新潟の酒蔵で桜の花を愛で、夏は秩父山系の尾根筋を踏破し、秋は青森に収穫も佳境のリンゴ園を訪れ、冬はオホーツク海で流氷に眺め入る。旅から旅への日々は、はや半世紀に及ぶ。酒と俳句はいつでも良き伴侶だった。大町桂月、種田山頭火、若山牧水らを酒飲み詩人の先達と仰ぐ著者は、日本各地をめぐる、出会った人々と「酒縁」を結ぶ。大衆酒場ブームの火付け役が、独特の感性で綴った紀行エッセイ。

780円
102290-5

2292 カラー版 ゴッホ〈自画像〉紀行

木下長宏 著

三七歳で自ら命を絶ったヴァン・ゴッホ。彼の画家人生は、わずか一〇年あまりにすぎない。その短い歳月に、四〇点を超える自画像を遺した。なぜゴッホはこれほど多くの自画像を描き、そしてそこに何を見いだしたのか。ゴッホ研究の第一人者が、その求道的な生涯とともに、自画像を一点ずつたどっていく。丹念な作品の読解によって浮かび上がる、新しいゴッホの世界。自画像全点カラー収録。

1000円
102292-9

2293 教養としての宗教入門

— 基礎から学べる信仰と文化

中村圭志 著

宗教とは何か。信仰、戒律、儀礼に基づく生き方は、私たち日本人にはなじみが薄い。しかし、食事前の前後に手を合わせ、知人と会えばお辞儀する仕草は、外国人の目には宗教的なふるまいに見える。宗教的儀式と文化的慣習の違いは、線引き次第なのである。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教から、仏教、ヒンドゥー教、そして儒教、道教、神道まで。世界の八つの宗教をテーマで切り分ける、新しい宗教ガイド。

840円
102293-6

2295 天災から日本史を 読みなおす

— 先人に学ぶ防災

磯田道史 著

豊臣政権を襲った二度の大地震。一七〇七年の宝水地震が招いた富士山噴火、佐賀藩を「軍事大国」に変えた台風、森繁久彌が遭遇した大津波……。史料に残された災いの記録をひもとくと、「もう一つの日本文史」が見えてくる。富士山の火山灰はどれほど降るか、土砂崩れを知らせる異い、そして津波から助かるための鉄則とは。東日本大震災後に津波常襲地に移住した著者が伝える、災害から命を守る先人の知恵。

760円
102295-0

2296 日本占領史1945-1952

— 東京・ウシントン・沖縄

福永文夫 著

一九四五年の敗戦後、マッカーサーを頂点にGHQの支配下に置かれた日本。当初占領政策は非軍事化・民主化を推進、平和主義を追求した日本国憲法が花開く。だが冷戦が深まる中、日本を「反共親米」にすべく、政策は経済復興に転換される。51年、朝鮮戦争の最中に結ばれたサンフランシスコ講和条約は日米安保条約とセットの締結となった。本書は、21世紀まで続く「戦後体制」が創られた日本占領7年間の全貌を描く。

1220円
102296-7

2298 四国遍路

— 八八ヶ所巡礼の歴史と文化

森 正人 著

八八の寺院を巡るあり方を決定つけた僧侶の案内記、貧困・病氣・差別に苦しめられた巡礼者たちの記録、新聞記者による遍路道中記、バスや鉄道の登場がもたらした遍路道の変貌。本書は、近世以降の史料を掘り起こし、伝説と史実が混ざりあっている四国遍路の実態を明らかにする。千数百キロの行程を歩く巡礼者と、彼らと相対し、お接待文化を育んだ地域住民。歩くだけでは見えてこない歴史の真実を浮かび上がらせる。

760円
102298-1

2300
フランス現代思想史

— 構造主義からデリダ以後へ —

岡本裕一朗 著

2302
日本人にとって
聖なるものとは何か

— 神と自然の古代学 —

上野 誠 著

一九六〇年代初め、サルトルの実存主義に代わり、西洋近代を自己批判的に解明する構造主義が世界を席捲した。レヴィ・ストロースをはじめ、ラカン、バルト、アルチュセールの活躍。六八年の五月革命と前後するフーコー、ドゥルーズ・ガタリ、デリダによるポスト構造主義への展開。さらには九〇年代の管理社会論と脱構築の政治化へ。構造主義の成立から巨匠たち亡き後の現在までを一望する、ダイナミックな思想史の試み。

880円
102300-1

2303
殷^{いん} — 中国史最古の王朝

落合淳思 著

殷王朝は、今から三〇〇〇年以上も前に中国に実在した王朝である。酒池肉林に耽る紂王の伝説など、多くの逸話が残されているが、これらは「史記」をはじめとする後世の史書の創作である。いまだ謎多き殷王朝の実像を知るには、同時代資料である甲骨文字を読み解かねばならない。本書は、膨大な数にのぼる甲骨文字から、殷王朝の軍事や祭祀、王の系譜、支配体制と統治の手法などを再現し、解明したものである。

880円
102303-2

2304
ビスマルク

— ドイツ帝国を築いた政治外交術 —

飯田洋介 著

一九世紀ヨーロッパを代表する政治家、ビスマルクの業績は華々しい。一八七一年のドイツ帝国創建、三度にわたるドイツ統一戦争での勝利、欧州に同盟システムを構築した外交手腕、普選選挙や社会保険制度の導入……。しかし彼の評価は「英霊」から「ヒトラーの先駆者」まで揺れ動いてきた。「鉄血宰相」「誠実なる仲買人」「白色革命家」など数多の異名に彩られるドイツ帝国宰相、その等身大の姿と政治外交術の真髄に迫る。

860円
102304-9

2305
生物多様性

— 「私」から考える進化・遺伝・生態系 —

本川達雄 著

地球上には、わかつていくだけで一九〇万種、実際は数千万種もの生物がいる。その大半は人間と直接の関わりを持たない。しかし私たちは多様なこの生物を守らなければならない。それはなぜなのか。熾烈な「軍拡競争」が繰り返される熱帯雨林や、栄養のない海に繁栄するサンゴ礁。地球まるごとの生態系システムを平易に解説しながら、リンネ、ダーウイン、メンデルの足跡も辿り直す、異色の生命讃歌。

880円
102305-6

2306
聖地巡礼

— 世界遺産からアニメの舞台まで —

岡本亮輔 著

非日常的な空間である聖地……。観光地として名高い聖地には、信仰心とは無縁の人々が数多く足を運んでいる。さらに近年では、宗教と直接関係のない場も聖地と呼ばれ、関心を集めている。人は何を求めて、そこへ向かうのか？ それは、どのような意味を持つのか？ サンティアゴ巡礼や四国遍路、B級観光地、パワースポット、アニメの舞台など、多様な事例から21世紀の新たな宗教観や信仰のあり方が見えてくる。

840円
102306-3

2309
朝鮮王公族

— 帝国日本の準皇族 —

新城道彦 著

1910年8月、日本は大韓帝国を併合した。最大の懸案だった皇帝一族の処遇については、王族・公族の身分を華族より上に新設し、解決を図った。1945年8月の敗戦まで、男子は軍務に就くなど、皇族同様の義務と役割を担う。異民族ながら「準皇族」扱いされた彼らの思いは複雑であり、日本に忠誠を尽くす者、独立運動に関与する者など多様であった。本書は、帝国日本に翻弄された26人の王公族の全貌を明らかにする。山本七平賞推薦賞受賞

840円
102309-4

2310
山岳信仰

— 日本文化の根底を探る —

鈴木正崇 著

出羽三山、大峯山、英彦山、三大霊場をはじめ、富士山、死者の魂が赴く立山と恐山、御座の木曾御嶽山、鎮座定の石鎚山……。個性豊かな山々に恵まれた日本人の精神文化の根底には、山への畏敬の念が息づく。本書は山岳信仰の歴史をたどりつつ、修験道の成立と展開、登拝の民衆化と女人禁制を解説。さらに八つに八つの山岳の信仰と祭祀、神仏分離後の状況までを詳解する。長年、山岳修験研究に携わってきた著者による決定版。

880円
102310-0

2313
ニルンベルク裁判

— ナチ・ドイツはどのように裁かれたのか —

アンネンテ・ヴァインケ 著
板橋拓己 訳

ナチ・ドイツによる第2次世界大戦中の戦争犯罪を裁いたニルンベルク裁判。主要犯罪人24名を扱った国際軍事法廷、医師・親衛隊員・高級官僚ら185名を扱った12の継続裁判で構成され、終戦後、半年を経て始まった。法廷では、ホロコーストを始めナチの悪行が明らかにされ「平和に対する罪」「人道に対する罪」など新しい罪の規定が話題を呼ぶ。本書は、東京裁判のモデルとなった史上初の大規模な戦争犯罪裁判の全貌を描く。

820円
102313-1

2314
iPS細胞

— 不可能を可能にした細胞 —

黒木登志夫 著

2006年、山中伸弥は、たった4種類の遺伝子によって大人の細胞が、未分化の細胞に初期化することを発見した。それから8年余、iPS細胞は、脳や肝臓、そして、アルツハイマー病の細胞をシャーレの中に再現した。難病の治療薬開発、黄斑変性、パーキンソン病、脊髄損傷などの再生医療も現実となった。不遇の時代、山中伸弥を力づけた『がん遺伝子の発見』（中公新書）の著者が、iPS細胞の生い立ちとその応用に迫る。

900円
102314-8

2315
みなかたぐまぐす
南方熊楠

日本人の可能性の極限

唐澤太輔 著

百科事典を丸ごと暗記、二十以上の言語を解した、キューバ独立戦争参戦といった虚実さまざまな伝説に彩られ、民俗学、生物学などに幅広く業績を残した南方熊楠。「てんきやん（天狗さん）」とあだ名された少年時代、大英博物館に通い続けた海外放浪期。神社合祀反対運動にかかわり、在野の結核研究者として昭和天皇に進講した晩年まで、「日本人の可能性の極限」を歩んだ生涯をたどり、その思想を解き明かす。

880円
102315-5

2317
歴史と私

史料と歩んだ歴史家の回想

伊藤 隆 著

日本近現代史研究を牽引してきた大家が、八〇年以上にわたる自らの歩みを語る。若き日の共産党体験、歴史観をめぐる論争、伊藤博文から佐藤栄作にいたる史料収集と編纂、岸信介、後藤田正晴、竹下登などへのオラール・ヒストリー……。その秘話やエピソードは、歴史の面白さを伝えると同時に、史料を集め、次代へ引き継ぐ歴史家の責任の重さをも物語る。史料を駆使して、近現代史を切り開いた泰斗の稀有な回想録。

880円
102317-9

2318
物語 イギリスの歴史(上)

古代ブリテン島から
エリザベス1世まで

君塚直隆 著

5世紀以降、ケルト人を駆逐しアングロ・サクソン人が定住したブリテン島。11世紀、大陸のノルマン人が征服するが、常にフランス領土を求め戦争を繰り返した。その間、島内では諸侯が伸張。13世紀にはマグナ・カルタを王が認め、議会の原型が成立した。その後も百年戦争の敗北、教皇からの破門と、王の権威低下が続いた。上巻は、大陸に固執する王たちを中心に、16世紀半ばはイングリランドにエリザベス1世が君臨するまでを描く。

860円
102318-6

2319
物語 イギリスの歴史(下)

清教徒・名誉革命から
エリザベス2世まで

君塚直隆 著

17世紀、王の絶対君主政への信奉は、清教徒・名誉革命を誘発し議会の権限が増す。18世紀半ば以降の産業革命下、内閣、政党が政治の主導権を獲得。グラッドストーンに優れた政治家も現れ、19世紀、ヴィクトリア女王の時代は「世界の工場」かつ「最強国」となった。だが20世紀に入り二つの世界大戦で国家は疲弊。経済停滞は「英国病」と揶揄された。本書は、近代化の胎動から、サッチャー、ブレアらが登場する現代までを描く。

860円
102319-3

2321
道路の日本史

古代駅路から高速道路へ

武部健一 著

邪馬台国の頃には獣道だけだった日本列島も、奈良時代には幅12mの真っ直ぐな道が全国に張りめぐらされ、駅馬の制度が設けられた。中世には道路インフラは衰退したが、徳川家康は軍事優先から利便性重視に転換して整備を進める。明治以降は奥羽山脈を貫くトンネルを掘った三島通庸、名神高速建設を指揮したドルシユなど個性溢れる人物の手によって道路建設が成し遂げられる。エピソード満載で綴る道路の通史。

860円
102321-6

交通人物賞、土木学会賞受賞

2322
仕事と家族

日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか

筒井淳也 著

男性中心の労働環境のため女性が活躍しづらく、少子化が深刻な日本。仕事と家族のあり方は限界にきている。一方、「大きな政府」を代表するスウェーデンと「小さな政府」を代表するアメリカは正反対の国と思われがちだが、実は働く女性が多く、出生率も高いという点で共通している。それはなぜか、歴史的な視点と国際比較を通じて日本の現在地を示し、目指すべき社会を考える。この国で働き、家族と暮らす全ての人へ。

820円
102322-3

不動産協会賞受賞

2323
文明の誕生

メソポタミア、ローマ、そして日本へ

小林登志子 著

道路、都市などの建造物、カレンダーや貨幣、法律にはじまる制度、そして宗教や文学のような精神世界まで、わたしたちの快適な毎日は、数多くの文明的要素によって成り立っている。では、この文明はいつ、どこで誕生し、どのように受けつがれてきたのか。本書は、5000年前のメソポタミアに文明の起源をたずね、ギリシア、ローマや古代中国を経て、現代の日本にいたるまでを巨細に辿る壮大な「旅」である。

920円
102323-0

2327
カラー版

イースター島を行く

モアイの謎と未踏の聖地

野村哲也 著

南太平洋に浮かぶ孤島イースター島。そこには千体ものモアイ像が眠っている。かつては緑溢れる豊かな島だったが、「モアイ倒し戦争」や西洋人の来航によって、一万人以上いた島民は約百人にまで激減、文明は失われてしまった。しかし、いまではモアイが再建され、文化復興の動きもめざましい。本書は島内に立つすべてのモアイ像を紹介し、文明滅亡の謎に迫る。さらに島民にも知られていない、隠された聖地へ読者を誘う。

1000円
102327-8

2328
植物はすごい 七不思議篇

知ってびっくり、緑の秘密

田中 修 著

アサガオの花はなぜ夕方になると赤紫になるの？ とうしてゴーヤの実は熟すと爆発するの？ トマトのタネはなぜぬるに包まれているの？ トウモロコシの黄色い粒と白い粒の比率が3対1って本当？ イチゴの種はどこにあるの？ チューリップの花はなぜだんだん大きくなるの？ ソメイヨシノはなぜ暖かい九州よりも寒い東京で先に咲くのか？ 7つの身近な植物に秘められた「すごい」から学ぶ、生き方の工夫と知恵。

820円
102328-5

2329
ナチスの戦争 1918-1949

民族と人種の戦い
リチャード・ベッセル 著

大山 晶 訳

ナチスが主導した「民族と人種の戦い」とは何だったのか。第一次世界大戦の敗北からヒトラー独裁体制の確立、第二次世界大戦へ。ユダヤ人の絶滅を標榜しヨーロッパ全土を巻き込んだ戦争は、無差別爆撃と残虐行為を生み、最後には凄惨なホロコーストまで行き着いた。本書はナチズムの核心を人種戦争と捉え、そのイデオロギーの本質を抉り出し、「狂信的な意志」による戦争の全過程、その余波までを描き出す。

960円
102329-2

2330 チェ・ゲバラ
—旅、キューバ革命、ボリビア

伊高浩昭 著

1928年、アルゼンチンに生まれた革命家チェ・ゲバラ。医学生時代にラテンアメリカを旅し、貧富の格差や米国の支配の問題に目覚める。カストロ兄弟と共にゲリラ戦で活躍し、59年のキューバ革命政権樹立に貢献。要職を歴任するものの、思いは全ラテンアメリカでの革命推進にあった。再び戦地に赴くチェ。だが前哨戦のコンゴ、続くボリビアで過酷な現実に直面し……。彼の遺した膨大な文章と関係者への取材から実像に迫る。

880円
102330-8

2331 カラー版
廃線紀行 —もうひとつの鉄道旅

梯 久美子 著

「絶景廃線」と呼びたくなる路線がある。瀬戸大橋の見える下津井電鉄、景勝地・耶馬溪の真ん中を走る大分交通耶馬溪線などだ。他方で、ありふれた景色の中を通っているが、歩いてみると何とも楽しい路線も少なくない。鉄道をよくよく愛する著者が五年をかけて全国の廃線跡を踏破。往時の威容に思いを馳せつつ、現在の姿を写す。北は道東の国鉄根北線から南は鹿児島交通南薩線まで、精選50路線を紹介する廃線案内。

1000円
102331-5

2332 「歴史認識」とは何か
—対立の構図を超えて

大沼保昭 著 江川紹子 聞き手

日中・日韓関係を極端に悪化させる歴史認識問題。なぜ過去をめぐる認識に違いが生じるのか、一致させることはできないのか。本書では、韓国併合、満洲事変から、東京裁判、日韓基本条約と日中国交正常化、慰安婦問題に至るまで、歴史的事実が歴史認識問題に転化する経緯、背景を具体的に検証。あわせて、英仏など欧米諸国が果たしていない植民地支配責任を提起し、日本の取り組みが先駆となることを指摘する。

840円
102332-2

2333 地方消滅 創生戦略篇

増田寛也／富山和彦 著

地方消滅を避け、真の地方創生へ進むシナリオとは？ 全国896自治体の消滅可能性を指摘し政治を動かした増田氏と、GDPと雇用の7割を占めるローカル経済の可能性を明らかにした富山氏が語り合う。なぜ「選択と集中」は避けられないのか、移民を受け入れるべきか、大学が職業訓練を行うべき理由、東北地方が持つ可能性、自動運転やドローンなど新技術と地方の関係……日本を襲う危機を見つめ、解決策を探る。

740円
102333-9

2338 財務省と政治
—「最強官庁」の虚像と実像

清水真人 著

国家の財政を担い、「官庁の中の官庁」「最強官庁」と称される財務省（旧大蔵省）。55年体制下では自民党と蜜月関係を築いた。だが90年代以降、政治改革などの統治構造改革が、首相の指導力強化と大蔵省「解体」を推進。2001年には財務省へ衣替えした。小泉政権、民主党政権、第二次安倍政権と政治が変動するなか、経済停滞と少子高齢化により財政赤字の拡大は続く。20年以上の取材をもとに「最強官庁」の実態を追う。

880円
102338-4

2339 ロラン・バルト
—言語を愛し恐れつづけた批評家

石川美子 著

『恋愛のディスクール・断章』『記号の国』で知られる批評家ロラン・バルト（一九一五—八〇）。「テクスト」「エクリチュール」など彼が新たに定義し生み出した概念は、二十世紀の文学・思想シーンを次々と塗り替えた。デビュー以来、文学言語のみならず、モードから写真、日本論に至るまで華麗な批評活動を展開。晩年には「小説の準備」へと向かった。この多彩な思考の全体像を端正な文体によって浮き彫りにする。

800円
102339-1

2342 沖縄現代史
—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで

櫻澤 誠 著

太平洋戦争中、地上戦で20万人強の犠牲者を出した沖縄。敗戦後、米国統治下に置かれ、1972年に本土復帰を果たすが、広大な基地は残された。復帰後の沖縄は保革が争いながら政治を担い、「基地依存経済」の脱却を図る。だが95年の米兵少女暴行事件を契機に、2010年代には普天間基地移転、歴史認識を巡り、保革を超えた「オール沖縄」による要求が国に行われる。本書は、政治・経済・文化と、多面的に戦後沖縄の軌跡を描く。

920円
102342-1

2345 京都の神社と祭り
—千年都市における歴史と空間

本多健一 著

京都の歴史は、千二百年を超える都市のなかで育まれた。神々への信仰と祭礼文化の歴史でもある。本書は、市内約三百の神社から、京都を代表する下鴨・上賀茂神社、松尾大社、伏見稲荷大社、八坂神社、北野天満宮、上・下御霊神社、今宮神社、平安神宮とその祭礼などを見極め、祭神はどのような性格をもち、なぜ祀られたのか。どのような氏子たちが支えてきたか。祭礼に込められた意味とは何か。秘められた歴史と特徴を解説する。

880円
102345-2

2347 代議制民主主義
—「民意」と「政治家」を問ひ直す

待鳥聡史 著

有権者が選挙を通じて政治家を選び、政治家が政策決定を行う。これが代議制民主主義の仕組みである。議会の発展、大統領制と議院内閣制の確立、選挙権の拡大を経て定着したこのシステムは、第二次世界大戦後に黄金期を迎えた。しかし、経済成長の鈍化やグローバル化の影響を受け、今や世界各国で機能不全に陥っている。代議制民主主義はもはや過去の政治制度なのか。民意と政治家の緊張関係から、その本質を問ひ直す。

840円
102347-6

2349 ヒトラーに抵抗した人々
—反ナチ市民の勇氣とは何か

對馬達雄 著

「いつでも人には親切にしない。助けたり与えたりする必要のある人たちにそうすることが、人生でいっばい勉強することです。だんだん自分が強くなり、楽しいこともどんどん増えてきて、いっばい勉強することになると、それだけ人を助けることができるようになるのです。これから頑張るってね、さようなら。お父さんより」（反ナチ市民グループ「クライザウ・サークル」のメンバーが処刑前に十一歳の娘に宛てた手紙）

880円
102349-0

2351 中曽根康弘

「大統領の首相」の軌跡

服部龍二 著

自主憲法制定を訴えるタカ派、主張を変える「風見鶏」、首相就任時も、田中角栄の影響下「田中曾根内閣」と批判された中曽根康弘。だが「戦後政治の総決算」を掲げた中曽根は「大統領の首相」の手法によって、国鉄などの民営化を推進、中韓と蜜月関係を築き、レーガン米大統領やサミットを通じ、日本の国際的な地位を大きく上昇させる。本書は中曽根の生涯を追う、日本が敗戦から1980年代、戦後の頂点へと向かう軌跡を追う。

900円
102351-3

2353 蘇我氏——古代豪族の興亡

倉本一宏 著

蝦夷・入鹿父子は六四五年の乙巳の変で討たれたが、蘇我氏は滅亡せず、以後も国家権力の中枢に位置した。―稲目を始祖とした馬子、蝦夷、入鹿の四代はいかに頭角を現し、大臣として国制改革を推し進めたのか。大化改新後、氏上となった倉麻呂系は千申の乱へとつづく激変の時代をどう生き延びたのか。六世紀初頭の成立から天皇家を凌駕する権勢を誇った時代、さらに平安末期までを描き、旧来の蘇我氏イメージを一新する。

800円
102353-7

2358 日本鉄道史 大正・昭和戦前篇

―日露戦争後から敗戦まで

老川慶喜 著

日露戦争後、帝国日本の鉄道は第一次世界大戦期の重工業化と国際化によって黄金時代を迎えた。後藤新平を総裁とする満鉄が設立され、シベリア経路は小林「東京発パリ行き」の欧亜連絡列車の運行が始まる。さらに関東大震災以後の都市化の波は小井「三反急」五島慶太の東京などの私鉄を発展させた。大正天皇の大喪輸送とともに昭和の幕が開き、大恐慌を経て戦時動員へ。一九〇七年から四五年八月の敗戦に至る怒濤の四〇年を描く。

820円
102358-2

2359 竹島——もうひとつの日韓関係史

池内 敏 著

日本と韓国などが領有権をめぐって対立する竹島。それそれが正当性を主張するものの議論は噛み合わず、韓国による占拠が続いている。本書は「六世紀から説き起こし、江戸幕府の領有権放棄 一九〇五年の日本領編入、サンフランシスコ平和条約での領土画定 李承晩ラインの設定を経て現在までの竹島をめぐる歴史をたどり、両国の主張を逐一検証。誰が分析しても同一の結論に至らざるをえない、歴史学の到達点を示す。

880円
102359-9

2360 キリスト教と戦争

―「愛と平和」を説きつつ戦う論理

石川明人 著

世界最大の宗教 キリスト教の信者は、なぜ「愛と平和」を祈りつつ「戦争」ができるのか？殺人や暴力は禁止されているのではなかったか？ 本書では、聖書の記述や、アウグスティヌス、ルターなど著名な神学者たちの言葉を紹介しながら、キリスト教徒がどのように武力行使を正当化するのかについて見ていく。平和を祈る宗教と戦争との奇妙な関係は、人間が普遍的に抱える痛切な矛盾を私たちに突きつけるであろう。

820円
102360-5

2361 トウガラシの世界史

―辛くて熱い「食卓革命」

山本紀夫 著

比類ない辛さが魅力のトウガラシ。原産地の中南米からヨーロッパに伝わった当初は「食べると死ぬ」とまで言われた。だが、わずか五百年のうちに全世界の人々を魅了するに至った。ピーマンやパプリカもトウガラシから生まれた。アンデスの多様な野生トウガラシ、インドのカレー、四川の豆板醤、朝鮮半島のキムチ、日本の京野菜……。各地を訪ね、世界中に「食卓革命」を起こした香辛料の伝播の歴史と食文化を紹介する。

860円
102361-2

2362 六国史

―日本書紀に始まる古代の「正史」

遠藤慶太 著

奈良時代から平安時代にかけて編纂された歴史書「六国史」。七二〇年に完成した日本書紀から、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、日本三代実録までを指す。天地の始まりから平安中期の八八七年八月まで、国家の動向を連続して記録した「正史」であり、古代史の根本史料である。本書は、各書の実情や魅力を紹介。また、その後の紛失、改竄、読み継がれ方など、中世から現代に至る歴史も描く。 古代歴史文化賞優秀作品賞受賞

820円
102362-9

2363 外国語を学ぶための言語学の考え方

黒田龍之助 著

誰もが近道や楽な方法を探そうとするが、結局は地道な努力しかないと思ひ知られる外国語学習。だが、それでもコツは存在する。本書は、そのヒントとなる言語学の基礎知識を紹介。「語学には才能が必要」「現地に留学しなければ上達しない」「検定試験の点数が大事」「日本人は巻き舌が下手」といった間違った対話は、縁起や如来などの仏教用語を解剖しながら、坐禅への誤解を暴き立て……。読むと坐りたくなる、坐禅のススメ。

800円
102363-6

2365 禅の教室

―坐禅でつかむ仏教の真髄

藤田一照／伊藤比呂美 著

悟りとは何か。禅には「不立文字、教外別伝」、つまり、釈迦の教えは言葉では伝えられないという考え方があり。では、アメリカで禅を長年にわたって教えてきた禅僧と、仏教に目覚めた詩人が「禅」について語り合うと、どのような言葉が飛び出すのか。「そもそも仏教って何ですか？」から始まった対話は、縁起や如来などの仏教用語を解剖しながら、坐禅への誤解を暴き立て……。読むと坐りたくなる、坐禅のススメ。

860円
102365-0

2367 食の人類史

―ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧

佐藤洋一郎 著

人は食べなければ生きていくことはできない。人類の歴史は、糟粕とタンパク質のセツトをどうやって確保するかという闘いだった。今では、西洋では「小麦とミルク」、東洋では「コメと魚」のセツトとして摂取されることが多いが、山菜を多食し、採集文化が色濃く残る日本のように、食の営みは多様である。本書は、ユーラシア全土で繰り広げられてきた、さまざまな生業の変遷と集団間の駆け引きを巨細に解説する。

920円
102367-4

2368 第一次世界大戦史

— 諷刺画とともに見る指導者たち

飯倉 章 著

一九一四年に勃発した戦争は、当初の予測を裏切り、四年以上に及ぶ最初の世界大戦となった。その渦中で、皇帝や政治家、軍人などの指導者は、どのような選択と行動をし、それは戦況にいかなる影響をもたらしたのか。本書は重要人物や戦場を描いた一〇〇点近くの諷刺画を織り交ぜ、当時を再現しながら、戦いの軌跡をたどる。複雑な背景を持ち、八五〇万人以上の戦死者が出た大戦を多面的に読み解き、実態を示す。

840円
102368-1

2369 天使とは何か

— キューピッド、キリスト、悪魔

岡田温司 著

エンジェルとキューピッドは何が違うのか。キリストがかった天使とみなされていたのはなぜか。堕天使はいかにして悪魔となったか。「天使」と聞いて、イメージが浮かばない日本人はいないだろう。しかし、天使をめぐる数々の謎に直面したとき、私たちは想像以上に複雑な陰影を彼らが見ていることに気づくはずだ。天使とは一体、何者なのか——。キリスト教美術をゆたかに彩る彼らの物語を追いかけてみよう。

780円
102369-8

2371 カラー版 古代飛鳥を歩く

千田 稔 著

六〜七世紀の飛鳥時代は危機と動乱の時代であった。仏教伝来、蘇我氏の台頭と聖徳太子の理想、吉野天皇の大公共事、大化改新、壬申の乱、そして平城京遷都……。飛鳥を散策すれば、当時の人々の息吹を感じることができる。現代に生きる私たちの「近き」に驚くことだろう。蘇我氏や息長氏などの豪族の足跡、道教や神まつりの痕跡、都城、寺院や古墳などを訪ね、76の章で日本の原風景である古代飛鳥へ読者をいざなう。

1000円
102371-1

2373 研究不正

— 科学者の捏造^{ねぞう}、改竄^{かいざん}、盗用

黒木登志夫 著

科学のすぐれた成果を照らす光は、時として「研究不正」という暗い影を生み落とす。研究費ほしさに、名誉欲にとりつかれ、短期的な成果を求める社会の圧力に屈し……科学者たちが不正に手を染めた背景には、様々なドラマが隠されている。研究不正はなぜ起こり、彼らはいかなる結果を迎えたか。本書は欧米や日本、中韓などを揺るがした不正事例を豊富にとりあげながら、科学のあるべき未来を具体的に提言する。

880円
102373-5

2375 科学という考え方

— アインシュタインの宇宙

酒井邦嘉 著

科学とは、自然法則の発見を基礎とする考え方である。ケプラーが天文観測のデータから惑星の運動を解き明かし、ガリレオが力学の端緒を開いて400年。以来、科学の発展を担ってきたニュートン、アインシュタインなどの物理学者たちの苦悩やひらめきを手がかりに、科学的思考とは何かを探る。彼らの足跡、科学法則を支える意味を掘り下げ、人間がいかにして科学という考え方を築き、受け継いできたかを明らかにしていく。

920円
102375-9

2376 江戸の災害史

— 徳川日本の経験に学ぶ

倉地克直 著

江戸時代は大災害が集中した、日本史上でも稀な時期である。江戸を焼き尽くした明暦の大火、富士山の噴火、日本史上最大級の宝永地震、度重なる飢饉などの記憶は今も語り継がれている。一方、幕府や藩、地域社会、家の各レベルで人々が防災に取り組んだのも江戸時代に入ってからだった。いのちを守るシステムはいかに形成され、いかに機能しなくなったのか。災害と防災から見えてくる新たな江戸三百年史の試み。

860円
102376-6

2378 保守主義とは何か

— 反フランス革命から現代日本まで

宇野重規 著

21世紀以降、保守主義者を自称する人が増えている。フランス革命による急激な進歩主義への違和感から、エドモンド・バークに端を発した保守主義は、今では新自由主義、伝統主義、復古主義など多くのイズムを包み、都合よく使われている感がある。本書は、18世紀から現代日本に至るまでの軌跡を辿り、思想的・歴史的に保守主義を明らかにする。さらには、驕りや迷走が見られる今、再定義を行い、そのあり方を問い直す。

800円
102378-0

2379 元老——近代日本の真の指導者たち

伊藤之雄 著

明治憲法成立後の1890年代以降、天皇の特別な補佐として、首相選出を始め、内閣の存廃、戦争、条約改正など重要国務を取り仕切った元老。近代日本は、伊藤博文、山県有朋、西園寺公望ら元老8人の指導下にあった。非公的な組織のため、当初は政治の黒幕として批判されたが、昭和初期の軍部台頭下では未成熟な立憲国家を補う存在として期待が高まる。本書は、半世紀にわたる権力中枢にいた元老から描く近代日本の軌跡である。

880円
102379-7

2382 シェイクスピア

— 人生劇場の達人

河合祥一郎 著

ウィリアム・シェイクスピア（1564—1616）は、世界でもっとも知られた文学者だろう。「マクベス」や「ハムレット」などの名作は読み継がれ、世界各国で上演され続けている。本書は、彼が生きた動乱の時代を踏まえ、その人生や作風、そして作品の奥底に流れている思想を読み解く。「万の心を持つ」と称された彼の作品は、喜怒哀楽を通して人間を映し出す。そこからは今に通じる人生哲学も汲み取れるはずだ。

820円
102382-7

2384 ビッグデータと人工知能

— 可能性と罫を見極める

西垣 通 著

ビッグデータ時代の到来、第三次AI（人工知能）ブームとディープラーニングの登場、さらに進化したAIが2045年に人間の知性を凌駕するといったシンギュラリティ予測……。人間とAIはこれからどこへ向かっていくのか。本書は基礎情報系にもとづいて現在の動向と論点を明快に整理し分析。技術万能主義に警鐘を鳴らし、知識増幅と集合知を駆使することによって拓かれる未来の可能性を提示する。

780円
102384-1

2386 悪意の心理学
——悪口、嘘、ヘイト・スピーチ

岡本真一郎 著

嘘、皮肉、罵倒、偏見……。面と向かっている会話であれ、ネットでのやりとりであれ、言葉によるコミュニケーションはしばしば暴走し、相手に対して「悪意」の牙を剥く。これらはいじめや差別、クレーマーやセクハラ、政治家の問題発言を生む。一方で、意図していないのに加害者になってしまうこともある。悪意はなぜ生まれ、どう表現されるのか。どうすれば、悪意に立ち向かえるのか。社会心理学・言語心理学の観点から考察。

900円
102386-5

2388 人口と日本経済
——長寿、イノベーション、経済成長

吉川 洋 著

人口減少が進み、働き手が減っていく日本。財政赤字は拡大の一途をたどり、地方は「消滅」の危機にある。もはや衰退は不可避ではないか……。そんな思い込みに対し、長く人口問題と格闘してきた経済学は「否」と答える。経済成長の鍵を握るのはイノベーションであり、日本が世界有数の長寿国であるからこそチャンスなのだ。日本に蔓延する「人口減少パessimism（悲観論）」を排し、日本経済の本當の課題に迫る。

760円
102388-9

2389 通貨の日本史
——無文銀錢、富本銭から電子マネーまで

高木久史 著

都の建設のため国産銭が作られた古代、中国からの輸入銭に頼った中世、石見銀山の「シルバラッシュ」が世界経済をも動かした戦国時代、財政難に苦しめられた江戸の改革者たち、帝国日本の通貨政策……。無文銀銭が登場した7世紀から現在まで、通貨をめぐる歴史はエピソードに事欠かない。通貨政策に大きな影響を与えてきた庶民の事情にも着目しながら、その歩みをたどる。今も昔も私たちを悩ませる、お金をめぐる通史。

840円
102389-6

2391 競馬の世界史
——サラブレッド誕生から21世紀の凱旋門賞まで

本村凌二 著

中東生まれのアラブ馬を始祖とし、イギリスで誕生したサラブレッド。この純血種は名馬エクリプスの登場で伝説化され、欧米から世界中に広まった。ダービーなど若駒が競い合うクラシックレースが各国で始まって人気を博し、二十世紀以降、凱旋門賞をはじめとするビッグレースが創設された。観衆の胸を躍らせた名勝負の舞台裏では、人と馬のいかなる営みがあったのか。優勝たちが演じた筋骨きのないドラマを世界史としてたどる。

840円
102391-9

2392 中国の論理
——歴史から解き明かす

岡本隆司 著

同じ「漢字・儒教文化圏」に属すイメージが強いにもかかわらず、私たちは中国や中国人を理解していると考える。だが「反日」なのに日本で「爆買い」、「二つの中国」「社会主義市場経済」など、中国では矛盾がそのまま現実となる。それはなぜか……。本書は、歴史をひもときつつ、目の前の現象を追うだけでは見えない中国人の思考回路をさぐり、切っても切れない隣人となつてあつたためのヒントを示す。

820円
102392-6

2393 シベリア出兵
——近代日本の忘れられた七年戦争

麻田雅文 著

1917年11月に勃発したロシア革命。共産主義勢力の拡大に対して翌年8月、反革命軍救出を名目に、日本は極東ロシアへ派兵。シベリア中部のバイカル湖畔まで占領する。だがロシア人の傀儡政権は機能せず、バルチザンや赤軍に敗退を重ねる。日本人虐殺事件の代償を求め、北サハリンを占領するなど、単独で出兵を続行するが……。本書は、増派と撤兵に揺れる内政、酷寒の地で7年間にわたる戦争の全貌を描く。

860円
102393-3

2394 難民問題
——イスラム圏の動揺、EUの苦悩、日本の課題

墓田 桂 著

シリアなどイスラム圏では紛争が続く、大量の難民が発生している。2015年9月、溺死した幼児の遺体写真がきっかけに、ドイツを中心に難民受け入れの輪が広がった。だが同年11月のパリ同時多発テロ事件をはじめ、欧州で難民・移民の関与した事件が続発。16年6月、EU離脱を決めたイギリス国民投票にも影響した。苦しむ難民を見送ってよいのか、だがこのままでは社会が壊れかねない。欧州の苦悩から日本は何を学ぶか。

860円
102394-0

2395 ショパン・コンクール
——最高峰の舞台を読み解く

青柳いづみこ 著

ポーランドのワルシャワで五年に一度開催されるショパン・コンクール。一九二七年の創設以来、紆余曲折を経ながらも多くのスターを生み出してきた。ピアニストをめざす若者の憧れの舞台であり、その結果は人生を大きく左右する。本書では、その歴史を俯瞰しつつ、二〇一五年大会の模様を現地からレポート。客観的な審査基準がない芸術をどう評価するか、日本人優勝者は現れるのか。コンクールを通して音楽界の未来を占う。

880円
102395-7

2396 周——理想化された古代王朝

佐藤信弥 著

紀元前11世紀から前256年まで続いた古代中国の王朝である周。太公望や周公旦などの建国の功臣、孔子や老子といった諸子百家、齊の桓公から春秋の五霸などが名高い。また、封建制や共和制など、周に由来するといわれる政治システムは多く、孔子ら儒家によって理想化されて伝えられてきた。では、その実態はいかなるものだったのか。近年、陸續と発掘される金文や甲骨文などの当時の史料から、王朝の実像を再現する。

920円
102396-4

2398 地球の歴史(上)
——水惑星の誕生

鎌田浩毅 著

地球は太陽系の数ある惑星のなかで唯一環境が安定した「水惑星」である。生命が生まれ、進化を遂げるこができたのはなぜか。上巻では一三八億年前の宇宙誕生「ビッグバン」から説き起こし、銀河系や太陽系、そして地球が形成される過程を追う。灼熱のマグマの海だった地球は、マグマの冷却や大陸の分裂・合体を繰り返しながら、厚い大気の層と穏やかな海を持つに至った。全三巻でたどる地球四六億年の旅がここに始まる。

880円
102398-8

2399 地球の歴史(中)
— 生命の登場

鎌田浩毅 著

厚い大気の層と穏やかな海を持つ地球。中巻では生命の誕生という地球史最大の謎に迫る。海で生まれた小さな生命は、光合成、呼吸、多細胞化、有性生殖といったさまざまな仕組みを獲得し、ついに重力や乾燥した大気をも克服して陸上に進出する。一方、磁場の形成や地球全体が凍結した氷河時代、オゾン層の形成など、地球環境も変化を重ねてきた。「生命の惑星」地球と生物が共進化するダイナミズムを追う。

840円
102399-5

2400 地球の歴史(下)
— 人類の台頭

鎌田浩毅 著

超大陸の分裂と超巨大噴火によって九五%もの生物が絶滅した地球。生き残った生物が進化を遂げて中生代は恐竜の時代となるが、これまで地球が経験しなかったほどの隕石衝突によって再びほとんどの生物が絶滅する。六六〇万年前から始まる新生代は哺乳類の時代であり、やがて人類が誕生する。激変する地球環境のなかで、折り返し地点にいたる「文明の惑星」はどうなるのか。全三巻でたどる地球四六億年の旅、完結篇。

880円
102400-8

2401 応仁の乱
— 戦国時代を生んだ大乱

呉座勇一 著

室町後期、諸大名が東西両軍に分かれ、京都市街を主戦場として戦った応仁の乱(一四六七〜七七)。細川勝元、山名宗全という時の実力者の対立に、将軍後継問題や管領家畠山・斯波両氏の家督争いが絡んで起きたとされる。戦国乱世の序曲とも評されるが、高い知名度とは対照的に、実態は十分知られていない。いかなる原因で勃発し、どう終結に至ったか。なぜあれほど長期化したのか——。日本史上屈指の大乱を読み解く意欲作。

900円
102401-5

2402 現代日本外交史
— 冷戦後の模索、首相たちの決断

宮城大蔵 著

米ソ冷戦が終わり、日本は経済大国として平和を謳歌すると思われた。だが、1991年の湾岸戦争で状況は一変する。非自民の細川政権を皮切りに連立政権の時代に入った日本を、北朝鮮核危機、テロとの戦い、中国台頭による緊張の高まりといった安全保障問題が揺さぶった。さらに経済危機、歴史認識、沖縄米軍基地、北方領土など、冷戦後の25年は危機の連続だった。16政権の苦闘をたどり、日本外交の課題に迫る。

880円
102402-2

2404 ラテンアメリカ文学入門
— ボルヘス、ガルシア・マルケスから新世代の旗手まで

寺尾隆吉 著

一九六〇〜七〇年代に旋風を巻き起こし、世界に強い衝撃をもたらしたラテンアメリカ文学。その潮流はどのように生まれ、いかなる軌跡をたどったのか。ボルヘス、ガルシア・マルケス、バルガス・ジョサ、ボラーニョら作家の活動と作品はもとより、背景となる歴史、世相、出版社の販売戦略なども描き出す。世界的ブーム後の新世代の台頭にも迫った本書は、広大で肥沃な新しい世界へ読者を誘うだろう。ブックガイドにも最適。

840円
102404-6

2405 欧州複合危機
— 苦悶するEU、揺れる世界

遠藤 乾 著

一九九三年に誕生し、単一通貨ユーロの導入などヨーロッパ統合への壮大な試行錯誤を続けてきたEU(欧州連合)。だが、たび重なるユーロ危機、大量の難民流入、統廃するテロ事件、イギリスの離脱決定と、厳しい試練が続いている。なぜこのような危機に陥ったのか、EUは本当に崩壊するのか、その引き金は何か、日本や世界への影響は……。欧州が直面する複合的な危機の本質を解き明かし、世界の今後を占う。

860円
102405-3

2407 英単語の世界
— 多義語と意味変化から見る

寺澤 盾 著

英語は世界中の言語から多くの語彙を吸収し、既存の英単語も新しい意味を獲得してきた。「Long(長靴)」に「コンピュータの起動」の意味が生じ、固定して動かない状態を指した「frozen(凍結)」を意味するようになるなど、一見理解しがたい変化もある。しかし、こうした変化は、ランダムにおこったのではなく、何らかの連想関係が存在するのだ。英単語の多様な意味をつなぐものとは何か。その秘密に迫る。

780円
102407-7

2408 醤油・味噌・酢はすごい
— 三大発酵調味料と日本人

小泉武夫 著

料理の素材を引き立て、味付けの決め手となる調味料。古くから用いられてきた発酵調味料の醤油・味噌・酢は、日本の食卓に欠かせないばかりか、海外での需要も年々高まっている。本書は、発酵学の第一人者がこれら三大調味料の製造工程や成分をわかりやすく解説。我が国の食文化に根ざした歴史や魅力を述べる。さらには、近年の科学的知見をふまえ、血圧上昇や肥満の抑制、発ガン予防などの驚くべき効能も紹介する。

800円
102408-4

2409 贖罪のヨーロッパ
— 中世修道院の祈りと書物

佐藤彰一 著

中世初期、アイルランドの聖コロンバヌスによって、自らの心の内に罪を自覚し、意識的にえぐり出す思想が誕生する。この「贖罪」思想は社会に大きな影響を与え、修道院の生活を厳しく規定していく。その絶え間ない祈りと労働からは、華麗な写本も生み出された。本書は、ベネディクト戒律からカロリング・ルネサンスを経てシスター派の誕生に至るまで、修道制、修道院と王侯貴族との関係、経済、芸術等から読み解く通史である。

920円
102409-1

2410 ポピュリズムとは何か
— 民主主義の敵か、改革の希望か

水島治郎 著

イギリスのEU離脱、反イスラムなど排外主義の広がり、トランプ米大統領誕生……世界で猛威を振るポピュリズム。「大衆迎合主義」とも訳され、民主主義の脅威と見られがちだが、ラテンアメリカではエリート支配から人民を解放する原動力となり、ヨーロッパでは既成政党に改革を促す効果も指摘される。一方的に断罪すれば済むものではない。西欧から南北アメリカ、日本まで席卷する現状を分析し、その本質に迫る。

820円
102410-7

2411 シベリア抑留
——スターリン独裁下、
「収容所群島」の実像

富田 武著

2412 俳句と暮らす

小川 軽舟著

2415 トルコ現代史

今井 宏平著

2416 浄土真宗とは何か
——親鸞の教えとその系譜

小山 聡子著

2418 沖縄問題
——リアリズムの視点から

高良 倉吉編著

2419 ウニはすごい
——バツタもすごい
——デザイン生物学

本川 達雄著

2420 フイリピン
——急成長する若き「大国」

井出 穰治著

2421 織田信長の家臣団
——派閥と人間関係

和田 裕弘著

2424 帝国大学
——近代日本のエリート育成装置

天野 郁夫著

2428 自民党——「二強」の実像

中北 浩爾著

第2次世界大戦の結果、ドイツや日本など400万人以上の将兵、数十万人の民間人が、ソ連領内や北朝鮮などのソ連管理地域に抑留され、「賠償」を名目に労働を強制された。いわゆるシベリア抑留である。これはスターリン独裁下、主に政治犯を扱った矯正労働収容所がモデルの非人道的システムであり多くの悲劇を生む。本書はその起源から、ドイツ軍捕虜、日本人が被った10年に及ぶ抑留の実態を詳述、その全貌を描く。アジア・太平洋賞特別賞受賞

花鳥風月を詠む優雅な趣味の世界——これが俳句のイメージだろう。だが、日々の小さな発見を折に触れ書き留められるところにこそ、俳句本来の魅力がある。本書では、俳人にしして単身赴任中のサラリーマンでもある著者が、「飯を作る」「会社で働く」「妻に会う」「病気で死ぬ」などさまざまな場面を切り取りつつ、俳句とともに暮らす生活を提案。平凡な日常をかけがえのない記憶として残すための俳句入門。

1923年に建国したトルコ共和国。革命を主導し、建国の父となったムスタファ・ケマルは、共和主義・民族主義・人民主義・国家資本主義・世俗主義・革命主義という6原則を掲げ国家運営の舵を取った。それから約1世紀、数度のクーデタ、オザル首相の政治改革を経たトルコでは、エルドアンが政敵を排除しながら躍進を続けている。ケマルが掲げた6原則を通して、トルコの百年の足跡を振り返る。

日本最大の仏教宗派、浄土真宗。開祖・親鸞は、絶対他力の教え、悪人正機説など、思想の革新性で知られている。本書では、さらに平安時代の浄土信仰や、密教呪術とのつながりに目を向け、親鸞の教えと、それがどのように広まったのかを、豊富な史料とエピソードに基づき描きだす。師・法然から、親鸞、その子孫、室町時代に教団を確立した蓮如、そして東西分裂後まで、浄土真宗の思想と歴史を一望する。

米軍海兵隊の普天間飛行場の移設をめぐる国と沖縄県の対立は根深い。保守と革新の単純化した構図でとらえられることの多い沖縄問題をどう考えればよいのか。本書では琉球処分、沖縄戦から米国統治、そして日本復帰という近代以降の歴史を踏まえ、特に沖縄県の行政に注目し、経済振興と米軍基地問題という二大課題への取り組みを追う。理想と現実のはざまを苦闘しつつも、リアリズムに徹する沖縄の論理を示す。

ハチは、硬軟自在の「クチャクラ」という素材をバネにして、一秒間に数百回も羽ばたくことができる。アサリは天敵から攻撃を受けると、通常の筋肉より25倍も強い力を何時間も出し続けられる「キヤッチ筋」を使って殻を閉ざす——。いきものの体のつくりは、かたちも大きさも千差万別。バッタの跳躍、クラゲの毒針、ウシの反芻など、進化の過程で姿を変え、武器を身につけたいきものたちの、巧みな生存戦略に迫る。

かつて「アジアの病人」と呼ばれたフィリピン。近年、サービス業主導で急成長し、経済規模は10年強で3倍となった。人口は1億人を突破し、国民の平均年齢は25歳。「アジアの希望の星」との誉さえ聞かれる。一方、貧富の格差はなお深刻で、インフラも不十分。ドゥテルテ大統領の暴言や強権的手法は世界から危惧されている。経済成長著しい島国の魅力と課題に、IMFでフィリピン担当を務めたエコノミストが迫る。

織田家中で最古参の重鎮・佐久間信盛は、本願寺攻めでの無為無業を理由に信長から突如追放された。一見理不尽な「リストラ」だが、婚姻や養子縁組による盤石の人脈を築けなかった結果とも言える。本書では、一万を越す大軍勢を任された柴田勝家・羽柴秀吉・滝川一益・明智光秀ら軍団長と、配下の武将たちの関係を、地縁・血縁などから詳細に検証。これまで知られなかった「派閥」の構造に迫り、各軍団の特性を明らかにする。

今なお大きな存在感を持つ旧七帝大。明治維新後、西欧の技術を学ぶため、一八八六年の帝国大学令により設立が始まった。本書では、各地域の事情に応じて設立・拡充される様子、帝大生の学生生活や就職先、教授たちの研究と組織の体制、予科教育の実情、太平洋戦争へ向かう中での変容などを豊富なデータに基づき活写。建学から戦後、国立総合大学に生まれ変わるまでの七〇年間の追ひ、エリート七大学の全貌を描く。

自民党は結党以来38年間にわたり政権を担い、2度「下野」したが、2012年に政権に復帰。一強状態にある。その間、自民党は大きな変貌を遂げた。本書は、関係者へのインタビューや数量のデータなどを駆使し、派閥、総裁選挙、ボス配分、政策決定プロセス、国政選挙、友好団体、地方組織、個人後援会、理念といった多様な視角から、包括的に分析。政権復帰後の自民党の特異な強さと脆さを徹底的に明らかにする。

860円
102411-4

780円
102412-1

900円
102415-2

860円
102416-9

820円
102418-3

840円
102419-0

800円
102420-6

900円
102421-3

860円
102424-4

880円
102428-2

2446 人口減少時代の土地問題

「所有者不明化」と
相続・空き家、制度のゆくえ

吉原祥子 著

日本の私有地の約20%で、所有者がわからない。持ち主の居所や生死が判明しない土地の「所有者不明化」。この問題が農村から都市に広がっている。空き家、耕作放棄地問題の本質ではある。人口増前提だった日本の土地制度の矛盾の露呈だ。過疎化、面倒な手続き、地価の下落による相続放棄、国・自治体の受け取り拒否などで急増している。本書はその実情から、相続・登記など問題の根源、行政の解決断念の実態までを描く。

不動産協会賞受賞

760円
102446-6

2447 競争社会の歩き方

「自分の「強み」を見つけるには

大竹文雄 著

協力を否定し、利己的で、やられたらやり返す。成績に順位をつけず、競争より協力を重視した教育を受けた子どもは、そうした価値観をもつという。それはなぜか。競争というと、日本では否定的にとられがちだが、自分の強みを見つけ、社会を活性化させる機会でもある。チケット転売問題から、政府が取り組む女性活躍推進 社会保障給付の問題まで、競争社会を生き抜くための大きなヒントを与える。

820円
102447-3

2450 現代日本の地政学

13のリスクと地経学の時代

日本再建イニシアティブ 著

国家の行動を地理環境と結びつけて考える「地政学」が復活している。米国主導の秩序と日米同盟に守られていた日本だが、中国の軍拡による脅威は深刻だ。さらに経済力と地政学的利益の実現を目指す中国の手法は「地経学」時代の到来を示す。北朝鮮の核やロシアの動向のほか、エネルギー、サイバー戦争、気候変動など地球規模のリスクの影響も大きい。トランプ米政権のもと、日本がとるべき戦略を俊英13人が描く。

900円
102450-3

2451 トラクターの世界史

人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち

藤原辰史 著

19世紀末にアメリカで発明されたトラクター。直接土を耕す苦役から人類を解放し、作物の大量生産を実現。近代文明のシンボルとしてアメリカは民間主導、ソ連、ナチス・ドイツ、中国は国家主導により、世界中に普及する。だが農民や宗教界の拒絶、化学肥料の大量使用、土壌の圧縮、多額のローンなど新たな問題、軋轢も生む。20世紀以降この機械が農村・社会・国家に何をたらしたか、日本での特異な発展にも触れて描く意欲作。

860円
102451-0

2452 齋宮

伊勢斎王たちの生きた古代史

榎村寛之 著

天皇の代替わりごとに占いで選ばれ、伊勢神宮に仕える未婚の皇女——それが斎王であり、その住まいが齋宮である。飛鳥時代から鎌倉時代まで六六〇年にわたって続いた齋宮を、あらゆる角度から紹介し、斎王一人一人の素顔に迫る。「伊勢物語」のモデルとなった斎王、皇后となり怨霊となった斎王、悲恋に泣いた斎王……彼女たちは都を離れた伊勢で何を折り、何を思っただけで人生を送ったのか。古代史の新たな姿が浮かびあがる。

920円
102452-7

2453 イスラームの歴史

1400年の軌跡
カレン・アームストロング 著

小林朋則 訳

一六億人にもなるイスラーム教徒。だが、行動原理は外からは理解しづらく、欧米や日本からの偏見は根深い。本書は、世界の宗教学者がイスラーム一四〇〇年の歴史を概観。誕生から近代化、世俗化との葛藤までを宗教運動や思想的背景とともに解説する。十字軍以降、西洋は歪んだイスラーム像をつくり文明の敵と見なしてきたと指摘し、比較宗教の視点と事実の掘り起こしから、理解の修正を迫る。監修・池田美佐子。

900円
102453-4

2454 人口減少と社会保障

孤立と縮小を乗り越える

山崎史郎 著

国民皆年金・皆保険と社会保障方式を特徴とする日本の社会保障。雇用の安定と人口増加のもと発展してきたが、1990年代以降の経済低迷により、家族と雇用のあり方は激変。社会的孤立などの問題が浮上した。加えて、人口減少が社会保障の土台を揺るがしている。「ミスター介護保険」と呼ばれ、地方創生総括官も務めた著者が現状の問題点を指摘し、孤立を防ぐ方法、高齢者偏重から全世代型への転換など新しい方策を示す。

880円
102454-1

2455 日本史の内幕

戦国女性の素顔から
幕末・近代の謎まで

磯田道史 著

西郷隆盛の性格は、書状からみえる。豊臣秀頼の父親は本当に秀吉なのか。著者が原本を発見した龍馬の手紙の中身とは。司馬遼太郎と伝説の儒学者には奇縁があった——日本史にはたくさん謎が潜んでいる。著者は全国各地で古文書を発見・解説し、真相へと分け入ってゆく。歴史の「本当の姿」は、古文書の中からしかみえてこない。小説や教科書ではわからない、日本史の面白さ、魅力がここにある！

840円
102455-8

2456 物語 フィンランドの歴史

北欧先進国「バルト海の乙女」の
800年

石野裕子 著

古来スウェーデン王国下にあったフィンランド。19世紀にロシア帝国下、「大公国」となり広範囲な自治を獲得。ロシア革命後、独立するが内戦で混乱する。第2次世界大戦では、ソ連に侵略され領土割譲。その後ナチ・ドイツに接近し、近親民族の「解放」を唱えソ連に侵攻するが敗退。戦後は巨大な隣国を意識した中立政策を採りつつ、教育、福祉、デザイン、IT産業などで特異な先進国となった。本書は、「森と湖の国」の苦闘と成功を描く。

880円
102456-5

2457 光明皇后

平城京にかけた夢と祈り

瀧浪貞子 著

大宝元年（七〇一）、藤原不比等の子として生まれ、同い年の聖武天皇と同じ邸宅で育った光明子。やがて皇后となり、天武・文武・聖武と続く皇統の維持が最大の使命となる。だが、長屋王の変、相次ぐ遷都、身近な人々の死など、動乱の荒波は彼女にひとときの安らぎも与えることはなかった。「稀代の女傑」か、慈悲深い篤信の女性か。毀誉褒貶半ばする光明皇后の心奥まで光を当て、天平のヒロインの実像にダイナミックに迫る。

880円
102457-2

2459 聖書、コーラン、仏典
— 原典から宗教の本質をさぐる

中村圭志 著

宗教にはそれぞれ教典がある。開祖やその弟子たち、あるいは教団によって書かれ、編まれ、受け継がれた「教えの原点」だ。時代が変わり、教義が揺れる時に、人々が立ち返る場所としての原典ともいえる。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教、仏教から、ヒンドウー教や神道、儒教・道教まで。歴史を超えて受け継がれてきた教典はどのように生まれ、何を私たちに伝えようとしているのか。信仰の核心に迫る新しい宗教ガイド。

1080円
102459-6

2460 脳の意識 機械の意識
— 脳神経科学の挑戦

渡辺正峰 著

物質と電氣的・化学的反應の集合体にすぎない脳から、なぜ意識は生まれるのか——。多くの哲学者や科学者を悩ませた「意識」という謎。本書は、この不可思議な領域へ、クオリアやニューロンなどの知見を手がかりに迫る。さらには実験成果などを踏まえ、人工意識の可能性に切り込む。現代科学のホットトピックであり続ける意識研究の最新線から、気鋭の脳神経科学者が、人間と機械の関係が変わる未来を描きだす。

920円
102460-2

2461 蒙古襲来と神風
— 中世の対外戦争の真実

服部英雄 著

鎌倉中期、日本は対外戦争を経験する。二度にわたる蒙古襲来（元寇）である。台風が吹き、文永の役では敵軍が一日で退散し、弘安の役では集結していた敵船が沈み、全滅したとされる。だが、それは事実なのか。本書では、通説の根拠となった諸史料の解釈を批判的に検証。戦闘に参加した御家人・竹崎季長が描かせた『蒙古襲来絵詞』ほか、良質な同時代史料から真相に迫る。根強い「神風史観」をくつがえす、刺激に満ちた一冊。

860円
102461-9

2463 兼好法師
— 徒然草に記されなかった真実

小川剛生 著

兼好は鎌倉時代後期に京都・吉田神社の神職である卜部家に生まれた。六位蔵人・左兵衛佐となり朝廷に仕えた後、出家して「徒然草」を著す——。この、現在広く知られる彼の出自や経歴は、兼好没後に捏造されたものである。著者は同時代史料をつぶさに調べ、鎌倉、京都、伊勢に残る足跡を辿りながら、「徒然草」の再解釈を試みる。無位無官のまま、自らの才知で中世社会を渡り歩いた「都市の隠者」の正体を明らかにする。

820円
102463-3

2464 藤原氏——権力中枢の一族

倉本一宏 著

「大化改新」で功績を残したとされる鎌足に始まる藤原氏。律令国家を完成させた不比等から四家の分立、ミウチ関係を梃子に天皇家と一体化した摂関時代まで権力中枢を占めつづける。中世の武家社会を迎えても五摂家ははじめ諸家は重要な地位を占め、その末裔は近代以降も活躍した。本書は古代国家の成立過程から院政期、そして中世に至る藤原氏千年の動きをたどる。権力をいかにして握り、後世まで伝えていったかを描く。

1000円
102464-0

2465 日本軍兵士
— アジア・太平洋戦争の現実

吉田 裕 著

310万人に及ぶ日本人犠牲者を出した先の大戦。実はその9割が1944年以降と推算される。本書は「兵士の目線・立ち位置」から、特に敗色濃厚になった時期以降の戦争の実態を追う。異常に高い餓死率、30万人を超えた海没死、戦場での自殺と「処置」・特攻、体力が劣悪化した補充兵、靴に鯨皮まで使用した物資欠乏……。勇猛と語られる日本兵たちが、特異な軍思想の下、凄惨な体験を強いられた現実を描く。アジア・太平洋賞特別賞、新書大賞受賞

820円
102465-7

2467 剣と清貧のヨーロッパ
— 中世の騎士修道会と托鉢修道会

佐藤彰一 著

俗世間を離れ、自らの心の内を見つめる修道院。だが12世紀、突然その伝統から大きく離れた修道会が生まれた。騎士修道会と托鉢修道会である。かたや十字軍と都て聖地エルサレムやイベリア半島、北方で異教徒と戦い、かたや聖フランチェスコらが都市のただ中で民衆の信仰のあり方をラディカルに変革した。これら「鬼子」ともいうべき修道会の由来と変遷を、各修道会の戒律や所領経営などにも注目しながら通観する。

880円
102467-1

2470 倭の五王
— 王位継承と五世紀の東アジア

河内春人 著

倭の五王とは、中国史書『宋書』倭国伝に記された讃・珍・済・興・武を言う。邪馬台国による交信が途絶えてから150年を経て、5世紀に中国へ使者を派遣した王たちである。当時、朝鮮半島では高句麗・百濟・新羅が争い、倭もその渦中にあった。本書は、中国への接近の意図や状況、倭国内の不安定な王権や文化レベル、記紀における天皇との関係などを中国史書から解説。5世紀の倭や東アジアの実態を描く。古代歴史文化賞優秀作品賞受賞

860円
102470-1

2471 戦前日本のポピュリズム
— 日米戦争への道

筒井清忠 著

現代の政治状況を表現するとき用いられる「ポピュリズム」。だが、それが劇場型大衆動員政治を意味するのであれば、日本はすでに戦前期に経験があった。日露戦争後の日比谷焼き打ち事件に始まり、怪写真事件、満洲事变、五・一五事件、天皇機関説問題、近衛文磨の登場、そして日米開戦。普通選挙と二大政党制は、なぜ政党政治の崩壊と、戦争という破壊に至ったのか。現代への教訓を歴史に学ぶ。

920円
102471-8

2472 酒は人の上に人を造らず
— 酒は人の上に人を造らず

吉田 類 著

『土佐日記』の作者・紀貫之は、国司の任を終えた送別の宴で連日、熱烈に歓待された。酒好きが多く、酔うほどに胸襟を開く土地柄なれば、開放的な酒宴は今なお健在、と高知出身の著者は言う。福沢諭吉の名言ならぬ「酒は人の上に人を造らず」を地であって、東京の下町をはじめ、北海道、福島、京都、愛媛、熊本など各地を訪ね、出会った人々と縁を結ぶ。酒場の風情と人間模様を描く、読みごたえたっぷりの紀行エッセイ。

760円
102472-5

2473
人口減少時代の都市
——成熟型のまちづくりへ

諸富 徹 著

人口減少と高齢化、低成長に直面する日本。だが本場の危機はこれからやって来る。上下水道や交通ネットワークといった身近な公共インフラの維持・更新、空き家問題への対策などは膨大な費用がかかるが、自治体は破産寸前だ。本書ではこの危機を逆に「住みよい都市」実現のチャンスととらえる。投資と効率性の視点から地域内の所得と雇用、独自の財源をもたらず都市経営のあり方とは。発展を続けるための戦略を示す。

900円
102473-2

2477
日本の公教育

——学力・コスト・民主主義

中澤 渉 著

教育無償化、学力低下、待機児童など、近年の教育の論点は多岐にわたる。だが、公費で一部もしくは全体が運営される学校教育＝公教育とはそもそも何のためにあるのか。実際に先進国の中で公教育費が少い日本には、多くの課題が山積している。本書は、学校とそれを取り巻く環境を歴史的背景や統計などのエビデンスを通して、論じる。そこからは、公教育の経済的意義や社会的役割が見えてくるだろう。

880円
102477-0

2479
スポーツ国家アメリカ

——民主主義と巨大ビジネスのはざま

鈴木 透 著

野球、アメフト、バスケットなどの母国アメリカ。国民が熱狂するこれらの競技は、民主主義とビジネスの両立への挑戦を体現している。人種、性の格差解消を先導する一方で、巨大化したプロスポーツでは、薬物汚染に加え、経営側の倫理が揺らぐ場面もある。大リーグの外国人選手獲得や、トランプ大統領とプロレスの関係は、現代アメリカの何を象徴するのか。スポーツで読む、超大国の成り立ちと現在。

860円
102479-4

2480
理科系の読書術

——インプットからアウトプットまでの28のヒント

鎌田浩毅 著

本を読むのが苦行です——著者の勤務する京都大学でも、難関の入試を突破したにもかかわらず、そう告白する学生が少なくない。本書は、高校までの授業になかった「本の読み方」を講義する。「最後まで読まなくていい」「難しいのは著者が悪い」「アウトプットを優先し不要な本は読まない」など、読書が苦手な人でも仕事や勉強を効率よく進めるヒントが満載。文系の人にもおすすめの、理科系の合理的な読書術を伝授する。

820円
102480-0

2481
戦国日本と大航海時代

——秀吉・家康・政宗の外交戦略

平川 新 著

15世紀以来、スペインやポルトガルはキリスト教布教と一体化した「世界征服事業」を展開。16世紀にはアジアに勢力を広げた。本書は史料を通じて、戦国日本とヨーロッパ列強による虚々実々の駆け引きを描きます。豊臣秀吉はなぜ朝鮮に出兵したのか、徳川家康はなぜ鎖国へ転じたのか、伊達政宗が遣欧使節を送った狙いとは。そして日本が植民地化された理由とは——。日本史と世界史の接点に着目し、数々の謎を解明する。和辻哲郎文化賞受賞

900円
102481-7

2482
日本統治下の朝鮮

——統計と実証研究は何を語るか

木村光彦 著

1910年から1945年まで、帝国日本の植民地となった朝鮮。その統治は、政治的には弾圧、経済的には搾取・貧困化という言葉で語られてきた。日本による統治に多くの問題があったことは確かである。だが、それは果たして「収奪」一色だったのか。その後の韓国の発展、北朝鮮の社会主義による国家建設と繋がりはあるのか——。本書は、論点を経済に絞り、実証主義に徹し、日本統治時代の朝鮮の実態と変容を描く。

800円
102482-4

2483
明治の技術官僚

——近代日本をつくった長州五傑

柏原宏紀 著

幕末、先進技術を習得すべくイギリスに留学した若き長州藩士たちがいた。伊藤博文、井上馨、山尾庸三、井上勝、遠藤謙助の五人である。出発点を同じくしながら、やがて有力政治家となった伊藤・井上馨と、官僚人生を全うした他の三人。その運命を分けたものは何だったのか。高度な専門知識により工業・鉄道・造幣の分野で活躍した山尾・井上勝・遠藤の足跡を軸に、近代国家形成期に技術官僚が果たした役割を明らかにする。

880円
102483-1

2484
社会学

——わたしと世間

加藤秀俊 著

一五〇年前に充てた安易な訳語のせいで、抽象的で理解しにくい「社会」と「社会学」。だが、社会とは私たちを取りまく身近な世間のことにほかならない。本書では、集団、コミュニケーション、組織、自我などのキーワードを切り口に、世の中の仕組みをよりよく知るこの学問の本質、方法を述べる。半世紀以上にわたり研究を続けてきた碩学による社会学入門にして、知的好奇心を持ちつづけ、人生を楽しむためのヒント。

780円
102484-8

2486
定年準備

——人生後半戦の助走と実践

楠木 新 著

シニア向けライフプラン研修でお金・健康・趣味などが重要と説かれる。だがそれだけでは物足りない。長い定年後を充実させるには、やりたことを見極めて行動に移す準備が必要だ。『定年後』に続く本書は、シニア社員や定年退職者への取材を重ねるなかで著者が新たに発見した、個別的で多彩な実例を一挙公開。自分らしい第二の人生を踏み出す上で役立つ具体的なヒントを明かす。巻末に「定年準備のための行動六か条」を掲載。

820円
102486-2

2488
ヤングケアラー

——介護を担う子ども・若者の現実

澁谷智子 著

ヤングケアラーとは、家族の介護を行う一八歳未満の子どもの指す。超高齢社会を迎え、介護を担う若い層も増えているが、その影響は彼らの学業や日常生活にも及んでいる。本書はヤングケアラーの現状について、調査データ、当事者の声、海外の事例、現在の取り組みを紹介。周囲に相談できず孤立したり、進路の選択を左右されたりする状況といかに向き合うかを考える。人口減少時代の家族のあり方とケアの今後を問う一冊。生協総研賞特別賞受賞

800円
102488-6

2490 **ヴィルヘルム2世**

—ドイツ帝国と命運を共にした
「国民皇帝」

竹中 亨 著

1888年にドイツ皇帝として即位したヴィルヘルム2世（1859～1941）。統一の英雄「鉄血宰相」ビスマルクを罷免し、自ら国を率いた皇帝は、海軍力を増強し英仏露と対立。第一次世界大戦勃発の主要因をつくった。1918年、敗戦とともにドイツ革命が起きるとオランダへ亡命、その地で没する。統一・国民国家の草創期、ふたつの世界大戦という激動の時代とともに歩んだ、最後のドイツ皇帝の実像。

820円
102490-9

2491 **植物のひみつ**

—身近なみどりの「すごい」能力

田中 修 著

なぜウメはサクラより早く開花するのか、タンポポの茎はどうして空洞なのか、イネの根が水に浸かっても生きていられるのはなぜか、緑色のアジサイの花を見かけたら何に注意すればいいのか、ヒマワリはどこまで背が伸びるか、ジャガイモの食べる部分は根か茎か、バナナの皮は滑りやすいというのは本当か……。学校や家庭でよく目にする植物10種の（ひみつ）を紹介し、身近な植物たちに秘められた驚きの能力を解説する。

860円
102491-6

2493 **日本語を翻訳すること**

—失われるもの、残るもの

牧野成一 著

「古池や蛙飛び込む水の音」芭蕉のこの俳句を英語で説明するとき、「蛙」を a frog と frog のどちらかで訳すべきだろうか。単数が複数かを決めないまま翻訳することは英語では許されない。ほかに「どちらら」「どんどん」「どん」などの擬音・擬態語「雨ニモ負ケズ」の漢字カタカナ交じりの表記「顔が能面のようだ」といった比喩など、翻訳困難な日本語表現を紹介。夏目漱石も村上春樹も登場する、海を越えた日本語論。

780円
102493-0

2494 **温泉の日本史**

—記紀の古湯、武将の隠し湯、温泉番付

石川理夫 著

日本人と温泉の関わりは古く、三古湯と称される道後・有馬・白浜温泉は「日本書紀」にも出てくる。中世には箱根・熱海・草津・別府などの名湯が歴史の表舞台に現れた。武田信玄や戦国大名が直轄した領国内の温泉地は「隠し湯」として知られる。江戸時代に入ると大名や藩士、幕臣らはこぞで湯治旅を楽しむようになり、旅行案内書や温泉番付が登場。初の秘湯ブームも到来した——。多彩なエピソードでつづる通史。

880円
102494-7

2495 **幸福とは何か**

—ソクラテスから
アラン、ラッセルまで

長谷川 宏 著

幸福とは何か——。この問いに哲学者たちはどう向き合ってきたのか。共同体の秩序と個人の衝突に直面した古代ギリシャのソクラテス、アリストテレスに始まり、道徳と幸福の対立を見据えたイギリス経験論のヒューム、アダム・スミス。さらに人類が世界大戦へ行きつきた二〇世紀のアラン、ラッセルまで。ヘーゲル研究で知られる在野の哲学者が、日常の地平から西洋哲学史を捉えなおし、幸福のかたちを描き出す。

880円
102495-4

2496 **物語 アラビアの歴史**

—知られざる3000年の興亡

蔦 勇造 著

アラブについて記された最初の石碑は紀元前九世紀に遡る。メソポタミア・エジプト両文明の影響を受けた地に誕生した諸国家は交易と遊牧と農業で栄え、互いにしのぎを削り、エチオピアやインドとも交渉を持った。西暦七世紀にはこの地にイスラームが誕生し、世界史に大きな影響を与える。二十世紀以降は石油資源をもとに近代化を進めるが、政治的安定からはほど遠い。古代文明から現代まで、中東の核心地帯の三千年を追う。

1100円
102496-1

2498 **斗南藩**

—「朝敵」会津藩士たちの苦難と再起

星 亮一 著

二十八万石を誇った会津藩は戊辰戦争に敗れ、明治二年、青森県の下北半島や三戸を中心とする地に転封を命ぜられる。実収七千石の荒野に藩士とその家族一万七千人が流れこんだため、たちまち飢饉に陥り、斃れていった。疫病の流行、住民との軋轢、新政府への不満と反乱……。凄絶な苦難をへて、ある者は教師となって青森県教育に貢献し、また、近代的な牧場を開いて荒野を沃土に変えた。知られざるもうひとつの明治維新史。

820円
102498-5

2499 **仏像と日本人**

—宗教と美の近現代

碧海寿広 著

仏像鑑賞が始まったのは、実は近代以降である。明治初期に吹き荒れた廃仏毀釈の嵐、すべてに軍が優先された戦時下、レジャーに沸く高度経済成長期から、仏像ブームの現代まで、人々はさまざまな思いで仏像と向き合ってきた。本書では、岡倉天心、和辻哲郎、土門拳、白洲正子、みうらじゅんなど各時代の、知識人を通して、日本人の感性の変化をたどる。劇的に変わった日本の宗教と美のあり方が明らかに。

860円
102499-2

2500 **日本史の論点**

—邪馬台国から象徴天皇制まで

中公新書編集部 編

鎌倉時代は「いい国つくろう」の1192年に始まる、という時代区分はもはや主流ではない。日本史の研究は日々蓄積され、塗り替えられている。今注目されている日本史の論点は何か、どこまで解明されたのか。「邪馬台国はどこにあったか」「応仁の乱は画期的なのか」「江戸時代は「鎖国」だったのか」「明治維新は革命なのか」田中角栄は名宰相か」など、古代・中世・近世・近代・現代の29の謎に豪華執筆陣が迫る。

880円
102500-5

2501 **現代経済学**

—ゲーム理論・行動経済学・制度論

瀧澤弘和 著

二〇世紀半ば以降、経済学は急速に多様化していき、学問としてはわかりにくさを増した。本書は、ミクロ及びマクロ経済学はもとより、ゲーム理論、行動経済学や神経経済学などの大きな潮流を捉え、実験や制度、経済史といった重要な領域について詳しく解説。多様化した経済学の見取り図を示す。かつて、社会科学の女王と呼ばれた経済学の現在地を提示し、その未来と果たすべき役割を明らかにする。入門にも最適。

880円
102501-2

2502 **日本型資本主義**
—その精神の源—

寺西重郎 著

長期にわたって停滞を続ける日本経済。混沌から抜け出せないのはなぜなのか。本書では、その解明を歴史に求め、経済システムを支える日本人の「資本主義の精神」を探究する。強欲な金儲け主義への嫌悪感、ものづくりへの敬意や高品質の追求、個人主義ではなく集団行動の重視など、欧米はもとより、中韓など東アジア諸国とも異なる特質を明らかにする。そのうえで現代日本の経済システム改革への指針を示す。

880円
102502-9

2503 **信長公記**
—戦国覇者の一級史料—

和田裕弘 著

織田信長の生涯を側近が著述した『信長公記』。父親の葬儀で仏前に抹香を投げつける場面、岳父である斎藤道三との初会見ほか、小説などで描かれる挿話の数々は、この軍記が土台となっている。第一級の史料とされるが、実際には何がどう書かれているのか。現存する『信長公記』諸本を調査した著者が「桶狭間の戦い」「信長の居城」並み重要な重臣「本能寺の変」など28のトピックに整理して解説、その内容を明かにする。

900円
102503-6

2505 **正義とは何か**
—現代政治哲学の6つの視点—

神島裕子 著

「公正な社会」とはどういったものか。権利や財の分配で可能になるのか。米国の政治哲学者ロールズは、一九七〇年代以降、社会のあり方を根底から問い直し、世界に新たな地平を切り開いた。本書は、ロールズの考えを起点に、リタリアニズム（自由至上主義）やコミュニタリアニズム（共同体主義）など六つの思想潮流から正義とは何かを問う。格差や貧困など現実課題との接点に、個人の幸福を支える平等な社会の可能性を探る。

880円
102505-0

2506 **中国経済講義**
—統計の信頼性から成長のゆくえまで—

梶谷 懐 著

世界第2位のGDPを誇る経済大国、中国。だが実態はつかみづらい。その経済力が世界秩序を揺るがすと見る「脅威論」から、正反対の「崩壊論」まで、論者によって振れ幅が大きい。本書では「中国の経済統計は信頼できるか」「不動産バブルを止められるか」「共産党体制の下で持続的な成長は可能か」など、中国経済が直面する根本的な課題について分析。表面的な変化の奥にある、中国経済の本質を明らかにする。

880円
102506-7

2509 **陸奥宗光**
—「日本外交の祖」の生涯—

佐々木雄一 著

条約改正や日清戦争の難局を打開した外交指導者、陸奥宗光。幕末の紀州に生まれた彼は、坂本龍馬のもと海援隊で頭角を現す。明治新政府において県知事などを務めるが、政府転覆計画に関与し投獄される。出獄後、欧州遊学を経て再起し、駐米公使としてメキシコと対等条約を締結。1892年、伊藤博文内閣の外務大臣に就任し、条約改正や日清戦争で手腕を発揮した。最新の研究成果をもとに、「日本外交の祖」の実像に迫る。

900円
102509-8

2512 **高坂正堯** —戦後日本と現実主義—

服部龍二 著

日本における国際政治学の最大の巨人・高坂正堯（1934―96）。中立志向の理想主義が世を覆う60年代初頭、28歳で論壇デビューした高坂は、日米安保体制を容認、勢力均衡という現実主義から日本のあり方を説く。その後の国際政治の動向は彼の主張を裏付け、確固たる地位を築いた。本書は、高坂の著者、歴代首相のブレインとしての活動を中心に生涯を辿り、戦後日本の知的潮流、政治とアカデミズムとの関係を明らかにする。

1000円
102512-8

2513 **カラー版 日本画の歴史 近代篇**
—狩野派の崩壊から
院展・官展の隆盛まで—

草薙奈津子 著

開国後、大和絵、狩野派、浮世絵など日本伝統の絵画は、西洋絵画と出遭い、「日本画」と称するようになった。フェノロサに評価された日本画は、岡倉天心、橋本雅邦らが新設の東京美術学校で確立。のちには日本美術院の横山大観や菱田春草らが技法を追究し進展させる。本書は、幕末の横浜浮世絵や南画から、国家主導で堂々たる作品が制作された明治期、そして、今村紫紅に代表されるのびやかな画風の大正期を描く。

920円
102513-5

2514 **カラー版 日本画の歴史 現代篇**
—アヴァンギャルド、戦争画から
21世紀の新潮流まで—

草薙奈津子 著

昭和十年代、前衛美術集団の離合集散が続いた。だが、新しい絵画の胎動は戦時体制に飲み込まれ、富士山や軍人など国威昂揚を意図した絵画が制作されるようになる。戦後は国粋主義への批判から「日本画滅亡論」が唱えられ、新しい道の模索を余儀なくされた。本書は、前衛として戦前に注目された吉岡堅二らから、戦時中、そして復興に寄り添って人気を博した東山魁夷や平山郁夫の活躍、さらに、平成以降の新潮流までを描く。

920円
102514-2

2516 **宣教のヨーロッパ**
—大航海時代のイエズス会と
托鉢修道会—

佐藤彰一 著

ルターに端を発する十六世紀ヨーロッパの宗教的動揺は、イエズス会というまったく新しい組織を生んだ。霊操と教育を重視し、異教徒への宣教を実践するイエズス会は、ポルトガル、スペインの植民地開拓と軌を一にして、新大陸やアジアへと進出した。かれらの思想や布教方法はどうのようだったか。いかなる経済的基盤に支えられていたのか。現地社会に与えた影響や「キリスト教の世界化」のプロセスを詳細に検証する。

880円
102516-6

2517 **承久の乱**
—真の「武者の世」を告げる大乱—

坂井孝一 著

一二一九年、鎌倉幕府三代将軍・源実朝が暗殺された。朝廷との協調に努めた実朝の死により公武関係は動揺。二年後、承久の乱が勃発する。朝廷に君臨する後鳥羽上皇が、執権北条義時を討つべく兵を挙げたのだ。だが、義時の嫡男泰時という幕府の大軍は京都へ攻め上り、朝廷方の軍勢を圧倒。後鳥羽ら三上皇は流罪となり、六波羅探題が設置された。公武の力関係を劇的に変え、中世社会のあり方を決定づけた大事件を読み解く。

900円
102517-3

2518
オスマン帝国
— 繁栄と衰亡の600年史

小笠原弘幸 著

オスマン帝国は1299年頃、イスラム世界の辺境であるアナトリア北西部に誕生した。アジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸に跨る広大な版図を築いた帝国は、イスラムの盟主として君臨する。その後、多民族・多宗教の共生を実現させ、1922年まで苦闘を保った王朝の黎明から、玉座を巡る王子達の争い、ヨーロッパへの進撃、近代化の苦闘など、滅亡までの600年の軌跡を描き、空前の大帝国の内幕に迫る。

榎山純三賞受賞

900円
102518-0

2519
安楽死・尊厳死の現在

— 最終段階の医療と自己決定

松田 純 著

21世紀初頭、世界で初めてオランダで合法化された安楽死。同国では年間6000人を超え、増加の一途である。容認の流れは、自己決定意識の拡大と超高齢化社会の進行のなか、ベルギー、スイス、カナダ、米国へと拡散。他方で精神疾患や認知症の人々への適用をめぐる問題も噴出しつつある。本書は、先進・各国の実態から、尊厳死と称する日本での問題、人類の自死をめぐる思想史を繙き、「死の医療化」と言われるその実態を描く。

860円
102519-7

2521
老いと記憶

— 加齢で得るもの、失うもの

増本康平 著

加齢によって、記憶は衰える——それが一般的なイメージだろう。だが、人間のメカニズムはもっと複雑だ。本書は、高齢者心理学の立場から、若年者と高齢者の記憶の違いや、認知能力の変化など、老化の実態を解説。気分や運動、コミュニケーションなどが記憶に与える影響にも触れ、人間の生涯で記憶が持つ意味をも問う。加齢をネガティブに捉えず、老いを前向きに受け入れるヒントも見えてくる。

780円
102521-0

2522
リバタリアニズム

— アメリカを揺るがす自由至上主義

渡辺 靖 著

アメリカ社会、とりわけ若い世代に広がりつつあるリバタリアニズム（自由至上主義）。公権力を極限まで排除し、自由の極大化をめざす立場だ。リベラルのように人工妊娠中絶、同性婚に賛成し、死刑や軍備増強に反対するが、保守のように社会保障費の増額や統制に反対するなど、従来の左右対立の枠組みではとらえきれない。著者はトランプ政権誕生後のアメリカ各地を訪れ、実情を報告。未来を支配する思想がここにある。

800円
102522-7

2523
古代オリエントの神々

— 文明の興亡と宗教の起源

小林登志子 著

テigrリス・ユーフラテス河の間に広がるメソポタミアの平野、ナイルの恵みに育まれたエジプト。ここで人類は古代文明を築き、数多くの神をつくり出した。エジプトの豊饒神オシリス、天候を司るバアル、冥界神ギルガメッシュ、都市バビロニアを守るマルドク、アジアからヨーロッパまで遠征したキユベレ女神、死後に復活するドゥムジ神——さまざまな文明が興り、消えゆくなか、人がいかに神々とともに生きたかを描く。

940円
102523-4

2525
硫黄島

— 国策に翻弄された1300年

石原 俊 著

小笠原群島の南方に位置する硫黄島。日本帝国が膨張するなか、無人島だったこの地も一九世紀末に領有され、入植・開発が進み、三〇年ほどで千人規模の人口を有するようになった。だが、一九四五年に日米両軍の凄惨な戦いの場となり、その後は米軍、続いて海上自衛隊の管理下に置かれた。冷戦終結後の今なお島民たちは、帰島できずにいる。時の国策のしわ寄せを受けた島をアジア太平洋の近現代史に位置づけ、描きだす。

820円
102525-8

2526
源頼朝

— 武家政治の創始者

元木泰雄 著

一一八〇年、源頼朝は平氏追討の兵を挙げた。平治の乱で清盛に敗れて、父義朝を失い、京から伊豆に流された二十年が過ぎていた。苦難を経て仇敵平氏を滅ぼし、源氏一門内の対抗者たる義仲と義経を退け、最後の強敵平泉藤原氏を倒し、武門の頂点を極めた頼朝。流人の挙兵はなぜ成功し、鎌倉幕府はいかなる成立過程を辿ったのか。何度も死線をくぐり抜けた末に武士政権樹立を成し遂げ、五十三歳で急逝した波瀾の生涯。

900円
102526-5

2529
ナポレオン四代

— 二人のフランス皇帝と
悲運の後継者たち

野村啓介 著

18世紀末、コルシカ島出身の一軍人から皇帝にのぼった英雄ナポレオン。父帝に憧れ軍功を焦るが、病のため夭折した2世。二月革命を経て大統領に当選、その後クーデタで皇帝となった甥の3世。帝政復興の期待を背負うも、英兵として赴いた戦地で落命した4世。二組の父子、そして一族は栄華と没落という教訓的な運命を辿る。革命と激変の時代に「ナポレオン」はどう生き、民衆に求められたか。ボナパルト家から近代史を読む。

860円
102529-6

2530
日本鉄道史 昭和戦後・平成篇

— 国鉄の誕生からJR7社体制へ

老川慶喜 著

「日本の復興は、鉄道が中心となつてやらなければならない」（一九四五年八月一日、鉄道総局長官の発言。進駐軍専用列車の運行、統廃する事故等の混乱のなか、独立採算制の企業体・日本国有鉄道は誕生した。ビジネス特急「こだま」、東海道新幹線、通勤五方面作戦ほか近代化に努めるが、過大な投資等で赤字が膨らみ、分割民営化により四〇年の歴史を閉じた。その後のJR三〇年も含め、鉄道から見た日本現代史を描く。

940円
102530-2

2533
古代日中関係史

— 倭の五王から遣唐使停止後まで

河上麻由子 著

607年、日本は隋の煬帝に「日出する処の天子」で名高い書状を送る。以後、対等の関係を築き、中国を大國とみなすことになった。こうした通説は事実なのか。日本はアジア情勢を横目に、いかなる手段・方針・目的をもって中国と交渉したのか。本書は、倭の五王の時代から、5回の遣唐使、15回の遣唐使、さらには派遣後まで、500年間に及ぶ日中間の交渉の軌跡を実証的に、「常識」に疑問を呈しながら描く。古代歴史文化賞優秀作品賞受賞

880円
102533-3

2534 漢字の字形

— 甲骨文字から篆書、楷書へ

落合淳思 著

「馬」の字からはタテガミをなびかせ走るウマの姿が見えてくる。しかし「犬」からイヌを、「象」からゾウの姿を想像することは難しい。甲骨文字から篆書、隸書を経て楷書へ——字形の変化を丹念にたどると、祭祀や農耕など中国社会の変化の軌跡を読み取れる。漢字がもつ四千年の歴史は、捨象と洗練と普及の歴史なのだ。本書では小学校で習う教育漢字を取り上げた。眺めて楽しい字形表から漢字の歴史が見えてくる。

2537 日本の地方政府

— 1700自治体の実態と課題

曾我謙悟 著

日本には都道府県47、市790、町745など、1700を超える地方政府がある。一般に地方自治体、地方公共団体と呼ばれ、行政機構のみが存在する印象を与えてきた。だが20世紀末以降の地方分権改革は、教育、介護、空き家問題など、身近な課題に直面する各政府に大きな力を与えた。本書は、政治制度、国との関係、地域社会・経済の三つの面から、国家の2・5倍の支出と4倍の人員を持つ地方政府の軌跡、構造と実態を描く。

カラー版

2539 虫や鳥が見ている世界

— 紫外線写真が明かす生存戦略

浅間 茂 著

人間の目は、赤・青・緑の3色しか見えない。だが、虫や鳥は紫外線をも見ることができ。人や植物を撮影。そこには驚きの世界が広がっていた。モンシロチョウは雄雌で翅の色が違い、ウツボカサラの捕虫囊は紫外線を反射して虫を誘い、ハシブトガラスは紫外色の模様の違いで個体を識別していた。人には見えない生存戦略を探る。

2540 食の実験場アメリカ

— ファーストフード帝国のゆくえ

鈴木 透 著

先住インディアン、黒人奴隷、各国の移民らの食文化が融合したアメリカの食。そこからバーベキュー、フライドチキン、ハンバーガーなど独自の食文化が形成されたが、画一化されたファーストフードや肥満という問題をも引き起こした。そしていまアメリカではスシローをはじめとする、ヘルシーとエスニックを掛け合わせた潮流が生まれ、食を基点に農業や地域社会の姿が変わろうとしている。食から読む移民大国の歴史と現在。

2541 平成金融史

— バブル崩壊からアベノミクスまで

西野智彦 著

昭和末期に拡大したバブル経済は、平成の幕開きとともに崩壊した。不良債権問題で多くの金融機関が行き詰まり、一九九七―一九九八年には北海道拓殖銀行、山一証券などが経営破綻。金融システムは壊滅寸前に至った。その後も混乱は続き、二〇〇八年にはリーマン危機に直面するなど、日本経済は長期停滞にあえぐ。金融当局は当時どう考え、何を見誤ったのか。キーパーソンによる貴重な証言を交え、金融失政の三〇年を検証する。

2542 漢帝国 — 400年の興亡

渡邊義浩 著

漢字、漢民族という表現が示すように、漢は中国を象徴する「古典」である。秦を滅亡させ、項羽を破った劉邦が紀元前202年に中国を統一（前漢）。武帝の時代に最盛期を迎える。王莽による篡奪を経て、紀元後25年に光武帝が再統一（後漢）。220年に魏に滅ぼされるまで計400年余り続いた。中国史上最長の統一帝国として、中国を規定し続けた「儒教国家」はいかに形成されたのか。その興亡の歴史をたどる。

2543 日米地位協定

— 在日米軍と「同盟」の70年

山本章子 著

日米地位協定は、在日米軍の基地使用、行動範囲、米軍関係者の権利などを保証したものである。在日米軍による事件が沖縄などで頻発する中、捜査・裁判での優遇が常に批判されてきた。冷戦後、独伊などでは協定は改正されたが日本はそのままである。本書は、協定と在日米軍を通して日米関係の軌跡を描く。実際の運用が非公開の「合意議事録」に基づいてきた事実など、日本が置かれている「地位」の実態を描く。石橋湛山賞、沖縄研究奨励賞受賞

2545 物語 ナイジェリアの歴史

— 「アフリカの巨人」の実像

島田周平 著

アフリカはサハラ砂漠南縁を境に、北のアラブ主義と南のネグロ主義に分けられる。現在この両者にまたがる唯一の国がナイジェリアである。サハラ交易による繁栄、イスラームの流入、奴隷貿易、イギリスの統治などを経て、ナイジェリアは人口・経済ともにアフリカ最大の国となった。20世紀には150万人以上の犠牲者を出したビアフラ戦争を経験し、イスラーム過激派組織ボコ・ハラムを抱える「アフリカの巨人」の歴史を辿る。

2546 物語 オーストリアの歴史

— 中欧「いにしえの大国」の千年

山之内克子 著

ローマ帝国の「前線基地」を源流とするオーストリア。神聖ローマ皇帝としてヨーロッパに君臨したハプスブルク家、モーツァルトやウィーン世紀末芸術など華やかな歴史に彩られる一方、オスマントルコの侵攻、第一次世界大戦敗北後の帝国解体、ナチスドイツによる併合、連合国軍による分割統治といった苦難も重ねてきた。首都ウィーンだけでなく、ザルツブルク、ティロルなど魅力溢れる九つの州からたどる、一千年の物語。

2547 科学技術の現代史

— システム、リスク、イノベーション

佐藤 靖 著

第2次世界大戦後、科学技術の力は増大する。その原動力は豊富な資金を持つ国家、特に米国だった。インターネットが生まれ、遺伝子操作が可能になり、原子力や人工衛星の利用が広がる。一方でリスクは巨大化・複雑化した。21世紀に入り、AIやバイオテクノロジーが驚異的な展開を見せ、中国や民間企業による「暴走」が懸念されるなか、世界は今後どうなっていくのか——科学技術の「進化」の歴史と未来への展望を描く。

2548 老いのゆくえ

黒井千次 著

運転免許を返納した。転倒が増えた——。85歳という新たな区切りを超えた作家が描く「老いの日常」。優先席での年齢比べ、一向に進まない本の整理、曲げた腰を伸ばす難しさ、隙を見ては襲ってくる眠気、病氣との付き合い方。いずれも70歳代のころとは何かが徐々に変わっている。この先の時間に思いを馳せながら、年齢を重ねるなかで生じる失敗や戸惑い、さらに発見や喜びも余さずつづる、老いの日々のスケッチ。

820円
102548-7

2549 海外で研究者になる

——就活と仕事事情

増田直紀 著

日本人の研究リサーたちが世界の大学で活躍している。どうすれば海外で研究者になれるのか。応募書類の書き方から、面接の実際、待遇交渉まで、イギリスの大学に就職した著者が詳説。昇進は自己申告制、会議は家庭の用事で欠席可能、公費でティータム、意外と親身な学生指導など、異文化での研究生活をリアルに描写。各国で活躍する研究者17人へのインタビューも収録。研究職だけでなく、海外で働こうとする日本人必読。

880円
102549-4

2550 大隈重信(上)

——「巨人」が夢見たもの

伊藤之雄 著

政治家、言論人、早稲田大学初代総長など多面的な活動で知られる大隈重信。一八三八年、佐賀に生まれ、幕末に志士として活躍。明治維新後は、官僚として頭角を現し、木戸孝允、大久保利通、三条実美らの右腕として、参議院大蔵卿などを務める。明治十四年の政変で失脚するも、立憲改進黨を率い、藩閥政府と対峙。時流を機敏にとらえ、一八九八年には総理大臣に就任する。上巻では、若き日から念願の組閣までを描く。

1100円
102550-0

2551 大隈重信(下)

——「巨人」が築いたもの

伊藤之雄 著

大隈内閣は内紛のため四ヵ月で瓦解。苦難の時期を迎えるも、日露戦争後に早稲田大学総長や文明論者として活動、全国を積極的に遊説した。一九一四年に二度目の組閣を迎え、第一次世界大戦という難局にあたり日本の舵を取る。時にポピュリズムの手法を用い、「大平民」政治家として広汎な支持を集めた。下巻は、一九二二年に没するまでの「巨人」の後半生と晩年を辿る。葬儀に「百万人」が駆けつけた大隈の魅力を描き切る。

1000円
102551-7

2554 日本近現代史講義

——成功と失敗の歴史に学ぶ

山内昌之／細谷雄一 編著

明治維新から一五〇年余り。日本近現代史の研究は日々蓄積され、塗り替えられている。日本国内の閉じた歴史にとどまるのではなく、世界史と融合した新しい歴史を模索する流れが強まっている。明治維新に始まり、日清・日露戦争、第二次世界大戦、東京裁判と歴史認識問題、戦後日中関係、そして未来に向けた歴史観の問題まで。特定の歴史観やイデオロギーに偏らず実証を旨とする、第一線の研究者による入門一四講。

900円
102554-8

2556 日本近代文学入門

——12人の文豪と名作の真実

堀 啓子 著

「円朝の落語通りに書いて見たらどうか」と助言された二葉亭四迷は日本初の言文一致小説『浮雲』を生んだ。初の女流作家田辺花圃と同門だった樋口一葉は、最晩年に「奇跡の14ヵ月」と呼ばれるほどの作品を遺した。翻案を芸術に変えた泉鏡花と尾崎紅葉の師弟。新聞小説で国民的人気を得た黒岩涙香と夏目漱石。自然主義の田山花袋と反自然主義の森鷗外。「生活か芸術か」を巡る菊池寛と芥川龍之介。12人でたどる近代文学史。

900円
102556-2

2558 日本の地方議会

——都市のジレンマ、消滅危機の町村

辻 陽 著

最も身近な政治の舞台である地方議会。だが、平成の大合併により議員数は半減、政務活動費などをめぐる不祥事も続き、住民との距離は広がるばかりだ。都市部では、首長と対立する「抵抗勢力」と批判され、反対に支持すれば単に「追認機関」とされる。一方、過疎地では議員のなり手さえ不足している。本書は地方議会の仕組みやカネ、選挙の実態、そして実は重い職責までを丁寧に描き、いま必要な改革を示す。

860円
102558-6

2559 菅原道真

——学者政治家の栄光と没落

滝川幸司 著

学者ながら右大臣に昇進するが、無実の罪で大宰府に左遷された菅原道真(845〜903)。藤原氏の専横が目立ち始めたこの時期、学問を家業とした道真は、英邁で名高く、宇多天皇に見出され異例の出世を果たす。天皇による過大な評価、重用に苦悩しつつも、遣唐使派遣など重大な国政に関与。だが藤原氏の策謀により失脚する。本書は、学者、官僚、政治家、漢詩人として、多才がゆえに悲劇の道を通った平安貴族を描き出す。

860円
102559-3

2560 月はすごい

——資源・開発・移住

佐伯和人 著

一番身近な天体、月。約38万km上空を回る地球唯一の衛星だ。アポロ計画から約半世紀を経て、中国やインド、民間ベンチャーも参入し、開発競争が過熱している。本書では、大きさや成り立ちといった基礎、探査で新たに確認された地下空間などの新発見を解説。人類は月に住めるか、水や鉱物資源は採掘できるか、エネルギーや食糧をどう確保するかなども詳述する。最新線の月探査プロジェクトに携わる著者が月面へと誘う。

820円
102560-9

2561 キリスト教と死

——最後の審判から無名戦士の墓まで

指 昭博 著

人は死んだらどこへ行くのか——。古来、人々は死後の世界をさまざまにイメージしてきた。本書では天国と地獄、「最後の審判」、幽霊など、キリスト教の世界観を紹介し、とりわけイギリス社会に大きな影響を与えたことになったカトリックとプロテスタントの違いを指摘。キリスト教の死生観が生み出してきた墓やモニュメント、シエイクスピアアの文学や映画、芸術作品など、「死の文化」の豊かな世界をめぐる。

860円
102561-6

2562 現代美術史

— 欧米、日本、トランスナショナル

山本浩貴 著

20世紀以降、芸術概念は溶解し、定義や可能性を拡張した新しい潮流が続々と生まれている。アーティストは、差別や貧困のような現実、震災などの破局的出来事とどう格闘しているのか。美術は現代をいかに映し、何を投げかけたか。本書は難解と思われがちな現代美術を、特に第二次世界大戦後の社会との関わりから解説し、意義づける。世界中の多くの作家による立体、映像、パフォーマンスなど様々な作品で紡ぐ、現代アート入門。

960円
102562-3

2563 持統天皇

— 壬申の乱の「真の勝者」

瀧浪貞子 著

後の天智天皇の子として大化改新の年に誕生した少女は、五歳のときに祖父が自害し、心痛の余り母が没するという悲劇を体験する。十三歳で叔父の大海人皇子（後の天武天皇）と結婚。有間皇子の謀反や白村江の戦いの後、二十七歳のとき、古代最大の争乱である壬申の乱を夫と共に起こし、弟・大友皇子に勝利する。その後は中央集権化に邁進し、兄弟継承だった皇位を父子継承に転換させた。古代国家を形作った女帝の実像とは。

900円
102563-0

2564 統計分布を知れば世界が分かる

— 身長・体重から格差問題まで

松下 貢 著

一見バラバラに見えるデータでもグラフにすれば特徴が浮かび上がる。身長やテストの点数は真ん中が一番多い釣鐘型のカーブ（正規分布）に、地震の頻度やウェブの被引用数は右肩下がり曲線（べき乗分布）になる。そして体重や町村の人口は、釣鐘型だが左側が縮み右側が伸びたカーブになる（対数正規分布）。なぜ世界のほとんどの物事はこの3種類になるのか。仕組みを説明し、データに潜む真理から何が読み取れるかを明かす。

800円
102564-7

2566 海の地政学

— 覇権をめぐる400年史

竹田いさみ 著

地球の面積の7割以上を占める海。大航海時代以来、その覇権をめぐる、多くの国々が鎗を削ってきた。スペイン、オランダ、イギリス、二度の大戦を経て頂点に君臨するアメリカ。そして国際ルールへ挑戦する中国……。本書は、航路や資源、国際的な法制度など多様な論点から、400年に及ぶ海をめぐる激動の歴史を描き出す。各国の思惑が交錯し、形作られてきた海洋秩序を前にして、海に囲まれた日本はどう向き合っていくべきか。

900円
102566-1

2567 歴史探究のヨーロッパ

— 修道制を駆逐する啓蒙主義

佐藤彰一 著

宗教改革以降、カトリックは修道院での学術活動を活性化させた。人文主義者たちは古典を博搜し、教会史や聖人伝などの文書を批判的に検証する学問を進歩を遂げた。偽書を識別する文献学や文書学、ローマ法の解釈学など、現代の歴史学の基礎がここに形成されたのである。その中核となったのが、サン・モール修道会のマビヨンらであった。啓蒙思想の席巻、宗教と世俗の相剋の間で、歴史と真理を探究した人々の足跡を追う。

900円
102567-8

2568 中国の行動原理

— 国内潮流が決める国際関係

益尾知佐子 著

世界各国と軋轢を起こす中国。その特異な言動は、中華思想、米国に代わる世界覇権への野心などでは説明できない。なぜ21世紀に入り、中国は海洋問題で強硬姿勢に出たのか、経済構想「一带一路」を始めたのか。本書は、毛沢東・鄧小平から習近平までの指導者の動向、民族特有の家族観、社会の秩序意識、政経分離のカメラ体制など国内の潮流から、中国共産党を中心とした対外行動のルールを明らかにする。

920円
102568-5

2569 古関裕而

— 流行作曲家と激動の昭和

刑部芳則 著

古関裕而（一九〇九〜八九）は忘れられた名作曲家である。日中戦争中、軍歌「露宮の歌」で一世を風靡。アジア・太平洋戦争下のニュー・スエズ歌謡や戦時歌謡を多く手がけ、慰問先でも作曲に動しんだ。戦後は鎮魂歌「長崎の鐘」、東京五輪行進曲「オリンピック・マーチ」、映画「モス」劇伴音楽と、流行歌からスポーツ音楽まで数々の名曲を残す。戦争、そしてテレビの普及まで、昭和史を彩った彼の生涯をたどる。

880円
102569-2

2570 佐藤栄作

— 戦後日本の政治指導者

村井良太 著

1960年代半ばから7年を超える長期政権を誇った佐藤栄作。岸信介の実弟で、吉田茂に寵愛された佐藤は、寡黙な官僚政治家との批判が強く、ノーベル平和賞受賞には違和感の声を上へ上へ。だが憲法改正を回避し、日米安保体制の安定を確立させる中、沖縄返還、日韓基本条約締結、急激な経済成長に対する社会開発政策など事績は多い。本書は、佐藤の軌跡を追いつつ、核兵器を保有せず大国の地位を獲得した戦後日本を描く。

1000円
102570-8

2571 アジア経済とは何か

— 躍進のダイナミズムと日本の活路

後藤健太 著

戦後アジアをリードした日本経済。しかし20世紀の終わりに長期停滞に陥っている。一方、中国を筆頭にASEANなどのアジア諸国・地域は躍進し、21世紀は「アジアの世紀」とされる。日本の家電メーカーなどの凋落と、中国はじめアジア企業の急成長に象徴される激変の本質は何か。「グローバル・バリウチエーン」「インテグラル/モジュラー型」といった鍵となる概念をわかりやすく解説し、日本の活路を示す。

820円
102571-5

2572 日本の品種はすごい

— うまい植物をめぐる物語

竹下大学 著

より美味で、かつ丈夫、収穫量が多く、栽培しやすい品種を——。誰もが夢見る新品種を生むべく、自然と格闘する仕事者が育種家だ。りんごの「ふじ」のように歴史に名を刻む有名種や、競争に敗れて頂点から転落した梨の「長十郎」など、品種改良をめぐる歴史は、育種家たちの情熱の結晶である。本書では、じゃがいもや大豆、大根、わさびなど7つの身近な食用植物を取り上げ、その進化と普及にいたるドラマを描き出す。

900円
102572-2

2573 公家源氏——王権を支えた名族

倉本一宏 著

源氏と聞いてイメージするのは頼朝や義経に代表される武士だろう。だが古代から近世にかけ、源朝臣の姓を賜わった天皇の子孫たちが貴族として活躍する。光源氏のモデルとされる源融、安和の変で失脚した源高明、即位前に源定省と名乗った宇多天皇など、家系は二十一流に及ぶ。久我家、岩倉家、千種家、大原家など中世や幕末・維新期に活躍した末裔も数多い。藤原氏とともに王権を支え続けた名族の全貌。

2574 戦争とは何か
——国際政治学の挑戦

多湖 淳 著

「戦争の原因には何があるのか」「国際介入の効果とは」「民主主義と平和は関係があるのか」「戦争を予測することは可能か」……。本書は、国際政治学の最新線の成果を生かして科学的に国家間戦争や内戦を論じ、多くの疑問に答える。そして緊張を増す東アジアの現状を踏まえ、日本の安全保障などの展望も示す。歴史やイデオロギーから一定の距離を置き、データ分析から実証的に国際情勢と戦争の本質に迫る試み。

2575 移民の経済学

雇用、経済成長から治安まで、日本は変わるか

友原章典 著

すでに250万人の「移民」が暮らす日本。2018年末に入管法を改正し、さらなる外国人労働者の受け入れ拡大に舵を切った。移民が増えると、私たちの生活にどのような影響があるのか。本書は、雇用や賃金、経済成長や物価、貿易、税と社会保障、さらに科学技術、治安・文化に至るまで、主要な論点を網羅。経済学の研究成果をもとに分析することで、感情的な議論を超え、移民がもたらす「損」と「得」を明らかにする。

2576 内戦と和平

現代戦争をどう終わらせるか

東 大作 著

人類の不治の病と言われる戦争。そのほとんどが国家間の紛争ではなく凄惨な内戦である。本書ではシリア、イラク、アフガニスタン、南スーダンなど二十一世紀以降の内戦を例に、発生から拡大、国連や周辺国の介入の失敗、苦難の末に結ばれたはずの和平合意の破綻といった過程を分析。テレビ局の報道ディレクター、国連日本政府代表部公使参事官、そして研究者として一貫して和平調停に関わる著者が、戦争克服の処方箋を探る。

2578 エリザベス女王

史上最長・最強のイギリス君主

君塚直隆 著

1952年に25歳で英国の王位に即いたエリザベス女王。カナダ、オーストラリアなど16カ国の元首でもある。W・チャーチルら十数人の首相が仕え、「政治的な経験を長く保てる唯一の政治家」と評される彼女は、決して「お飾り」ではない。70年近い位の中で政治に関与し、また数多くの事件に遭遇。20世紀末、その振る舞いは強い批判も受けた。本書はイギリス現代史をたどりながら、幾多の試練を乗り越えた女王の人生を描く。

2579 米の日本史

稲作伝来、軍事物資から和食文化まで

佐藤洋一郎 著

日本人にとって特別な食・コメ。稲はどこから日本列島にきたのか、最初の水田を作ったのは誰か、なぜ東北地方で栽培が遅れたのかなど、稲作の起源を解説。インデিকা米が盛んに作られていた中世、地下水路を建設するほど水利に力を入れ、和菓子や酒づくりなど米食文化が開いた近世の実態を紹介。さらに富国強兵を支えた近代を経て現代まで、農学や文化の視点を交えながら「米食悲願民族」の歴史を解き明かす。

2580 移民と日本社会

データで読み解く実態と将来像

永吉希久子 著

少子高齢化による労働力不足や排外主義の台頭もあり、移民は日本の大きな課題だ。本書は、感情論を排し、統計を用いた計量分析で移民を論じる。たとえば「日本に住む外国人の増加により犯罪が増える」と考える人は6割を超えるが、データはその印象を覆す。こうした実証的な観点から、経済、労働、社会保障、そして統合のあり方までを展望。移民受け入れのあり方を通して、日本社会の特質と今後を浮き彫りにする。

2581 台湾の歴史と文化

六つの時代が織りなす「美麗島」

大東和重 著

街路に残る古跡や廟、人びとに愛される「名物料理・信仰と祭り」。『美麗島』とも称される台湾に、今も思づく独自の文化。その伝統は「一六二四年のオランダ統治以来、鄭氏、清朝、国民党に至るまで、各時代の外来政権との関係によって形作られてきた。本書では、激動の台湾を生きた人びとの視点から、四百年におよぶ歴史をたどる。台湾をより深く知るための案内を豊富にまじえて、多様な文化の魅力を活写する。

2582 百年戦争

中世ヨーロッパ最後の戦い

佐藤 猛 著

フランスを主戦場として英仏王家が攻防を繰り返した百年戦争（一二三七―一四五三）。イングランドの大陸領をめぐる積年の対立に、フランス王位継承権争いが絡んで勃発した。当初イングランドが優勢だったが、ジャンヌ・ダルクによるオルレアン解放後、フランスが巻き返して勝利する。戦乱を経て、英仏双方で国民意識はどのように生まれたか。ヨーロッパ中世に終止符を打った戦争の全貌を描き、その歴史的意義を解明する。

2583 鉄道のドイツ史

——帝国の形成からナチス時代、そして東西統一へ

鳩澤 歩 著

1815年、大小さまざまな主権国家の集合体・ドイツ連邦が誕生。以降、ドイツは帝国、共和国、ナチス、東西分裂、そして統一へと、複雑な軌道を疾走した。本書は、同時代に誕生した鉄道という近代技術の担った人びとと、その組織からドイツを論じる。統一国家の形成や二度の世界大戦などの激動に、鉄道はいかなる役割を果たしたのか。「富と速度」（ゲーテ）の国民経済を模索した苦闘とともに、「欧州の盟主」の実像を描き出す。

2584
樗井文書
——日本最大級の偽文書

馬部隆弘 著

中世の地図、失われた大伽藍や城の絵図、合戦に参陣した武将のリスト、家系図……。これらは貴重な史料であり、学校教材や市町村史にも活用されてきた。しかし、もしそれが後世の偽文書だったら？ しかも、たった一人の人物によつて創られたものだとしたら——。樗井政隆（一七七〇—一八三七）が創り、近畿一円に流布し、現在も影響を与え続ける数百点にも及ぶ偽文書。本書はその全貌に迫る衝撃の一冊である。

900円
102584-5

2585
徒然草

——無常観を超えた魅力

川平敏文 著

鎌倉時代末期、兼好法師が著した日本文学屈指の古典『徒然草』。自然の移ろいに美を見だし、死や老いが主題の随想を含むため「無常観の文学」という理解が主流だ。しかし、ペストセラードだった江戸時代には多様な読み方がなされた。江戸幕府に仕えた儒者の林羅山は儒教に基づく注釈書を作り、近松門左衛門は浄瑠璃で兼好を色男として描いた。本書は『徒然草』の知られざる章段や先達の読みを通して奥深さと魅力に迫る。

900円
102585-2

2587
五・一五事件

——海軍青年将校たちの「昭和維新」

小山俊樹 著

昭和恐慌下、民衆が困窮を極める中、政党政治の腐敗を憂える海軍青年将校らが起こした五・一五事件。首相を暗殺し、内大臣邸・警視庁を襲撃、変電所爆破による「帝都暗黒化」とも目論んだ。本書は「北一輝」「橋孝三郎」井上日召ら国家主義者と結合した青年将校たちが、天皇親政の「昭和維新」を唱え、兇行に走った軌跡を描く。事件後、政党内閣は崩壊し軍部が台頭。実行犯の減刑嘆願に国民は熱狂する。昭和戦前、最大の分岐点。サントリー学芸賞受賞

900円
102587-6

2590
人類と病

——国際政治から見る感染症と健康格差

詫摩佳代 著

人類の歴史は病との闘いだ。ペストやコレラの被害を教訓として、天然痘を根絶し、ポリオを抑え込めたのは、20世紀の医療の進歩と国際協力による。しかしマラリアはなお蔓延し、エイズ、エボラ出血熱、新型コロナウイルスなど、新たな感染症が次々と襲いかかる。他方、現代社会では、喫煙や糖分のとりすぎによる生活習慣病も課題だ。医療をめぐる格差も深刻である。国際社会の苦闘をたどり、いかに病と闘うべきかを論じる。サントリー学芸賞受賞

820円
102590-6

2591
白人ナショナリズム

——アメリカを揺るがす「文化的反動」

渡辺 靖 著

白人至上主義と自国第一主義が結びついた「白人ナショナリズム」。トランプ政権の誕生以降、注目を集めるオルトライトをはじめ、さまざまな勢力が連なる反動思想だ。反共、反多文化主義、反ポリテカル・コレクトネスといった旧来の保守と共通する性格の一方、軍備拡張や対外関与、グローバル資本主義を否定する。社会の分断が深まるなか、自由主義の盟主アメリカはどこへ行くのか。草の根のリアルな動向を現地から報告。

800円
102591-3

2594
マックス・ウェーバー

——近代と格闘した思想家

野口雅弘 著

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『仕事としての政治』などで知られるマックス・ウェーバー（一八六四—一九二〇）。合理性や官僚制というキーワードを元に、資本主義の発展や近代社会の特質を明らかにした。彼は政治学、経済学、社会学にとまらず活躍し、幅広い学問分野に多大な影響を及ぼした。本書は、56年の生涯を辿りつつ、その思想を解説する。日本の知識人に与えたインパクトについても論じた入門書。

860円
102594-4

2595
ビザンツ帝国

——千年の興亡と皇帝たち

中谷功治 著

アジアとヨーロッパをつなぐ首都コンスタンティノープルを中心に、千年以上にわたる歴史を刻んだビザンツ帝国。ローマ帝国の継承国家として地中海に覇を唱えた4世紀頃から、イスラム勢力や十字軍に翻弄される時期を経て、近代の到来目前の1453年に力尽きた。賢帝や愚帝がめまぐるしく登場し、過酷な政争や熾烈な外交および戦争を展開する一方、多様な文化が花開いた。波瀾万丈の軌跡をたどり、この帝国の内実を描き出す。

940円
102595-1

2597
カール・シュミット

——ナチスと例外状況の政治学

薩山 宏 著

M・ウェーバー以後、最大の政治思想家か、それとも批判すべきナチのイデオログか——。毀誉褒貶相半ばするドイツの政治学者カール・シュミット（二八八—一九八五）。ワイマール期の『政治神学』から転換点となったホフス論、第二次大戦後の『大地のノモス』まで、主要著作を読み解きつつ、七〇年に及ぶ思索の変遷を辿る。ワイマール思想史研究の第一人者が、尊敬すべき敵の「思想と理論を精緻に解説した入門書」。

860円
102597-5

2598
倫理学入門

——アリストテレスから生殖技術、AIまで

品川哲彦 著

善と正の違いは何か。権利と義務の関係とは——。本書は、倫理学の基礎から始めて、法、政治、経済、宗教と倫理を関連づけながらその意義を再考する。アリストテレスやカントらによる5つの主要理論を平易に概説。さらに、グローバル経済、戦争、移民、安楽死、環境破壊、人工知能など現代社会の直面する難題について倫理学の観点から考察する。社会契約論や功利主義にかんする10の図解と26名の思想家のコラム付き。

880円
102598-2

2601
北朝の天皇

——「室町幕府に翻弄された皇統」の実像

石原比伊呂 著

建武三年（一三三六）、京都を制圧した足利尊氏は新天皇を擁して幕府を開いた。後醍醐天皇は吉野に逃れ、二帝が並び立つ時代が始まる。北朝の天皇や院は幕府の傀儡だったと思われがちだが、歴代将軍は概して手厚く遇した。三代義満による南北朝の合一以降、皇統は北朝系が占めた。一見無力な北朝は、いかに将軍の庇護を受け、生き残りに成功したか。両者の交わりをエピソード豊かに描き、室町時代の政治力学を解き明かす。

880円
102601-9

2602 韓国社会の現在

— 超少子化、貧困・孤立化、デジタル化

春木育美 著

若者の就業率、教育費負担、男女の賃金格差など先進国の中で、「最悪」の数値を示す韓国。特に「圧縮した近代」の結果、1を切った出生率、60%が無年金者という高齢者の貧困率・自殺率は深刻だ。他方で問題解決のため大胆な政策を即実行し、デジタル化などは最先端を行く。本書は少子高齢化、貧困・孤立化、デジタル化、教育、ジェンダーを柱に、深刻化した現状と打開への試行錯誤を描く。韓国の苦悩は日本の近未来でもある。

2603 性格とは何か

— より良く生きるための心理学

小塩真司 著

「あの人は性格がいいね」「もっと明るい性格だったらなあ」——私たちがよく話題にする「性格」。最新の心理学はそこに潜む謎を解明しつつある。歳をとると人はどう変わるのか。住む地域はどんな影響をもたらすか。日本人はどんなネガティブになっているのか。男女は何が同じで何が違うか。「成功」できる性格とは。性格についてよく知ることでも居心地よく暮らせる環境を作り、幸福な人生を送るためのヒント。

2604 SDGs（持続可能な開発目標）

蟹江憲史 著

SDGs（持続可能な開発目標）は、国連で採択された「未来のかたち」だ。健康と福祉、産業と技術革新、海の豊かさを守るなど経済・社会・環境にわたる17の目標があり、2030年までの達成が目指されている。「だれ一人取り残されない」ために目標を設定し、達成のための具体策は裁量に任されているのが特徴だ。ポスト・コロナ時代に、企業・自治体、そして我々個人はどう行動すべきか、第一人者がSDGsのすべてを解説する。

2605 民衆暴力

— 一揆・暴動・虐殺の日本近代

藤野裕子 著

現代の日本で、暴動を目撃する機会はまずないだろう。では、かつてはどうだったのか。本書は、新政反対一揆、秩父事件、日比谷焼き打ち事件、関東大震災時の朝鮮人虐殺という四つの出来事を軸として、日本近代の一面を描く。権力の横暴に対する必死の抵抗か、それとも鬱屈を他者へぶつけた暴挙なのか。単純には捉えられない民衆暴力を通して、近代化以降の日本の軌跡とともに国家の権力と統治のあり方を照らし出す。

2606 音楽の危機

— 『第九』が歌えなくなった日

岡田暁生 著

二〇二〇年、世界的なコロナ禍でライブやコンサートが次々と中止になり、「音楽が消える」事態に陥った。集うことすらできない——交響曲からオペラ、ジャズ、ロックに至るまで、近代市民社会と共に発展してきた文化がかつてない窮地を迎えている。一方で、利便性を極めたストリーミングや録音メディアが「音楽の不在」を覆い隠し、私たちの危機感には麻痺している。文化の終焉か、それとも変化の契機か。音楽のゆくえを探る。

小林秀雄賞受賞

2608 万葉集講義

— 最古の歌集の素顔

上野 誠 著

奈良時代の後期に成立し、短歌・長歌など四五・一六首を収める『万葉集』。歴代天皇や皇族、宮廷貴族、律令官僚がおもな作者だ。他方で防人、東国の農民、遊女といった庶民の歌も含む。幅広い階層が詠んだ、きわめて日本的な「国民文学」のイメージで語られるが、それははたして妥当か。古代日本が範を仰いだ中国の詩文の色濃いつい影響をどう見るべきか。代表的な歌々を紹介・解説しつつ、現存最古の歌集の実像を明らかにする。

2610 ヒトラーの脱走兵

— 裏切りか抵抗か、ドイツ最後のタブー

對馬達雄 著

ナチス・ドイツ国防軍の脱走兵は、捕らえられて死刑判決を受けた者だけでも3万人以上で、英米に比べて際だって多い。その多くは戦闘中の逃亡ではない。民族殲滅に加担したくないという、生命をかけた抵抗であった。戦後、生き延びた脱走兵たちは久しく卑怯者と罵られ存在までも否定されつづけるが、ついに軍法会議の不当な実態を暴き、名誉回復をなし遂げる。最後の脱走兵の生涯を通じて、人間の勇氣と尊厳を見つめる。

2611 アメリカの政党政治

— 建国から250年の軌跡

岡山 裕 著

アメリカの民主・共和の二大政党は、世界の中で極めて異質だ。両党は、地域の政党組織の連合体に過ぎず、党首、恒常的な綱領、党議拘束もない。他方で、地方政治家、政府高官、裁判官など隅々にまで浸透し、いずれかの党派であることが当然視される。両党は法によって優遇されている。本書は、支持層・基盤を変えながら二大政党が制度化していく歴史を辿り、大統領を中心に語られてきたアメリカ政治の本質を描く。

2612 デジタル化する新興国

— 先進国を超えるか、監視社会の到来か

伊藤亜聖 著

デジタル技術の進化は、新興国・途上国の姿を劇的に変えつつある。中国、インド、東南アジアやアフリカ諸国は、今や最先端技術の「実験場」と化し、決済サービスやWeChatなどのスーパーアプリでは先進国を凌駕する。一方、雇用の悪化や、中国が輸出する監視システムによる国家の取り締まり強化など、負の側面も懸念される。技術が増幅する新興国の「可能性とリスク」は世界に何をもちたか。日本がとるべき戦略とは。読売・吉野作造賞受賞

2613 古代メソポタミア全史

— シュメル、バビロニアからサッサーン朝ペルシアまで

小林登志子 著

人類初の文明は5500年前のメソポタミアに生まれた。灌漑農業、都市、文字など、現代でも必須な文明の要素は全てこのときにシュメル人が発明した。その後「目には目」で名高いハンムラビ王、初の世界帝国を築いた新アッシリアのアッシュル・バニバル王、「バビロン捕囚」で悪名高いネブカドネザル二世など数々の王たちが現れ、様々な民族の王朝が抗争を繰り返す。イスラームの登場まで、4000年の興亡を巨細に描く。

2615 物語 東ドイツの歴史

― 分断国家の挑戦と挫折

河合信晴 著

ドイツは第二次世界大戦の敗北後、東西に分裂する。ソ連の影響下、社会主義国として四〇年にわたって存在したのが東ドイツである。東西統一後、東ドイツは、非人道的な独裁政治やシュタージといった秘密警察の監視など、負の側面ばかり強調されてきた。本書は、ベルリンの壁崩壊後に明らかになった史料から、楽観的で無責任な指導部、豊かさを求めて声を上げる民衆など、壁の向こうの実験国家の実態と全貌を描く。

900円
102615-6

2616 法華経とは何か

― その思想と背景

植木雅俊 著

『法華経』は、釈尊入滅から約五百年後、紀元一世紀末から三世紀初頭のインド北西部で誕生したとされる。日本には六世紀半ばに伝わり、『法華秀句』を著した最澄や『法華経の行者』を自注した日蓮から、松尾芭蕉、宮沢賢治に至るまで、後世に広く影響を与えた。本書では、サンスクリット原典の徹底的な精読を通じて、「諸経の王」とも称される仏典の全体像を描き、平等な人間観に貫かれた教えの普遍性と現代的意義を示す。

900円
102616-3

2617 暗殺の幕末維新史

― 桜田門外の変から
大久保利通暗殺まで

一坂太郎 著

近代日本が生まれた幕末維新期。日本史上これほど暗殺が頻発した時期はない。尊皇攘夷論の洗礼を受けた者をはじめ、彼らはずっと暗殺に走ったのか。本書は大老井伊直弼から内務卿大久保利通に至る国家の中枢、外国人、坂本龍馬らの志士、市井の人々までが次々に標的となった事件の凄惨な実相と世間の反応を描く。さらに後世、一方で暗殺者を顕彰し、他方で忌避した明治国家の対応も詳述する。闇から見つめる幕末維新史。

820円
102617-0

2618 板垣退助

― 自由民権指導者の実像

中元崇智 著

「板垣死すとも自由は死せず」の言で名高い板垣退助（1837-1919）。戊辰戦争で官軍の指揮官として名声を得た彼は、維新後、政権に参画するも西郷隆盛らと下野。民選議会設立を求め自由民権運動に邁進し、日本初の全国政党・自由党を結成する。議会開設後は第一党のトップとして藩閥政府と対峙。のちに大隈重信と初の政党内閣を組織した。多くの大衆から愛され、近代日本に大きな足跡を残した志士の真実。

860円
102618-7

2619 ものけの日本史

― 死霊、幽霊、妖怪の1000年

小山聡子 著

モノノケは、古代・中世では、正体不明の死霊を指した。病氣や死をもたらす恐ろしい存在で、貴族らは退治や供養に苦心した。近世になると幽霊や妖怪と同一視され、怪談や幽霊入りの玩具を通して庶民に親しまれる。明治以降、知識人のみならず政府もその存在を否定するが、新聞に掲載される怪異や文芸作品で語られる化物たちの人気は根強かった。本書は、豊富な史料からモノノケの系譜を辿り、日本人の死生観、霊魂観に迫る。

900円
102619-4

2620 コロナ危機の政治

― 安倍政権 vs 知事

竹中治堅 著

二〇二〇年一月十五日に日本で最初の罹患者が確認された新型コロナウイルス感染症。中国・武漢での発生から日本への到来、一斉休校、緊急事態宣言とその解除、そして安倍政権の退陣まで。この九か月に及ぶ経緯から見えてきたのは、強大な権力を手に入れて「一強」とまで言われた「首相支配」への制約だった。安倍政権と知事らの対応のプロセスを丹念にたどり、危機が明らかにした日本の政治体制とその問題点を描く。

980円
102620-0

2621 リベラルとは何か

― 17世紀の自由主義から現代日本まで

田中拓道 著

現代のリベラルは「すべての個人が自由に生き方を選択できるよう、国家が一定の再分配を行うべきだ」と考える。リベラルは17世紀ヨーロッパの自由主義から思想的刷新を重ね、第二次世界大戦後は先進諸国に共通する政治的立場となった。しかし20世紀後半の新自由主義や近年のポピュリズムなどの挑戦を受け、あり方の模索が続く。本書は理念の変遷と現実政治の展開を丁寧に、日本でリベラルが確立しない要因にも迫る。

820円
102621-7

2622 明智光秀

― 織田政権の司令塔

福島克彦 著

織田信長は版図拡大に伴い、柴田勝家、羽秀秀吉ら有力部将に大幅な権限を与え、前線に送り出した。だが明智光秀の地位はそれらは一線を画す。一貫して京都とその周辺を任され安土城の信長から近く、政権の司令塔ともいえる役割を果たした。検地による領国掌握、軍法の制定などの先進的な施策は、後年の秀吉が発展的に継承している。織田家随一と称されるながら、本能寺の変で主君を討ち、山崎合戦で敗れ去った名將の軌跡。

900円
102622-4

2623 古代マヤ文明

― 栄華と衰亡の3000年

鈴木真太郎 著

かつて中米に栄えた古代マヤ。前一〇〇〇年頃に興り、一六世紀にスペインに征服された。密林に眠る大神殿、高度に発達した天文学や暦など、かつては神秘的なイメージが強かったが、最新の研究で「謎」の多くは明かされている。解説が進んだマヤ文字は王たちの事績を語り、出土した人骨は人びとの移動や食生活、戦争の実態まで浮き彫りにする。現地での調査に長年携わった著者が、新知見をもとに、その実像を描く。

960円
102623-1

2625 新型コロナの科学

― パンデミック、そして共生の未来へ

黒木登志夫 著

未曾有のパンデミックはなぜ起きたか。世界を一変させた新型コロナウイルス。本書は、治療薬やワクチン開発を含む研究の最前線を紹介。膨大な資料からその正体を探る。ロックダウン前後のベネチア、雲南省の洞窟、武漢ウイルス研究所、ダイヤモンド・プリンセス号と舞台を移してウイルスの変遷を辿り、見えない敵に立ち向かう人々のドラマを生き生きと描く。日本政府の対応にも鋭く迫り、今後の課題を浮き彫りにする。山中伸弥氏推薦。

940円
102625-5

2626 フランクリン・ローズヴェルト
—大恐慌と大戦に挑んだ指導者—
佐藤千登勢 著
フランクリン・D・ローズヴェルトはアメリカ史上唯一4選された大統領である。在任中、大恐慌と第二次世界大戦という未曾有の危機に直面した。内政では大胆なニューディール政策を採用、外交ではチャーチルやスターリンと協力してドイツ、日本など枢軸国と戦い、勝利に導いた。ポリアオの後遺症による不自由な身体を抱えつつ、いかにして20世紀を代表する指導者となったか。妻エレノアらとの人間模様も交え、生涯を活写する。

880円
102626-2

2627 戦後民主主義
—現代日本を創った思想と文化—
山本昭宏 著
アジア・太平洋戦争の悲惨な経験から、多くの支持を得た戦後民主主義。日本国憲法に基づく民主主義・平和主義の徹底を求める思想である。だが冷戦下、戦争放棄の主張は理想主義と、経済大国化後は「一国平和主義」と批判され、近年は改憲論の前に守勢にある。本書は戦後の制度改革、社会運動から政治家、知識人、映画などに着目し、戦後民主主義の実態を描く。日本社会にいかなる影響を残したのか、その軌跡を追う。

920円
102627-9

2628 英文法再入門
—10のハードルの飛び越え方—
澤井康佑 著
「英語は苦手、でも得意になりたい」と思っている人に！英語が難しい原因は次の2つです。1つは英語が日本語と全く別の言語だから、もう1つは中学・高校で正しい方法と順番で学ばなかったからです。この2点を意識しながら、中学・高校の英文法をもう一度学んでみましょう。本書は、名詞の用法から基本の5文型、誰もががまずく不定詞句や関係詞まで、工夫を凝らした10の講義で解説。これで自信がつくはずですよ。

880円
102628-6

2629 ロヒンギヤ危機
—「民族浄化」の真相—
中西嘉宏 著
ロヒンギヤは、ミャンマー西部に住むイスラーム系民族だ。軍事政権下、長く差別されてきた。2017年の国軍による掃討作戦以降、大量の難民が発生し、現在100万人が隣国のキャンプで暮らす。民主化運動の指導者アウンサンスーチーはなぜ「虐殺」を否定するのだ。本書は、複雑な歴史的背景やミャンマーをめぐる国内・国際政治を通して、アジア最大の人道・人権問題の全貌を示す。

880円
102629-3

2630 現代音楽史
—闘争しつづける芸術のゆくえ—
沼野雄司 著
長い歴史をもつ西洋音楽は、二十世紀に至って大きく変貌する。シェーンベルクやストラヴィンスキーに始まり、ジョン・ケージ、武満徹、バース・ティン……。多くの作曲家が既存の音楽の解体をめざして無調、十二音技法、トーン・クラスター、偶然性の音楽などといったさまざまな技法を開発し、音の実験を繰り返した。激動する政治や社会、思想を反映しながら時代との闘争を続ける「新しい」音楽のゆくえとは。ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞

900円
102630-9

2631 現代民主主義
—指導者論から熟議、ポピュリズムまで—
山本 圭 著
二〇世紀以降、思想・理論ともにさらなる多様化が進む民主主義。本書は、政治学をはじめ、ウェバー、シュミット、シュンペーター、アレント、デリダ、ムフなどの思想家から、その大きな潮流と意義を捉える。指導者や選挙による競争、市民参加、熟議・闘争、ポピュリズムといった多くの論点から、現代デモクラシー論の可能性に迫る。試行錯誤を繰り返してきた軌跡を通して、二一世紀の民主主義を模索する試み。

860円
102631-6

2632 男が介護する
—家族のケアの実態と支援の取り組み—
津止正敏 著
かつて女性中心で行われてきた家族の介護。今では男性（夫や息子など）が担い手の3分の1を占めるが、問題は少なくない。孤立し、追い詰められた男性介護者による虐待、心中などの事件は後を絶たない。他方で介護離職を余儀なくされる人もいる。本書は、悲喜こももものケアの実態、介護する男性が集い、支え合う各地のコミュニティの活動を、豊富なエピソードを交えて紹介。仕事と介護が両立できる社会に向けた提言を行う。

820円
102632-3

2633 日本の歴史的建造物
—社寺・城郭・近代建築の保存と活用—
光井 渉 著
法隆寺や姫路城はじめ、日本には世界遺産に指定された歴史的建造物が多い。だが、「役割を終えた古い建物」でしかなかったそれらに価値や魅力が「発見」されたのは、実は近代以降のことである。そして、保存や復元、再現にあたっては、その建造物の「正しい」あり方が問われた。歴史上何度も改築された法隆寺、コンクリート構造の大阪城天守閣、東京駅、首里城……。明治時代から現代に至る美の発見のプロセスをたどる。

900円
102633-0

2634 サラ金の歴史
—消費者金融と日本社会—
小島庸平 著
個人への少額の融資を行ってきたサラ金や消費者金融は、多くのテレビCMや屋外看板で広く知られる。戦前の素人高利貸から質屋、団地金融などを経て変化した業界は、経済成長や金融技術の革新で躍進した。だが、バブル崩壊後、多重債務者や苛烈な取り立てによる社会問題化に追い詰められていく。本書は、この一世紀に及ぶ軌跡を追う。家計やジェンダーなど多様な視点から、知られざる日本経済史を描く意欲作。サントリー学芸賞、新書大賞受賞

980円
102634-7

2635 文部科学省
—揺らぐ日本の教育と学術—
青木栄一 著
文部科学省は2001年に文部省と科学技術庁が統合し、発足した。教育、学術、科学技術を中心に幅広い分野を担当する一方で「三流官庁」とも揶揄される。実態はどのようなものか。霞が関最小の人員、キャリア官僚の昇進ルート、減り続ける予算など実状を解説。さらに、ゆとり教育の断念、働きすぎの教員たち、大学入試改革の頓挫、学術研究の弱体化など続出する問題に迫る。官邸や経産省に振り回される現状は変えられるか。

800円
102635-4

2636 古代日本の官僚
— 天皇に仕えた怠惰な面々

虎尾達哉 著

壬申の乱の勝者である天武天皇以降の日本は、律令に基づく専制君主国家とされる。だが貴族たち上級官僚とは異なり、下級官僚は職務に忠実とは言えず、勤勉でもなかった。朝廷の重要な儀式すら無断欠席し、日常の職務をしばしば放棄した。なぜ政府は寛大な措置に徹したのか。その背後にあった現実主義とは、飛鳥・奈良時代から平安時代にかけて、下級官僚たちの勤務実態を具体的に検証し、古代国家の知られざる実像に迫る。

800円
102636-1

2637 英語の読み方

— ニュース、SNSから小説まで

北村一真 著

ネット上で海外発の情報に接する機会が増えた昨今、英語を読む力の重要性はますます高まっている。本書では、ニュース記事や論文、SNS、小説など、幅広いタイプの英文の読み方を指南。論理的な読み解きのセオリーを解説する。独学者にとって宝の山である各種サイトの活用法や、ネイティブでも間違えやすい表現など、「さらに上」を目指す人へのガイドも満載。巻末に、重要語彙・文法が身につく60の厳選例文を収録。

800円
102637-8

2638 幣原喜重郎

— 国際協調の外交家から
占領期の首相へ

熊本史雄 著

戦前に外相を4度務め、経済重視の国際協調を主導、戦後は占領下、首相として日本国憲法制定に尽力した幣原喜重郎。外交官の中枢を歩み、欧米との関係を重視した「幣原外交」は、軟弱と批判されながらも中国への不干渉を貫き、政党政治を支えた。満洲事变後の軍部台頭に引退を余儀なくされるが敗戦後、昭和天皇に請われ復活。民主化や憲法9条の成立に深く関与する。激動の昭和期、平和を希求し続けた政治家の実像に迫る。

880円
102638-5

2639 宗教と日本人

— 葬式仏教から
スピリチュアル文化まで

岡本亮輔 著

日本では信仰を持たない人が大半を占めるが、他方で仏教や神道、キリスト教の行事とは縁が深い。日本人と宗教の不可思議な関わりはどこへ向かうのか。新宗教の退潮とスピリチュアル文化の台頭、変わる葬式や神社の位置づけ、ケルトや縄文など古代宗教のブーム……。宗教を信仰の面だけでなく、実践や所属の観点も踏まえ、その理解を刷新。人々の規範から消費される対象へと変化しつつある宗教の現在地を示す。

820円
102639-2

2641 小説読解入門

— 『ミドルマーチ』教養講義

廣野由美子 著

読書に正解はないかもしれないが、小説世界を味わうコツは存在する。本書は、19世紀英国の地方都市を舞台としたジョージ・エリオットの傑作長編『ミドルマーチ』を実例に、「小説技法篇」で作家の用いるテクニクを解説。続く「小説読解篇」では、歴史や宗教、科学、芸術などの《教養》を深める目の着眼点で、小説の愉しみを伝授する。知性と感性を研ぎ澄まし、文学の奥深くに潜むものを読み取るために。

900円
102641-5

2643 イギリス1960年代

— ビートルズからサッチャーへ

小関 隆 著

第2次世界大戦後のベビーブームを背景に、若者文化が花開いた1960年代。中心にはビートルズが存在し、彼らの音楽・言動は世界に大きな衝撃を与えた。他方、サッチャー流の新自由主義も実はこの時代に胚胎した。今なお影響を与え続ける若者文化と新自由主義の象徴は、なぜイギリスで生まれたか——。本書は、ファッション、アートなどの百花繚乱、激動の社会とその反動を紹介し、1960s Britainの全貌を描く。

860円
102643-9

2644 植物のいのち

— からだを守り、子孫につなぐ
驚きのしくみ

田中 修 著

森の中で巨樹を伐る。轟音を立てて倒れ、生命が絶たれたように見える。だがしばらくすると切り株から小さな芽が生まれてくる。死んだと思つた木は生きていたのだろうか。植物の「いのち」は、わたしたち動物とはずいぶん違つて見える。動かず、しゃべらず、食べない。一方で、栄養を自分で作る、体の一部が失われても復活するなど、動物には真似できない能力も持つ。ユニークな「いのち」の形と仕組みをやさしく解説。

860円
102644-6

2645 天正伊賀の乱

— 信長を本気にさせた伊賀衆の意地

和田裕弘 著

三重県西部の伊賀市・名張市エリアはかつて伊賀国と呼ばれた。戦国時代、この小国は統治者がおらず、在地領主たちが割拠していた。一五七九年、織田信長の次男信雄は独断でこの地に侵攻。挙国体制で迎え撃つた伊賀衆は地の利を生かして巧みに抗戦し、信雄は惨敗を喫した。信長から厳しく叱責された信雄は翌々年、大軍勢を率いて再び襲いかかる——。文献を博搜した著者が、強大な外敵と伊賀衆が繰り広げた攻防を描く。

880円
102645-3

2646 ケアとは何か

— 看護・福祉で大事なこと

村上靖彦 著

やがて訪れる死や衰弱は、誰にも避けられない。自分や親しい人が苦境に立たされたとき、私たちは「独りでは生きていけない」と痛感する。ケアとは、そうした人間の弱さを前提とした上で、生を肯定し、支える営みである。本書は、ケアを受ける人や医療従事者、ソーシャルワーカーへの聞き取りを通して、より良いケアのあり方を模索。介護や地域活動に徹底する「当事者主体の支援」を探り、コロナ後の課題についても論じる。

840円
102646-0

2648 藤原仲麻呂

— 古代王権を動かした異能の政治家

仁藤敦史 著

古代王権が安定した奈良時代に現れた異能の権力者・藤原仲麻呂。叔母・光明皇后の寵愛の下、橘奈良麻呂の変などで兄や他氏を粛清し実権を掌握。中国への憧憬から官職名をすべて唐風に改め、藤原氏嫡系に「惠美」姓を賜り准皇族化を推進、自ら惠美押勝と名乗った。養老律令の施行、新羅への外征計画を進める中、怪僧道鏡を慕う孝謙上皇と対立。武装蜂起を試みるが敗死する。息子らを「親王」と呼ばせ、皇位継承をも目論んだ生涯。

860円
102648-4

2649 東京復興ならず

—文化首都構想の挫折と戦後日本

吉見俊哉 著

空襲で焼け野原となった東京は、戦災復興、高度経済成長と一九六四年五輪、バブル経済、そして二〇二〇年五輪といった機会のたびに、破壊と大規模開発を繰り返して巨大化してきた。だが、戦後の東京には「文化」を軸とした、現在とは異なる復興の可能性があった……。南原繁や石川栄耀の文化首都構想、丹下健三の「東京計画1960」など、さまざまな「幻の東京計画」をたどりながら、東京の失われた未来を構想しなおす。

960円
102649-1

2650 米中対立

—アメリカの戦略転換と
分断される世界

佐橋 亮 著

「中国は唯一の競争相手」——バイデン米大統領がこう明言するように、近年、米中の角逐は激しさを増している。貿易戦争、科学技術開発競争、香港・台湾問題……。米国の対中姿勢は関与・支援から対立へとなぜ一変したのか。両国のリーダーが誰になろうとも、今後も対立が続く。緊張緩和はないのか。国交回復から現在まで、五〇年にわたる米中関係をたどり、分断が進む世界のなかで、日本のとるべき針路を考える。

940円
102650-7

2651 政界再編

—離合集散の30年から何を学ぶか

山本健太郎 著

1993年に細川政権が発足し、日本政治は政界再編の時代に入りました。非自民勢力の結集は新進党で一度挫折するが、二度の合流で伸長した民主党は2009年に政権交代を果たした。しかし政権崩壊後、民主党は四分五裂し、「第三極」も低迷。自公政権のもと「二強多弱」に陥った。大同団結しなければ選挙に勝てず、政党が拡大すれば路線対立が激化する……。ジレンマを乗り越え、「政権交代」可能な日本政治「実現の道」を示す。

840円
102651-4

2652 戦争はいかに終結したか

—二度の大戦から
ベトナム、イラクまで

千々和泰明 著

第二次世界大戦の悲劇を繰り返さない——戦争の抑止を追求してきた戦後日本。しかし先の戦争での日本の過ちは終戦交渉をめぐる失敗にもあった。戦争はいかに收拾すべきなのか。二度の世界大戦から朝鮮戦争とベトナム戦争、さらに湾岸戦争やイラク戦争まで、二〇世紀以降の主要な戦争の終結過程を精緻に分析。「根本的解決と妥協的和平のジレンマ」を切り口に、真に平和を回復するための「出口戦略」を考える。

920円
102652-1

2653 中先代の乱

—北条時行、鎌倉幕府再興の夢

鈴木由美 著

鎌倉幕府滅亡から二年後の一三三五年、北条高時の遺児時行が信濃で挙兵。動揺する後醍醐天皇ら建武政権を尻目に進撃を続け、鎌倉を陥落させた。二十日はど後、足利尊氏によって鎮圧されるも、この中先代の乱を契機に歴史は南北朝時代へと動き出す。本書は、同時代に起きた各地の北条氏残党による蜂起や陰謀も踏まえ、乱の内実を読み解く。また、その後の時行たちの動向も追い、時流に抗い続けた人々の軌跡を描く。

820円
102653-8

2654 日本の先史時代

—旧石器・縄文・弥生・古墳時代を
読みなおす

藤尾慎一郎 著

日本史の教科書で最初に出てくる、旧石器・縄文・弥生・古墳時代。三万六〇〇〇年に及ぶ先史の時代区分は、明治から戦後にかけて定着していった。しかし近年、考古学の発展や新資料の発掘に伴い、それぞれの時代の捉え方は大きく塗りかえられている。本書では、各時代の「移行期」に焦点を当て、先史の実像を描き出す。人びとの定住、農耕の開始、祭祀、「都市」の出現、前方後円墳の成立……。研究の最前線を一望する決定版。

940円
102654-5

2655 刀伊の入寇

—平安時代、最大の対外危機

関 幸彦 著

藤原道長が栄華の絶頂にあつた一〇一九年、対馬・豊岐と北九州沿岸が突如、外敵に襲われた。東アジアの秩序が揺らぐ状況下、中国東北部の女真族（刀伊）が海賊化し、朝鮮半島を経て日本に侵攻したのだ。道長の甥で大宰府在任の藤原隆家は、有力武者を統率して奮闘。刀伊を撃退するも死傷者・拉致被害者は多数に上った。当時の軍制をふまえて、平安時代最大の対外危機を検証し、武士台頭以前の戦闘の実態を明らかにする。

840円
102655-2

2657 平沼騏一郎

—検事総長、首相からA級戦犯へ

萩原 淳 著

司法と行政の頂点を極めた唯一の政治家・平沼騏一郎。東大を首席で卒業後、能吏の閑こえ高く、大逆事件を処理し、検事総長、大審院長を歴任。政界進出を目論み右翼団体・国本社を組織する。軍人らの期待を集め、日中戦争下、首相に就任。日米開戦後は重臣、枢密院議長として和平派へ。機会主義と映る行動から右翼に銃撃され、自宅放火にも遭った。天皇崇拜の国家主義者、陰謀家、A級戦犯として断罪され続けた平沼の実像を描く。

900円
102657-6

2658 物語 パリの歴史

—「芸術と文化の都」の2000年

福井憲彦 著

古代ローマのカエサルのカリア遠征に始まり、フランク王国、ベストの流行、百年戦争、ルネサンス、絶対王政、フランス革命など、常に世界史の中心に位置してきたパリ。「芸術と文化の都」として、世界で最も多くの旅行者を惹きつけている。その尽きせぬ魅力の源は何か。歴史を彩る王たち、たび重なる戦争と疫病の危機、そして文学や思想、芸術、建築……。フランス史の達人とともに訪ねる二〇〇〇年の歴史の旅。

900円
102658-3

2659 経済社会の学び方

—健全な懐疑の目を養う

猪木武徳 著

私たちが暮らす経済社会——経済的な関係が深く染みこんだ社会とどうつき合うべきか。その仕組みを知り、そこで起る問題解決のために必要なことは。データの重要性和限界、理論の功罪、因果推論の効果と弱点から、人間心理を扱う難しさ、歴史に学ぶ意義と注意点、政治との距離感まで、経済社会について学ぶためのヒントに満ちた一冊。溢れる情報に「健全な懐疑の目」で接し、社会を少しでも良くしたい全ての人々へ。

860円
102659-0

2660 原 敬

「平民宰相」の虚像と実像

清水唯一朗 著

初の「平民」首相として、本格的政党内閣を率いた原敬。戊辰戦争で敗れた盛岡藩出身の原は苦学を重ね、新聞記者を経て外務省入省、次官まで栄進する。その後、伊藤博文の政友会に参加、政治家の道を歩む。大正政変、米騒動など民意高揚の中、閣僚を経て党の看板として藩閥と時に敵対、時に妥協し改革を主導。首相就任後、未来を見据えた改革途上で凶刃に倒れた。独裁的、権威的と評されるリアリスト原の軌跡とその真意を描く。

900円
102660-6

2661 アケメネス朝ペルシア

史上初の世界帝国

阿部拓児 著

2500年前、アジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸にまたがる「史上初の世界帝国」として君臨したアケメネス朝ペルシア。エジプト侵攻やペルシア戦争など征服と領土拡大をくり返し、王はアフラマズダ神の代行者として地上世界の統治に努めた。古代オリエントで栄華を極めるも、アレクサンドロス大王によって滅ぼされ、2200年の歴史は儚く幕を閉じた。ダレイオス1世から9人の王を軸に、大帝国の全貌と内幕を描き出す。

880円
102661-3

2662 荘 園

「墾田永年私財法から応仁の乱まで

伊藤俊一 著

荘園は日本の原風景である。公家や寺社、武家など支配層の私有農園をいい、奈良時代に始まる。平安後期から増大し、院政を行う上皇の権力の源となった。鎌倉時代以降、武士勢力に侵食されながらも存続し、応仁の乱後に終焉を迎える。私利私欲で土地を開墾し込み、国力の秩序を乱したと見られがちな荘園だが、農業生産力向上や貨幣流通の進展に寄与した面は見逃せない。新知見もふまえ、中世社会の根幹だった荘園制の実像に迫る。

900円
102662-0

2663 物語 イスタンブールの歴史

「世界帝都」の1600年

宮下 遼 著

ローマ帝国の混乱を取ったコンスタンティヌス一世が三三〇年に建設した「新ローマ」から、一九二二年のオスマン帝国滅亡まで一六〇〇年余り、「世界帝都」として繁栄したイスタンブール。本書は、ビザンツとオスマン、二つの帝国支配の舞台となったこの地の案内記である。城壁に囲まれた旧市街から、西欧化の象徴である新市街、東の玄関口アジア岸、そして近代のメガシティへ――複雑多彩な古都を愉しむ時間旅行。

920円
102663-7

2664 歴史修正主義

「ヒトラー賛美、ホロコースト否定論から法規制まで」

武井彩佳 著

ナチによるユダヤ人虐殺といった史実について、意図的に歴史を書き替える歴史修正主義。フランスでは反ユダヤ主義の表現、ドイツではナチ擁護として広まる。一九八〇年代以降は、ホロコースト否定論が世界各地で噴出。独仏では法規制、英米ではアヴィンク裁判を始め司法で争われ、近年は共産主義の評価をめくり、東欧諸国で拡大する。本書は、一〇〇年以上に及ぶ欧米の歴史修正主義の実態を追ひ、歴史とは何かを問う。

840円
102664-4

2665 三好一族――戦国最初の「天下人」

天野忠幸 著

阿波の守護細川氏に仕え、主家に従い畿内に進出した三好氏。全盛期の当主長慶は有能な弟たちや重臣松永久秀と覇業に邁進し、主家を凌ぐ勢力となる。やがて足利将軍家の権威に抱けない政権を樹立し、最初の「天下人」と目された。政権が短命で終わった後も、織田信長の子や羽柴秀吉の甥を養子に迎えるなど名門の存在感保たれ、その血脈は江戸時代になっても旗本として存続する。信長に先駆けて天下に号令した一族の軌跡。

820円
102665-1

2666 ドイツ・ナシヨナリズム

「普遍」対「固有」の二千年史

今野 元 著

アメリカの世界覇権が弱りを見せるなか、欧州で主導権を握り、存在感を増すドイツ。だが英仏など周辺国からの反撥は根強い。そこには歴史の経緯や、経済をはじめとする国力の強大化への警戒感だけでなく、放漫財政を指摘し、難民引き受けや環境保護を迫るなど、西欧的「普遍」的価値観に照らした「正しさ」を他国にも求める姿勢がある。二千年にわたる歴史を繙き、ドイツはいかにして「ドイツ」となったのかをさぐる。サントリー学芸賞受賞

960円
102666-8

2667 南北朝時代

五胡十六国から隋の統一まで

会田大輔 著

中国の南北朝時代とは、五胡十六国後の北魏による華北統一（439年）から隋の中華再統一（589年）までの150年を指す。北方遊牧民による北朝（北魏・東魏・西魏・北齊・北周）と漢人の貴族社会による南朝（宋・齊・梁・陳）の諸王朝が興っては滅んだ。南北朝の戦争に加え、六鎮の乱や侯景の乱など反乱が続いた一方、漢人と遊牧民の交流から、後世につながる制度・文化が花開いた。激動の時代を生きた人々を活写する。

900円
102667-5

2668 宗教図像学入門

「十字架、神殿から仏像、怪獣まで」

中村圭志 著

十字架、仏像、モスク、曼荼羅、地獄絵図、神話の神々、竜……。シンボルマークや聖なる空間、絵画、彫刻、映画などによって形成された「イメージ」は、教義と並ぶ宗教の重要な特徴だ。それを分析する技法が宗教図像学である。本書では、ユダヤ教、キリスト教、仏教をはじめ、世界の主な宗教の図像学的知識を一挙解説。「天界の王族」「聖なる文字」などのトピックごとに、奥深い宗教文化の魅力を余すことなく紹介する。

960円
102668-2

2669 古代中国の24時間

――秦漢時代の衣食住から性愛まで――

柿沼陽平 著

始皇帝、項羽と劉邦、曹操ら英雄が活躍した古代の中国。二千年前の人々はどうな日常生活を送っていたのか。気鋭の中国史家が文献史料と出土資料をフル活用し、服装・食卓・住居から宴会・性愛・育児まで、古代中国の一日24時間を再現する。口臭にうろさく、女性たちはイケメンに狂狂、酒に溺れ、食欲に性を愉しむ……。驚きに満ちながら、現代の我々ともどこか通じる古代人の姿を知れば、歴史がもっと愉しくなる。

960円
102669-9

2670 サウジアラビア
「イスラーム世界の盟主」の正体

高尾賢一郎 著

2671 親孝行の日本史

— 道徳と政治の1400年

勝又 基 著

2672 南極の氷に何が起きているか

— 気候変動と氷床の科学

杉山 慎 著

2673 国造（くのみやつこ）

— 大和政権と地方豪族

篠川 賢 著

2674 ジョン・ロールズ

— 社会正義の探究者

齋藤純一／田中将人 著

2675 江戸 — 平安時代から家康の建設へ

齋藤慎一 著

2676 地球外生命

— アストロバイオロジーで探る
生命の起源と未来

小林憲正 著

2677 エビはすごい カニもすごい

— 体のしくみ、行動から食文化まで

矢野 勲 著

2678 北条義時

— 鎌倉殿を補佐した二代目執権

岩田慎平 著

2679 資本主義の方程式

— 経済停滞と格差拡大の謎を解く

小野善康 著

1744年にアラビア半島に誕生したサウジアラビア。王政国家、宗教権威、産油国の貌を持つキメラのような存在だ。王室内の権力闘争や過激主義勢力との抗争、石油マネーをめぐる利権により、内実とはヴェールに包まれている。中東の新興国はいかにして「イスラーム世界の盟主」に上りつめたのか。宗教・経済・女性問題は克服できるか。イスラームの国家観と西洋近代の価値観の狭間で変革に向かう、大国の実像を描き出す。

820円
102670-5

孝とは、親を大切にすることで、儒教の基本的徳目だ。律令で孝行者の表彰が定められ、七十四年に最古の例が見られる。以来、孝子は為政者から顕彰され、人々の尊敬を集めた。特に江戸時代は表彰が盛んに行われ、多くの孝子伝が編まれた。明治に入り教育の中心に据えられるが、戦後、軍国主義に結びついたとして否定された。それは常に支配者の押しつけた。豊富な資料で「孝」を辿り、日本人の家族観や道徳観に迫る。

860円
102671-2

日本の面積の約40倍に及ぶ。地球最大の氷。こと南極氷床。極寒の環境は温暖化の影響を受けたけいとい言われてきたが、近年の研究で急速に氷が失われつつある事実が明らかに。大規模な氷床融解によって、今世紀中に2メートルも海面が上昇するという「最悪のシナリオ」も唱えられている。不安は現実のものとなるか。危機を回避するためにすべきことは。氷床研究の第一人者が、謎多き「氷の大陸」の実態を解き明かす。 講談社科学出版賞受賞

860円
102672-9

古墳時代から飛鳥時代にかけて地方行政のトップにあったのが、有力豪族が任命された国造である。だが、その実態は謎も多い。本書は、稲荷山鉄剣銘に刻まれた「ヲウケ」の名や、筑紫の磐井など国造と関連する豪族、記紀の記述を紹介しながら、国造制とは、いつ施行されたのか、どのような制度で、誰が任命され、いつ廃止されたのかまでを描き出す。さらに奈良時代以降に残った国造がどのような存在であったのかなどを解説する。

860円
102673-6

米国の政治哲学者ジョン・ロールズ（1921-2002）。1971年刊行の『正義論』において、独創的な概念を用いて構築した「公正な社会」の構想は、リベラリズムの理論的支柱となった。「平等な自由」を重視する思想はいかに形成されたか。太平洋戦線における従軍体験、広島への原爆投下の記憶がロールズに与えた影響とは。最新資料から81年の生涯を捉え直し、思想の全体像を解説。その課題や今日の意義にも迫る。

840円
102674-3

徳川家康が入城し、將軍の本拠地として大都市へ変貌した江戸。その始まりは平安時代末、秩父平氏一族の江戸氏が拠点を置く低湿地だった。太田道灌の江戸城築城、戦国大名北条氏の支配を経て、入府した家康の大事業によって、城と町は発展を遂げる。江戸の繁栄はいかにして築かれたのか。本書では新知見をふまえて、中世から近世への変遷過程を解明。平安時代の寒村から、豪華絢爛な都市が成立するまでの500年を描き出す。

820円
102675-0

生命はどう生まれたか。アミノ酸などが生成する過程と生物誕生の間に何があったか、いまだ明らかではない。しかし、現在の空白は、宇宙で作られた有機物が埋めるという見方がある。有力だ。宇宙が命のふるさとならば、地球外の生命にも多数存在すると考えた方が自然だろう。本書は、進化のプロセスと、最新の惑星探査での知見をもとに、アストロバイオロジー（宇宙生物学）から、生命の起源と地球外生命に迫る。

900円
102676-7

みんなが大好きなエビとカニ。しかし、その体のしくみや行動は意外に知られていない。なぜエビ・カニは茹でると赤くなるのか。エビがブリブリの理由は？ カニの横歩きの秘密は？ エビ・カニとシヤコやヤドカリとの違いとは？ さらに何百kmも渡りをするエビ、ハサミをパチンと閉じてプラズマを発生させ獲物を倒すエビ、毒を持つイソギンチャクをばさんで身を守るカニ等、多種多様なエビ・カニのすごい生き方を紹介する。

900円
102677-4

北条義時は十八歳で突如、歴史の表舞台に立たされる。義兄の源頼朝が平家追討の兵を挙げたのだ。義時は頼朝の側近として鎌倉幕府の樹立に貢献。頼朝没後、父時政に従い比企氏とは有力御家人を排斥する。さらには父を追放して將軍補佐の執権職を継ぎ、甥の將軍実朝と姉政子を支えて幕政を主導。後鳥羽上皇と対決した承久の乱で鎌倉勢に勝利をもたらした。公武関係の変遷を辿り、武家優位の確立を成し遂げた義時の生涯を描く。

820円
102678-1

順調に成長を続けた日米欧経済はなぜ長期停滞や格差拡大に陥ったのか。従来の経済学ではうまく説明できない。本書ではお金や富の保有願望「資産選好」に注目し、経済が豊かになるにつれて人々の興味が消費から蓄財に向かい、経済構造が大きく変貌した経緯を解明。高度成長期を支えた従来型の金融緩和や構造改革、減税やバラマキ、教育方針が、今では無意味か逆効果であることを明らかにし、低成長時代の経済政策を提言する。

820円
102679-8

2680 モチベーションの心理学

「やる気」と「意欲」のメカニズム

鹿毛雅治 著

2681 リヒトホーフエン

撃墜王とその一族

森 貴史 著

「やる気が出ない……」。職場で、学校で、家庭で、悩んでいる人は多い。自分だけでなく、他者のやる気も気がかりである。口ではめるのか、報酬を与えるのか、罰をちらつかせるのか。自らの経験と素朴な理論に基づいて対処しても、なかなかうまくいかない。そもそもモチベーションはどのようなように生じ、何に影響を受け、変化していくのか。目標説、自信説、成長説、環境説など、モチベーション心理学の代表的理論を整理、紹介する。

「赤い男爵」ことマンフレート・フォン・リヒトホーフエンは、真紅の機体で大空を舞った、ドイツの撃墜王だ。弟とともに第一次世界大戦でエースパイロットとして活躍し、戦死後も英雄として尊敬を集めた。その遠縁である姉妹の姉エゼルゼはマックス・ヴェーバーらと親交を結びつつ影響を与え、妹フリídaは作家D・H・ロレンスと世界を遍歴……。この個性豊かな一族4人の軌跡を通し、戦争と思想の時代の一面を照らす。

880円 1000円
102681-1 102680-4

2682 韓国愛憎

激変する隣国と私の30年

木村 幹 著

ここ30年間で韓国は大きく変わった。独裁から民主国家へ、発展途上国から先進国へと。20世紀に日本が「弟」と蔑んだ韓国は過去のものだ。他方、元慰安婦を始め歴史認識問題が顕在化、日韓の対立は熾烈さを増す。21世紀に入り、政治、経済から韓流、韓韓まで常に意識する存在だ。本書は、1980年代末、途上国だった隣国に関心を抱き、韓国研究の第一人者となった著者が自らの体験から描く、日韓関係の変貌と軋轢の30年史である。

860円
102682-8

2683 人類の起源

古代DNAが語る
ホモ・サピエンスの「大いなる旅」

篠田謙一 著

古人骨に残されたDNAを解読し、ゲノム（遺伝情報）を手がかりに人類の足跡を辿る古代DNA研究。近年、分析技術の向上によって飛躍的に進展を遂げている。30万年前にアフリカで誕生したホモ・サピエンスはどのように全世界に広がったのか。旧人であるネアンデルタール人やデニソワ人と血のつながりはあるのか。アジア集団の遺伝的多様性の理由とは……。人類学の第一人者が、最新の研究成果から起源の謎を解き明かす。

960円
102683-5

2684 中学英語「再」入門

日本語と比べて学ぶ14講

澤井康佑 著

「習うより慣れろ」中学時代、丸暗記でテストを切り抜けた人も多いでしょう。しかし、大人になった今だからこそ、中学英語を学び直すと、英語の理屈が筋道立って見えてきます。「日本語と違って同じ単語が動詞にも名詞にもなる」「副詞は動詞の前に置くか後ろに置くか」……文の構造、修飾語や受動態などの大事なポイントも、日本語と比較しながら、理想的な順番で解説していきます。今度こそ無理なくマスターしましょう！

980円
102684-2

2685 ブラックホール

宇宙最大の謎は
どこまで解明されたか

二間瀬敏史 著

ブラックホールとは、重力がきわめて強く光すら脱出できない天体だ。原理は18世紀には考え出されたが、長く存在証明は困難だった。本書は前半で、存在が確認されるまでの歴史をたどりながら基礎をわかりやすく解説。後半では、最先端の物理学からブラックホールの内側に迫る。「別の宇宙」と、そこへの抜け道である「ワームホール」、さらには熱力学との関係など、さまざまな謎を解き明かす。面白く不思議な、最新の宇宙論。

860円
102685-9

2686 中国哲学史

諸子百家から
朱子学、現代の新儒家まで

中島隆博 著

春秋戦国時代に現れた孔子や老子ら諸子百家に始まり、朱子学と陽明学に結実したのち、西洋近代と対峙するなかで現代の儒教復興に至る中国哲学。群雄割拠から統一帝国へ、仏教伝来、キリスト教宣教、そして革命とナショナリズム。社会変動期に紡がれた思想は中国社会の根幹を形づくった。本書は中国3000年の叡智を丹念に読み解き、西洋を含めた世界史の視座から、より深い理解へと読者をいざなう。新しい哲学史への招待。

1050円
102686-6

2687 天皇家の恋愛

明治天皇から眞子内親王まで

森 暢平 著

明治天皇まで多岐にわたる天皇家は、一夫一婦制、子どもを家庭で養育する近代家族へと大きく変わった。これは、恋愛結婚で家庭をつくった戦後の明仁皇太子・美智子妃からとされる。だが、実はそれ以前、大正・昭和の皇后をはじめ多くの皇族たちが、近代家族をめざし、その時代なりの恋をしていた。本書は、明治以降、上皇夫妻や眞子内親王まで、皇室の150年に及ぶ歴史を、さまざまな恋愛を切り口に描き出す。

900円
102687-3

2688 戦国日本の軍事革命

鉄炮が一変させた戦場と統治

藤田達生 著

16世紀中頃、戦国日本に伝来した鉄炮。砲術師・鉄炮鍛冶・武器商人により国内に広まると、長槍や騎馬隊が主力だった戦場の光景を一変させた。さらに織田信長は検地によって巨大兵站システムを整え、鉄炮の大量保有を実現。鉄炮や大砲を活用する新たな戦術を野戦・攻城戦・海戦に導入し、天下統一へと邁進した。軍隊や統治のあり方をも変えたこの「革命」が豊臣秀吉、徳川家康と引き継がれ、近世を到来させるまでを描く。

840円
102688-0

2689 肝臓のはなし

基礎知識から病への対処まで

竹原徹郎 著

現代の日本人は、四〜五人に一人の割合で、肝機能に異常があるとされる。沈黙の臓器である肝臓の異変が気づかぬまま、慢性的の病で死に至る場合も多い。本書では、健康診断以外で意識しつらい肝臓について、基礎知識を死にから解説。飲酒やダイエットとの関係、健康項目の見方、主な肝臓病と最新の治療などを、医学史の流れをふまえて紹介する。健康な毎日のために知っておきたい、人体最大の臓器をめぐる医学講義。

820円
102689-7

2690 北海道を味わう
—四季折々の「食の王国」—
小泉武夫 著
春はニシン、ヤマワサビ。夏はウニ、ジャガイモ。秋はサケ、新米。冬はカニ、タラ。そして通年でジンギスカン、ラーメン……。北海道は、日本ばかりか世界でも有数の「食の王国」である。海・川・湖の幸、広大な大地の幸に恵まれ、食材本来の良さを生かした料理の数々は、私たちを魅了してやまない。無類の食いしん坊を自認し、北海道を長年食べ歩いた発酵学の第一人者による、垂涎のうまいもの尽くしエッセイ。

2691 日本の国会議員
—政治改革後の限界と可能性—
濱本真輔 著
国会議員への不信が高まっている。1990年代以降の一連の政治改革を経て、議員の活動・役割は見えにくい。本書は、人材、選挙、政策形成、価値観、資金、国際比較など、あらゆる観点から国会議員の実態をデータに基づき描く。世襲や秘書出身者の増加、少数の女性議員、なお不透明な政治資金、憲法・安全保障と異なる社会経済政策を巡る対立軸の不在など、多くの問題と原因を指摘。日本政治に何が必要か改革の方向性を示す。

2692 後悔を活かす心理学
—成長と成功を導く意思決定と対処法—
上市秀雄 著
「もっと勉強すればよかった」「あの一言を言わなかったら……」人生は後悔の連続である。後悔は嫌な感情で、後々まで尾を曳く。できれば後悔しないで生きたい。しかし一方で、自分の思考や行動を変えるきっかけとなり、人生の糧ともなる。やらないで後悔するのとやって後悔するのとどちらがマシか、後悔とうまく付き合うにはどうすればよいのかなど、効果的な意思決定と対処法を解説する。巻末にチェックリストも掲載。

2693 カラー版 クモの世界
—糸をあやつる8本脚の狩人—
浅間 茂 著
日本には1700種類のクモがいる。もともとは地中に生活していたが、網を張って待ち伏せするクモに進化し、さらにあちこち歩き回って獲物を捕らえるクモが生まれた。花の蜜を吸うクモ、投げ縄を放つクモ、花嫁をぐるぐる巻きに縛ったり催眠術をかけたりして交尾に及ぶクモ、我が子に自分の体を与えるクモなど、特徴ある生き方を示すものも多い。その種類から生態、人との関わりまで全てを紹介。カラー写真370点収録。

2694 日本アニメ史
—手塚治虫・宮崎駿 庵野秀明、新海誠らの100年—
津堅信之 著
初の国産アニメが作られてから、一〇〇年余り。現在、海外でも人気が高く、関連産業も好調だ。本書は、今や日本を代表するポップカルチャーとなったアニメの通史である。一九一七年の国産第一作に始まり、テレビでの毎週放送を定着させた「鉄腕アトム」、監督の作家性を知らしめた「風の谷のナウシカ」、深夜枠作品を増大させた「新世紀エヴァンゲリオン」など、画期となった名作の数々を取り上げ、その歴史と現在を描く。

2695 日本共産党
—「革命」を夢見た100年—
中北浩爾 著
戦前から高度成長期にかけて多くの若者や知識人を惹きつけ、巨大な政治的磁場を作った日本共産党。東欧革命・ソ連崩壊などで深刻な打撃を受けたが、しぶとく生き残り、近年、野党共闘による政権交代を目標に据える。政権を担える事実上の社会民主主義政党になったのか、今なお暴力革命を狙っているのか。本書は、一貫して「革命」を目指しつつも大きく変化した百年の歴史を追い、国際比較と現状分析を交え同党の全貌を描く。

2696 物語 スコットランドの歴史
—イギリスのなかにある「誇り高き国」—
中村隆文 著
イングランド、ウェールズ、北アイルランドとともに「イギリス」を構成するスコットランド。一七〇七年の合同法でイングランドと統合しグレートブリテン王国となったが、近年は独立を模索するなど、独自の歴史とナショナル・アイデンティティをもつ。ケルト文化、デヴィッド・ヒュームやアダム・スミスに代表される啓蒙思想「地酒」ウィスキー、ゴルフ、伝統衣装タータン・キルトなど多様なスコットランドを活写する。

2697 戦後日本の安全保障
—日米同盟、憲法9条からNSCまで—
千々和泰明 著
中国の台頭、アメリカの後退、そしてロシアの暴走。国際環境は厳しさを増し、日本が安全保障で果たすべき責任は重くなっている。しかし日本では憲法をはじめ、一度でき上がった独特な仕組みをなかなか変えられない。危機の時代にふさわしい防衛の姿とは、日米安保条約、憲法第9条、防衛大綱、ガイドライン、NSC（国家安全保障会議）という重要トピックの知られざる歴史をたどり、日本の安全保障の「常識」を問い直す。

2698 変異ウイルスとの闘い
—コロナ治療薬とワクチン—
黒木登志夫 著
変異するウイルス、繰り返された緊急事態宣言、解消されない医療逼迫——。長期化するコロナ禍で、我々は感染症との闘いの難しさを思い知った。一方、人類も無力ではない。比類なきスピードで開発されたmRNAワクチン、変異株のゲノム解析、そして全症状に対応する治療薬。「終幕」へのシナリオは着々と描かれていく。本書では最新の研究成果を一望し、コロナ危機からの「出口戦略」を探る。山中伸弥氏推薦。

2699 新版 大化改新
—「乙巳の変」の謎を解く—
遠山美都男 著
皇極四年（六四五）、中大兄皇子と中臣鎌足は蘇我蝦夷・入鹿父子を武力で排除した。この乙巳の変が国政改革「大化改新」の序幕だったという筋書きはあまりにも有名である。だが、これに關する目的は何か。その首謀者は誰だったのか。本書は、王位継承をめぐる路線対立に着目して旧版を大幅改稿し、熾烈な権力闘争の内実に迫るものである。

2700 **新疆ウイグル自治区**
——中国共産党支配の70年

熊倉 潤 著

中国西北部に位置する新疆ウイグル自治区。中国全体の6分の1ほどの面積に、約2500万人が暮らす。1955年に自治区が成立した当初、中国共産党は少数民族の「解放」を謳った。しかし習近平政権のもと、ウイグル人らへの人権侵害は深刻化を増している。なぜ中国共産党は、多くの人々を「教育施設」へ収容するといった過酷な統治姿勢に転じたのか。新疆地域の歴史を丁寧にとり、その現在と未来を考える。

櫻山純三賞受賞

2701 **日本のコメ問題**
——5つの転換点と迫りくる最大の危機

小川真如 著

稲作伝来以来、日本人はコメ不足に悩まされてきた。1967年、ついに自給自足を達成する。だが、そこに喜びはなかった。直ちに到来したコメ余り時代と減反の開始、ヤミ米の拡大と食糧制度の崩壊、ウルグアイ・ラウンドで生まれた国際秩序への対応、水田フル活用政策の誕生と混乱……。本書は半世紀で大変貌を遂げた日本人とコメの関係を、転換点ごとに整理。そして、残された未解決問題がもたらす最大の危機に警鐘を鳴らす。

2702 **ミュージカルの歴史**
——なぜ突然歌いだすのか

宮本直美 著

物語、台詞、歌で構成される舞台、ミュージカル。ヨーロッパの歌劇と大衆的な娯楽ショーをルーツとし、一九世紀アメリカで誕生した。本書はその本質を音楽に注目して探る。ティン・パン・アリーのブロードウェイへの音楽供給から、一九二〇年代のラジオの流行、統合ミュージカルの成立、六〇年代のロックの影響、八〇年代に隆盛するメガ・ミュージカル、そして二・五次元へ。歴史を辿りつつ「なぜ突然歌いだすのか」という最大の謎に迫る。

2703 **帝国日本のプロパガンダ**
——「戦争熱」を煽った宣伝と報道

貴志俊彦 著

日清戦争に始まり、アジア太平洋戦争の敗北で終わった帝国日本。日中開戦以降、戦いは泥沼化し、国力を総動員するため、政府・軍部・報道界は帝国の全面勝利をうたい、プロパガンダ（政治宣伝）を繰り返した。宣伝戦はどのように先鋭化したか。なぜ国民は報道に熱狂し、戦争を支持し続けたのか。錦絵、風刺画、絵巻書、戦況写真、軍事映画など、戦争熱を喚起したビジュアル・メディアから、帝国日本のプロパガンダ史を描きます。

2704 **転身力**
——「新しい自分」の見つけ方、育て方

楠木 新 著

人生100年とも言われる長寿化の現代、長期雇用の揺らぎ、コロナ禍の影響などで、生き方や働き方が大きく変わりつつある。だがそれは、誰もが人生二毛作、三毛作を楽しめる豊かな時代でもある。求められるのは、可能性を信じ、自分を変えるための「転身力」だ。「将来のリスクに備えたい」「収入は減っても好きな仕事で食べていけたら」「生涯現役で働きたい」といった思いに寄り添い、豊富な実例をもとにヒントを提示する。

2705 **平氏——公家の盛衰、武家の興亡**

倉本一宏 著

清盛ら平家一門が権力を握ったのはわずか十数年。だが日本史において平氏の存在感は大きい。「源平合戦」で功績を挙げて鎌倉幕府を支えた御家人（北条氏、梶原氏、三浦氏など）の多くは平氏出身とされ、後世の織田信長も平氏の末裔を称した。本書は、平朝臣の姓を賜った天皇の子孫たちに始まり、朝廷に対して反乱を起こした平将門、公卿・実務官として京都で活躍した堂上平氏など、公家・武家にわたる平氏の全貌を描く。

2706 **マスメディアとは何か**
——「影響力」の正体

稲増一憲 著

「マスコミを信じるな」。ネットの浸透に伴い、高まるマスメディア不信。長く独占的地位にあった新聞、ラジオ、テレビに、近年は不要論まで語られる。社会にとって、マスメディアとはどのような存在なのか。そもそも、「世論を動かすほどの大きな影響力を持つ」というイメージは真実なのか。長年の研究成果をふまえ、問題視される偏向報道、世論操作などの実態を科学的に検証し、SNS時代のメディアのあり方を問いなおす。

2707 **大東亜共栄圏**
——帝国日本のアジア支配構想

安達宏昭 著

大東亜共栄圏とは、第2次世界大戦下、日本を盟主とし、アジアの統合をめざす国策だった。それは独伊と連動し世界分割を目論むものでもあった。日本は「自存自衛」を掲げ、石油、鉱産、コメ、棉花などの生産を占領地域に割り振り、政治家財が連携し企業を進出させる。だが戦局悪化後、「アジア解放」をスローガンとし、各地域の代表を招く大東亜会議を開催するなど、変容し迷走する。本書は、立案、実行から破綻までの全貌を描く。

2708 **最後の審判**
——終末思想で読み解くキリスト教

岡田温司 著

世界の終末に神が人類を裁く「最後の審判」。キリストが再臨して、天国で永遠の命を授かる者と地獄へ堕ちて永遠の苦しみを課される者を振り分けるとされる。西洋の人々にとって、希望の光であると同時に恐怖の源でもあった。本書は、このキリスト教の重要主題をわかりやすく解説する。死後の世界はどうイメージされたか。罪は誰が裁き、どんな罰が与えられたか。裁きに正義はあったか——。多くの図版とともに読み解く。

2709 **縄文人と弥生人**
——「日本人の起源」論争

坂野 徹 著

日本人は、在来縄文人と渡来系弥生人の混血によって生まれた。「日本人の起源」の定説である。しかし、この縄文／弥生人モデルが二〇世紀後半に定着するまで、人種交替説、混血説、縄文説、変形説など、様々な説が唱えられてきた。研究の進展とともに、見え隠れするのは同時代の社会からの影響だ。近年はゲノム解析により、縄文／弥生人の図式もゆらぐ。起源を訪ねた研究者たちの足跡を辿り、日本人の自画像を描きます。

2710 日本インテリジェンス史

—旧日本軍から公安、内調、NSCまで

小谷 賢著

国家の政策決定のために、情報分析や防諜活動を行うインテリジェンス。公安や外交、防衛を担う「国家の知性」である。戦後日本では、軍情報部の復活構想が潰れたのち、冷戦期に警察と内閣調査室を軸に再興。公安調査庁や自衛隊・外務省の情報機関と、共産主義陣営に相對した。冷戦後はより強力な組織を目指し、NSC（国家安全保障会議）創設に至る。CIA 事件やソ連スパイ事件など豊富な事例を交え、戦後75年の秘史を描く。

900円
102710-8

2711 京都の山と川

—「山紫水明」が伝える千年の都

鈴木康久／肉戸裕行著

人口150万を数える京都。街を歩けば、どこからでも山が見え、川では子どもが遊んでいる。これはどなたと山河が近い大都会は珍しい。1200年前の遷都時に桓武天皇が「山が襟のように開んでそびえ、川が帯のようにめぐって流れる自然の要害」であると述べたように、京都の山河は常に人々と共にあった。本書は東山・北山・西山の三山、鴨川・桂川・宇治川・琵琶湖疏水、さらに市中の川を紹介、知られざる歴史を明かす。

920円
102711-5

2712 韓国併合

—大韓帝国の成立から崩壊まで

森 万佑子著

日清戦争の結果、朝鮮王朝は清の「属国」から脱し大韓帝国を建国、皇帝高宗のもと独自の近代化を推進した。だが帝国日本は朝鮮半島での利権を狙い侵食。日露戦争下、日韓議定書に始まり、1904・07年に三次にわたる日韓協約によって外交・財政・内政を徐々に掌握し、10年8月の併合条約により完全に植民地化する。本書は日韓双方の視点から韓国併合の軌跡と実態を描く。今なお続く植民地の合法・不法論争についても記す。

860円
102712-2

2713 「美しい」とは何か

—食からひととく美学入門

源河 亨著

あるものを「美しい」「醜い」など評価するとき、私たちは何を考えているのか。評価を下す基準となる「センス」とは。こうしたことを考える学問が美学だ。本書は絵画や音楽ではなく、身近な食事からその扉を開く。「美しい」「まずい」という評価は人それぞれ？ レビューサイトの情報があると、純粋に食事を楽しめない？ 美食の感動は言葉にすべきじゃない？ インスタントラーメンは芸術か？ やさしくも奥深い美学入門。

820円
102713-9

2714 国鉄

—「日本最大の企業」の栄光と崩壊

石井幸孝著

1949年に誕生した国鉄は、復旧途上の設備で旅客・貨物輸送を一手に担い、戦後の高度成長を支え、新幹線もつくった。「鉄道は国家なり」であった。だが交通手段の多様化でシェアは低下、自立的な経営もままならず、赤字が雪だるま式に増え、労使関係も悪化、ついに1987年に分割民営化された。今、人口減、IT化、コロナ禍を受け、鉄道は再び危機に瀕している。国鉄の歴史に何を学ぶか、JR九州初代社長が明かす。

1100円
102714-6

2715 縛られる日本人

—人口減少をもたらす「規範」を打ち破れるか

メアリー・C・プリントン 著
池村千秋 訳

人口が急減する日本。なぜ出生率が幸福度も低いのか。日本、アメリカ、スウェーデンの子育て世代へのインタビュー調査と、国際比較データをあわせて分析することで、「規範」に縛られる日本の若い男女の姿が見えてきた。日本人は家族を大切にしているのか、男性はなぜ育児休業をとらないのか、職場にどんな問題があるのか、アメリカやスウェーデンに学べことは——。アメリカを代表する日本専門家による書き下ろし。

900円
102715-3

2716 カラー版 絵画で読む『失われた時を求めて』

吉川一義 著

二〇世紀を代表する作家、プルースト（一八七二—一九二二）。その生涯をかけて執筆した『失われた時を求めて』は著名だが、長大さと難解さから挫折する人も多い。本書は絵画が手がかりにそのエッセンスを紹介。彼が作品で描いた恋愛、同性愛、死、ユダヤ人、スノビズム、時間、芸術論などの主題をわかりやすく案内する。この大作の個人全訳を成し遂げた、プルースト研究の第一人者による最良の入門書。図版六九点収載。

940円
102716-0

2717 アイルランド現代史

—独立と紛争、そしてリベラルな富裕国へ

北野 充著

多彩なビールやウィスキー、作家ジェイムズ・ジョイスの祖国、ラグビー強豪国としても知られるアイルランド。約七五〇年のイングランド／英国支配の後、一九二二年に独立を勝ち取った。貧困や人口流出、北アイルランド紛争などの困難に直面するも、一九九〇年代半ばからの高度経済成長を経て、一人当たりGDP世界二位の富裕国へ、同性婚も容認するリベラルな国へと変身する。独立後を中心に、苦心と奮闘の歴史を辿る。

900円
102717-7

2718 カラー版 キリスト教美術史

—東方正教会とカトリックの二大潮流

瀧口美香 著

ローマ帝国時代、信仰表明や葬礼を目的として成立したキリスト教美術。四世紀末に帝国は東西分裂し、やがて二つの大きな潮流が生まれる。一方は、一〇〇〇年にわたって不変の様式美を誇ったビザンティン美術。他方は、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロックと変革を続けたローマ・カトリックの美術である。本書は、壮大なキリスト教美術の歴史を一望。一〇〇点以上のカラー図版と共に、その特徴と魅力を解説する。

960円
102718-4

2719 近代日本外交史

—幕末の開国から太平洋戦争まで

佐々木雄一 著

1853年にペリールが来航し、日本は開国へと向かう。明治維新後、条約改正や日清・日露戦争、第一次世界大戦を経て、世界の大国となった。だが1930年代以降、満州事変、日中戦争、太平洋戦争に突入し、悲惨な敗戦に終わった。日本は世界とどう関わってきたのか。破局の道を回避する術はなかったのか。国際秩序との関係を軸に、幕末の開国から太平洋戦争まで、日本外交の歩みをたどる。近年の研究をふまえた最新の通史。

840円
102719-1

2720 司馬遼太郎の時代
—歴史と大衆教養主義—

福岡良明 著

2721 京都の食文化
—歴史と風土がはぐくんだ
「美味しい街」—

佐藤洋一郎 著

2722 陰謀論
—民主主義を揺るがすメカニズム—

秦 正樹 著

2723 徳川家康の決断
—桶狭間から関ヶ原、大坂の陣まで
10の選択—

本多隆成 著

2724 行動経済学の処方箋
—働き方から日常生活の悩みまで—

大竹文雄 著

2725 奈良時代
—律令国家の黄金期と熾烈な権力闘争—

本本好信 著

2726 田中耕太郎
—闘う司法の確立者、
世界法の探究者—

牧原 出 著

2727 古代オリエント全史
—エジプト、メソポタミアから
ペルシアまで4000年の興亡—

小林登志子 著

2728 孫 子—「兵法の真髄」を読む

渡邊義浩 著

2729 日本史を暴く
—戦国の怪物から幕末の闇まで—

磯田道史 著

『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など、売上げが累計1億冊を超える大ベストセラー作家司馬遼太郎（1923～96）。日本史を主たるテーマに、人物を個性豊かに、現代への教訓を込めて記した作品は、多くの読者を獲得。「司馬史観」と呼ばれる歴史の見方は論争ともなった。本書は、司馬の生涯を辿り、作品を紹介しつつ、その歴史小説の本質、多くの人を魅了した理由を20世紀の時代とともに描く。国民作家の入門書でもある。

三方を山に囲まれ、水に恵まれた京都。米や酒は上質で、野菜や川魚も豊かだ。それだけではない。長年、都だった京都には、瀬戸内のハモ、日本海のニシンをはじめ、各地から食材が運び込まれ、ちりめん山椒やにしんそば等、奇跡の組み合わせが誕生した。近代以降も、個性あふれるコヒー文化、ラーメンやパン、イタリアンなど、新たな食文化が生まれている。風土にはぐくまれ、人々が創り守ってきた食文化を探究する。

ネット上の陰謀論「Qアノン」を妄信する人々を引き起こしたアメリカ連邦議会襲撃政治は、世界を震撼させた事件であった。21世紀の今、荒唐無稽な言説が多くの人に信じられ、政治的影響力すら持つのはなぜか。本書は、実証研究の成果に基づき、陰謀論者のメカニズムを解説。日本で蔓延する陰謀論の実態や、個人の政治観やメディア利用との関連、必要ならテララーなどを交え、「民主主義の病」への対抗法を指南する。

戦国乱世を勝ち抜き、天下を制した徳川家康。だが、その道のりは平坦ではなかった。今川・織田の両雄に挟まれた弱小勢力として出発し、とりわけ前半生の苦悩は色濃い。正妻と嫡男信康を喪い、重臣の離反も経験する。武田信玄、羽柴秀吉らと鎧を削り、手痛い誤りも犯したが、速い味方にして幾多の難局を切り抜けた。三方原の合戦、本能寺の変、関ヶ原の合戦、大坂の陣ほか、家康が迫られた10の選択を軸に波瀾の生涯を描く。

日々の暮らしや仕事の課題、さらには大きな社会問題まで、その解決策は行動経済学にある。急速に普及したテレワークで生産性を上げるには？ 新型コロナウイルス感染症対策と経済活動を両立させる方策とは？ 偏見や思い込みへの対応は？ 最低賃金の引き上げは所得向上につながる？ 目の前に立ちちはだかる大小の課題に、私たちが何気なく行ってしまう、非合理的な選択に、最新の経済理論を駆使して処方箋を示す。

平城京への遷都で幕を開けた奈良時代。律令体制の充実期で、台頭する藤原氏はその立役者だった。唐の文物が輸入され、国際色豊かな天平文化も花開く。他方で長屋王の変、藤原原田の乱、恵美押勝の内乱など政変が相次ぎ、熾烈な権力闘争が繰り返された。飢饉や疫病にも襲われる。仏教を重んじ、遷都を繰り返した聖武天皇、その娘で道鏡の重用など混乱も招いた孝謙（称徳）天皇の治世を軸に、政治と社会が激動した時代を描く。

戦前、論壇人、東大教授として大学自治を守ろうとした田中耕太郎。戦後は文相に就き教育基本法制定に尽力。復古主義・共産主義を排し新憲法を強く支持した。参院議員を経て最高裁長官就任後は在任中、松川・砂川事件など重要判決を主導、「反動」と叫ばれたながらも脆弱だった司法権を確立。退任後は国際司法裁判所判事に。激動の時代、学界・政界・司法の場で奮闘し戦後日本を形作ったカトリックの自由主義者の生涯。

西はナイル河、北は黒海、東はインダス河、南はアラビア海に囲まれた地域がオリエントである。この地には人類初の文明が誕生し、諸民族が行き来し、数多の王国が栄え滅びていった。シュメールやバビロンを擁したメソポタミア、象形文字や太陽神信仰など独自の文明が発達したエジプト、鉄器を生んだアナトリア、これらに興った国々が激突したシリア、そして東の大国ペルシア……。4000年に及ぶ時代を巨細に解説する。

二千年以上にわたる読み継がれてきた兵法と戦略の名著『孫子』。この古典を整理し、最も重要な注釈を付したのが三国志の英雄・曹操だ。本書は最初に、孫武と孫臋のどちらが著者かという成立の謎に挑む。そして曹操の解釈を踏まえて、合理性・先進性・実践性・普遍性という四つの特徴から読み解く。「孫子」が見抜いた、戦争や組織の本質は今の時代にも生かせるか。巻末に「孫子」全十三篇の現代語訳を収録。

歴史には裏がある。古文書を一つずつ解説すると、教科書に書かれた「表の歴史」では触れられない意外な事実が見えてくる。明智光秀が織田信長を欺けた理由、信長の遺体の行方、江戸でカブトムシが不人気だった背景、忍者の悲惨な死に方、赤穂浪士が「吉良の首」で行った奇妙な儀式、漏洩していた孝明天皇の病床記録……。古文書と格闘し続ける著者が明らかにした、戦国、江戸、幕末の「歴史の裏側」がここにある。

2730 大塩平八郎の乱

幕府を震撼させた武装蜂起の真相

敷田 貫著

江戸後期、天保の大飢饉が起こり、深刻な米不足から大坂でも餓死者が続出した。大坂町奉行所の元手力で陽明学者の大塩平八郎は、窮状を見かねて奉行所に救済を嘆願したが容れられず、私塾の門弟らと「救民」を掲げて決起。乱は一日で鎮圧された。自決まで一カ月余り大坂市中で潜伏を続けた大塩の真意は何か。密かに江戸へ送った「建議書」で何を訴えようとしたのか。近年発見の史料もふまえ、幕府を震撼させた事件の全容に迫る。

2731 物語 遺伝学の歴史

メンデルからDNA、ゲノム編集まで

平野博之著

子とはなぜ親に似るのか？この仕組みを解き明かすことから始まったのが遺伝学だ。メンデル以来約160年とその歴史は浅いものの、遺伝学は生物科学の中核となった。遺伝子が子へ伝達される仕組みや生体内での働きが明らかとなり、染色体からDNAへと、遺伝子の実体解明も進む。いまや、PCRやゲノム編集などの最新技術にも結実している。遺伝学の研究と発見の歴史を、科学者たちの生涯とともにドラマチックに描く。

2732 森林に何が起きているのか

気候変動が招く崩壊の連鎖

吉川 賢著

2019年、オーストラリアで史上最大級の森林火災が発生。5か月間で17万平方キロメートルの国土が焼失した。近年、温暖化の影響による森林の「異変」が世界中で観測されている。大規模火災が相次ぐのはなぜか。森林破壊がもたらす経済的影響は。豊かな自然を守るため、何をすべきなのか。本書は、森林生態系のメカニズムから、日本の里山の持続可能な保全策まで、森林科学の知見を第一人者が解説。実効的な気候変動対策を論じる。

2733 日本の歴史問題

「帝国」の清算から
靖国、慰安婦問題まで

波多野澄雄著

靖国神社、歴史教科書、慰安婦、領土、そして「犠牲者」、個人への補償。戦後七五年を超えてなお残る歴史問題。なぜ「過去」をめぐる認識は衝突し、アジア太平洋戦争の「清算」は終わらないのか。本書では、帝国の解体から東京裁判、靖国論争が始まる一九八〇年代、慰安婦や領土をめぐる周辺諸国との軋轢が増す二〇一〇年代以降の歴史問題の全容を丹念に描く。名著「国家と歴史」を改題のうえ全面改稿し、歴史和解の道筋を示す。

2734 新興国は世界を変えるか

29カ国の経済・民主化・軍事行動

恒川恵市著

21世紀以降、ますます存在感を強めている「新興国」。特にブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカは「BRICS」と呼ばれ、リーマンショック後の世界経済の牽引役として期待された。他方で中国は海洋進出を進め、ロシアはウクライナに軍事侵攻を行う。力をつけた新興国は世界にどのような影響を与え、どこへ向かうのか。本書はアジア、中南米、東欧など29カ国を新興国とし、経済成長、政治体制、軍事行動を分析する。読売・吉野作造賞受賞

2735 沖縄のいきもの

1000を超える固有種が暮らす
「南の楽園」

盛口 満著

青い空、サンゴ礁の海——豊かな自然が広がる沖縄には、珍しい生き物がいっぱい！県鳥のノグチゲラはキツキツなのに、なぜ地面をつつくの？珊瑚色に輝くゴキブリがいるのはなぜ？イリオモテヤマネコはどうやって小さな西表島で生き延びてきたの？沖縄・宮古・八重山・大東……島々の個性的な生き物たちを魅力たっぷりに紹介。

2736 ウイルスとは何か

生物か無生物か
進化から捉える本当の姿

長谷川政美著

「ウイルス」という言葉を知らない人はいないだろう。ただし、その定義は曖昧である。目に見えない極小の存在で、ほかの生物の細胞内ではか増殖できないために、通常は生命体とはみなされない。だが、独自のゲノムを有し、突然変異を繰り返す中で、より環境に適した複製子を生産するメカニズムは、生物の進化と瓜二つだ。恐ろしい病原体か、あらゆる生命の源か……。進化生物学の最前線から、その正体に迫る。

2737 不倫——実証分析が示す全貌

五十嵐 彰／迫田さやか 著

既婚者が配偶者以外と性交渉をもつことを指す「不倫」。毎月のように有名人がスクープされる関心事だが、日本では客観的な研究がほとんどない。本書では、気鋭の社会学者と経済学者が大規模調査を敢行。実験的手法や海外の先行研究も活用して実態に迫る。経験者は何かか。どんな人が不倫しやすいのか。どこで出会ひ、いかに終わるか。家族にどんな影響があるか。誰が誰をバッシングするのか。実証分析により解き明かす。

2738 英語達人列伝Ⅱ

かくも気高き、日本人の英語

斎藤兆史著

「英語は学習成功者に学べし」。この鉄則は揺らぐことはない。紹介する嘉納治五郎、夏目漱石、南方熊楠、國弘正雄、山内久明ら8人の「達人」は、工夫と努力によって、日本に居ながらにして、英語力の基礎を築き上げた。彼らはまた日本文化への貢献でも傑出した存在である。本書は、「達人」たちの英語習得法を紹介するが、それは「英語使い」になる明らかな道筋だ。その過程は、英語受容をめぐる格闘の歴史でもある。

2739 天誅組の変

幕末志士の挙兵から生野の変まで

舟久保 藍著

尊王攘夷の風が吹き荒れた幕末。孝明天皇の攘夷親征決定を受け、皇軍の先鋒を志す急進派公家や志士らが討幕を掲げて挙兵した。大和国の五條代官所に制圧し、「新政府」を宣言するが、京都で政変が起き、わずか一日で情勢は暗転。幕府代官を討つされ、激戦の末に壊滅した。本書はこの天誅組の変と、呼応して起きた但馬国生野の挙兵事件（生野の変）を明治維新に至る運動の先駆と捉え、その全貌を描く。幕末史の知られざるドラマ。

2740 日本語の発音はどう変わってきたか
——「てふてふ」から「ちようちよう」へ、
音声史の旅

釘貫 亨 著

問題「母とは二度会ったが父とは一度も会わないもの、ないんだ?」(答「くちびる」)。この室町時代のなぞなぞから、当時「ハハ」は「フアフア」のように発音されていたことがわかる。では日本語の発音はどのように変化してきたのか。奈良時代には母音が8つあった? 「行」を「コウ」と読んだり「ギョウ」と読んだり、なぜ漢字には複数の音読みがあるのか? 和歌の字余りからわかる古代語の真実とは? 千三百年に及ぶ音声の歴史を辿る。

840円
102740-5

2741 物語 オーストラリアの歴史 新版
——イギリス植民地から多民族国家へ
2000年

竹田いさみ／永野隆行 著

南半球の大陸オーストラリア。1788年以降、英国の植民地としてヨーロッパから移民を迎え、金鉱開発と羊毛貿易によって成長。1901年に建国した。戦後は白豪主義を転換してアジア諸国と結びつき、21世紀は多民族国家として存在感を示している。本書は、英帝国や日本、アメリカ、中国と対峙しながら、豪大陸が国家形成する成長物語である。旧版を刷新し、料理・観光のコラムを追加。「理想社会」の成功と挫折を活写する。

1000円
102741-2

2742 唐——東ユーラシアの大帝国

森部 豊 著

六八八年、李淵(高祖)が隋末の争乱の中から、唐を建国。太宗、高宗の時代に突厥・高句麗を破り、最盛期を築く。武則天、玄宗の治世は国際色豊かな文化を生み、大帝国の偉容をこった。安史の乱以降は宦官支配や政争により混乱し、遊牧勢力と流寇の反乱に圧され、九〇七年に滅亡した。本書では、歴代皇帝の事績を軸に、対外戦争、経済、社会制度、宮廷内の権謀術数を活写。東ユーラシア帝国二九〇年の興亡を巨細に描く。

1100円
102742-9

2743 入門 開発経済学
——グローバルな貧困削減と
途上国が起こすイノベーション

山形辰史 著

世界は今なお悲惨さに満ちている。飢餓、感染症、紛争にとどまらず、教育、児童労働、女性の社会参加、環境危機等、課題は山積みだ。途上国への支援は、私たちにとって重要な使命である。一方、途上国自身にも、新たな技術革新の動きが生じている。当事者は今、何を求め、それはどうすれば達成できるか? 効果的な支援とは何か? 開発経済学の理論と最新の動向を紹介し、国際協力のあり方や、今こそ必要な理念について提言する。

900円
102743-6

2744 正倉院のしごと
——宝物を守り伝える舞台裏

西川明彦 著

奈良時代、光明皇后が聖武天皇遺愛の品々を東大寺大仏に献納したことに始まる正倉院宝物。落雷や台風、源平合戦や戦国時代の兵火、織田信長やGHQなど時の権力者による開扉要求といった、数多くの危機を乗り越えてきた。古墳など土中から出土したのではなく、人々の手で保管されてきた伝世品は世界的にも珍しい。千三百年にわたる宝物を守り伝えてきた正倉院の営みを、保存・修理・調査・模造・公開に分けて紹介する。

900円
102744-3

2745 バレエの世界史
——美を追求する舞踊の600年

海野 敏 著

バレエはルネサンス期イタリアで誕生し、今なお進化を続けるダンスの一種だ。当初、王侯貴族が自ら踊り楽しんだが、舞台芸術へと転換。観客も貴族からブルジョワ階級、市民へと拡大する。十九世紀の西欧とロシアで成熟し、世界へ広がった。ダ・ヴィンチ制作の舞台装置、ルイ十四世が舞った「太陽」役、チャイコフスキーの三大バレエ、シヤネルやピカソが参加したバレエ・リュス、そして日本へ——六百年の歴史を通観する。

940円
102745-0

2746 統一教会
——性・カネ・恨から実像に迫る

櫻井義秀 著

一九五四年、文鮮明によって創設された統一教会。戦後韓国で勃興したキリスト教系新宗教の中でも小規模な教団だったが、日本に渡ったのち教勢を拡大、巨額の献金を原資に財閥としても存在感を強めた。「合同結婚式」と呼ばれる特異な婚姻儀礼、日本政治への関与、霊感商法や高額献金、二世信者……。異形の宗教団体はいかに生まれ、なぜ社会問題と化したのか。歴史的背景、教義、組織構造、法的観点などから多角的に論じる。

960円
102746-7

2747 戦後教育史
——貧困・校内暴力、いじめから、
不登校・発達障害問題まで

小国喜弘 著

ここ30年間に不登校といじめの報告件数は、小学生で5・2倍と46倍、中学生で2・5倍と6倍に。特別支援教育対象は、15年間に小中学生ともに3倍近い。少子化にかかわらず、本書は深刻な混迷の中にある日本社会と教育の歴史を辿る。なぜここまで行き詰まったのか。貧困、日教組、財界主導、校内暴力、政治介入、いじめ、学級崩壊、発達障害の激増など、各時代の問題を描きつつ、現在と未来の教育を考える手掛かりとする。

940円
102747-4

2748 物語 チベットの歴史
——天空の仏教国の1400年

石濱裕美子 著

古代に軍事国家だったチベットはインド仏教を受容、12世紀には仏教界が世俗に君臨する社会となった。17世紀に成立したダライ・ラマ政権はモンゴル人や満洲人の帰依を受け、チベットは聖地として繁栄する。だが1950年、人民解放軍のラサ侵入により独立を失い、ダライ・ラマ14世はインドに亡命した。チベットはこれからどうなるのか? 1400年の歴史を辿り、世界で尊敬の念を集めるチベット仏教と文化の未来を考える。

900円
102748-1

2749 帝国図書館
——近代日本の「知」の物語

長尾宗典 著

近代国家への道を歩み出した明治日本。国家の「知」を支えるべく政府によって帝国図書館が設立された。しかし、その道のりは多難であった。「東洋一」を目指すも、慢性的な予算不足で書庫は間寛室も狭く、資料は溢れ、利用者は行列に苦しんだ。本書は、その前身の書籍館から一九四九年に国立国会図書館へ統合されるまでの八〇年の歴史を活写する。

920円
102749-8

2750 幕府海軍

——ペリー来航から五稜郭まで

金澤裕之 著

ペリー来航などの「西洋の衝撃」を受け、1855年に創設された幕府海軍。長崎海軍伝習所、勝海舟らによる咸臨丸の太平洋横断航海、幕長戦争などを経て近代海軍として成長してゆく。鳥羽・伏見の戦いにより徳川政権は瓦解し、五稜郭で抵抗した榎本武揚も敗れて歴史の役割を終えるが、人材や構想などの遺産は明治海軍へと引き継がれた。歴史研究者・現役海上自衛官の二つの顔を持つ筆者が、歴史と軍事の両面から描く。

820円
102750-4

2751 入門 環境経済学

新版

——脱炭素時代の課題と最適解

有村俊秀／日引 聡 著

私たちは製品やサービスを消費して豊かな生活を享受する一方で、気候変動や廃棄物汚染、生態系破壊など多くの環境問題に直面している。経済活動と環境保全は相反する関係にあるが、バランスのよい最適解はどこにあるのか？ 本書は経済学の基礎理論を押さえ、それを環境問題に適用して望ましい政策を検討する。旧版にカーボンプライシングなど最新テーマを大幅加筆して、豊かな環境を引き継ぐための制度設計を提示する。

900円
102751-1

2752 戦後日本政治史

——占領期から「ネオ55年体制」まで

境家史郎 著

日本国憲法の枠組みの中にある戦後日本政治。自民党と社会党のイデオロギー対立は1960年の安保改定問題で頂点を迎える。以降、自民党は経済成長に専心し、一党支配を盤石に。80年代末以降は「改革」が争点となるも、民主党政権を経て、第二次安倍政権以降は再び巨大野党と中小野党が防衛問題を主な争点として対峙している。本書は憲法をめぐる対立に着目して戦後政治をたどり、日本政治の現在地を見極める。

960円
102752-8

2753 エルサレムの歴史と文化

——3つの宗教の聖地をめぐる

浅野和生 著

ユダヤ教やキリスト教、イスラム教の聖典に描かれ、史跡が数多く残る古都エルサレム。今も世界中から巡礼が訪れる。その文化は、古代イスラエル王国が興った紀元前1000年ごろから現在まで、諸民族の激しい攻防をくり返け、受け継がれてきた。本書は、貴重な現地写真など一五〇点以上の図版と共に、「聖なる都市」の唯一無二の魅力を紹介。聖地の起源を物語るエピソードを随所に交え、美術館を巡るように街を探索する。

1000円
102753-5

2754 関東軍

——満洲支配への独走と崩壊

及川琢英 著

関東軍は、一九一九年に中国・関東州と南満洲鉄道附属地の保護を目的に成立した。しかし、一九二八年の張作霖爆殺事件や三一年の満洲事変など、日本政府・陸軍中央の統制から外れて行動し、多くの謀略に関与した。「独走」の代名詞として悪名高い組織は、どのようにして生まれたのか。軍事・外交史研究の蓄積に、中国側の史料も踏まえ、組織制度、軍人たちの個人的特性、満洲の現地勢力との関係から解き明かす。

920円
102754-2

2755 モンスーンの世界

——日本、アジア、地球の風土の未来可能性

安成哲三 著

インド洋の季節風がヒマラヤにぶつかって東アジアに流れ、梅雨前線を形成する。冬にはシベリアの冷気がチベット高原に遮られて東に到来し、日本に大雪を降らせる。モンスーンは日本をはじめ東アジアから南アジアにかけて豊かな自然をもたらし、独自の風土を育んだ。今や「モンスーンアジア」は世界の中心となっている一方で、地球規模の環境危機も招いている。この危機を克服するために、いま私たちは何をすべきか。

1150円
102755-9

2756 言語の本質

——ことばはどう生まれ、進化したか

今井むつみ／秋田喜美 著

日常生活の必需品であり、知性や芸術の源である言語。なぜヒトはことばを持つのか？ 子どもはいつかにしてことばを覚えるのか？ 巨大システムの言語の起源とは？ ヒトとAIや動物の違いは？ 言語の本質を問うことは、人間とは何かを考えることである。鍵は、オノマトペと、アブダクション（仮説形成）推論という人間特有の学ぶ力だ。認知科学者と言語学者が力を合わせ、言語の誕生と進化的謎を紐解き、ヒトの根源に迫る。

新書大賞受賞

960円
102756-6

2757 J・S・ミル

——自由を探究した思想家

関口正司 著

19世紀に活躍した英国の思想家、ジョン・スチュアート・ミル（1806-73）。生涯を通じて道徳と政治のあり方を探究し、『自由論』『代議制統治論』『功利主義』をはじめとする膨大な著作で近代社会の立脚点となる理論を打ち立てた。その生涯——父ジェイムズとの確執、ベンサムへの傾倒、精神的危機、伴侶ハリエットとの出会いと別れ、晩年の議員活動——を丹念に追いながら、今なお鮮然な思想の本質を描き出す。

920円
102757-3

2758 柴田勝家

——織田軍の「総司令官」

和田裕弘 著

織田家随一の重鎮として信長の信頼が厚く、北陸方面軍司令官に任じられた柴田勝家。だが本能寺の変により運命は暗転する。主君の用い合戦で後れをとり、織田家後継を決める清須会議で羽柴秀吉の独断専行を許す。最後は賤ヶ岳で秀吉との決戦に敗れて自害した。「勇猛だが不器用で無策」と評されるなど、勝家には後世作られた負のイメージが根強い。信用しうる同時代史料を中心に事績を検証し、「悲運の名将」の実像に迫る。

860円
102758-0

2759 都会の鳥の生態学

——カラス、ツバメ、スズメ、水鳥、猛禽の栄枯盛衰

唐沢孝一 著

カラスとオオタカの空中戦、コンクリート張りの川で繁殖するカワセミ、高層ビルで子育てするハヤブサ、新たに進出してきたインビヨドリ、スズメやツバメの営巣地の栄枯盛衰…… 都会は自然の少ない人工的な環境だが、鳥たちはしたたかに適応して生きている。身近な鳥、珍しい鳥、意外な鳥たちの知られざる生態を紹介するとともに、人間と鳥たちとの関係の変化も解説、読めば街歩きが楽しくなる。写真多数、カラー図16頁。

1050円
102759-7

2760 諜報国家ロシア

—ソ連KGBから
プーチンのFSB体制まで

保坂三四郎 著

ウクライナへの全面侵攻で世界に衝撃を与えたロシア。なぜ国際法を無視し、密行を続けるのか？ その背景には、ソ連時代に国家の根幹を掌握し、かつてプーチンも所属した諜報機関「KGB」と、ロシア連邦でそれを継承した「FSB」がある。ウクライナで近年公開されたKGBの極秘文書、反体制派やハッカーによるリーク情報、最新のインテリジェンス研究から、「諜報国家 ロシアの社会構造と行動原理」に迫る。

山本七平賞受賞

980円
102760-3

2761 御成敗式目

—鎌倉武士の法と生活

佐藤雄基 著

御成敗式目は一二三二年、鎌倉幕府三代執権の北条泰時により制定された。源頼朝以来の先例や武士社会の道理（慣習や道徳）に基づくとして、初の武家法として名高い。主たる対象は御家人だったが、その影響力はやがて全国規模に拡大する。画期的と評されるこの法はどのように生まれ、なぜ広く知れ渡ったのか。主要な条文を詳しく解説し、受容の実態や後世への影響を視野に、「最も有名な法」の知られざる実像を明かす。

920円
102761-0

2762 災害の日本近代史

—大凶作、風水害、噴火、関東大震災と
国際関係

土田宏成 著

東北大凶作、関東大水害、桜島大噴火、東京湾台風、そして関東大震災……。百年前の日本は、自然の猛威による援て膨大な被災者を出していた。この時代は、世界各地でも巨大災害が続発。国際的な支援活動が活発化し、「二等国」となった日本も対応に迫られる。本書は、巨大災害の実態から、対応、復興、影響、国際関係まで、民衆と国家の双方の視点から記す。戦争で語られがちな日本近代の「もう一つの現実」を描く。

820円
102762-7

2763 「利他」の生物学

—適者生存を超える進化のドラマ

鈴木正彦／末光隆志 著

生物の進化は、自らが生き残り、遺伝子を次世代に継承するための「利己的」なメカニズムとして説明されることが多い。だとすれば、種を超えて観察される「利他的」な行動は、どのように理解すればよいのだろうか？ 本書は、植物学者と動物学者がタッグを組み、その謎の答えに迫る。カギとなるのは「共生」という戦略である。互いの強みを融合し、欠点を補い合いながら自然淘汰に打ち克つた生物たちのドラマ。

880円
102763-4

2764 教養としての建築入門

—見方、作り方、活かし方

坂牛 卓 著

美術館の意匠に感動し、憧れの旅館で心を癒す。名建築で過ごす時間はなぜ格別なのか。建築の見方と作り方を知れば、暮らしは快適になり、楽しみが増す。本書は、日本と西洋の建築史を一望し、観賞・設計、社会という三つのアプローチから建築を堪能する入門書。「機能」と「美」から分け入り、現代に至る建築の画期を読み解く。建築家の世界も惜しみなく紹介。あなたも建築通に。観光や街歩きの格好のガイドになる。

840円
102764-1

2765 浄土思想

—釈尊から法然、現代へ

岩田文昭 著

阿弥陀仏の極楽浄土に往生し、悟りをえて成仏を目指す浄土教。浄土宗、浄土真宗、時宗などの宗派が属し、日本で最も信者数が多い。なぜこれだけ多くの信仰を集めたのか——。本書は、教えの広がりや「物語の力」に着目する。衆生を救うため誓いをたて阿弥陀仏になった「法蔵説話」、家庭不和を主題とする「王舎城の悲劇」などの経典に描かれた話。法然や親鸞ら開祖の物語を読み解きながら、その思想の本質に迫る。

840円
102765-8

2766 オットー大帝

—辺境の戦士から
「神聖ローマ帝国」樹立者へ

三佐川亮宏 著

カール大帝の死後、フランク帝国は3分割される。そのひとつ、東フランク王国の貴族の王として912年に生まれたオットーは、父による東フランク王位獲得の後、936年、国王に即位する。東方異民族による度重なる侵攻、兄弟や息子たちの叛乱、3度のイタリア遠征と、その生涯は戦役の連続だった。カール大帝の伝統を引く皇帝戴冠を受け、のちに神聖ローマ帝国と称される大國の基盤を築いた王者の不屈の生涯を描く。

1100円
102766-5

2767 足利将軍たちの戦国乱世

—応仁の乱後、七代の奮闘

山田康弘 著

足利将軍家を支える重臣たちの争いに端を発した応仁の乱。その終結後、将軍家は弱体化し、群雄割拠の戦国時代に入ります。だが、幕府はすぐに滅亡したわけではない。九代義尚から十五代義昭まで、将軍は百年にわたり権威を保持し、影響力を行使したが、その理由は何か？ 歴代将軍の生涯と事績を丹念にたどり、各地の戦国大名との関係を解明。「無力」「傀儡」というイメージを裏切り、将軍たちの生き残りかけた戦いを描く。

840円
102767-2

2768 ジェンダー格差

—実証経済学は何を語るか

牧野百恵 著

歴史・文化・社会的に形成される男女の差異「ジェンダー」。その差別には近年批判が強く集まる。本書は、実証経済学の成果から就業、教育、歴史、結婚、出産など様々な事柄を取り上げ、格差による影響、解消後の可能性について、国際的視点から描く。議員の女性枠導入「クォータ制」が質の低下より無能な男性議員排除に繋がる、女性への規範が弱い国はど大学歴女性が出産するなどエビデンスを提示。旧来からの慣習や制度を問う。サントリー学芸賞受賞

900円
102768-9

2769 隋—「流星王朝」の光芒

平田陽一郎 著

五八一年に誕生した隋王朝。五八九年には文帝楊堅が南朝の陳を滅ぼし、長き分裂の時代に終止符を打った。草原、華北、江南に君臨する帝国の誕生である。二代目の煬帝は大運河を築き親征を行ったが、高句麗遠征に失敗して動乱を招き、六一八年には唐に滅ぼされた。南朝、高句麗、突厥といったライバルが割拠したユーラシア大陸東部の変動を視野に、北方から興隆し、流星のように消えた軌跡を描く。

1000円
102769-6

2770
インド
グローバル・サウスの超大国

近藤正規 著

人口で中国を上回って世界一に、GDPでも英仏を抜き第5位に。近年では「グローバル・サウス」と呼ばれる新興国・途上国のリーダーと目されることも増えたインド。複雑化する国際政治のなかで展開する独自外交も注目されている。長くインドを研究する経済学者が、財閥の盛衰や成長を続けるIT産業などビジネス面から、米・中・ロとの外交の検証、さらには格差問題の現状、日印関係の今後まで幅広く解説する入門書。

榎山純三賞受賞

2771
カラー版 美術の愉しみ方

「好きを見つめる」から
「判る判らない」まで

山梨俊夫 著

絵に殉じたゴッホの筆遣い、色彩を見極めたセザンヌの眼、人間の生命を影像にしたロダンの手。優れた絵画・彫刻は、作家の感性と知性が結晶した永遠の芸術である。東西の名品を堪能できる現場が美術館や展覧会だ。本書は、関心を開く・好きを見つめる・読む・比べる・敷居をまたぐ・参加する・判るという7つの視点から、読者を現場にいざなう。80点のカラー1図版とともに、美術体験の感動に迫り、愉しみ方を伝授する。

2772
恐怖の正体

トラウマ・恐怖症からホラーまで

春日武彦 著

うじゃうじゃと蠢く虫の群れ、密集したブツブツの集合体、鋭い尖端、高所や閉所、人形、デブコ、屍体。なぜ人は「それ」に恐怖を感じるのか。人間心理の根源的な謎に、精神科医・作家として活躍する著者が迫る。恐怖に駆られると、なぜ時間が止まったように感じるのか。グロテスクな描写から目が離せない理由とは。自らの死を考えるとときの恐ろしさ等々、「得体の知れない何か」の正体に肉薄する。

2773
実験の民主主義

トクヴィルの思想から
デジタルフロンタムへ

宇野重規 著／若林 恵 聞き手

デジタルが社会を一変させるなか、政治は分断を生み、機能不全が深刻だ。なぜ私たちは民主主義を実感できないのか。本書は、19世紀の大転換期を生きたトクヴィルの思索と行動を手がかりに、平等・結社・行政・市民のイメージを一新し、実験的な民主主義像を描き出す。新しい技術が人々の想像力を変えた歴史を捉え、民主主義論の第一人者がフランス革命・アメリカ建国後の政治史を解説。AI時代の社会像と人間像を探究する。

2774
ケマル・アタテュルク

オスマン帝国の英雄、
トルコ建国の父

小笠原弘幸 著

トルコ建国の父、ムスタファ・ケマル（1881〜1938）。オスマン帝国が西欧列強からの脅威にさらされるなか救国の英雄として活躍し、帝国崩壊後はトルコ共和国を建国し大統領に就任する。民族主義と世俗主義を掲げて新国家の建設を進めたケマルは、議会からアタテュルク（父なるトルコ人）という姓を与えられた。今なお国民から敬愛される彼の実像を、愛する家族や、戦いを共にした同志との人間模様を交えて活写する。

2775
英語の発音と綴り

なぜWalkがウォークで、
Workがワークなのか

大名 力 著

なぜWalkがウォークで、Workがワークなのか。Lettersはタイガースなのか、タイガーズなのか。live→livingのように、-ingが付けば取ってしまうのに読まないeを語末に付けるのはなぜか。不思議だらけの英語の発音と綴りだが、仕組みを知れば規則性が見えてくる。本書では、母音と子音、開音節と閉音節、母音字の読み方、「マジックe」など、学校では習わない英語の発音と綴りの仕組みを基本から解説する。

2776
パロック美術

西洋文化の爛熟

宮下規久朗 著

西洋文化の頂点、パロック様式。17世紀を中心に花開いたパロックの建築・彫刻・絵画は、ルネサンス期の端正で調和のとれた古典主義に対し、豪華絢爛で躍動感あふれる表現を特徴とする。本書は、カラヴァッジョ、ルーベンス、ベルニーニ、ペラスケス、レンブラント、フェルメールらの代表的名作を網羅。美術史上の位置づけ、聖俗の権力がせめぎ合う時代背景など、パロック美術の本質を読み解く。カラー写真200点以上。

2777
山県有朋

明治国家と権力

小林道彦 著

明治国家で圧倒的な政治権力を振るった山県有朋。陸軍卿・内相として徴兵制・地方自治制を導入し、体制安定に尽力。首相として民党と対峙し、時に提携し、日清戦争では第一軍司令官として、日露戦争では参謀総長として陸軍を指揮した。その間に、枢密院議長を務め、長州閥陸軍や山県系官僚閥を背景に、最有力の元老として長期にわたり日本政治を動かした。本書は、山県の生涯を通して、興隆する近代日本の光と影を描く。

2778
自動車の世界史

T型フォードからEV、自動運転まで

鈴木 均 著

19世紀末、欧州で誕生した自動車。1908年にT型フォードがアメリカで爆発的に普及したのを機に、各国による開発競争が激化する。フォルクスワーゲン、トヨタ、日産、ルノー、GM、現代、テスラ、上海汽車―トップメーカーの栄枯盛衰には、国際政治の動向が色濃く反映している。本書は、自動車産業の黎明期から、日本車の躍進、低燃費・EV・自動運転の時代における中国の台頭まで、100年の激闘を活写する。

2779
日蓮

「闘う仏教者」の実像

松尾剛次 著

地震や疫病、蒙古襲来など、激動の鎌倉時代を生きた日蓮。天台宗ほか諸宗を学び、三二歳で日蓮宗を開いて法華經の信仰を説いた。鎌倉を本拠に辻説法で他宗を攻撃して圧迫を受け、建白書「立正安国論」の筆禍で伊豆に、のちには佐渡に配流された。死をも恐れぬ「闘う仏教者」のイメージがある一方、民衆の苦しみに寄り添う姿も垣間見られる日蓮。自筆の書簡、数多くの著作をはじめ、史料を博搜して、その思想と人物像に迫る。

2780 物語 江南の歴史
—もうひとつの中国史—

岡本隆司 著

「中国」は古来、大陸に君臨した北方「中原」と経済文化を担った南方「江南」が分立、対峙してきた。潤温温暖な長江流域で稲作が広がりと、楚・呉・越の争覇から、蜀の開発、六朝の繁華、唐・宋の発展、明の興亡、革命のうねりが転変へと、江南は多彩な中国史を形成する。北から甦まれた辺境は、いかにして東ユーラシア全域に冠絶した経済文化圏を築いたのか。中国五千年の歴史を江南の視座から描きなおす。

1000円
102780-1

2781 冷戦史(上)

—第二次世界大戦終結から
キューバ危機まで—

青野利彦 著

1945年に第二次世界大戦が終わると大国の協調は崩壊し、アメリカ中心の西側陣営とソ連中心の東側陣営による冷戦が始まった。ヨーロッパではドイツが東西に分断され、東アジアでは中国の国共内戦、朝鮮戦争という「熱戦」が勃発。さらに脱植民地化の潮流に米ソが介入し、冷戦は第三世界にも拡大した。上巻では、1962年のキューバ・ミサイル危機で核戦争寸前に至るまでを描く。世界的な視野から冷戦を俯瞰する通史。

900円
102781-8

2782 冷戦史(下)

—ベトナム戦争からソ連崩壊まで—

青野利彦 著

キューバ・ミサイル危機後、泥沼化するベトナム戦争が世界に衝撃を与えた。1960年代末から米中ソはデタント(緊張緩和)へ向かうものの、70年代末には再び対立が深まり、「新冷戦」と呼ばれた。だが、その背後では西側経済の優位と東アジア経済の躍進により、第三世界の国々が社会主義を放棄しつつあった。そしてソ連にゴルバチョフが登場し、冷戦は終焉を迎えるが……。戦争と対立が続く現代に、冷戦は何を遺したのか。

880円
102782-5

2783 謎の平安前期

—桓武天皇から『源氏物語』誕生
までの200年—

榎村寛之 著

平安遷都に始まる200年は激変の時代だった。律令国家は大きな政府から小さな政府へと変わったが、国家は豊かになった。その富はどこへ行ったのか。奈良時代の宮廷を支えた女官たちはどこへ行ったのか。新しく生まれた摂関家とは何か。桓武天皇、在原業平、菅原道真、藤原基経ら個性のメンパー、齋宮女御、中宮定子、紫式部ら綺羅星の如き女性が織り成すドラマとは? 「この国のかたち」を決めた平安前期の全てが明かされる。

1000円
102783-2

2784 財政・金融政策の転換点

—日本経済の再生プラン—

飯田泰之 著

世界の経済政策が大きく転換しつつある。これまで政府支出などの財政政策は抑制的に、金融政策はそれとは独立して行うことを常識としてきたが、昨今、その実効性が疑問視されるようになったのだ。巨額の政府債務と長期の低金利政策で財政破綻さえ囁かれる日本。この苦境をどのように打開すべきなのか。財政・金融政策の現代的な意義と機能を考察し、日本再生に必要な両政策の統合運用と高圧経済への移行を提言する。

840円
102784-9

2785 長篠合戦

—鉄砲戦の虚像と実像—

金子 拓 著

一五七五年、織田信長・徳川家康の連合軍と、武田勝頼率いる軍勢が激突した長篠合戦。足軽鉄砲隊の一斉射撃という信長の新戦法により、武田の誇る騎馬隊が潰滅した。画期的な戦いとして知られる。小説や映像で繰り返し描かれるこの鮮烈なイメージは、どのように形作られてきたのか。伝来する合戦図屏風ほか、様々な関連史料を検証し、虚飾に彩られた決戦の実像に迫る。最新研究をふまえて提示する、長篠合戦論の総決算。

900円
102785-6

2786 日本の経済政策

—「失われた30年」をいかに克服するか—

小林慶一郎 著

バブル崩壊以降、「失われた30年」とも言われる長期停滞から抜け出せない日本。なぜこれほど長く低迷しているのか。日本経済を一九九〇年代から振り返り、繰り返し行われた論争と、実施された政策をマクロ経済学の見地から検証する。一九九〇年代の不良債権処理、二〇〇〇年代の格差論争、二〇一〇年代の低金利政策。私たちはどこで判断を誤り、どのように克服すべきか。将来への持続性につながる経済政策を提言する。

920円
102786-3

2787 カーストとは何か

—インド「不可触民」の実像—

鈴木真弥 著

インドに根付く社会的な身分制「カースト」。数千年の歴史のなかで形成され、結婚・食生活・職業など生まれから規制し、今なお影響を与え続ける。カースト問題には、「不浄」とされ蔑視が続く最底辺の不可触民「ダリト」への差別がある。政府は2億人に及ぶダリトを支援する施策を打つが、その慣習は消えず、移民した世界各国でも問題化している。本書はインドに重くのしかかるカーストについて、歴史から現状まで、具体的な事例を通して描く。

900円
102787-0

2788 生き物の「居場所」はどう決まるか

—攻める、逃げる、生き残るための
すこい知恵—

大崎直太 著

世界は広いが、それぞれの生き物が生きられるのは、ほんの小さな場所にすぎない。ウナギは川底の穴にしか棲めないし、モンシロチョウはいつもキャベツ畑を飛んでいる。生き物の居場所「ニッチ」は、なぜそこに決まっているのか。これまで餌や配偶者の存在などの理由が考えられてきたが、実は天敵の不在こそが何よりも重要なのだ。生き物たちの巧妙な生き方から、天敵不在と繁殖干渉という、生態学の核心的概念を紹介する。

1050円
102788-7

2789 在日米軍基地

—米軍と国連軍、「2つの顔」の80年史—

川名晋史 著

世界で最も多くの米軍基地を抱え、米兵が駐留する日本。米軍のみならず、終戦後一貫して友軍の「国連軍」も駐留する。なぜ、いつから基地大国になったのか。米軍の裏の顔で、冷戦終結、現代の普天間移設問題まで、基地と日米関係の軌跡を追う。「日本は基地を提供し、米国は防衛する」という通説を覆し、特異な実態を解明。戦後史を描き直す。

1100円
102789-4

2790 **ウマは走る ヒトはコケる**
——歩く・飛ぶ・泳ぐ生物学
本川達雄 著
背骨と手足を得て、脊椎動物は速く長距離を移動できるようになった。走る、泳ぐ、飛ぶと方法は異なるが、動物それぞれが素早い動きを可能にする体のデザインを持っている。ヒトはコケつつ歩くが、これがめつばう効率がよくていい。なぜ？ 鶏の胸肉はササミよりも3倍も大きい。なぜ？ 渡り鳥が無着陸で何千kmも飛べる。なぜ？ 魚やイルカには頭がなぜ？ 皆、納得のいく理由がある。動くための驚きの仕組みが満載！
1000円
102790-0

2791 **中国農村の現在**
——「14億分の10億」のリアル
田原史起 著
経済発展めざましい中国。だが、農村部は置き去りにされていないか。出稼ぎの「農民工」は虐げられ「留守児童」は劣悪な環境に置かれていないか。1990年代末から中国各地の農村でフィールドワークを重ねてきた著者が実態を迫る。家族の発展を何より重視する精神、末端幹部たちの奮闘、裏金が飛び交う村の選挙、習近平政権が進める都市化の本当の意味とは。現場で農民と酒を飲み交わし、初めて見えてくる実像。
960円
102791-7

2792 **三井大坂両替店**
——銀行業の先駆け、その技術と挑戦
萬代 悠 著
元禄四年（一六九一）に三井高利が開設した三井大坂両替店。当初の業務は江戸幕府に委託された送金だったが、その役得を活かし民間相手の金貸しとして成長する。本書は三井の膨大な史料から信用調査の技術と法制度を利用した工夫を読み解く。そこからは三井の経営手法のみならず、当時の社会風俗や人々の倫理観がみえてくる。三井はいかにして栄え、日本初の民間銀行創業へと繋がったか。新たな視点で金融史を捉え直す。サントリール学芸賞受賞
1000円
102792-4

2793 **化石に眠るDNA**
——絶滅動物は復活するか
更科 功 著
DNAには不思議な魅力がある。大ヒット映画「ジュラシック・パーク」では、琥珀の中に造られたDNAから、恐竜を現代に蘇らせた。それは絵空事とはいき切れない。マンモスなど絶滅動物の復活をめざす取り組みは今なお続けられている。古代DNAの研究を進展させた新技術はどのようなものか。生命を操作することに重大なリスクはないのか——。科学者たちが織りなしたドラマとともに、起伏に富んだ研究史をたどる。
1000円
102793-1

2794 **流出する日本人**
——海外移住の光と影
大石奈々 著
日本人の海外「流出」が注目されている。ワーキングホリデーの若者、子育て世代、富裕層、技術者や研究者、リタイア世代。日本をなぜ離れるのか。海外移住にはどんなリスクがあるのか。移住研究の第一人者が、当事者へのインタビューやデータをもとに実態を迫る。自由な環境で実力を発揮する人々から、悪徳業者に騙される若者、帰国したくてもできない離婚者まで、海外で暮らす人々の明暗と日本への影響。
840円
102794-8

2795 **ナチ親衛隊（SS）**
——「政治的エリート」たちの歴史と犯罪
バステイアン・ハイン 著
若林美佐知 訳
ヒトラーの護衛に過ぎなかった親衛隊は、ナチ政権発足後、党や全国の警察組織を掌握。強制収容所を創り敵対勢力を弾圧する。第2次世界大戦開始後は行動部隊、アウシュビッツなどの絶滅収容所を起動しユダヤ人の大量殺戮を主導、80万人の巨大な軍事組織・武装親衛隊も併せ持った。本書は、ヒトラーに最も忠実な「エリート」たちの選抜から、ホロコーストの実行、カルト的信仰、戦後の姿までその全貌を描く。解題・芝健介
1000円
102795-5

2796 **堤康次郎**
——西武グループと20世紀日本の開発事業
老川慶喜 著
早稲田大学在学中に起業、卒業するや別荘地や住宅地を積極的に開発した堤康次郎。その軌跡は、公務員・会社員などの新中間層（サラリーマン）の誕生や都市人口の増大と重なる。軽井沢や箱根では別荘地や自動車道を、東京では目白文化村や大泉・国立などの学園都市を開発した。さらに私鉄の経営権を握り、百貨店や化学工業も含めた西武コンツェルンを一代で築くが、事業の本分はまぎれもなく「土地」にあった。膨大な資料から生涯を読み解く。
1200円
102796-2

2797 **英語の読み方 リスニング篇**
——話し言葉を聴きこなす
北村一真 著
音声英語に接し、聴き取れないからと英語習得を断念したことはないだろうか。安心していただきたい。一定の速度で英文が読めれば、自ずとリスニングの力も上達するからだ。本書では、まず読む力を鍛え、話す英語の本質とリスニング力向上のポイントを指南。ニュースや映画予告編、首相・国王や実業家のスピーチなど「本物の英語」を教材に、聴く力を身に付ける。随所に独習のコツ、巻末に即役立つ20の厳選例文を収録。
840円
102797-9

2798 **日ソ戦争**
——帝国日本最後の戦い
麻田雅文 著
日ソ戦争とは、1945年8月8日から9月上旬まで満洲・朝鮮半島・南樺太・千島列島で行われた第2次世界大戦最後の全面戦争である。短期間ながら両軍の参加兵力は200万人を超え、玉音放送後に戦闘が始まる地域もあり、戦後を見据えた戦争だった。これまでソ連の中立条約破棄、非人道的な戦闘など断片的には知られてきたが、本書は新史料を駆使し、米国のソ連への参戦要請から各地での戦闘の実態、終戦までの全貌を描く。司馬遼太郎賞受賞
980円
102798-6

2799 **戦後フランス思想**
——サルトル、カミュからバタイユまで
伊藤 直 著
第二次世界大戦後、ナチ・ドイツから解放されたフランスの思想界には、時代を牽引する書き手が台頭した。サルトルを筆頭にカミュやボアヴォアゼ、メルロー・ポンティ、バタイユらが次々と作品を世に問い、論戦も繰り広げた。本書は、哲学と文学を架橋して展開された彼らの創作活動に着目。実存主義が世を席巻し、知識人や芸術家の政治的社会参加（アンガージュマン）が唱えられた時代の知的潮流は、何をもたらしたのか。その内実を描き出す。
900円
102799-3

2800
日本列島はすごい
—水・森林・黄金を生んだ大地—

伊藤 孝著

1万4千の島々が連なる日本列島は、ユーラシア大陸の東縁でその土台ができ、やがて分離。3万8千年前に人類が上陸し、歴史を紡いできた。変化に富んだ気候が豊かな資源を生み、国土を潤す。本書は、時空を超えて島国の成り立ちと形を一望し、水、火、塩、森、鉄、黄金が織りなした日本列島史を読み直す。天災から命を守り、資源を活かす暮らしとは。地学教育の第一人者が、列島で生きる醍醐味をやさしく解説する。

2801
神聖ローマ帝国
—「弱体なる大国」の実像—

山本文彦 著

オットー一世の皇帝戴冠（九六二年）を起源とする神聖ローマ帝国は、ドイツを中心に周辺へと領域を広げた。皇帝位は一四三八年以降、ハプスブルク家がほぼ独占。十六世紀に最盛期を迎える。宗教改革、三十年戦争といった混乱を経て帝国は衰退し、一八〇六年に消滅した。弱体に見える国家が八五〇年も存続したのはなぜか。叙任権闘争など、皇帝と教皇の関係はいかなる推移をたどったのか。捉えにくい「大国」の実像に迫る。

2802
日本の財政
—破綻回避への5つの提言—

佐藤主光 著

コロナ禍、ウクライナ危機を経てインフレ転換した世界経済。有事対応で財政出動を繰り返した日本は、債務残高対GDP比で先進国最悪である。デフレ下でこそ持ちこたえられた財政には新たな破綻シナリオもよぎる。日本の危機的状況を再確認するとともに、立て直しの方策として、税制と財政ルール改革、成長戦略、セーフティネット構築、ワイズスペンディングなど5つの提言。未来につなぐ財政民主主義のあり方を問う。

2803
台湾のデモクラシー
—メディア、選挙、アメリカ—

渡辺将人 著

権威主義体制が長く続いた台湾。1996年に総統の直接選挙が始まり、2000年には国民党から民進党への政権交代が実現した。今や「民主主義指数」でアジア首位に立つ。中国の圧力に晒されながら、なぜ台湾の民主主義は強靱なのか。また弱点はどこにあるか。白熱する選挙キャンペーン、特異なメディア環境、多様な言語と文化の複雑さ、そしてあらゆる点で大きな影響を及ぼすアメリカとの関係に注目し、実態を解き明かす。サントリー学芸賞受賞

2804
元朝秘史
—チンギス・カンの一級史料—

白石典之 著

蒼き狼と白き牝鹿の伝説に始まる『元朝秘史』。チンギス・カンの生涯と事績を中心に、はるかなる祖先の系譜から第二代君主ゴゲイの治世までを綴った、モンゴル帝国研究に不可欠な文獻である。史書ながら、異母弟殺し、妻ボルテの誘拐、後継の座をめぐる息子たちのいさかいなど、生々しいエピソードも少なくない。魅力に富む壮大な歴史絵巻を、現地での発掘調査に長年携わってきた考古学者が、新知見を踏まえて解説する。

2805
老いの深み

黒井千次 著

80代から90代の大台へと足を踏み入れた作家がつづる日常。少しずつ縮む散歩の距離、少量の水にむせる苦しさ、朝ぼんやりと過ごす時間の感覚など、自身に起る変化を見つめる。移りゆく社会を横目に「ファックス止り」の自分をなぐさめ、暗証番号を忘れて途方に暮れ……。一方、年長者が背筋を伸ばしてスピーチを聞く姿に爽快感を覚え、電車の乗客の「スモハラ」など新発見も。老いと向き合い見えたこと、考えたこと。

2806
言論統制
—情報官・鈴木庫三と教育の国防国家—

佐藤卓己 著

戦後のジャーナリズム研究で、鈴木庫三は最も悪名高い軍人である。戦時中、非協力的な出版社を恫喝し、用紙配給を盾に言論統制を行った張本人とされる。超人的な勉強の末、陸軍から東京帝国大学に派遣された鈴木は、戦争指導の柱となる国防国家の理論を生み出した教育将校でもあった。『悪名』成立のプロセスを追うと、通説を覆す事実が続く。言論弾圧史に大きな変更を迫った旧版に、その後発掘された新事実・新資料を補増。

2807
グリーン戦争
—気候変動の国際政治—

上野貴弘 著

人類共通の課題、気候変動。各国はこれを解決すべく、温室効果ガスの排出削減を目標に掲げ2015年にパリ協定に合意した。しかし17年、トランプ米大統領が協定脱退を宣言。中国やインドなど新興国が条件闘争をはじめ、国際協力が動揺している。本書は米国、欧州、新興国の利害が錯綜する政治力学を、産業、貿易、金融、エネルギーの観点から解き明かす。激しい国家間対立の終結を目指して、世界、日本が進むべき道とは。

2808
広東語の世界
—カントン語—

飯田真紀 著

香港人の母語にして華南の共通語である広東語。東南アジア、欧米の華人社会も含め世界で8000万人が話す「中国語」だ。なぜ海外でかくも優勢なのか。北京語とはどう違うのか。謎を解く鍵は日本語にもある。ヤムチャ、チャーシュー、キョンシー、モウマントイ、ブルース・リー。本書では食や映画を手がかりに、文法・会話・香港社会、華人移民、漢字、十大方言を一望し、広東語の世界を探究。中国語とは何かを問い直す。

2809
NPOとは何か
—災害ボランティア、地域の居場所から気候変動対策まで—

宮垣 元 著

政府・自治体や企業から独立した民間の非営利団体・組織「NPO」。阪神・淡路大震災後のボランティア活動以降、広く知られる。近年、子どもへの貧困や孤独、気候変動など新たな社会課題が顕在化すると、行動の中心となり、活動分野と範囲を拡大。かつての会社や地域社会のような人々を結び付ける「中間集団」が細るなか、その受け皿としても注目される。本書は、歴史、制度、存在理由から特性まで、把握しつらい実態を描く。

2810 **日本鉄道廃線史**
消えた鉄道の跡を行く
小牟田哲彦 著
野ざらしの廃車両、ぼつかりと闇をのぞかせる廃トンネル……全国に散在する廃線にも、かつては活気に満ちた時代があった。なぜこれらは廃止されてしまったのか。戦中の「不要不急路線」にはじまり、モーターゼリションや国鉄再建に伴う大量の廃止、近年の自然災害による廃線などを時代別・種類別に紹介する。そして現在、新たに巻き起こっている廃線議論の解決策はどこにあるのか。廃線からたどる日本交通史。
1050円
102810-5

2811 **アフアーマティブ・アクション**
平等への切り札か、逆差別か
南川文里 著
「積極的差別是正措置」と訳されるアフアーマティブ・アクション。入試や雇用・昇進に際して人種やジェンダーに配慮する取り組みだ。1960年代、公民権運動後のアメリカで構造的な人種差別解消のため導入されたが、「逆差別」「優遇措置」との批判が高まる。21世紀には多様性の推進策として復権するも、連邦最高裁は2023年に違憲判決を下した。その役割は終わったのか。アメリカの試行錯誤の歴史をたどり考える。
880円
102811-2

2812 **サンスクリット入門**
インドの思想を育んだ「完全な言語」
赤松明彦 著
仏も塔も鳥居も瓦もジャングルもアパートも、サンスクリットに起源を持つ単語だ。紀元前4世紀に文法学者パニーニが完成させた言語であるサンスクリットは、プログラム言語のうな厳密さと正確さと簡潔さを持ち、インド思想や仏伝などの記述に使われてきた。日本にも仏教と共に伝わり、五十音がサンスクリットに由来を持つようにその影響はいまなお大きい。「完全な言語（サンスクリタ）」の文法を学びながら、思想と文学の精華に触れよう。
1300円
102812-9

2813 **ダーウィン**
「進化論の父」の大いなる遺産
鈴木紀之 著
『種の起源』で進化論を唱え、科学に革命をもたらしたチャールズ・ダーウィン（1809-82）。後代の思想、社会観にも影響を与え続けてきた。だが、大発見は進化論にとどまらな。人類の起源、感情の由来、性淘汰、動物の心理、新種の化石の発掘、サンゴ礁の形成、家畜・作物の品種改良、花と昆虫の関係……。本書は、ダーウィンの劇的な生涯を辿り、進化論の本質、彼の偉業を紐解く。旧来のイメージを刷新する。
1000円
102813-6

2814 **吾妻鏡**
あずまかがみ
鎌倉幕府「正史」の虚実
藪本勝治 著
鎌倉幕府草創から中期までの事績を記した「吾妻鏡」。源頼朝率兵に至る経緯、二代将軍頼家の暗愚、三代執権北条泰時の武勇と仁徳ほか、小説やドラマが描く挿話の多くはこの史料に基づく。幕府の公式記録とも言われるが、史実の錯誤や改変も少なくない。本書では平家追討、奥州合戦、実朝暗殺、承人の乱など主要な合戦や争乱の叙述を、近年の研究も踏まえて検証。「正史」に潜む虚構を洗い出し、隠された意図を明らかにする。
1000円
102814-3

2815 **消費者と日本経済の歴史**
高度成長から社会運動、
推し活ブームまで
満園 勇 著
SDGs、応接消費、カスハラなど、消費者にまつわる用語に注目している。背景にはどのような潮流があるのか。本書は、一九六〇年代の消費革命から、平成バブル、長期経済停滞、現在までを、消費者を通して読み解く。生産性向上運動、ダイエー・松下戦争、堤清二とセゾングループのビジョン、セブン・イレブンの衝撃、お客様相談室の誕生などを論じ、日本経済の歩みとともに変貌してきた消費者の姿と社会を描き出す。
880円
102815-0

2816 **西郷従道**
維新革命を追求した最強の「弟」
小川原正道 著
幕末期、兄隆盛・大久保利通のもと、尊攘派志士として活躍した従道。20代半ばで欧州視察後、台湾出兵では派遣軍トップとして制圧。西南戦争では国家建設を優先し陸軍卿代理として、叛乱軍指導者の兄と敵対。隆盛自刃後、謹慎する。天皇に請われ復讐後は海相を長期間務め、日清戦争時には陸海相兼務など軍事的指導者、さらに元老として政府中枢を担った。最晩年まで首相待望論があったが、「賊将の弟」と固辞し続けた志士の生涯。
900円
102816-7

2817 **アメリカ革命**
独立戦争から憲法制定、
民主主義の拡大まで
上村 剛 著
1776年に独立を宣言した13植民地が、イギリス本国との戦争に勝利し、合衆国に生まれ変わったアメリカ革命。人民主権、三権分立、二大政党のモデルは、民主政治の基礎となる。なぜ革命を遂げた弱小国は、覇権国家になりえたか。植民地時代から独立戦争、建国者たちが死闘を演じた憲法制定、党派の始まり、南北戦争へ。大西洋を越えたスケールで、先住民・黒人奴隷の視点もふまえ、70年の歴史を清新に描きだす。
900円
102817-4

2818 **昭和歌謡史**
古賀政男、東海林太郎から、
美空ひばり、中森明菜まで
刑部芳則 著
日本人の心を躍らせ、泣かせてきた昭和の歌謡曲。その礎は中山晋平、西條八十が築き、三大作曲家の古賀政男、古関裕而、服部良一によつて確立する。時代は戦争、敗戦と復興、高度成長へと進み、視聴手段もレコード、ラジオからテレビへと変化する。本書は作詞家、作曲家、歌手が残した膨大な史料を用いて実証的に考察。数々の名曲が生まれた背景とその特徴を炙り出す。人はなぜ昭和歌謡に魅了されるのか。
1050円
102818-1

2819 **死ぬということ**
医学的に、実務的に、文学的に
黒木登志夫 著
「死ぬということ」は、いくら考えても分からない。自分がいなくなるということが分からないのだ。生死という大テーマを哲学や宗教の立場から解説した本は多いが、本書は医学者が記した、初めての医学的生死論である。といつても、内容は分かりやすい。事実に基づきつつ、数多くの短歌や映画を紹介しながら、ユーモアを交えてやさしく語る。加えて、介護施設や遺品整理など、実務的な情報も豊富な、必読の書である。
1200円
102819-8

2820
レコンキスタ
―「スペイン」を生んだ
中世800年の戦争と平和

黒田祐我 著

2821
在野と独学の近代

―ターウイン、マルクスから
南方熊楠、牧野富太郎まで

志村真幸 著

2822
日本の果物はすごい
―戦国から現代 世を動かした
魅惑の味わい

竹下大学 著

2823
独仏関係史

―三度の戦争からEUの中核へ

川嶋周一 著

2824
アメリカ黒人の歴史

―奴隷貿易からオバマ大統領、
BLM運動まで

上杉 忍 著

2825
就職氷河期世代

―データで読み解く
所得・家族形成・格差

近藤絢子 著

2826
里親と特別養子縁組

―制度と暮らし 家族のかたち

林 浩康 著

2827
死とは何か

―宗教が挑んできた人生最後の謎

中村圭志 著

2828
加耶／任那

―古代朝鮮に倭の拠点はあったか

仁藤敦史 著

2829
私たちの平安後期

―紫式部から源平までの200年

榎村寛之 著

8世紀の初め、ジブラルタル海峡を渡ってイベリア半島、さらにフランスまでを席巻したイスラーム勢力。その後はキリスト教徒側が少しずつ押し戻し、1492年のグラナダ陥落でイスラーム勢力を駆逐した。この800年に及ぶ「聖戦」はレコンキスタの一語でまとめられてきた。だが、どちらの勢力も一枚岩ではなく、戦争と平和、寛容と不寛容、融和と軋轢が交錯していた。レコンキスタの全貌を明かす、初の通史。

1100円
102820-4

近代に入り、大学をはじめ研究機関が整備される中、在野で独学に打ちこむ道を歩んだひとびともいた―。本書は、柳田国男に「日本人の可能性の極限」と評された南方熊楠を軸に、ターウイン、マルクスから福来友吉、牧野富太郎、三田村鳶魚ら、英日の独学者たちの姿を写真する。さらに郵便、辞書、雑誌、図書館といった「知」のインフラやシステムにも着目。彼らの営為と、変化する環境を通して、学問の意味や可能性を探る。

960円
102821-1

日本の歴史を語るのに果物は欠かせない。なぜ柿は平安時代から生活用品だったのか。徳川家康はなぜ関ヶ原の戦い直前に柿と桃に願をかけたのか。ペリー来航の際、アメリカと対等に渡り合おうと日本が振る舞った料理に添えられた果物とは何か。太平洋戦争中、軍需物資として密かに大量生産されたのはどんなブドウだったか。日本社会・経済発展の知られざる裏側を「果物×歴史」で多種多様に読み解く、「もうひとつの日本史」。

1000円
102822-8

ドイツとフランスは、19世紀から20世紀にかけての70年間に3度も戦争を繰り返して、不信と憎悪を募らせた。しかし、その後の両国は徐々に和解への道を歩み始め、EUの基盤を築いていく。なぜ協定は可能だったのか。本書は、ド・ゴール、アデナウアー、ミッテラン、コール、メルケル、マクロンなどの政治指導者の政策、民間外交の動きなどを一望。因縁深い両国の関係を通して、欧州の歴史をたどり、展望を示す。

1080円
102823-5

黒人たちはアメリカ社会の底辺にいとされてきた。だが20世紀後半、徐々に社会的地位を高め、中産階級の仲間入りをする者も現れる。文化や芸能、スポーツなどの分野での活躍は目覚ましく、政財界に進出した例も少なくない。本書は、アメリカ独立以前から南北戦争、公民権運動を経て現代まで、差別に直面しながらも境遇改善の努力を積み重ねた彼らの歩みを辿る。二〇一〇年代に勃興したBLM運動を概観する新章を収録。

980円
102824-2

バブル崩壊後、未曾有の就職難が社会問題となった。本書は1993〜2004年に高校、大学などを卒業した人々を「就職氷河期世代」と定義し、雇用形態や所得などをデータから明らかにする。不況がこの世代の人生に与えた衝撃は大きい。結婚・出産など家族形成への影響や、男女差、世代内の格差、地域間の移動、高齢化に伴う困窮について検討し、セーフティネットの拡充を提言する。統計から見えてくるこの世代の実態とは。

880円
102825-9

実の親と暮らせない子どもたちはこの国で3万人を超える。彼らの成長を家庭内で支えていくのが、里親や特別養子縁組だ。前者は一時的に育てる公的養育で、後者は生涯にわたり親子関係が持続する。それぞれの家庭で、親と子はどのように暮らし、どんな思いを抱いているのか。血縁なく中途から養育する制度の意義や課題は何か。子どもの支援のあり方に長年取り組む著者が、当事者へのインタビューなど多くの事例をもとに解説する。

820円
102826-6

死んだらどうなるのか。天国はあるのか。まだまだ生きたい。来世で逢おう―。尽きせぬ謎だからこそ、古来、人間は死や転生、不老長寿を語り継いできた。本書は、死をめぐる諸宗教の神話・教え・思想を歴史的に通覧し、「死とは何か」に答える。ギリシアや日本の神話、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教から、ヒンドゥー教、仏教、さらに儒教、神道まで。浮世の煩悩をはらい、希望へいざなう「死の練習」帳。

1000円
102827-3

加耶／任那は3〜6世紀に存在した朝鮮半島南部の小国群を指す。「日本書紀」は任那と記し、「任那日本府」の記述などから長く倭の拠点と認識されてきた。だが戦後、強く疑義が呈される。歴史教科書の記述は修正が続き、呼称も韓国における加耶へと変わる。他方で近年、半島南部で倭独自の前方後円墳の発掘が相次ぎ、倭人勢力説が台頭する。本書は、古代東アジア史の大きな争点である同地域の実態を実証研究から明らかにする。

900円
102828-0

平安後期、天皇を超える絶対権力者として上皇が院政をしき、それを支える中級貴族や源氏・平家などの軍事貴族、乳母が権力を持つようになる。そのなかで巨大な権力を持った女院たちが登場、莫大な財産は源平合戦のきっかけを作り、武士の世へと移って行く。紫式部が「源氏物語」で予言し、中宮彰子が行き着いた女院権力とは？「女人入眼の日本国（政治の決定権は女にある）」とまで言われた平安後期の実像がいま明かされる。

1040円
102829-7

2830 地方消滅2

加速する少子化と
新たな人口ビジョン

人口戦略会議 編著

2014年刊行の『地方消滅』と、そこで示した896の「消滅可能性都市」リストは、衝撃をもたらした。それから10年を経て、東京の出生率は0.99になるなど、なお少子化は加速する。このままだと2100年に人口は6300万人、高齢者が4割の国になりかねない。本書は、全国1729自治体を9つに分類。「プラックホール型自治体」の特性なども分析し、持続可能な社会へ向かうための戦略とビジョンを打ち出す。

920円
102830-3

2831 イノベーションの科学

創造する人・破壊される人

清水 洋著

経済成長の起爆剤として期待されるイノベーション。将来への新しい希望であると同時に、「創造的破壊」と言われるように、人々のスキルや生活の基盤を壊す側面もある。本書は「人の観点から検討し、創造の促進は元より、破壊の打撃を軽減する方策を考察する。創造する人、破壊される人の特徴とは？ 抵抗と格差を縮小する教育投資、ミドル・シニア層のリスクリングとは？ 希望と幸せのための二つのリスク・シェアとは？」

920円
102831-0

2832 大学改革

自律するドイツ、つまづく日本

竹中 亨著

2004年の法人化により、日本の国立大学は自律と教育・研究の活性化を求められた。だが、目標を達成したとは言いがたい。原因は国からの交付金の先細りなのだろうか。同様の改革を進めたドイツの国立大学は、厳しい予算下でも、複数校が競争しつつ世界大学ランキングの上位を占めている。学長のリーダーシップなど、日本で礼賛されてきた英米モデルを見つめ直し、日独の明暗を分けた大学統治のあり方を比較検証する。

860円
102832-7

2833 脳の本質

いかにしてヒトは知性を獲得するか

乾 敏郎／門脇加江子 著

なぜ細胞の集合体である脳から自我が生まれ、感情が湧くのか。どうして相手の心がわかるのか。脳はいかに言語を操るのか。そもそもなぜ生命を維持できるのか。鍵は、脳がする「予測」と予測誤差の修正だ。本書では、知覚、感情、運動から、言語、記憶、モチベーションと意思決定まで、脳が発達する原理をひとつとく。子どもの学習や障害、意識の構造も一望。人類に残された謎である、高度な知性を獲得するしくみを解き明かす。

1000円
102833-4

2834 日米首脳会談

政治指導者たちと同盟の70年

山口 航著

日本の「参勤交代」「物乞い」とまで当初揶揄された日米首脳会談。経済面での日本の台頭、米国の覇りから、貿易摩擦や安全保障問題を抱える関係、2国間を超えた国際社会でのパートナーへと変貌。他国と比しても会談頻度は増している。トップ同士の対話や人間関係は、何を生み、創ってきたか。――本書は、米14人、日本28人の首脳に約150回に及ぶ会談を追いつ、70年以上にわたる日米関係を政治指導者を通して描く。

1160円
102834-1

2835 カナダ

資源・ハイテク・移民が拓く
未来の「準超大国」

山野内勘二 著

留学・移住先として日本での人気は高いが、実情は知られていないカナダ。食糧やエネルギー豊かな資源大国、ノーベル賞学者を育んだAIや量子技術の開発国、地球温暖化対策の先進国、そして移民立国など多様な側面を持つ国の光と影を紹介。「アメリカの51番目の州」との揶揄もあるが、自由・民主主義・人権重視をわが国と共有する外交パートナーとして存在感を高めている。未来の「準超大国」の可能性と課題とは？

960円
102835-8

2836 使うための英語

ELF（世界の共通語）として学ぶ

瀧野みゆき 著

英語で話す、メールを書く、会議で議論する……。自分の考えを英語で伝えたい、「使うための」英語を学びたい！ そんな人々に本書は、ELF「世界の共通語（リンガ・フランカ）」としての英語への発想転換を提案する。世界の実践知を取り入れ、自分のニーズに合わせて、効果的に学び、使えるようになる方法だ。発音やリスニングからテクノロジーの活用まで、「知っている英語」を「使える英語」に変えるための具体的な英語勉強法を紹介する。

1000円
102836-5

2837 日本政治学史

丸山眞男からジェンダー論、
実験政治学まで

酒井大輔 著

「科学としての政治学」は、どのような道程をたどったのか――。本書は、戦後に学会を創り、行動論やマルクス主義の成果を摂取した政治学が、先進国化する日本でいかに変貌してきたのかを描く。丸山眞男、升味準之輔、京極純一、レウアイアサン・グループ、佐藤誠三郎、佐々木毅などの業績に光を当て、さらにジェンダー研究、実験政治学といった新たに生まれた潮流も追う。欧米とは異なる軌跡を照らし、その見取り図を示す。

1080円
102837-2

2838 続・日本軍兵士

帝国陸海軍の現実

吉田 裕著

先の大戦で230万人の軍人・軍属を喪った日本。死者の6割は戦闘ではなく戦病死による。この大量死の背景には、無理ある軍拡、「正面装備」以外の軽視、下位兵士に犠牲を強いる構造、兵士の生活・衣食住の無視があった。進まない機械化、パン食をめぐる精神論、先進的と言われた海軍の住環境無視……日中戦争の拡大とともに限界が露呈していく。本書は帝

900円
102838-9

2839 ユダヤ人の歴史

古代の興亡から離散
シオニズムまで

鶴見太郎 著

ユダヤ教を信仰する民族・ユダヤ人・学問・芸術に長けた知力、富のネットワーク、ホロコーストに至る迫害、アラブ人への弾圧――。五大大陸を流浪した集団は、なぜ世界に影響を与え続けているのか。古代王国建設から民族離散、パレスチナ・ローマ・スペイン・オスマン帝国下の繁栄、東欧での迫害、ナチによる絶滅計画、ソ連・アメリカへの適応、イスラエル建国、中東戦争まで。三〇〇〇年のユダヤ史を雄大なスケールで描く。

1080円
102839-6

2840 **皇室典範**
—明治の起草の攻防から
現代の皇位継承問題まで
笠原英彦 著
伊藤博文の主導で制定された明治の皇室典範。女帝・女系容認の可能性もあったが、皇位継承資格は「男系の男子」限定で、退位の規定もない。その骨格は戦後の皇室典範でも維持された。皇族男子の誕生は極めて稀で、皇族数の減少も続く。制度的矛盾が顕在化して久しい。小泉内閣時代に改正の検討が始まるも、進展はまだ見えない。本格的議論の再開に向けて、皇室制度の専門家が論点を整理し、法改正への道筋を探る。

2841 **アッシリア全史**
—都市国家から世界帝国までの
1400年
小林登志子 著
アッシリアは、イスラエルの民を虜囚にし、敵対民族を残酷に処刑したとして、「旧約聖書」では悪役に描かれる。だがその実像はバビロニアの先進文明に学び、長きにわたって栄えた個性的な国だ。紀元前2000年に誕生した小さな都市国家が他国に隸従しつつも、シャルマネセル3世、サルゴン2世らの治世に勢力を拡大、世界帝国となるが、急速に衰微し、前609年に瓦解する。その盛衰を軍事・宗教・交易など多角的に描く。

2842 **近代日本の対中国感情**
—なぜ民衆は嫌悪していったか
金山泰志 著
明治維新後、欧米をモデルに近代化した日本。他方中国はその停滯から一転し蔑視の対象となった。日清・日露戦争、満洲事変、日中戦争と経るなか、それは敵愾心から侮蔑、嘲笑へと変わっていった。本書は、明治から昭和戦前までの民衆の対中感情を追う。世論調査を時代、民衆が愛読した少年雑誌に着眼。赤裸々な図版から、古代中国への変わらぬ思慕とは対照的に、同時代中国への露骨な差別意識、感情を描く。図版百点収載。

2843 **コミンテルン**
—国際共産主義運動とは何だったのか
佐々木太郎 著
ロシア革命後の一九一九年、コミンテルン（共産主義インターナショナル）は、世界革命のために誕生。各国共産主義政党の国際統一組織として、欧州のみならずアジアなど各地に影響を及ぼすべく、様々な介入や工作を行った。本書は、レーニンやスターリンら指導者の思想も踏まえ、知られざる活動に光をあてる。一九四三年の解体にいたるまで、人々を煽動する一方、自らも歴史に翻弄され続けた組織の軌跡を描き出す。

2844 **世界の教育はどこへ向かうか**
—能力・探究・ウェルビーイング
白井 俊著
デジタル化やグローバル化などの社会変化を背景に、世界各国が教育改革を加速させている。本書は国連やOECD、ユネスコなどの国際機関、各国での議論を踏まえ、これからの教育を考察する。新たな時代に求められる能力や主体性、ウェルビーイングとは何か。各国が直面する教師不足や過重カリキュラムへの対応策は。そして、日本に欠けている点とは。一人ひとりの子供が尊重された、あるべき教育、学校の未来を探る。

2845 **神道とは何か**
—神と仏の日本史
増補版
伊藤 聡 著
日本（固有）の民族宗教といわれる神道はどのように生まれ、その思想はいかに形成されたか。明治維新による神仏分離・廃仏毀釈以前、日本は千年以上にわたる神仏習合の時代だった。本書は両部・伊勢神道を生み出した中世を中心に、古代から近世にいたる過程を丹念にたどる。近代の再編以前の神をめぐる信仰と、仏教などとの交流から浮かび上がる新しい神道の姿とは。補論「神道と天皇」を収録し、新たに補注を加えた増補版。

2846 **平等とは何か**
—運・格差・民主主義を問う
田中将人 著
一億総中流といわれてきた日本。いまや格差が広がり、社会の分断も進んでいる。人生が親ガチャ・運しだいではないのか。能力主義は正しいのか。そもそも平等の何がわるいのか。日本の「失われた30年」を振り返り、政治哲学と思想史の知見から世界を覆う不平等に切り込み、経済・政治・評価の平等を問う。支配・抑圧のない、自尊を下さえる社会へ。財産が公平にいきたるデモクラシーの構想を示す。

2847 **デザイン経営**
—各国に学ぶ企業価値を高める戦略
小山太郎 著
どれほど消費者調査しても、人々が気付いていない未来のニーズは掘り起こせない。だが、デザインにはそれが可能だ。本書は、「デザイン経営とは何か」を解説し、デザインプロジェクト中心の経営とは何かを描く。イタリア、アメリカ、中国、韓国、北欧、そして日本の先進的な企業を紹介し、アパレル、インテリア、家電、自動車など、多様な事例から、デザイン経営の類型と特長を解説し、日本の進むべき道を提示する。

2848 **外交とは何か**
—不戦不敗の要諦
小原雅博 著
米中の覇権争い、あいつく戦争。試練の時代に日本外交はどこへ、どう向かうべきか。本書が探るのは戦争をせず平和的に問題を解決するための要諦である。現実主義と理想主義、地政学と戦略論などの理論、E・H・カーやキッシンジャーらの分析に学ぶ。また陸奥宗光、小村寿太郎、幣原喜重郎、吉田茂、そして安倍晋三らの歩みから教訓を導く。元外交官の実践的な視点から、外交センスのある国に向けた指針を示す。

2849 **書とはどういう芸術か**
—筆蝕の美学
石川九楊 著
書は紙と筆と墨の芸術である。墨跡には深度・速度・角度と力が秘められている。書的美は紙の書体に萌芽し、楷書体とその基本運筆「三折法」の成立により完成したが、そこには石と葉を書くところに書の価値はある。甲骨文から前衛書道までを読み解き、書の表現を歴史的、構造的に解明したロングセラーに、新章「現代の作家の書」を収録。

中公新書 分野別分類

◆数字は新書番号

哲学・思想

2276	2097	1696	832	2300	2799	2288	2591	2522	2378	2187	1
本居宣長	江戸の思想史	日本文化論の系譜	外国人による 日本論の名著	フランス現代思想史	戦後フランス思想	フランクフルト学派	白人ナショナリズム	リバタリアニズム	保守主義とは何か	物語 哲学の歴史	日本の名著(改版)
田中康二	田尻祐一郎	大久保喬樹	佐伯彰一 編 芳賀 徹	岡本裕一朗	伊藤 直	細見和之	渡辺 靖	渡辺 靖	宇野重規	伊藤邦武	桑原武夫 編
2339	2257	2597	2594	1939	2757	448	1862	2220	2042	1695	36
ロラン・バルト	ハンナ・アーレント	カール・シュミット	マックス・ウェーバー	ニーチエーツァラトウストラの謎	J・S・ミル	詭弁論理学(改版)	入門! 論理学	言語学の教室	菜根譚	韓非子	莊子
石川美子	矢野久美子	蔭山 宏	野口雅弘	村井則夫	関口正司	野崎昭弘	野矢茂樹	野西義樹	湯浅邦弘	富谷 至	福永光司
2135	1130	2845	2668	2459	2293	宗教・倫理					674
仏教、本当の教え	仏教とは何か	神道とは何か(増補版)	宗教図像学入門	聖書、コラン、仏典	教養としての宗教入門						ジョン・ロールズ
植木雅俊	山折哲雄	伊藤 聡	中村圭志	中村圭志	中村圭志						田齋藤純一
											木村 敏
											長谷川 宏
											田中将人
											神島裕子
											2505
											正義とは何か
											2846
											平等とは何か
											2495
											幸福とは何か

2389	通貨の日本史	高木久史
2321	道路の日本史	武部健一
2494	温泉の日本史	石川理夫
2671	親孝行の日本史	勝又基
2500	日本史の論点	中公新書 編集部編
1617	歴代天皇総覧（増補版）	笠原英彦
2302	日本人にとって 聖なるものとは何か	上野誠
2619	もののけの日本史	小山聡子
1928	物語 京都の歴史	脇田晴子
2345	京都の神社と祭り	本多健一
2654	日本の先史時代	藤尾慎一郎
2709	縄文人と弥生人	坂野徹
482	倭国	岡田英弘
147	騎馬民族国家（改版）	江上波夫
2164	魏志倭人伝の謎を解く	渡邊義浩
2533	古代日中関係史	河上麻由子
1085	古代朝鮮と倭族	鳥越憲三郎
2563	持統天皇	瀧浪貞子
1502	日本書紀の謎を解く	森博達
2362	六国史―日本書紀に始まる 古代の「正史」	遠藤慶太
2464	藤原氏―権力中枢の一族	倉本一宏
2353	蘇我氏―古代豪族の興亡	倉本一宏
2168	飛鳥の木簡―古代史の 新たな解明	市大樹
2371	カラー版 古代飛鳥を歩く	千田稔
2636	古代日本の官僚	虎尾達哉
1293	壬申の乱	遠山美都男
2699	新版 大化改新 （たしかのかいしん）	遠山美都男
1622	奥州藤原氏	高橋崇
1041	蝦夷の末裔	高橋崇
804	蝦夷	高橋崇
2673	国造くさみやつこ―大和政権と 地方豪族	篠川賢
2095	『古事記』神話の謎を解く	西條勉
2470	倭の五王	河内春人
2828	加耶／任那―古代朝鮮に倭の 拠点があったか	仁藤敦史
2389	通貨の日本史	高木久史

2616	法華経とは何か	植木雅俊
2765	浄土思想	岩田文昭
2416	浄土真宗とは何か	小山聡子
2365	禪の教室	伊藤比呂美 藤田比呂美
134	地獄の思想	梅原猛
989	儒教とは何か（増補版）	加地伸行
2453	イスラームの歴史 （カレン・アームストロング 小林明則訳）	森本達雄
1707	ヒンドゥー教―インドの聖と俗	堀内一史
2076	アメリカと宗教	石川明人
2360	キリスト教と戦争	岡本亮輔
2639	宗教と日本人	櫻井義秀
2746	統一教会	岡本亮輔
2306	聖地巡礼	鈴木正崇
2310	山岳信仰	碧海寿広
2499	仏像と日本人	品川哲彦
2598	倫理学入門	中村圭志
2827	死とは何か	中村圭志
481	無意識の構造（改版）	河合隼雄
557	対象喪失	小此木啓吾
2061	認知症	池田学
2521	古い記憶	増本康平
515	少年期の心	山中康裕
1324	サブリミナル・マインド	下條信輔
2460	脳の意識 機械の意識	渡辺正峰
2833	脳の本質	乾敏郎 門脇加江子
2603	性格とは何か	小塩真司
2202	言語の社会心理学	岡本真一郎
666	犯罪心理学入門	福島章
565	死刑囚の記録	加賀乙彦
1169	色彩心理学入門	大山正
318	知的好奇心	波多野誼余夫 稲垣佳世子
599	無気力の心理学（改版）	波多野誼余夫 稲垣佳世子
2680	モチベーションの心理学	鹿毛雅治
907	人はいかに学ぶか （人はなぜ 集団になると忘れるのか）	稲垣佳世子 波多野誼余夫
1345	考えることの科学	釘原直樹
757	問題解決の心理学	市川伸一
2386	悪意の心理学	安西祐一郎
2692	後悔を活かす心理学	岡本真一郎
2772	恐怖の正体	上市秀雄
2189	歴史の愉しみ方	春日武彦
2455	日本史の内幕	磯田道史
2295	天災から日本史を読みなおす	磯田道史
2729	日本史を暴く	磯田道史
2579	米の日本史	佐藤洋一郎

2712	韓国併合	森 万佑子
2605	民衆暴力―一揆・暴動・虐殺	藤野 裕子
1792	日露戦争史	横手 慎二
2270	日清戦争	大谷 正
161	秩父事件	井上 幸治
252	ある明治人の記録 (改版)	石光真人 編著
1927	西南戦争	小川原正道
561	明治六年政変	毛利 敏彦
2483	明治の技術官僚	柏原 宏紀
2212	近代日本の官僚	清水唯一朗
2816	西郷従道―維新革命を追求した最強の「弟」	小川原正道
2550	大隈重信 (上下)	伊藤之雄
2618	板垣退助	中元 崇智
2777	山県有朋	小林 道彦
2051	伊藤博文	瀧井 一博
2379	元老―近代日本の真の指導者たち	伊藤之雄
1836	華族	小田部雄次

2728	孫 子―兵法の真髄―を讀む	渡邊義浩
2392	中国の論理	岡本隆司
2780	物語 江南の歴史	岡本隆司
1353	物語 中国の歴史	寺田隆信
2683	人類の起源	篠田 謙一
世界史		
2842	近代日本の対中国感情	金山 泰志
2530	日本鉄道史 昭和戦後平成篇	老川 慶喜
2358	日本鉄道史 大正昭和戦前篇	老川 慶喜
2269	日本鉄道史 幕末明治篇	老川 慶喜
2762	災害の日本近代史	土田 宏成
2393	シベリア出兵	麻田 雅文
881	後藤新平	北岡 伸一
2660	原 敬	清水唯一朗
2509	陸奥宗光	佐々木雄一

2748	物語 チベットの歴史	石濱裕美子
2581	台湾の歴史と文化	大東和重
1144	台湾	伊藤 潔
2030	上海	榎本 泰子
1812	西太后	加藤 徹
2804	元朝秘史―チンギス・カンの一級史料	白石 典之
15	科挙 (改版)	宮崎市定
7	宦官 (改版)	三田村泰助
2099	三国志	渡邊義浩
12	史記	貝塚茂樹
2742	唐―東ユーラシアの大帝国	森部 豊
2769	隋―「流星王朝」の光芒	平田陽一郎
2667	南北朝時代―五胡十六国から隋の統一まで	会田 大輔
2542	漢帝国―400年の興亡	渡邊義浩
2396	周―理想化された古代王朝	佐藤 信弥
2303	殷―中国史最古の王朝	落合 淳思
2669	古代中国の24時間	柿沼陽平

2526	源頼朝	元木 泰雄
2678	北条義時	岩田 慎平
2517	承久の乱	坂井 孝一
2761	御成敗式目	佐藤 雄基
2814	吾妻鏡―鎌倉幕府「正史」の虚実	藪本 勝治
2779	日蓮	松尾 剛次
2461	蒙古襲来と神風	服部 英雄
2653	中先代の乱	鈴木 由美
2601	北朝の天皇	石原比伊呂
2463	兼好法師	小川 剛生
2443	観応の擾乱	亀田 俊和
2179	足利義満	小川 剛生
978	室町の王権	今谷 明
2401	応仁の乱	呉座 勇一
2767	足利将軍たちの戦国乱世	山田 康弘
2058	日本神判史	清水 克行
2139	贈与の歴史学	桜井 英治

1227	保科正之	中村 彰彦
2723	徳川家康の決断	本多 隆成
476	江戸時代	大石 慎三郎
2675	江戸―平安時代から家康の建設へ	齋藤 慎一
784	豊臣秀吉	小和田哲男
2622	明智光秀	福島 克彦
2785	長篠合戦	金子 拓
2758	柴田勝家	和田 裕弘
2645	天正伊賀の乱	和田 裕弘
2503	信長公記―戦国覇者の一級史料	和田 裕弘
2421	織田信長の家臣団―派閥と人間関係	和田 裕弘
1625	織田信長合戦全録	谷口 克広
2665	三好一族―戦国最初の天下人	天野 忠幸
1213	流浪の戦国貴族 近衛前久	谷口 研語
2084	戦国武将の手紙を讀む	小和田哲男
2688	戦国日本の軍事革命	藤田 達生
2481	戦国日本と大航海時代	平川 新

740	元禄御畳奉行の日記	神坂次郎
853	遊女の文化史	佐伯 順子
2376	江戸の災害史	倉地 克直
2792	三井大坂両替店	萬代 悠
2730	大塩平八郎の乱	藪田 貫
2584	椿井文書―日本最大級の偽文書	馬部 隆弘
2047	オランダ風説書	松方 冬子
2617	暗殺の幕末維新史	一坂 太郎
1773	新選組	大石 学
2739	天誅組の変	舟久 保藍
2750	幕府海軍	金澤 裕之
455	戊辰戦争	佐々木 克
1728	会津藩	星 亮一
2498	斗南藩―「朝敵」会津藩士たちの苦難と再起	星 亮一
2107	近現代日本を史料で読む	御厨 貴 編著
2554	日本近現代史講義	山内昌之 編著
2719	近代日本外交史	細谷雄一 編著
		佐々木雄一

161 中公新書 分野別分類160

2221	2717	2578	2643	530	2760	2843	2274	2823	2615	2266	2313	2610	2349	1943	2795	2272
バチカン近現代史	アイルランド現代史	エリザベス女王	イギリス1960年代	チャーチル(増補版)	諜報国家ロシア	コミンテルン	スターリン	独仏関係史	物語 東ドイツの歴史	アデナウアー	ニュルンベルク裁判	ヒトラーの脱走兵	ヒトラーに抵抗した人々	ホロコースト	ナチ親衛隊(SS)	ヒトラー演説
松本佐保	北野 充	君塚直隆	小関 隆	河合秀和	保坂三四郎	佐々木太郎	横手慎二	川嶋周一	河合信晴	板橋拓己	アンネフランク	對馬達雄	對馬達雄	芝 健介	高田博行	高田博行

2811	2163	2330	2670	2415	2774	2540	2479	2781	2626	1596	2602	2682	1959	2700	2437
アフアーマティブ・アクション	人種とスポーツ	チェ・ゲバラ	サウジアラビア 「イスラーム世界の盟主」の正体	トルコ現代史	ケマル・アタテュルク	食の実験場アメリカ	スポーツ国家アメリカ	冷戦史(上下)	フランクリン・ローズヴェルト	アメリカの20世紀(上下)	ベトナム戦争	韓国社会の現在	韓国愛憎	新疆ウイグル自治区	中国ナショナリズム
南川文里	川島浩平	伊高浩昭	高尾賢一郎	今井宏平	小笠原弘幸	鈴木 透	鈴木 透	青野利彦	佐藤千登勢	有賀夏紀	松岡 完	春木育美	木村 幹	熊倉 潤	小野寺史郎

2338	2802	2825	2388	2786	2815	2502	2831	2679	1936	2659	2185	2000	経済・経営			2835
財務省と政治	日本の財政―5つの提言	就職氷河期世代	人口と日本経済	日本の経済政策	消費者と日本経済の歴史	日本型資本主義	イノベーションの科学	資本主義の方程式	アダム・スミス	経済社会の学び方	経済学に何ができるか	戦後世界経済史				カナダ―資源・ハイテク・移民が 拓く未来の「渾超大国」
清水真人	佐藤主光	近藤絢子	吉川 洋	小林慶一郎	満園 勇	寺西重郎	清水 洋	小野善康	堂目卓生	猪木武徳	猪木武徳	猪木武徳				山野内勘二

2687	2796	1243	2638	828	2806	2171	2471	2411	2296	2015	2798	2525	2838	2465	2707
天皇家の恋愛	堤康次郎	石橋湛山	幣原喜重郎	清沢洌(増補版)	言論統制(増補版)	治安維持法	戦前日本のポピュリズム	シベリア抑留	日本占領史1945-1952	「大日本帝国」崩壊	日ソ戦争	硫黄島	続・日本軍兵士―帝国陸海軍の現実	日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実	大東亜共栄圏
森 暢平	老川慶喜	増田 弘	熊本史雄	北岡伸一	佐藤卓己	中澤俊輔	筒井清忠	富田 武	福永文夫	加藤聖文	児島 襄	石原 俊	吉田 裕	吉田 裕	安達宏昭

2110	1821	2237	2714	1820	2359	2332	2075	1875	1574	2710	2512	2726	2351	1976	2186	2570
日中国交正常化	安田講堂1968-1969	四大公害病	国鉄―「日本最大の企業」の栄光と崩壊	丸山眞男の時代	竹島―もうひとつの日韓関係史	「歴史認識」とは何か	歌う国民	「国語」の近代史	海の友情	日本インテリジェンス史	高坂正堯―戦後日本と現実主義	田中耕太郎―闘う司法の確立者、世界法の探究者	中曽根康弘	大平正芳	田中角栄	佐藤栄作
服部龍二	島 泰三	政野淳子	石井幸孝	竹内 洋	池内 敏	大沼保昭 江川紹子聞き手	渡辺 裕	安田敏朗	阿川尚之	小谷 賢	服部龍二	牧原 出	服部龍二	福永文夫	早野 透	村井良太

2329	27	現代史 II			2834	2733	2649	2810	2543	2789	2342	2720	2627	2317	2196	2150
ナチスの戦争	ワイマル共和国				日米首脳会談	日本の歴史問題(改題新版)	東京復興ならず	日本鉄道廃線史	日米地位協定	在日米軍基地	沖縄現代史	司馬遼太郎の時代	戦後民主主義	歴史と私	大原孫三郎―善意と戦略の経営者	近現代日本史と歴史学
リチャードベッセル 大山 晶訳	林 健太郎				山口 航		吉見俊哉	小牟田哲彦	山本章子	川名晋史	櫻澤 誠	福岡良明	山本昭宏	伊藤 隆	兼田麗子	成田龍一

2405	欧州複合危機	遠藤 乾	533	日本の方言地図	徳川宗賢編
2650	米中対立	佐橋 亮	433	日本語の個性(改版)	外山滋比古
2697	戦後日本の安全保障	千々と泰明	2756	言語の本質	今井むつみ 秋田喜美
2402	現代日本外交史	宮城大蔵	言語・文学・エッセイ		
113	日本の外交	入江 昭			
2133	文化と外交	渡辺 靖	言語・文学・エッセイ		
2848	外交とは何か	小原雅博			
2629	ロヒンギャ危機―「民族浄化」の真相	中西嘉宏	2734	新興国は世界を変えるか	恒川恵市
2394	難民問題	墓田 桂	1272	アメリカ海兵隊	野中郁次郎
2576	内戦と和平	東 大作	2611	アメリカの政党政治	岡山 裕
2195	入門 人間の安全保障(増補版)	長有紀枝	2450	現代日本の地政学	日本再建イニシアティブ
2207	平和主義とは何か	松元雅和	2566	海の地政学	竹田いさみ
2410	ポピュリズムとは何か	水島治郎	721	地政学入門(改版)	曾村保信
2621	リベラルとは何か	田中拓道	700	戦略的思考とは何か(改版)	岡崎久彦
2652	戦争はいかに終結したか	千々と泰明	2215	戦略論の名著	野中郁次郎(編著)
2574	戦争とは何か	多湖 淳	2803	台湾のデモクラシー	渡辺将人
2807	グリーン戦争―気候変動の国際政治	上野貴弘	2568	中国の行動原理	益尾知佐子
2420	フィリピン―急成長する若き「大国」	井出稜治	2691	日本の国会議員	濱本真輔
2770	インド―グローバル・サウスの超大国	近藤正規	1905	日本の統治構造	飯尾 潤
2506	中国经济講義	梶谷 懐	2631	現代民主主義	山本 圭
2571	アジア経済とは何か	後藤健太	2347	代議制民主主義	待鳥聡史
2743	入門 開発経済学	山形辰史	2773	実験の民主主義	宇野重規 若林恵聞き手
2751	入門 環境経済学(新版)	有村俊秀 日引 聡	819	アメリカン・ロイヤリーの誕生	阿川尚之
2473	人口減少時代の都市	諸富 徹	2840	皇室典範―明治の起草の政界から現代の皇位継承問題まで	笠原英彦
2575	移民の経済学	友原章典	125	法と社会	碧海純一
2447	競争社会の歩き方	大竹文雄	政治・法律		
2045	競争と公平感	大竹文雄			
2724	行動経済学の処方箋	大竹文雄	2847	デザイン経営	小山太郎
1824	経済学的思考のセンス	大竹文雄	2634	サラ金の歴史	小島庸平
1658	戦略的思考の技術	梶井厚志	2701	日本のコメ問題	小川真如
2501	現代経済学	瀧澤弘和	2200	夫婦格差社会	橋本俊詔 迫田さやか
2041	行動経済学	依田高典	2612	デジタル化する新興国	伊藤亜聖
2784	財政・金融政策の転換点	飯田泰之	290	総裁日記(増補版)	服部正也
2541	平成金融史	西野智彦	ルワンダ中央銀行		

2541	平成金融史	西野智彦	290	ルワンダ中央銀行 総裁日記(増補版)	服部正也
2784	財政・金融政策の転換点	飯田泰之	2612	デジタル化する新興国	伊藤亜聖
2041	行動経済学	依田高典	2200	夫婦格差社会	橋本俊詔 迫田さやか
2501	現代経済学	瀧澤弘和	2701	日本のコメ問題	小川真如
1658	戦略的思考の技術	梶井厚志	2634	サラ金の歴史	小島庸平
1824	経済学的思考のセンス	大竹文雄	2847	デザイン経営	小山太郎
2724	行動経済学の処方箋	大竹文雄	政治・法律		
2045	競争と公平感	大竹文雄			
2447	競争社会の歩き方	大竹文雄			
2575	移民の経済学	友原章典	125	法と社会	碧海純一
2473	人口減少時代の都市	諸富徹	2840	皇室典範――明治の起草の政界から 現代の皇位継承問題まで	笠原英彦
2751	入門 環境経済学(新版)	有村俊秀 日引聡	819	アメリカン・ロイヤリーの誕生	阿川尚之
2743	入門 開発経済学	山形辰史	2773	実験の民主主義	宇野重規 若林恵聞き手
2571	アジア経済とは何か	後藤健太	2347	代議制民主主義	待鳥聡史
2506	中国经济講義	梶谷 懐	2631	現代民主主義	山本 圭
2770	インド――グローバル・サウス の超大国	近藤正規	1905	日本の統治構造	飯尾 潤
2420	フィリピン――急成長する 若き「大国」	井出稜治	2691	日本の国会議員	濱本真輔
2537	日本の地方政府	曾我謙悟	2558	日本の地方議会	辻 陽
2537	日本の地方議会	辻 陽	1687	日本の選挙	加藤秀治郎
2537	日本の地方議会	辻 陽	2752	戦後日本政治史	境家史郎
2537	日本の地方議会	辻 陽	2651	政界再編	山本健太郎
2537	日本の地方議会	辻 陽	2428	自民党――「二強」の実像	中北浩爾
2537	日本の地方議会	辻 陽	2695	日本共産党	中北浩爾
2537	日本の地方議会	辻 陽	2233	民主党政権 失敗の検証	日本再建イニ シアティブ
2537	日本の地方議会	辻 陽	2101	国会議員の仕事	津村 芳正 啓介
2537	日本の地方議会	辻 陽	2418	沖縄問題――リアリズム の視点から	高良倉吉編著
2537	日本の地方議会	辻 陽	2837	日本政治学史	酒井大輔
2537	日本の地方議会	辻 陽	2439	入門 公共政策学	秋吉貴雄
2537	日本の地方議会	辻 陽	2620	コロナ危機の政治	竹中治堅
2537	日本の地方議会	辻 陽	108	国際政治(改版)	高坂正堯
2537	日本の地方議会	辻 陽	1686	国際政治とは何か	中西 寛
2537	日本の地方議会	辻 陽	2190	国際秩序	細谷雄一
2537	日本の地方議会	辻 陽	1899	国連の政治力学	北岡伸一

2247 2248	2185	2818	2569	2395	2745	2702	2606	2009	2630	1816	1585	1103	2562	1827	2514	2513
日本写真史(上下)	映画館と観客の文化史	昭和歌謡史	古関裕而―流行作曲家と激動の昭和	シヨパン・コンクール	バレエの世界史	ミュージカルの歴史	音楽の危機	音楽の聴き方	現代音楽史	西洋音楽史	オペラの運命	モーツァルト	現代美術史	カラー版 絵の教室	カラー版 日本画の歴史 現代篇	カラー版 日本画の歴史 近代篇
鳥原 学	加藤幹郎	刑部芳則	刑部芳則	青柳いづみこ	海野 敏	宮本直美	岡田暁生	岡田暁生	沼野雄司	岡田暁生	岡田暁生	石井 宏 訳	山本浩貴	安野光雅	草薙奈津子	草薙奈津子

2322	1479	2794	2580	2446	2454	2715	2830	2333	2282	1910	1242	2484	2694
仕事と家族	安心社会から信頼社会へ	流出する日本人	移民と日本社会	人口減少時代の土地問題	人口減少と社会保障	縛られる日本人	地方消滅2	地方消滅 創生戦略篇	地方消滅	人口学への招待	社会学講義	社会学	日本アニメ史
筒井淳也	山岸俊男	大石奈々	永吉希久子	吉原祥子	山崎史郎	メアリー・C・プリントン 池村千秋 訳	人口戦略会議 編著	増田寛也 編著 富田和彦 也	増田寛也 編著	河野稠果	富永健一	加藤秀俊	津堅信之

2747	2604	1537	2184	2138	2809	2488	2704	2486	2431	2632	2737	2768	2826
戦後教育史	SDGs (持続可能な開発目標)	不平等社会日本	コミュニケーションデザインの時代	ソーシャル・キャピタル入門	NPOとは何か	ヤングケアラー―介護を担う子ども・若者の現実	転身力	定年準備	定年後	男が介護する	不 倫―実証分析が示す全貌	ジェンダー格差	里親と特別養子縁組
小国喜弘	蟹江憲史	佐藤俊樹	山崎 亮	稲葉陽二	宮垣 元	澁谷智子	楠木 新	楠木 新	楠木 新	津止正敏	五十嵐 彰 迫田さや	牧野百恵	林 浩康

1790	2404	2716	275	2242	2382	1798	2585	2156	563	2556	352	2684	2628	2836	2775	2797
批評理論入門	ラテンアメリカ文学入門	『失われた時を求めて』	マザー・グースの唄	オスカー・ワイルド	シェイクスピア	ギリシア神話	徒 然 草	源氏物語の結婚	幼い子の文学	日本近代文学入門	日本の名作	中学英語「再」入門	英文法再入門	使ったための英語―E・L・F 世界の共通語として学ぶ	英語の発音と綴り	英語の読み方リスニング篇
廣野由美子	寺尾隆吉	吉川 一義	平野敬一	宮崎かすみ	河合祥一郎	西村賀子	川平敏文	工藤重矩	瀬田貞二	堀 啓子	小田切進	澤井康佑	澤井康佑	瀧野みゆき	大名 力	北村一真

220	2805	2548	2289	2053	1702	3	824	2412	1891	1656	2608	2641
詩 経	老いの深み	老いのゆくえ	老いの味わい	老いのかたち	ユーモアのレックスン	アーロン収容所(改版)	辞世のことば	俳句と暮らす	漢詩百首	詩歌の森へ	万葉集講義	小説読解入門
白川 静	黒井千次	黒井千次	黒井千次	黒井千次	外山滋比古	会田雄次	中西 進	小川軽舟	高橋睦郎	長谷川 耀	上野 誠	廣野由美子

2292	2776	2369	2708	1781	2718	385 386	2771	118	2849	2764	2713	1296	2072	1741
カラー版 ゴッホ(自画像)紀行	パロック美術	天使とは何か	最後の審判	マグダラのマリア	カラー版 キリスト教美術史	カラー版 近代絵画史(上下)(増補版)	カラー版 美術の愉しみ方	フイレンツエ	書とはどういう芸術か(増補版)	教養としての建築入門	「美味い」とは何か	美の構成学	日本の感性	美学への招待(増補版)
木下長宏	宮下規久朗	岡田温司	岡田温司	岡田温司	瀧口美香	高階秀爾	山梨俊夫	高階秀爾	石川九楊	坂牛 卓	源 河 亭	三井秀樹	佐々木健一	佐々木健一

2519	安楽死・尊厳死の現在	松田 純
2819	死ぬということ	黒木登志夫
691	胎児の世界	三木 成夫
2646	ケアとは何か	村上 靖彦
2698	変異ウイルスとの闘い ーコロナ治療とワクチン	黒木登志夫
2625	新型コロナウイルスの科学	黒木登志夫
2314	iPS細胞	黒木登志夫
2250	睡眠のはなし	内山 真
2689	肝臓のはなし	竹原 徹郎
39	医学の歴史	小川 鼎三
2384	ビッグデータと人工知能	西 垣 通
2564	統計分布を知れば 世界が分かる	松 下 貢

2539	カラ版クモの世界	浅 間 茂
2693	糸をあやつる8本脚の狩人	浅 間 茂
2788	生き物の「居場所」は どう決まるか	大崎 直太
2759	都会の鳥の生態学	唐 沢 孝一
2677	エビはすごい カニもすごい	矢 野 勲
2419	ウニはすごい バッタもすごい	本川 達雄
1087	ゾウの時間 ネズミの時間	本川 達雄
1709	親指はなぜ太いのか	島 泰 三
2731	物語 遺伝学の歴史	平 野 博之
1647	言語の脳科学	酒 井 邦 嘉
2763	「利他」の生物学	鈴木 紀之
2433	すごい進化	鈴木 紀之
2736	ウイルスとは何か	長谷川 政美
2813	ダーウィン	鈴木 紀之
2305	生物多様性	本川 達雄
2328	植物はすごい	田 中 修
2174	植物はすごい	田 中 修
2328	植物はすごい	田 中 修
2491	植物のひみつ	田 中 修
2644	植物のいのち	田 中 修
2822	日本の果物はすごい	竹下 大学
2732	森林に何が起きているのか	吉 川 賢
2735	沖縄のいきもの	盛 口 満
2572	日本の品種はすごい	竹下 大学
1769	苔の話	秋山 弘之
939	発 酵	小泉 武夫
2408	醤油・味噌・酢はすごい	小泉 武夫
2672	南極の水に何が起きているか	杉 山 慎
2790	ウマは走る ヒトはコケる	本川 達雄
2793	化石に眠るDNA	更 科 功

2549	海外で研究者になる	増田 直紀
2066	いじめとは何か	森田 洋司
416	ミュンヘンの小学生	子安 美知子
1984	日本の子どもと自尊心	佐藤 淑子
2844	世界の教育はどこへ向かうか	白 井 俊
1704	教養主義の没落	竹 内 洋
2006	教育と平等	荻谷 剛彦
1249	大衆教育社会のゆくえ	荻谷 剛彦
2821	在野と独学の近代	志村 真幸
2832	大学改革ー自律するドイツ、 つまづく日本	竹 中 亨
2424	帝国大学ー近代日本の エリート育成装置	天野 郁夫
2004	大学の誕生(上)	天野 郁夫
2635	文部科学省	青木 栄一
2218	特別支援教育	柘植 雅義
2477	日本の公教育	中 澤 渉

2749	帝国図書館ー「知」の物語	長尾 宗典
2706	マスメディアとは何か	稲 増 一 憲
2263	うわさとは何か	松田 美佐
1636	オーラル・ヒストリー	御 厨 貴
807	コミュニケーション技術	篠田 義明
2109	知的文章と プレゼンテーション	黒木 登志夫
2480	理科系の読書術	鎌田 浩毅
1216	理科系のための英文作法	杉原 厚吉
624	理科系の作文技術	木下 是雄
2056	日本語作文術	野内 良三
1662	「超」文章法	野口 悠紀雄
1159	「超」整理法	野口 悠紀雄
210	続・発想法	川喜田 二郎
136	発想法(改訂版)	川喜田 二郎
410	取材学	加藤 秀俊

2749	帝国図書館ー「知」の物語	長尾 宗典
2706	マスメディアとは何か	稲 増 一 憲
2263	うわさとは何か	松田 美佐
1636	オーラル・ヒストリー	御 厨 貴
807	コミュニケーション技術	篠田 義明
2109	知的文章と プレゼンテーション	黒木 登志夫
2480	理科系の読書術	鎌田 浩毅
1216	理科系のための英文作法	杉原 厚吉
624	理科系の作文技術	木下 是雄
2056	日本語作文術	野内 良三
1662	「超」文章法	野口 悠紀雄
1159	「超」整理法	野口 悠紀雄
210	続・発想法	川喜田 二郎
136	発想法(改訂版)	川喜田 二郎
410	取材学	加藤 秀俊

1948	電車の運転	宇田 賢吉
2800	日本列島はすごい	伊 藤 孝
2398	地球の歴史(上中下)	鎌田 浩毅
2560	月はすごい	佐伯 和人
1566	月をめざした二人の科学者	的 川 泰 宣
1256	オッペンハイマー	中 沢 志 保
2676	地球外生命	小 林 憲 正
2685	ブラックホール	二 間 瀬 敏 史
1690	科学史年表(増補版)	小 山 慶 太
2007	物語 数学の歴史	加藤 文 元
1912	数学する精神(増補版)	加藤 文 元
2373	研究不正	黒木 登志夫
2375	科学という考え方	酒 井 邦 嘉
1843	科学者という仕事	酒 井 邦 嘉
2547	科学技術の現代史	佐藤 靖

地域・文化・紀行

285	日本人と日本文化	司馬遼太郎 ドナルド・キーン	1742	ひとり旅は楽し	池内 紀	2088	チョコレートの世界史	武田尚子
605	絵巻物 に見る 日本庶民生活誌	宮本 常一	2331	カラー版 廃線紀行 ―もうひとつの鉄道旅	梯 久美子	2361	トウガラシの世界史	山本紀夫
799	沖縄の歴史と文化	外間 守善	2472	酒は人の上に人を造らず	吉田 類	2229	真珠の世界史	山田篤美
2711	京都の山と川	鈴木 康行 肉戸 裕久	560	文化人類学入門 増補改訂版	祖父江孝男	1095	コーヒーが廻り 世界史が廻る	白井隆一郎
2298	四国遍路	森 正人	2315	南方熊楠 みなかくま	唐澤 太輔	1974	毒と薬の世界史	船山信次
2721	京都の食文化	佐藤洋一郎	2367	食の人類史	佐藤洋一郎	2391	競馬の世界史	本村凌二
2690	北海道を味わう	小泉 武夫	92	肉食の思想	鯖田 豊之	2755	モンスーンの世界	安成哲三
2151	国土と日本人	大石 久和	2129	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩	竹内 正浩	650	風景学入門	中村良夫
1810	日本の庭園	進士五十八	2170	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 都心の謎篇	竹内 正浩			
2633	日本の歴史的建造物	光 井 渉	2227	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 地形篇	竹内 正浩			
2744	正倉院のしごと	西川 明彦	2327	カラー版 ―モアイの謎と未踏の聖地― イースター島を行く	野村 哲也			
2791	中国農村の現在	田原 史起	1869	カラー版 将棋駒の世界	増山 雅人			
1009	トルコのもう一つの顔	小島 剛一	2117	物語 食の文化	北岡正三郎			
2183	アイルランド紀行	榎木 伸明	2787	カーストとは何か	鈴木 真弥			
1670	ドイツ 町から町へ	池内 紀	596	茶の世界史 改版	角 山 栄			
			1930	ジャガイモの世界史	伊藤 章治			

廣野由美子	1790, 2641	待鳥聡史	2347	森正人	2298	山本章子	2543
福井憲彦	2658	松尾剛次	1392, 2779	森万佑子	2712	山本昭宏	2627
福島章	666	松尾秀哉	2279	森暢平	2687	山本圭	2631
福島克彦	2622	松岡完	1596	盛口満	2735	山本健太郎	2651
福永光司	36	松方冬子	2047	森田洋司	2066	山本紀夫	2361
福永文夫	1976, 2296	松下貢	2564	森部豊	2742	山本浩貴	2562
福岡良明	2720	松田純	2519	森本達雄	1707	山本文彦	2801
藤尾慎一郎	2654	松田美佐	2263	諸富徹	2473	湯浅邦弘	1989, 2042
藤沢道郎	1045, 1771	松本佐保	2221			横手慎二	1792, 2274
藤田一照	(共著) 2365	松元雅和	2207	ヤ行		吉川一義	2716
藤田達生	2688	的川泰宣	1566	矢口祐人	1644	吉川賢	2732
藤野裕子	2605	萬代悠	2792	安田敏朗	1875	吉川洋	2388
藤原辰史	2451	美川圭	1867	安成哲三	2755	吉田裕	2465, 2838
二間瀬敏史	2685	三木成夫	691	矢野勲	2677	吉田類	2290, 2472
舟久保藍	2739	御厨貴	1636, (編著) 2107	矢野久美子	2257	吉原祥子	2446
船山信次	1974	三佐川亮宏	2766	藪田貫	2730	吉見俊哉	2649
ブリントン, メアリー・C	2715	水島治郎	2410	藪本勝治	2814		
古川隆久	2105	三田村泰助	7	山内昌之	(編著) 2554	ラ行	
ベッセル, リチャード	2329	三井秀樹	1296	山折哲雄	1130	ランドン, H・C・ロビンズ	1103
外間守善	799	光井渉	2633	山形辰史	2743	ワ行	
保坂三四郎	2760	満園勇	2815	山岸俊男	1479	若林恵	(聞き手) 2773
星亮一	1728, 2498	南川文里	2811	山口航	2834	若林美佐知	(訳) 2795
細見和之	2288	宮垣元	2809	山崎史郎	2454	脇田修	(共著) 1928
細谷雄一	2190, (編著) 2554	宮城大蔵	2402	山崎亮	2184	脇田晴子	(共著) 1928
堀啓子	2556	宮崎市定	15	山田篤美	2229	和田裕弘	2421, 2503, 2645, 2758
堀内一史	2076	宮崎かすみ	2242	山田康弘	2767	渡辺克義	2445
本多健一	2345	宮下規久朗	2776	山田雄司	2281	渡辺裕	2075
本多隆成	2723	宮下遼	2663	山中康裕	515	渡辺正峰	2460
		宮本常一	605	山梨俊夫	2771	渡辺将人	2803
マ行		宮本直美	2702	山之内克子	2546	渡辺靖	2133, 2522, 2591
牧野成一	2493	牟田口義郎	1594	山野内勘二	2835	渡邊義浩	2099, 2164, 2542, 2728
牧野百恵	2768	村井則夫	1939	山室信一	1138		
牧原出	2726	村井良太	2570				
政野淳子	2237	村上靖彦	2646				
益尾知佐子	2568	村田奈々子	2152				
増田直紀	2549	毛利敏彦	561				
増田弘	1243	本川達雄	1087, 2305, 2419, 2790				
増田寛也 (編著)	2282, (共著) 2333	元木泰雄	2127, 2526				
増田義郎	1437	本村凌二	2391				
増本康平	2521	桃井治郎	2442				
増山雅人	1869	森貴史	2681				
マゾワー, マーク	2440	森博達	1502				

加賀乙彦	565	川名晋史	2789	小島庸平	2634	佐々木克	455
柿崎一郎	1913	川平敏文	2585	小関隆	2643	佐々木太郎	2843
柿沼陽平	2669	貴志俊彦	2703	小谷賢	2710	佐々木雄一	2509, 2719
鹿毛雅治	2680	北岡正三郎	2117	後藤健太	2571	笹原宏之	2430
梯久美子	2331	北岡伸一	828, 881, 1899	小林慶一郎	2786	指昭博	2561
蔭山宏	2597	北野充	2717	小林憲正	2676	薩摩秀登	1838
笠原英彦	1617, 2840	北村一真	2637, 2797	小林標	1833	佐藤彰一	2253,
加地伸行	989	木下是雄	624	小林登志子	1818, (共著) 1977, 2323,		2409, 2467, 2516, 2567
梶井厚志	1658	木下長宏	2292		2523, 2613, 2727, 2841	佐藤信弥	2396
懷谷	2506	君塚直隆	1916, 2318, 2319, 2578	小林朋則	(訳) 2453	佐藤卓己	2806
柏原宏紀	2483	金両基 (キム・ヤンギ)	925	小林道彦	2777	佐藤猛	2582
春日武彦	2772	木村幹	1959, 2682	小原雅博	2848	佐藤千登勢	2626
勝又基	2671	木村敏	674	小牟田哲彦	2810	佐藤俊樹	1537
加藤聖文	2015	木村光彦	2482	子安美知子	416	佐藤主光	2802
加藤秀治郎	1687	木本好信	2725	小山慶太	1690	佐藤靖	2547
加藤徹	1812	キーン, ドナルド	(共著) 285	小山聡子	2416, 2619	佐藤雄基	2761
加藤秀俊	410, 2484	釘貫亨	2740	小山太郎	2847	佐藤洋一郎	2367, 2579, 2721
加藤文元	1912, 2007	釘原直樹	2238	小山俊樹	2587	佐藤淑子	1984
加藤幹郎	1854	草薙奈津子	2513, 2514	近藤絢子	2825	佐橋亮	2650
門脇加江子	(共著) 2833	楠木新	2431, 2486, 2704	近藤正規	2770	鯖田豊之	92
金澤裕之	2750	工藤重矩	2156	今野元	2666	更科功	2793
金山泰志	2842	熊倉潤	2700			猿谷要	1042
蟹江憲史	2604	熊本史雄	2638			澤井康佑	2628, 2684
金子拓	2785	倉地克直	2376	佐伯和人	2560	部勇造	2496
兼田麗子	2196	倉本一宏	2353, 2464, 2573, 2705	西條勉	2095	品川哲彦	2598
樺山紘一	(共著) 608, (共著) 613	黒井千次	2053, 2289, 2548, 2805	齋藤純一	(共著) 2674	篠川賢	2673
鎌田浩毅	2398, 2399, 2400, 2480	黒川祐次	1655	齋藤慎一	2675	篠田謙一	2683
神島裕子	2505	黒木登志夫	2109, 2314,	斎藤兆史	1533, 1701, 2738	篠田義明	807
上村剛	2817		2373, 2625, 2698, 2819	佐伯順子	853	芝健介	1943
亀田俊和	2443	黒田祐我	2820	佐伯彰一	(共編) 832	司馬遼太郎	(共著) 285
唐沢孝一	2759	黒田龍之助	2363	酒井邦嘉	1647, 1843, 2375	澁谷智子	2488
唐澤太輔	2315	桑原武夫	(編) 1	坂井孝一	2517	志摩園子	1758
荻谷剛彦	1249, 2006	源河亨	2713	酒井大輔	2837	島泰三	1709, 1821
河合祥一郎	2382	小泉武夫	939, 2408, 2690	境家史郎	2752	島田周平	2545
河合信晴	2615	神坂次郎	740	坂牛卓	2764	清水克行	2058
河合隼雄	481	高坂正堯	108	坂野徹	2709	清水洋	2831
河合秀和	530	河内春人	2470	桜井英治	2139	清水真人	2338
河上麻由子	2533	河野稠果	1910	櫻井義秀	2746	清水唯一朗	2212, 2660
川喜田二郎	136, 210	小国喜弘	2747	櫻澤誠	2342	志村真幸	2821
川島浩平	2163	呉座勇一	2401	桜田美津夫	2434	下條信輔	1324
川嶋周一	2823	小島剛一	1009	迫田さやか	(共著) 2200, (共著) 2737	白井俊	2844
川田稔	2144	児島襄	84, 90, 244, 248	佐々木健一	1741, 2072	白石隆	1551

サ行

中公新書 著訳編者名索引

◆数字は新書番号

ア 行

会田大輔	2667
会田雄次	3
青木栄一	2635
青野利彦	2781, 2782
碧海純一	125
青柳いづみこ	2395
赤松明彦	2812
阿川尚之	819, 1574
秋田喜美	(共著) 2756
秋田茂	2167
秋山弘之	1769
秋吉貴雄	2439
麻田雅文	2393, 2798
浅野和生	2753
浅間茂	2539, 2693
安達宏昭	2707
安達正勝	1963, 2286
阿辻哲次	1755, 2213
阿部謹也	518, (共著) 608, (共著) 613, 1420
阿部拓児	2661
天野郁夫	2004, 2005, 2424
天野忠幸	2665
網野善彦	(共著) 608, (共著) 613, 1503
アームストロング, カレン	2453
有村俊秀	(共著) 2751
有賀夏紀	1664, 1665
安西祐一郎	757
安野光雅	1827
飯尾潤	1905
飯倉章	2368
飯田真紀	2808
飯田泰之	2784
飯田洋介	2304

五十嵐彰	(共著) 2737
池内紀	1670, 1742
池内敏	2359
池田清	632
池田学	2061
池村千秋	(訳) 2715
石井進	(共著) 608, (共著) 613
石井宏	(訳) 1103
石井幸孝	2714
石川明人	2360
石川九楊	2849
石川理夫	2494
石川美子	2339
石野裕子	2456
石濱裕美子	2748
石原俊	2525
石原比伊呂	2601
石光真人	(編著) 252
磯田道史	2189, 2295, 2455, 2729
依田高典	2041
伊高浩昭	2330
板橋拓己	2266, (訳) 2313
市大樹	2168
市川伸一	1345
一坂太郎	2617
井出穰治	2420
伊藤亜聖	2612
伊藤潔	1144
伊藤邦武	2187
伊藤聡	2845
伊藤章治	1930
伊藤隆	2317
伊藤孝	2800
伊藤直	2799
伊藤俊一	2662
伊藤比呂美	(共著) 2365
伊藤之雄	2379, 2550, 2551

稲垣佳世子	(共著) 318, (共著) 599, (共著) 907
稲葉陽二	2138
稲増一憲	2706
乾敏郎	(共著) 2833
井上幸治	161
井上寿一	2192
井上廣美	(訳) 2440
猪木武徳	2000, 2185, 2659
今井宏平	2415
今井むつみ	(共著) 2756
今谷明	978
入江昭	113
岩崎育夫	2208
岩田慎平	2678
岩田文昭	2765
岩根罔和	1635, 1750
ヴァインケ, アンネッテ	2313
上市秀雄	2692
植木雅俊	2135, 2616
上杉忍	2824
上野貴弘	2807
上野誠	2302, 2608
白井勝美	1532
白井隆一郎	1095
宇田賢吉	1948
内山真	2250
宇野重規	2378, 2773
海野敏	2745
梅原猛	134
江上波夫	147
江川紹子	(聞き手) 2332
榎本泰子	2030
榎村寛之	2452, 2783, 2829
遠藤慶太	2362
遠藤乾	2405
及川琢英	2754
笈川博一	2067
老川慶喜	2269, 2358, 2530, 2796
大石慎三郎	476
大石奈々	2794
大石久和	2151

大石学	1773
大垣貴志郎	1935
大久保喬樹	1696
大崎直太	2788
大竹文雄	1824, 2045, 2447, 2724
大谷正	2270
大名力	2775
大沼保昭	2332
大東和重	2581
碧海寿広	2499
大山晶	(訳) 2329
大山正	1169
岡崎久彦	700
小笠原弘幸	2518, 2774
岡田明子	(共著) 1977
岡田暁生	1585, 1816, 2009, 2606
岡田温司	1781, 2369, 2708
岡田英弘	482
岡本真一郎	2202, 2386
岡本裕一郎	2300
岡本隆司	2392, 2780
岡本亮輔	2306, 2639
岡山裕	2611
小川軽舟	2412
小川剛生	2179, 2463
小川鼎三	39
小川真如	2701
小川原正道	1927, 2816
小倉貞男	1372
小此木啓吾	557
長有紀枝	2195
刑部芳則	2569, 2818
小塩真司	2603
小田切進	352
小田部雄次	1836
落合淳思	2303, 2534
小野善康	2679
小野寺史郎	2437
小和田哲男	784, 2084

カ 行

貝塚茂樹	12
------	----

(宮下遼)	2663
物語 イスラエルの歴史 (高橋正男)	1931
物語 イタリアの歴史 (藤沢道郎)	1045
物語 イタリアの歴史 II (藤沢道郎)	1771
物語 遺伝学の歴史 (平野博之)	2731
物語 ヴェトナムの歴史 (小倉貞男)	1372
物語 ウクライナの歴史 (黒川祐次)	1655
物語 エルサレムの歴史 (笈川博一)	2067
物語 オーストラリアの歴史 (新版)	(竹田いさみ, 永野隆行) 2741
物語 オーストリアの歴史	(山之内克子) 2546
物語 オランダの歴史 (桜田美津夫)	2434
物語 カタルーニャの歴史 (増補版)	(田澤耕) 1564
物語 韓国史 (金兩基)	925
物語 京都の歴史 (脇田修, 脇田晴子)	1928
物語 近現代ギリシャの歴史	(村田奈々子) 2152
物語 江南の歴史 (岡本隆司)	2780
物語 食の文化 (北岡正三郎)	2117
物語 シンガポールの歴史	(岩崎育夫) 2208
物語 数学の歴史 (加藤文元)	2007
物語 スコットランドの歴史	(中村隆文) 2696
物語 スペインの歴史 (岩根園和)	1635
物語 スペインの歴史 人物篇	(岩根園和) 1750
物語 タイの歴史 (柿崎一郎)	1913
物語 チェコの歴史 (薩摩秀登)	1838
物語 チベットの歴史 (石濱裕美子)	2748

物語 中国の歴史 (寺田隆信)	1353
物語 中東の歴史 (牟田口義郎)	1594
物語 哲学の歴史 (伊藤邦武)	2187
物語 ドイツの歴史 (阿部謹也)	1420
物語 ナイジェリアの歴史	(島田周平) 2545
物語 バリの歴史 (福井憲彦)	2658
物語 バルト三国の歴史 (志摩園子)	1758
物語 東ドイツの歴史 (河合信晴)	2615
物語 ビルマの歴史 (根本敬)	2249
物語 フィリピンの歴史 (鈴木静夫)	1367
物語 フィンランドの歴史	(石野裕子) 2456
物語 フランス革命 (安達正勝)	1963
物語 ベルギーの歴史 (松尾秀哉)	2279
物語 北欧の歴史 (武田龍夫)	1131
物語 ポーランドの歴史 (渡辺克義)	2445
物語 メキシコの歴史 (大垣貴志郎)	1935
物語 ラテン・アメリカの歴史	(増田義郎) 1437
もののけの日本史 (小山聡子)	2619
モンスーンの世界 (安成哲三)	2755
問題解決の心理学 (安西祐一郎)	757
文部科学省 (青木栄一)	2635

ヤ 行

安田講堂1968-1969 (島泰三)	1821
山県有朋 (小林道彦)	2777
ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実 (澁谷智子)	2488
遊女の文化史 (佐伯順子)	853
ユダヤ人の歴史 (鶴見太郎)	2839
ユーモアのレッスン (外山滋比古)	1702
四大公害病 (政野淳子)	2237

ラ 行

ラテンアメリカ文学入門 (寺尾隆吉)	2404
ラテン語の世界 (小林標)	1833
理科系の作文技術 (木下是雄)	624
理科系のための英文作法 (杉原厚吉)	1216
理科系の読書術 (鎌田浩毅)	2480
「利他」の生物学	(鈴木正彦, 末光隆志) 2763
六国史—日本書紀に始まる古代の「正史」(遠藤慶太)	2362
リバタリアニズム (渡辺靖)	2522
リヒトホーフェン—撃墜王とその一族 (森貴史)	2681
リベラルとは何か (田中拓道)	2621
流出する日本人 (大石奈々)	2794
倫理学入門 (品川哲彦)	2598
流浪の戦国貴族 近衛前久	(谷口研語) 1213
ルワンダ中央銀行総裁日記 (増補版)	

(服部正也)	290
冷戦史 (青野利彦)	上 2781, 下 2782
歴史修正主義 (武井彩佳)	2664
歴史探究のヨーロッパ (佐藤彰一)	
歴史と私 (伊藤隆)	2317
「歴史認識」とは何か	(大沼保昭著, 江川紹子聞き手) 2332
歴史の愉しみ方 (磯田道史)	2189
歴代天皇総覧 (増補版) (笠原英彦)	1617
レコンキスター「スペイン」を生んだ中世800年の戦争と平和	(黒田祐我) 2820
ロビンギャ危機—「民族浄化」の真相 (中西嘉宏)	2629
ロラン・バルト (石川美子)	2339

ワ 行

ワイマル共和国 (林健太郎)	27
倭国 (岡田英弘)	482
倭の五王 (河内春人)	2470

日本の地方議会（辻陽）	2558	美訳）	2440	仏教とは何か（山折哲雄）	1130	マックス・ウェーバー（野口雅弘）	
日本の地方政府（曾我謙悟）	2537	バレエの世界史（海野敏）	2745	仏教、本当の教え（植木雅俊）	2135		2594
日本の庭園（進士五十八）	1810	バロック美術（宮下規久朗）	2776	仏像と日本人（碧海寿広）	2499	マリー・アントワネット（安達正勝）	
日本の統治構造（飯尾潤）	1905	ハワイの歴史と文化（矢口祐人）	1644	不平等社会日本（佐藤俊樹）	1537		2286
日本の品種はすごい（竹下大学）	2572	犯罪心理学入門（福島章）	666	ブラックホール（二間瀬敏史）	2685	丸山眞男の時代（竹内洋）	1820
		ハンナ・アーレント（矢野久美子）	2257	フランクフルト学派（細見和之）	2288	万葉集講義（上野誠）	2608
日本の方言地図（徳川宗賢編）	533	美学への招待（増補版）（佐々木健一）	1741	フランクリン・ローズヴェルト（佐藤千登勢）	2626	三井大坂両替店（萬代悠）	2792
日本の名作（小田切進）	352	ビザンツ帝国（中谷功治）	2595	フランス現代思想史（岡本裕一朗）	2300	南方熊楠（唐澤太輔）	2315
日本の名著（改版）（桑原武夫編）	1	カラー版 美術の愉しみ方（山梨俊夫）	2771	不倫一実証分析が示す全貌（五十嵐彰、迫田さやか）	2737	源頼朝（元木泰雄）	2526
日本の歴史的建造物（光井渉）	2633	ビスマルク（飯田洋介）	2304	文化人類学入門（増補改訂版）（祖父江孝男）	560	ミュージカルの歴史（宮本直美）	2702
日本の歴史問題（改題新版）（波多野澄雄）	2733	ビッグデータと人工知能（西垣通）	2384	文化と外交（渡辺靖）	2133		416
日本文化論の系譜（大久保喬樹）	1696	人はいかに学ぶか（稲垣佳世子、波多野諠余夫）	907	文明の誕生（小林登志子）	2323	三好一族一戦国最初の「天下人」（天野忠幸）	2665
日本列島はすごい（伊藤孝）	2800	人はなぜ集団になると意欲するのか（釘原直樹）	2238	平氏一公家の盛衰、武家の興亡（倉本一宏）	2705	民衆暴力一揆・暴動・虐殺の日本近代（藤野裕子）	2605
入門 開発経済学（山形辰史）	2743	ヒトラー演説（高田博行）	2272	平成金融史（西野智彦）	2541	民主党政権 失敗の検証（日本再建イニシアティブ）	2233
入門 環境経済学（新版）（有村俊秀、日引聡）	2751	ヒトラーに抵抗した人々（對馬達雄）	2349	米中対立（佐橋亮）	2650	無意識の構造（改版）（河合隼雄）	481
入門 公共政策学（秋吉貴雄）	2439	ヒトラーの脱走兵（對馬達雄）	2610	平和主義とは何か（松元雅和）	2207	無気力の心理学（改版）（波多野諠余夫、稲垣佳世子）	599
入門 人間の安全保障（増補版）（長有紀枝）	2195	ひとり旅は楽し（池内紀）	1742	ベトナム戦争（松岡完）	1596	カラー版 虫や鳥が見ている世界一紫外線写真が明かす生存戦略（浅間茂）	2539
入門！ 論理学（野矢茂樹）	1862	美の構成学（三井秀樹）	1296	変異ウイルスとの闘いーコロナ治療薬とワクチン（黒木登志夫）	2698		2509
ニュルンベルク裁判（アンネッテ・ヴァインケ著、板橋拓己訳）	2313	批評理論入門（廣野由美子）	1790	北条義時（岩田慎平）	2678	陸奥宗光（佐々木雄一）	2509
認知症（池田学）	2061	百年戦争（佐藤猛）	2582	法と社会（碧海純一）	125	室町王権（今谷明）	978
脳の意識 機械の意識（渡辺正峰）	2460	平等とは何か（田中将人）	2846	北朝の天皇（石原比伊呂）	2601	明治の技術官僚（柏原宏紀）	2483
脳の本質（乾敏郎、門脇加江子）	2833	平沼騏一郎（萩原淳）	2657	法華経とは何か（植木雅俊）	2616	明治六年政変（毛利敏彦）	561
ハ 行		ヒンドゥー教ーインドの聖と俗（森本達雄）	1707	保科正之（中村彰彦）	1227	蒙古襲来と神風（服部英雄）	2461
俳句的生活（長谷川權）	1729	フィリピンー急成長する若き「大国」（井出穰治）	2420	保守主義とは何か（宇野重規）	2378	モチベーションの心理学（鹿毛雅治）	2680
俳句と暮らす（小川軽舟）	2412	フレイツェ（高階秀爾）	118	戊辰戦争（佐々木克）	455		2680
カラー版 廃線紀行ーもうひとつの鉄道旅（梯久美子）	2331	風景学入門（中村良夫）	650	北海道を味わう（小泉武夫）	2690	モーツァルト（H・C・ロビンズ・ランドン著、石井宏訳）	1103
白人ナショナリズム（渡辺靖）	2591	夫婦格差社会（橋本俊詔、迫田さやか）	2200	ポピュリズムとは何か（水島治郎）	2410	本居宣長（田中康二）	2276
幕府海軍（金澤裕之）	2750	部首のはなし（阿辻哲次）	1755	ホロコースト（芝健介）	1943	物語 アイルランドの歴史（波多野裕造）	1215
パチカン近現代史（松本佐保）	2221	藤原氏一権力中枢の一族（倉本一宏）	2464	マ 行		物語 アメリカの歴史（猿谷要）	1042
発酵（小泉武夫）	939	藤原仲麻呂（仁藤敦史）	2648	マグダラのマリア（岡田温司）	1781	物語 アラビアの歴史（藪勇造）	2496
発想法（改版）（川喜田二郎）	136			マザー・グースの唄（平野敬一）	275	物語 イギリスの歴史（君塚直隆）	2318, 2319
原敬（清水唯一朗）	2660			マスメディアとは何か（稲増一憲）	2706	物語 イスタンブールの歴史	
バルカンー「ヨーロッパの火薬庫」の歴史（マーク・マゾワー著、井上廣							

中国経済講義（梶谷懐）	2506	天使とは何か（岡田温司）	2369	（榎村寛之）	2783	日本語の個性（改版）（外山滋比古）	433
中国哲学史（中島隆博）	2686	電車の運転（宇田賢吉）	1948	ナチ親衛隊（SS）（バステアン・ハイ ン著、若林美佐知訳）	2795	日本語の発音はどう変わってきたか （釘貫亨）	2740
中国ナショナリズム（小野寺史郎）	2437	天正伊賀の乱（和田裕弘）	2645	ナチスの戦争1918-1949 （リチャード・ベッセル著、大山晶訳）	2329	日本語を翻訳するということ （牧野成一）	2493
中国農村の現在（田原史起）	2791	転身力（楠木新）	2704	ナポレオン四代（野村啓介）	2529	日本史の内幕（磯田道史）	2455
中国の行動原理（益尾知佐子）	2568	天誅組の変（舟久保藍）	2739	奈良時代（木本好信）	2725	日本史の論点（中公新書編集部編）	2500
中国の論理（岡本隆司）	2392	天皇家の恋愛（森暢平）	2687	南極の氷に何が起きているか （杉山慎）	2672	日本写真史（鳥原学）上2247, 下2248	
中世都市鎌倉を歩く（松尾剛次）	1392	ドイツ 町から町へ（池内紀）	1670	南京事件（増補版）（秦郁彦）	795	日本書紀の謎を解く（森博達）	1502
中世の風景（阿部謹也、網野善彦、 石井進、樺山紘一）	上608, 下613	ドイツ・ナショナリズム（今野元）	2666	南北朝時代一五胡十六国から隋の統 一まで（会田大輔）	2667	日本史を暴く（磯田道史）	2729
「超」整理法（野口悠紀雄）	1159	刀伊の入寇（関幸彦）	2655	難民問題（墓田桂）	2394	日本人と日本文化（司馬遼太郎、 ドナルド・キーン）	285
朝鮮王公族—帝国日本の準皇族 （新城道彦）	2309	唐—東ユーラシアの大帝国 （森部豊）	2742	肉食の思想（鯖田豊之）	92	日本人にとって聖なるものとは何か （上野誠）	2302
「超」文章法（野口悠紀雄）	1662	統一教会（櫻井義秀）	2746	ニーチェ—ツァラトゥストラの謎 （村井則夫）	1939	日本神判史（清水克行）	2058
諜報国家ロシア（坂本三四郎）	2760	トウガラシの世界史（山本紀夫）	2361	日米首脳会談（山口航）	2834	日本政治学史（酒井大輔）	2837
チョコレートの世界史（武田尚子）	2088	東京裁判（児島襄）	上244, 下248	日米地位協定（山本章子）	2543	日本占領史1945-1952（福永文夫）	2296
通貨の日本史（高木久史）	2389	東京復興ならず（吉見俊哉）	2649	日蓮（松尾剛次）	2779	日本的感性（佐々木健一）	2072
使うための英語—ELF（世界の共通 語）として学ぶ（瀧野みゆき）	2836	統計分布を知れば世界が分かる （松下貢）	2564	日露戦争史（横手慎二）	1792	日本鉄道史 昭和戦後・平成篇 （老川慶喜）	2530
月はすごい（佐伯和人）	2560	道路の日本史（武部健一）	2321	日清戦争（大谷正）	2270	日本鉄道史 大正・昭和戦前篇 （老川慶喜）	2358
月をめざした二人の科学者 （的川泰宣）	1566	都会の鳥の生態学（唐沢孝一）	2759	日ソ戦争（麻田雅文）	2798	日本鉄道史 幕末・明治篇 （老川慶喜）	2269
堤康次郎（老川慶喜）	2796	徳川家康の決断（本多隆成）	2723	日中国交正常化（服部龍二）	2110	日本鉄道廃線史（小牟田哲彦）	2810
椿井文書—日本最大級の偽文書 （馬部隆弘）	2584	毒と薬の世界史（船山信次）	1974	新版 日中戦争（臼井勝美）	1532	日本統治下の朝鮮（木村光彦）	2482
徒然草（川平敏文）	2585	独仏関係史（川嶋周一）	2823	二・二六事件（増補改版）（高橋正衛）	76	日本の外交（入江昭）	113
帝国大学—近代日本のエリート育成 装置（天野郁夫）	2424	特別支援教育（柘植雅義）	2218	日本アニメ史（津堅信之）	2694	日本の果物はすごい（竹下大学）	2822
帝国図書館—近代日本の「知」の物 語（長尾宗典）	2749	斗南藩—「朝敵」会津藩士たちの苦 難と再起（星亮一）	2498	日本インテリジェンス史（小谷賢）	2710	日本の経済政策（小林慶一郎）	2786
帝国日本のプロパガンダ（貴志俊彦）	2703	豊臣秀吉（小和田哲男）	784	カラー版 日本画の歴史 近代篇 （草薙奈津子）	2513	日本の公教育（中澤渉）	2477
定年後（楠木新）	2431	トラクターの世界史（藤原辰史）	2451	カラー版 日本画の歴史 現代篇 （草薙奈津子）	2514	日本の国会議員（濱本真輔）	2691
定年準備（楠木新）	2486	トルコ現代史（今井宏平）	2415	日本共産党（中北浩爾）	2695	日本の子どもと自尊心（佐藤淑子）	1984
デザイン経営（小山太郎）	2847	トルコのもう一つの顔（小島剛一）	1009	日本近現代史講義 （山内昌之、細谷雄一編著）	2554	日本のコメ問題（小川真如）	2701
デジタル化する新興国（伊藤亜聖）	2612	内戦と和平（東大作）	2576	日本近代文学入門（堀啓子）	2556	日本の財政—破綻回避への5つの提 言（佐藤主光）	2802
鉄道ドイツ史（嶋澤歩）	2583	長篠合戦（金子拓）	2785	日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の 現実（吉田裕）	2465	日本の選挙（加藤秀治郎）	1687
天災から日本史を読みなおす （磯田道史）	2295	中先代の乱（鈴木由美）	2653	日本語作文術（野内良三）	2056	日本の先史時代（藤尾慎一郎）	2654
		中曽根康弘（服部龍二）	2351				
		謎の漢字（笹原宏之）	2430				
		謎の平安前期—桓武天皇から『源氏 物語』誕生までの200年					

承久の乱 (坂井孝一)	1869	人口と日本経済 (吉川洋)	2388	戦国日本の軍事革命 (藤田達生)		代議制民主主義 (待鳥聡史)	2347
小説読解入門 (廣野由美子)	2517	人種とスポーツ (川島浩平)	2163	戦国武将の手紙を読む (小和田哲男)	2688	胎児の世界 (三木成夫)	691
正倉院のしごと (西川明彦)	2744	真珠の世界史 (山田篤美)	2229		2084	大衆教育社会のゆくえ (荻谷剛彦)	1249
浄土思想 (岩田文昭)	2765	壬申の乱 (遠山美都男)	1293	戦後世界経済史 (猪木武徳)	2000	対象喪失 (小此木啓吾)	557
浄土真宗とは何か (小山聡子)	2416	神聖ローマ帝国 (山本文彦)	2801	戦後日本政治史 (境家史郎)	2752	大東亜共栄圏 (安達宏昭)	2707
少年期の心 (山中康裕)	515	新選組 (大石学)	1773	戦後日本の安全保障 (千々和泰明)	2697	「大日本帝国」崩壊 (加藤聖文)	2015
消費者と日本経済の歴史 (満園勇)	2815	信長公記一戦国覇者の一級史料 (和田裕弘)	2503	戦後フランス思想 (伊藤直)	2799	太平洋戦争 (児島襄)	上 84, 下 90
縄文人と弥生人 (坂野徹)	2709	神道とは何か (増補版) (伊藤聡)	2845	戦後民主主義 (山本昭宏)	2627	台湾 (伊藤潔)	1144
醤油・味噌・酢はすごい (小泉武夫)	2408	森林に何が起きているのか (吉川賢)	2732	戦前日本のポピュリズム (筒井清忠)	2471	台湾のデモクラシー (渡辺将人)	2803
昭和歌謡史 (刑部芳則)	2818	人類と病 (詫摩佳代)	2590	戦争とは何か (多湖淳)	2574	台湾の歴史と文化 (大東和重)	2581
昭和天皇 (古川隆久)	2105	人類の起源 (篠田謙一)	2683	戦争はいかに終結したか (千々和泰明)	2652	ダーウィン (鈴木紀之)	2813
昭和陸軍の軌跡 (川田稔)	2144	隋一「流星王朝」の光芒 (平田陽一郎)	2769	禅の教室 (藤田一照, 伊藤比呂美)	2365	竹島—もうひとつの日韓関係史 (池内敏)	2359
贖罪のヨーロッパ (佐藤彰一)	2409	睡眠のはなし (内山真)	2250	戦略的思考とは何か (改版) (岡崎久彦)	700	田中角栄 (早野透)	2186
食の実験場アメリカ (鈴木透)	2540	数学する精神 (増補版) (加藤文元)	1912	戦略的思考の技術 (梶井厚志)	1658	田中耕太郎—闘う司法の確立者、世界法の探究者 (牧原出)	2726
食の人類史 (佐藤洋一郎)	2367	菅原道真 (滝川幸司)	2559	戦略論の名著 (野中郁次郎編著)	2215	治安維持法 (中澤俊輔)	2171
植物のいのち (田中修)	2644	すごい進化 (鈴木紀之)	2433	荘子 (福永光司)	36	チェ・ゲバラ (伊高浩昭)	2330
植物のひみつ (田中修)	2491	スターリン (横手慎二)	2274	ゾウの時間 ネズミの時間 (本川達雄)	1087	地球外生命 (小林憲正)	2676
植物はすごい (田中修)	2174	スポーツ国家アメリカ (鈴木透)	2479	贈与の歴史学 (桜井英治)	2139	地球の歴史 (鎌田浩毅)	上 2398, 中 2399, 下 2400
植物はすごい 七不思議篇 (田中修)	2328	政界再編 (山本健太郎)	2651	蘇我氏—古代豪族の興亡 (倉本一宏)	2353	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 (竹内正浩)	2129
諸子百家 (湯浅邦弘)	1989	正義とは何か (神島裕子)	2505	続・日本軍兵士—帝国陸海軍の現実 (吉田裕)	2838	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 地形篇 (竹内正浩)	2227
書とはどういう芸術か (増補版) (石川九楊)	2849	聖書考古学 (長谷川修一)	2205	続・発想法 (川喜田二郎)	210	カラー版 地図と愉しむ東京歴史散歩 都心の謎篇 (竹内正浩)	2170
ショパン・コンクール (青柳いづみこ)	2395	聖書、コーラン、仏典 (中村圭志)	2459	ソーシャル・キャピタル入門 (稲葉陽二)	2138	地政学入門 (改版) (曾村保信)	721
J・S・ミル (関口正司)	2757	西太后 (加藤徹)	1812	孫子—「兵法の真髓」を読む (渡邊義浩)	2728	秩父事件 (井上幸治)	161
ジョン・ロールズ (齋藤純一, 田中将人)	2674	聖地巡礼 (岡本亮輔)	2306			知的好奇心 (波多野諄余夫, 稲垣佳世子)	318
新型コロナの科学 (黒木登志夫)	2625	西南戦争 (小川原正道)	1927			知的文章とプレゼンテーション (黒木登志夫)	2109
新疆ウイグル自治区 (熊倉潤)	2700	生物多様性 (本川達雄)	2305			地方消滅 (増田寛也編著)	2282
人口学への招待 (河野綱果)	1910	政友会と民政党 (井上寿一)	2192			地方消滅 創生戦略篇 (増田寛也, 富山和彦)	2333
人口減少時代の都市 (諸富徹)	2473	西洋音楽史 (岡田暁生)	1816			地方消滅 2 (人口戦略会議編著)	2830
人口減少時代の土地問題 (吉原祥子)	2446	世界の教育はどこへ向かうか (白井俊)	2844			チャーチル (増補版) (河合秀和)	530
人口減少と社会保障 (山崎史郎)	2454	宣教のヨーロッパ (佐藤彰一)	2516			茶の世界史 (改版) (角山栄)	596
新興国は世界を変えるか (恒川恵市)	2734	戦後教育史 (小国喜弘)	2747			中学英語「再」入門 (澤井康佑)	2684
		戦国日本と大航海時代 (平川新)	2481				

ウマは走る ヒトはコケる (本川達雄)	2790	欧州複合危機 (遠藤乾)	2405	海軍と日本 (池田清)	632	2164	
海の地政学 (竹田いさみ)	2566	奥州藤原氏 (高橋崇)	1622	外交とは何か (小原雅博)	2848	騎馬民族国家 (改版) (江上波夫)	147
海の帝国 (白石隆)	1551	応仁の乱 (呉座勇一)	2401	外国語を学ぶための 言語学の考 方 (黒田龍之助)	2363	詭弁論理学 (改版) (野崎昭弘)	448
海の友情 (阿川尚之)	1574	大隈重信 (伊藤之雄) 上 2550, 下 2551		外国人による日本論の名著 (佐伯彰一, 芳賀徹編)	832	キメラ―満洲国の肖像 (増補版) (山室信一)	1138
うわさとは何か (松田美佐)	2263	大塩平八郎の乱 (藪田貫)	2730	海賊の世界史 (桃井治郎)	2442	教育と平等 (荻谷剛彦)	2006
映画館と観客の文化史 (加藤幹郎)	1854	大原孫三郎―善意と戦略の経営者 (兼田麗子)	2196	科学技術の現代史 (佐藤靖)	2547	競争社会の歩き方 (大竹文雄)	2447
英語達人塾 (斎藤兆史)	1701	大平正芳 (福永文夫)	1976	科学史年表 (増補版) (小山慶太)	1690	競争と公平感 (大竹文雄)	2045
英語達人列伝 (斎藤兆史)	1533	沖縄現代史 (櫻澤誠)	2342	科学者という仕事 (酒井邦嘉)	1843	京都の食文化 (佐藤洋一郎)	2721
英語達人列伝Ⅱ (斎藤兆史)	2738	沖縄のいきもの (盛口満)	2735	科学という考え方 (酒井邦嘉)	2375	京都の神社と祭り (本多健一)	2345
英語の発音と綴り (大名力)	2775	沖縄の歴史と文化 (外間守善)	799	科学という考え方 (酒井邦嘉)	2375	京都の山と川 (鈴木康久, 内戸裕行)	2711
英語の読み方 (北村一真)	2637	沖縄問題―リアリズムの視点から (高良倉吉編著)	2418	科挙 (宮崎市定)	15	恐怖の正体 (春日武彦)	2772
英語の読み方 リスニング篇 (北村一真)	2797	幼い子の文学 (瀬田貞二)	563	カーストとは何か (鈴木真弥)	2787	教養主義の没落 (竹内洋)	1704
英語の歴史 (寺澤盾)	1971	オスカー・ワイルド (宮崎かすみ)	2242	化石に眠るDNA (更科功)	2793	教養としての建築入門 (坂牛卓)	2764
英単語の世界 (寺澤盾)	2407	オスマン帝国 (小笠原弘幸)	2518	華族 (小田部雄次)	1836	教養としての宗教入門 (中村圭志)	2293
英文法再入門 (澤井康佑)	2628	織田信長合戦全録 (谷口克広)	1625	カナダ―資源・ハイテク・移民が拓 く未来の「準超大国」(山野内勘二)	2835	清沢淵 (増補版) (北岡伸一)	828
SDGs (持続可能な開発目標) (蟹江憲史)	2604	織田信長の家臣団―派閥と人間関係 (和田裕弘)	2421	加耶／任那―古代朝鮮に倭の拠点は あったか (仁藤敦史)	2828	ギリシア神話 (西村賀子)	1798
江戸―平安時代から家康の建設へ (齋藤慎一)	2675	オットー大帝―辺境の戦士から「神 聖ローマ帝国」樹立者へ (三佐川亮宏)	2766	カール・シュミット (蔭山宏)	2597	キリスト教と死 (指昭博)	2561
江戸時代 (大石慎三郎)	476	オッペンハイマー (中沢志保)	1256	河内源氏 (元本泰雄)	2127	キリスト教と戦争 (石川明人)	2360
江戸の災害史 (倉地克直)	2376	男が介護する (津止正敏)	2632	考えることの科学 (市川伸一)	1345	カラー版 キリスト教美術史 (瀧口美香)	2718
江戸の思想史 (田尻祐一郎)	2097	オペラの運命 (岡田暁生)	1585	宦官 (改版) (三田村泰助)	7	近現代日本史と歴史学 (成田龍一)	2150
NPOとは何か (宮垣元)	2809	親孝行の日本史 (勝又基)	2671	韓国愛憎 (木村幹)	2682	近現代日本を史料で読む (御野貴編著)	2107
カラー版 絵の教室 (安野光雅)	1827	親指はなぜ太いのか (島泰三)	1709	韓国現代史 (木村幹)	1959	カラー版 近代絵画史 (増補版) (高階秀爾)	上 385, 下 386
エビはすごい カニもすごい (矢野勲)	2677	親指はなぜ太いのか (島泰三)	1709	韓国社会の現在 (春木育美)	2602	近代日本外交史 (佐々木雄一)	2719
絵巻物に見る 日本庶民生活誌 (宮本常一)	605	オーラル・ヒストリー (御野貴)	1636	韓国併合 (森万佑子)	2712	近代日本の官僚 (清水唯一朗)	2212
蝦夷 (高橋崇)	804	オーラル・ヒストリー (御野貴)	1636	漢字再入門 (阿辻哲次)	2213	近代日本の対中国感情 (金山泰志)	2842
蝦夷の末裔 (高橋崇)	1041	オランダ風説書 (松方冬子)	2047	漢字の字形 (落合淳思)	2534	禁欲のヨーロッパ (佐藤彰一)	2253
エリザベス女王 (君塚直隆)	2578	音楽の危機 (岡田暁生)	2606	漢詩百首 (高橋睦郎)	1891	公家源氏―王権を支えた名族 (倉本一宏)	2573
エルサレムの歴史と文化 (浅野和生)	2753	音楽の聴き方 (岡田暁生)	2009	漢字百話 (白川静)	500	国造 (くにのみやつこ) ―大和政権と 地方豪族 (篠川賢)	2673
「美味しい」とは何か (源河亭)	2713	温泉の日本史 (石川理夫)	2494	肝臓のはなし (竹原徹郎)	2689	カラー版 クモの世界―糸をあやつ る 8 本脚の狩人 (浅間茂)	2693
老いと記憶 (増本康平)	2521	女たちの平安後期―紫式部から源平 までの200年 (櫻村寛之)	2829	漢帝国―400年の興亡 (渡邊義浩)	2542		
老いの味わい (黒井千次)	2289	怨霊とは何か (山田雄司)	2281	関東軍―満洲支配への独走と崩壊 (及川琢英)	2754		
老いのかたち (黒井千次)	2053	カ行		広東語の世界 (飯田真紀)	2808		
老いの深み (黒井千次)	2805	海外で研究者になる (増田直紀)	2549	観応の擾乱 (亀田俊和)	2443		
老いのゆくえ (黒井千次)	2548	カラー版 絵画で読む『失われた時 を求めて』(吉川一義)	2716	韓非子 (富谷至)	1695		
				魏志倭人伝の謎を解く (渡邊義浩)			

中公新書 書名索引

◆数字は新書番号

ア 行

会津落城（星亮一）	1728
iPS細胞（黒木登志夫）	2314
アイルランド紀行（栩木伸明）	2183
アイルランド現代史（北野充）	2717
悪意の心理学（岡本真一郎）	2386
明智光秀（福島克彦）	2622
アケメネス朝ペルシア—史上初の世界帝国（阿部拓児）	2661
アジア経済とは何か（後藤健太）	2571
足利将軍たちの戦国乱世（山田康弘）	2767
足利義満（小川剛生）	2179
飛鳥の木簡—古代史の新たな解明（市大樹）	2168
吾妻鏡—鎌倉幕府「正史」の虚実（藪本勝治）	2814
アダム・スミス（堂目卓生）	1936
アッシリア全史（小林登志子）	2841
アデナウアー（板橋拓己）	2266
アフターマティフ・アクション（南川文里）	2811
アメリカ海兵隊（野中郁次郎）	1272
アメリカ革命（上村剛）	2817
アメリカ黒人の歴史（増補版）（上杉忍）	2824
アメリカと宗教（堀内一史）	2076
アメリカの政党政治（岡山裕）	2611
アメリカの20世紀（有賀夏紀）	上1664, 下1665
アメリカン・ロイヤルの誕生（阿川尚之）	819
ある明治人の記録（改版）（石光真人編著）	252
アーロン収容所（改版）（会田雄次）	3

暗殺の幕末維新史（一坂太郎）	2617
安心社会から信頼社会へ（山岸俊男）	1479
安楽死・尊厳死の現在（松田純）	2519
硫黄島（石原俊）	2525
医学の歴史（小川鼎三）	39
生き物の「居場所」はどう決まるか（大崎直太）	2788
イギリス1960年代（小関隆）	2643
イギリス帝国の歴史（秋田茂）	2167
石橋湛山（増田弘）	1243
いじめとは何か（森田洋司）	2066
カラー版 イースター島を行く—モアイの謎と未踏の聖地（野村哲也）	2327
イスラームの歴史（カレン・アームストロング著、小林朋則訳）	2453
板垣退助（中元崇智）	2618
伊藤博文（瀧井一博）	2051
イノベーションの科学（清水洋）	2831
移民と日本社会（永吉希久子）	2580
移民の経済学（友原章典）	2575
殷—中国史最古の王朝（落合淳思）	2303
院政（増補版）（美川圭）	1867
インド—グローバル・サウスの超大国（近藤正規）	2770
陰謀論（秦正樹）	2722
ヴィクトリア女王（君塚直隆）	1916
ウイルスとは何か（長谷川政美）	2736
ヴィルヘルム2世（竹中亨）	2490
歌う国民（渡辺裕）	2075
ウニはすごい バッタもすごい（本川達雄）	2419